

# 鎌倉市埋蔵文化財緊急調査報告書 31

## 平成26年度発掘調査報告

(第2分冊)

佐助ヶ谷遺跡

極楽寺旧境内遺跡

北条小町邸跡

弁ヶ谷遺跡

大倉幕府跡

若宮大路周辺遺跡群

横小路周辺遺跡

大慶寺旧境内遺跡

平成27年3月

鎌倉市教育委員会



## ご あ い さ つ

近年、鎌倉の街では古い家屋や店舗の建て替えが相次いでいます。その中で、埋蔵文化財に影響のある工事も多くなっています。このため、個人専用住宅等の建設に際しては、昭和 59 年度から国・県の補助を受けて鎌倉市教育委員会が調査主体となって発掘調査の実施にあたってまいりました。

先人の遺産である文化財を守ることは、現在に生きる我々の責務であり、市内のおよそ 6 割の地域が埋蔵文化財包蔵地となっている本市の場合、特に市民の皆様のご理解とご協力なくしては、埋蔵文化財の保存や発掘調査の実施が困難であることは言うまでもありません。

本書は平成 17～23 年度及び平成 26 年度に国・県の補助を受けて鎌倉市教育委員会が実施した、個人専用住宅等の建築に伴う発掘調査と資料整理の成果として 14 地点の調査記録を掲載しています。

調査の実施にあたり埋蔵文化財に対する深い御理解をいただくとともに、調査の期間中、物心両面にわたり多大なご協力をいただきました事業者・工事関係者の皆様に心からお礼を申し上げます。

平成 27 年 3 月 31 日  
鎌倉市教育委員会

## 例 言

- 1 本書は平成26年度の国庫補助事業埋蔵文化財緊急調査に係る発掘調査報告書である。
- 2 本書所収の調査地点は別図のとおりである。また掲載分冊については、第1分冊に掲載した表のとおりである。
- 3 現地調査及び出土資料の整理は、鎌倉市教育委員会文化財課が実施した。ただし、報告12は株式会社博通が、報告13は有限会社鎌倉遺跡調査会が現地調査及び出土資料の整理を行った。
- 4 出土遺物及び調査に関する図面及び写真等は、鎌倉市教育委員会文化財課が保管している。
- 5 各調査の成果は、それぞれの報告を参照されたい。
- 6 報告6については当時の調査担当者である古田土俊一氏に玉稿を賜った。

# 総目次

(第2分冊)

ごあいさつ	I
例言	II
目次	III
<b>6 佐助ヶ谷遺跡 (No.203) 佐助二丁目667番3外地点</b>	
第一章 遺跡の位置と歴史的環境	4
第二章 調査の概要	8
第三章 検出遺構と出土遺物	11
第四章 まとめ	15
<b>7 極楽寺旧境内遺跡 (No.291) 極楽寺三丁目330番6地点</b>	
第一章 調査地点の位置と歴史的環境	22
第二章 調査の経過と概要	22
第三章 検出された遺構と遺物	25
第四章 まとめ	28
<b>8 北条小町邸跡 (No.282) 雪ノ下一丁目427番2外地点</b>	
第一章 遺跡と調査地点の概観	41
第二章 調査の概略	52
第三章 調査結果	54
第四章 まとめと考察	96
<b>9 弁ヶ谷遺跡 (No.249) 材木座六丁目640番2・3地点</b>	
第一章 調査地点の概観	121
第二章 調査の概要	128
第三章 検出された遺構と出土遺物	133
第四章 まとめと考察	179
<b>10 大倉幕府跡 (No.253) 雪ノ下三丁目693番8地点</b>	
第一章 遺跡の位置と歴史的環境	213
第二章 調査の方法と経過	216
第三章 基本土層	217
第四章 発見された遺構と遺物	220
第五章 調査成果のまとめ	255

## 11 若宮大路周辺遺跡群 (No. 242) 小町一丁目333番15地点

第一章 遺跡の位置と歴史的環境	305
第二章 調査の方法と経過	307
第三章 基本土層	308
第四章 発見された遺構と遺物	309
第五章 調査成果のまとめ	325

## 12 横小路周辺遺跡 (No. 259) 二階堂字荏柄939番10地点

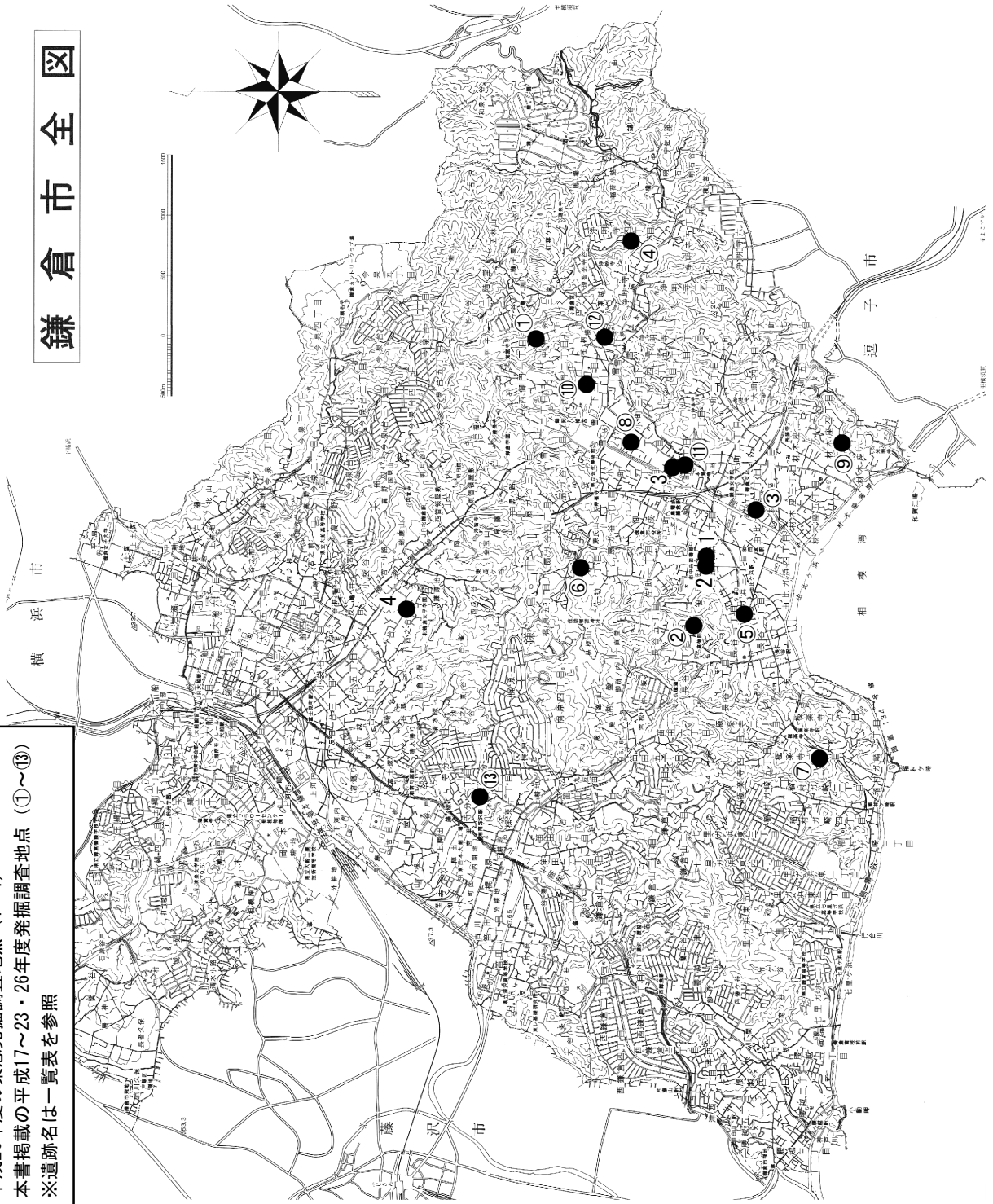
第一章 調査に至る経緯	352
第二章 遺跡概観	353
第三章 調査の経過と方法	355
第四章 堆積土層	357
第五章 発見された遺構と遺物	358
第六章 まとめ	372

## 13 大慶寺旧境内遺跡 (No. 361) 寺分一丁目939番1の一部地点

第一章 調査地点概観	384
第二章 検出した遺構と遺物	388
第三章 まとめと考察	398

平成26年度の緊急発掘調査地点 (1~4)  
本書掲載の平成17~23・26年度発掘調査地点 (①~⑬)  
※遺跡名は一覧表を参照

# 鎌倉市全図







# 佐助ヶ谷遺跡 (No. 203)

佐助二丁目 667 番 3 外

## 例 言

1. 本報は佐助ヶ谷遺跡（No.203）内、鎌倉市佐助二丁目 667 番 3 外地点における個人専用住宅の新築に伴う緊急調査報告書である。
2. 発掘調査期間と調査対象面積は以下の通りで、鎌倉市教育委員会が実施した。  
発掘調査期間：平成 18 年 5 月 17 日～7 月 3 日 調査対象面積 33.00m<sup>2</sup>
3. 現場の調査体制は以下の通りである。  
調査担当者：古田土俊一、福田誠  
調査員：石元道子、鈴木絵美  
協力機関名：鎌倉市シルバー人材センター、鎌倉考古学研究所  
作業員：浅香文保、川島仁司、鈴木順治、田口康雄
4. 整理作業および本報の作成は以下の通りである。  
遺物実測作業：田畑衣理  
遺構挿図作成：田畑衣理、岡田慶子  
遺物挿図作成：伊丹まどか、田畑衣理、古田土俊一  
遺物写真撮影：須佐仁和  
本文原稿執筆：古田土俊一  
本報編集作業：伊丹まどか、古田土俊一  
なお、本報の遺物、遺構挿図、観察表作成に際しては、田畑衣理氏、伊丹まどか氏より格別のご配慮とご教示を得た。特記し感謝申し上げる次第である。
5. 本報掲載の写真は全景を古田土が、個別遺構を古田土、鈴木（絵）が撮影した。
6. 発掘調査における出土遺物・図面類・写真などの資料は、鎌倉市教育委員会が保管している。
7. 本報の凡例は以下の通りである。
  - ・図版縮尺 全測図 1／80 遺構図 1／40 遺物図 1／3
  - ・遺構図版 遺構のレベルは海拔標高の数値を示す。
8. 発掘作業および出土品整理にあたり、多方面からのご教示・ご協力を賜った。記して感謝の意を表する（順不同・敬称略）  
菊川泉、松尾宣方、青木敬、太田美智子、原廣志、鈴木庸一郎、河野眞知郎、押木弘己、馬淵和雄、玉林美男、手塚直樹、山口正紀、汐見一夫、松葉崇、松吉大樹、松吉里永子

## 目 次 本 文 目 次

第一章 遺跡の位置と歴史的環境	4
1. 遺跡の位置	
2. 歴史的環境	
第二章 調査の概要	8
1. 調査の経過	
2. 測量軸の設定	
3. 堆積土層	
第三章 検出遺構と出土遺物	11
1. 第1面の遺構と遺物	
2. 第2面の遺構と遺物	
3. 第3面の遺構と遺物	
4. 第3面下トレンチの遺構と遺物	
第四章 まとめ	15

## 挿 図 目 次

図1 調査地点と周辺遺跡	7
図2 遺跡位置図・国土座標・グリッド配置図	10
図3 堆積土層図・全測図	12
図4 出土遺物	14

## 写真図版目次

図版1 検出遺構	17
図版2 出土遺物	18

# 第一章 遺跡の位置と歴史的環境

## 1. 遺跡の位置

本遺跡は鎌倉市街地の北西部、佐助ヶ谷地区に位置し、JR鎌倉駅から西方向へ約800mの距離に所在する「佐助一」交差点から北へ延びる佐介谷の最奥に位置する。所在地は鎌倉市佐助二丁目667番3外に相当し、神奈川県遺跡台帳の佐助ヶ谷遺跡（遺跡台帳No.203）に含まれる。

佐介谷は源氏山の南西、滑川の支流である佐助川の上流に当たる谷戸で、開口部は「佐助一」交差点よりも300mほど南方、およそ御成中学校から鎌倉市立中央図書館の間に所在する。海拔50～100mの低丘陵に囲まれた複雑な谷地には木部ヶ谷・七観音谷・鍛冶ヶ谷・宝蓮寺谷・北斗堂谷・西ヶ谷などの名を有する支谷が存在し、佐助川を遡上するかたちで谷戸奥に進むと葛原岡神社、化粧坂などがある源氏山に至る。途中には佐助稻荷、銭洗弁財天といった由緒ある宗教施設も存在し、歴史的に重要な地域であると言える。

## 2. 歴史的環境

佐介の名は鎌倉時代から見える地名である。『新編鎌倉志』はその名の由来として上総介・三浦介・常陸介三介の屋敷があったことや、この谷に住む稻荷の神霊が源頼朝（佐殿）の挙兵を助けたと伝わる佐助稻荷が所在することなどを挙げる。

また、佐介の史料上の初見は『吾妻鏡』寛元四年（1246）六月二十七日条であり「入道越後守時盛佐介亭」と見え、鎌倉追放となった前将軍藤原頼経が当地にあった北条時盛亭に入り、翌七月帰洛したことを記す。北条時盛は鎌倉幕府の初代連署北条時房の長男であり、佐介流北条氏の祖となる人物である。以後この所作は先例となったようで、鎌倉幕府五代将軍藤原頼嗣が帰洛する建長四年（1252）三月二十一日には「入道越後守佐介亭」に入っており、六代将軍宗尊親王が帰洛する際にも時盛亭に入っていることが記される（『吾妻鏡』文永三年（1266）七月四日条）。

なお谷戸名の初見は、文永八年（1271）卯月五日の聖教『阿字肝心抄』奥書にある「於佐介谷禅房」と見られる（神奈川県史資料編1 - 612）。また、正和三年（1314）頃と推定される円義書状は「さすけ」から宇治の義観房に出されたものである（神奈川県史資料編2 - 1916）。さらに『悉曇字記抄』扉書の墨書に「弘安八年（1285）西七月十八日於関東佐介谷信範記云明了坊即指此記云々」と見え（『昭和現存天台書籍綜合目録下』）、『四教五時略名目』の奥書にも「元徳四年（1332）〈壬申〉正月廿二日於鎌倉佐介谷抄之畢、恵鎮記之」とある（『昭和現存天台書籍綜合目録上』）。このほか『金沢文庫古文書』の年代未詳の某書状に「佐介の口ニ松尾と申候所に」と見える（神奈川県史資料編3上 - 3918）。

降って上杉禅秀の乱の際に佐介の名が見える。『鎌倉大草紙』によると、応永二十四年（1417）十月二日木戸満範の知らせによって禅秀の挙兵を知った足利持氏は「御馬にめし葛辻は敵篝を焼て警固しける間、岩戸のうへの山路をめぐり、十二所にかゝり小坪を打いで、前はまを佐介へいらせ給ふ」と見え、当地に移ったことが記されるが、同6日「佐介館」に火がかかったため、持氏は小田原に落ちのびている（群書類従20）。これは『湘山星移集』にも同様の記載がある（続群書類従21上）。

本調査地点は上記のような歴史を持つ谷戸の最奥に位置し、『新編鎌倉志』には「光明寺畠」と記されている。この光明寺は鎌倉市材木座6丁目に所在する浄土宗大本山・天照山蓮華院光明寺を指し、鎮西派第三祖の然阿良忠が諸国遊歴ののち、大仏朝直の帰依を得て、佐介谷に前身となる悟真寺を建立したことが端緒となる。大仏朝直は佐介時盛と同様、北条時房を父に持つ大仏流北条氏の祖であり、朝直

の子息上野介時遠と考えられる者から悟真寺房地と武蔵国鳩井の地も寄進されていることは、大仏流北条氏との関係を裏付ける（『光明寺文書』県史資1 - 635）。創建の時期については不明な部分が多いものの、『浄土宗要集聴書』の示すことから鑑みれば文応元年（1260）以前のものと見られている（『浄土宗全書』10、『角川地名大辞典』）。また寺号改名の時期および移転の時期は未詳であるものの、正中二年（1325）三月十五日の時点では「佐介谷、本悟真寺、今号蓮華寺」と記されていることから（『光明寺文書』県史資2 - 2433）、弘安十年（1287）の良忠没後であろうとされる（『角川地名大辞典』）。

このほか本調査地点から西側の山中には銭洗弁財天宇賀福神社が鎮座する。『新編鎌倉志』には「隠里【かくれざと】」と記され、洞窟内の湧水を源頼朝が夢告で発見供養し重用したと伝える。現在銭洗弁財天の参道は東と南の二ヶ所あり、東口となる隧道の真上にはやぐら群が確認されている。昭和四十五年に行われた発掘調査では、延慶（1311）から元徳二年（1330）の板碑や五輪塔の優品が多数出土しているが（『鎌倉の五輪塔』）、東口が開削されたのは昭和になってからであることから見て、やぐらは銭洗弁財天に付随する施設ではない。やぐらが谷戸奥中央に向かって開口することは、本調査地点となるこの地に寺院が存在した可能性を示す。

さらに本調査地点東の斜面には坂があり、住民間では「七曲」と俗称されている。この坂を上った先には源氏山一葛原岡神社間の尾根線を挟む形で化粧坂が所在する。藤沢・武蔵方面との出入口で鎌倉の重要な防御拠点であり、元弘三年新田義貞の鎌倉攻めでは、三手にわけた一軍を化粧坂に向け、幕府軍と対峙している（『太平記』）。『吾妻鏡』建長三年（1251）十二月三日条に、鎌倉中で小町屋および売買所を構えてもよい所の1つとして「气和飛坂山上」が見えることから、鎌倉後期に最も栄えた地域のひとつと目される。伝聞であるため詳細は不明だが、「七曲」は化粧坂と対を成す坂として使用された時期があったという。現在は使用されていない。

また、本調査地点の周辺地域で行われた過去の発掘調査事例を参考にすれば、佐助ヶ谷の本格的な開発はおおよそ13世紀後半ごろから始められたと見ることができ、佐助ヶ谷の奥となる図1 - 1地点、図1 - 6地点、図1 - 7の調査で、寺院関連施設もしくは寺地と推定される遺構が検出されている。また特に図1 - 7地点は基壇や門、池などが出土しており、寺院の様相が色濃い遺跡として知られる。谷戸内で13世紀後半ごろに存在した可能性を示す寺院は上記の悟真寺くらいだが、14世紀代になれば上杉憲顕創建といわれる禅宗寺院の国清寺も存在が確認できる（『鎌倉廃寺辞典』）。このほか宝蓮寺、松谷寺、宝性寺、薬師堂、北斗堂、天狗堂などがあったといい、鎌倉時代以降に多くの寺院が点在していた谷戸であると言える。

## 参考文献

- 角川日本地名大辞典編纂委員会 1984『角川日本地名大辞典 神奈川県』角川書店  
貫達人・川副武胤 1980『鎌倉廃寺辞典』有隣堂  
芦田伊人 編 1929『新編鎌倉志・鎌倉覽勝考』（大日本地誌大系）雄山閣出版  
黒板勝美 編 1968『吾妻鏡』（新訂増補国史大系 普及版）吉川弘文館  
後藤丹治・釜田喜三郎校注 1960『太平記』（日本古典文学大系）岩波書店  
塙保己一 編 1981『続群書類従』第20輯 続群書類従完成会  
塙保己一 編 1983『続群書類従』第21輯上 続群書類従完成会  
浄土宗開宗八百年記念慶讃準備局 編 1972『浄土宗全書』第10輯（寺誌宗史1-2）浄土宗  
神奈川県県民部県史編集室 編 1979『神奈川県史資料編』神奈川県  
鎌倉国宝館『鎌倉の五輪塔』鎌倉国宝館図録 第21集  
古田土俊一 2012「中世前期鎌倉における五輪塔の様相」『考古論叢神奈河第20集』神奈川県考古学会

#### 発掘調査事例参考文献

1. 瀬田哲夫 2005 『佐助ヶ谷遺跡発掘調査報告書 鎌倉市佐助一丁目 583 番外』(有) 鎌倉遺跡調査会
2. 齋木秀雄ほか 1993 『佐助ヶ谷遺跡(鎌倉税務署用地)発掘調査報告書』佐助ヶ谷遺跡調査団
3. 齋木秀雄・降矢順子 2009 「佐助ヶ谷遺跡 佐助一丁目 496 番 5」『鎌倉市埋蔵文化財緊急調査報告書』25 (第 2 分冊) 鎌倉市教育委員会
4. 熊谷満 2011 「佐助ヶ谷遺跡 佐助一丁目 496 番 4」『鎌倉市埋蔵文化財緊急調査報告書』27 (第 1 分冊) 鎌倉市教育委員会
5. 大三輪龍彦ほか 1989 『佐助ヶ谷遺跡 佐助一丁目 620 番地点』佐助ヶ谷遺跡発掘調査団
6. 原廣志・宇都洋平 2012 「宝蓮寺跡 (No.374) 佐助二丁目 905 番 3」『鎌倉市埋蔵文化財緊急調査報告書』28 (第 1 分冊) 鎌倉市教育委員会

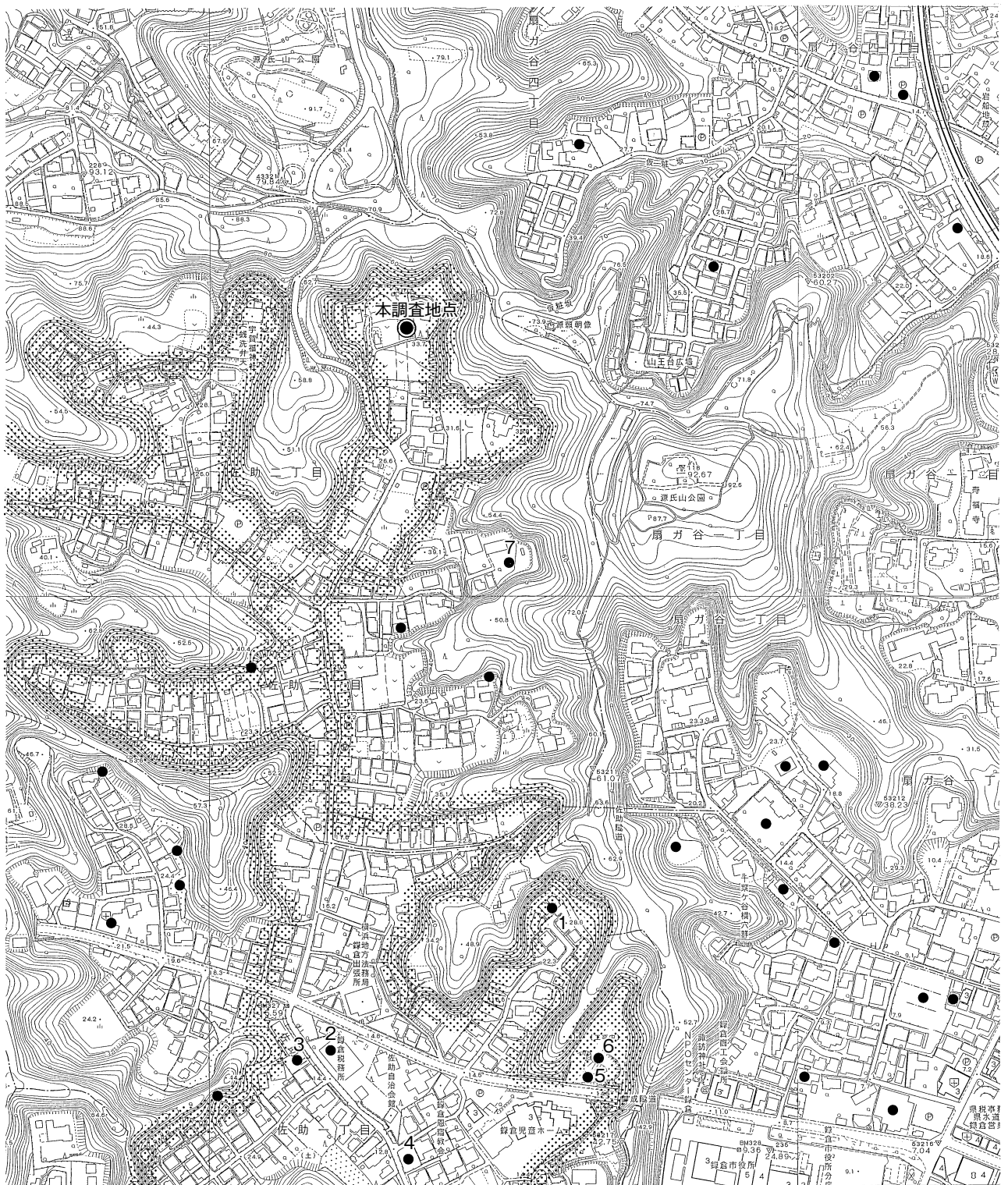


図1 調査地点と周辺遺跡

## 第二章 調査の概要

### 1. 調査の経過

本遺跡は鎌倉市中央部よりやや西側にあたる佐助ヶ谷に位置する。本調査地点は佐助ヶ谷遺跡（神奈川県遺跡台帳No. 203）の最北である佐助二丁目 667 番 3 外に所在しており、江戸時代の地誌には光明寺畠と呼ばれ、現在は材木座所在の光明寺の前身となる寺院が存在したことが記されている。近隣には銭洗弁財天や国史跡である化粧坂があるなど歴史的価値の高い場所として認識されているが、発掘調査事例は極めて少ない。

本件は、個人専用住宅建設案件の建築計画が基礎構造を鋼管杭打ち工法であったため、鎌倉市教育委員会により確認調査を行ったところ、現地地表下 140cm以下に中世の遺物包含層と生活面が検出され、工事の実施により遺構の損傷が避けられないものと判断されたことによる。これにより発掘調査の実施について建築主と数度にわたる協議を重ねた結果、文化財保護法に基づく届出手続き、調査の実施方法の協議を経て、平成 18 年 5 月から調査面積 33.00㎡を対象として発掘調査を実施することとなった。

現地調査は調査排土の置場の問題から調査区を南北に二分割し、北側をⅠ区、南側をⅡ区としてそれぞれの調査範囲を設定し、平成 18 年 5 月 17 日よりⅠ区の表土を重機によって掘削することから始められた。調査期間中は多量の湧水に悩まされながらの作業ではあったが、Ⅰ区において鎌倉時代末期の遺構・遺物が発見され、同年 6 月 2 日までの間に必要な記録保存を行なった。続けて行なったⅡ区の調査開始直後、表土を掘削していた重機が掘削域内より脱出できない事態が発生し、調査中断を余儀なくされる。重機は無事撤収されたものの、現場内安全面の考慮し協議を重ねた結果、同年 7 月 3 日発掘調査の中止が決定し、同日調査を終了した。調査経過については、以下のように調査日誌の抜粋を記すことにする。

#### 【日誌抄】

- 5 月 16 日（火） 調査区を設定し表土掘削。
- 17 日（水） 機材搬入とテント設営。
- 19 日（金） Ⅰ区 1 面確認作業。鎌倉市 4 級基準点を基として測量用方眼の設定。
- 22 日（月） 測量用水準点の原点レベルを移動。
- 24 日（水） Ⅰ区 1 面終了。全景・個別遺構の写真撮影および平面図作成。
- 29 日（月） Ⅰ区 2 面終了。全景・個別遺構の写真撮影および平面図作成。
- 31 日（水） Ⅰ区 3a 面終了。全景・個別遺構の写真撮影および平面図作成。
- 6 月 1 日（木） Ⅰ区 3b 面終了。全景・個別遺構の写真撮影および平面図作成。
- 2 日（金） Ⅰ区トレンチ調査終了。全景・個別遺構の写真撮影および平面図作成。
- 7 日（水） Ⅱ区表土掘削中、重機掘削域内より脱出不能。
- 9 日（金） 重機撤収。
- 7 月 3 日（月） 発掘調査の中止が決定。現地調査終了。機材撤収。

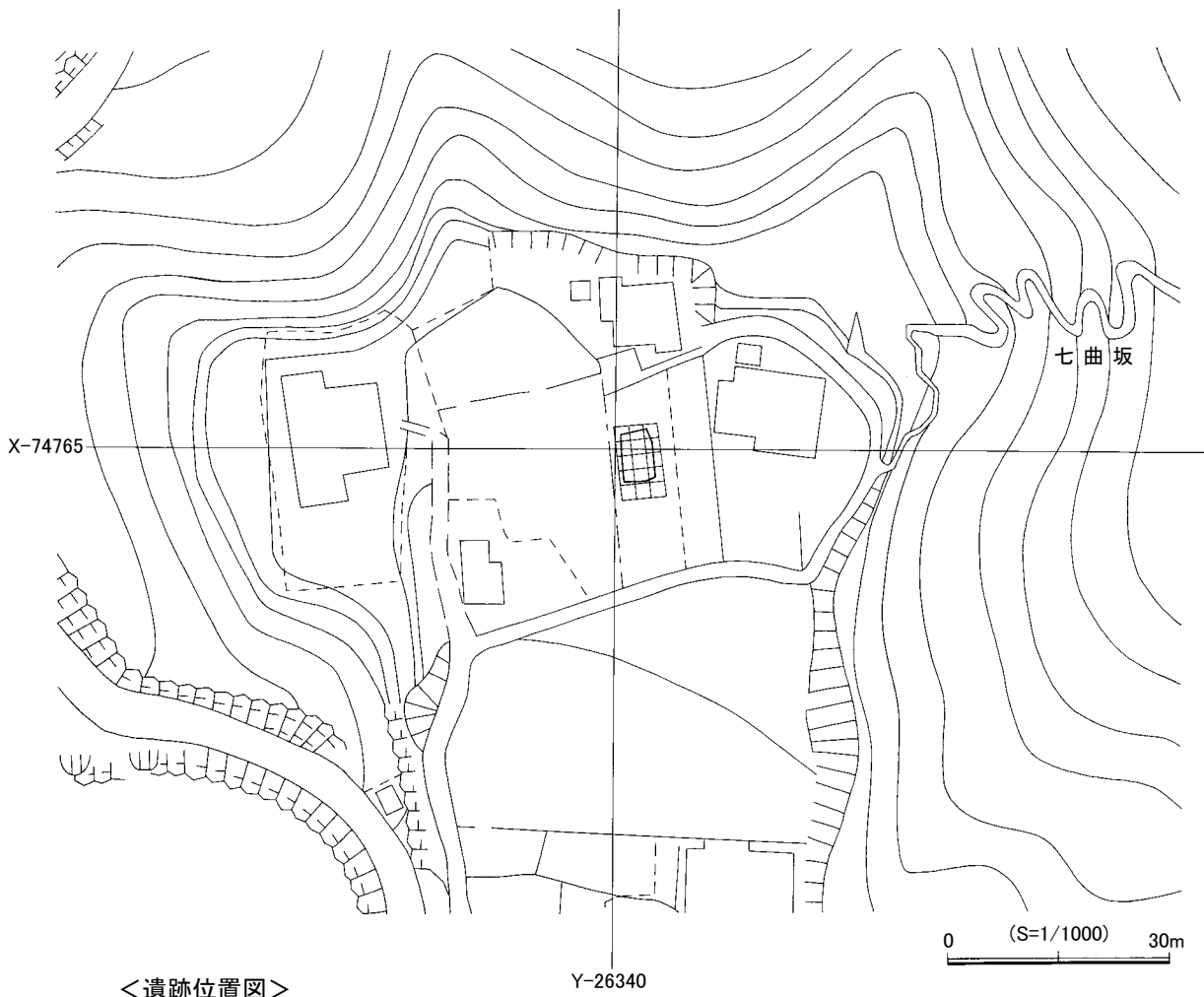


## 2. 測量軸の設定

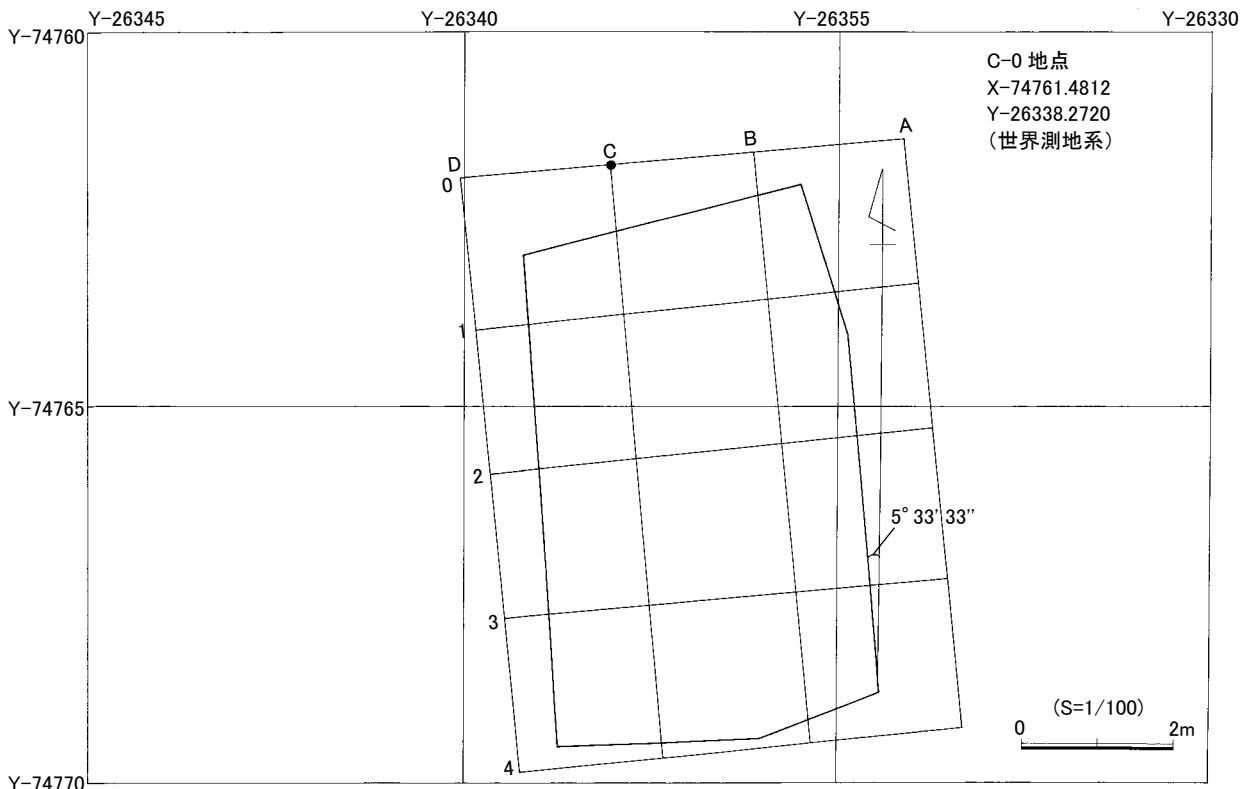
調査にあたり測量方眼軸を設定した。図2のように本調査地点に近接する道路には、鎌倉市道路管理課が設置した4級基準点のE129 [X = - 74781.5194・Y = - 26314.8322] と、E130 [X = - 74790.9254・Y = - 26359.5405]を用いて基準原点にあたるC-0杭を設置した。C-0杭の国土座標値は、X座標値: - 74761.4812・Y座標値: - 26338.2720の数値を得ている。図中の方位はすべて真北を採用し、方眼の南北軸線はN - 5° 33' 30" - Wである。また海拔標高については、源氏山公園から梶原方面へ向かう道の交差点に設けられた鎌倉市3級基準点 (No. 43321 : L = 79.899m) からC-0杭上に仮水準点を移動した。C-0杭の海拔標高は33.052mであり、文章中および挿図に記載されたレベル数値はすべてこれを基準にした海拔高を示している。本調査地点の経緯は、緯度 = 35° 19' 32.04872"、経度 = 139° 32' 37. 17213"となる。

## 3. 堆積土層

調査地点は現地表の海拔高約33mに位置する。調査地点の南側に広がる畑の標高に対して、ある程度の高台となる土地でありつつ平坦な宅地を形成している。表土は現代の攪乱と宝永火山灰を多く含む近代の客土(山砂)が30cmほど堆積しており、それらを除去すると海拔高32.8m前後で第1面が現れた。これより下層で検出した面は第3b面にまで及ぶが、遺構を検出できた面はトレンチ下層面のみとなる。第3面に至るまでの面は、総じて調査区北限が高く調査区南限が低い傾斜した堆積である。第1面の南北標高差は30cmほどで、遺構としては溝1が確認されたのみであった。第1面構成土となる灰褐色砂質土・茶灰色砂質土を除去すると、ブロック状の凝灰質砂岩を多く含む灰色凝灰岩層が現れたためこれを第2面としたが、遺構は確認できなかった。第2面は調査区北限で32.8m、南限32.2m前後で、南北標高差はおよそ60cmである。第2面構成土を除去すると、北側から調査区中央までの斜面堆積層となる茶色凝灰岩層・茶褐色砂質土層が確認でき、それらを除去したところで傾斜の緩くなる面が広がったためこれを第3面とした。第3面は北限32.2m、南限32.0mの高さとなり、標高差は20cmとなるものの、遺構は確認できなかった。第3面以下の調査は斜面崩落の危険を回避する形でトレンチ調査を行ない、遺構が確認できる面までの掘削を行なった。結果として31.20mの面より掘り込まれた溝2を検出し、鎌倉時代末期の遺構面を確認するに至っている。



<遺跡位置図>



<グリッド配置図>

図2 遺跡位置図・国土座標・グリッド配置図

## 第三章 検出遺構と出土遺物

第二章で述べたようにⅡ区の調査は行っていないため、本報告は調査区域のうちⅠ区のみ調査成果となる。調査では検出した硬化面をもとに上層より第1面、第2a面、第2b面、第3a面、第3b面と設定し、各面の調査を実施したものの、第1面以外に遺構は検出されず出土遺物も少量であった。このことからさらに下層に遺構が存在することも考慮し、第3面下へのトレンチ調査を実施した。結果として14世紀代の遺構面を検出するに至っている。

以下、発見した遺構、遺物を上層から下層にかけて第1面から第3b面および第3面下トレンチ調査の順で報告するが、第1面から第3b面にかけての土層は、背面が谷戸奥の崖となる調査区北壁から南壁にかけて傾斜した堆積を見せ、第1面以外から遺構は検出されなかったこともあり、遺構図版は第1面および第3面下トレンチ調査を開始した第3b面、トレンチ内検出面のみを掲載している。

なお、各層で検出した遺物は出土遺物観察表にまとめ、本文に詳細は記載していない。また各層における破片出土点数は表にまとめ、本報末に掲載した。

### 1. 第1面の遺構と遺物

現地表下約100～120cm、海拔標高は北壁33.0m、南壁32.7mで灰褐色砂質土・茶灰色砂質土で構成される硬化面を検出し、これを第1面とした。上層からの攪乱があるほか、検出した遺構は溝1条のみである。

#### 溝1

北壁中央から南東へ延びる溝である。試掘坑によって寸断されてしまったが、調査区東壁に向けて延びていたと考えられる。確認した長さは120cm、幅45cm、深さ40cmで、薬研掘の形状となる底面には炭化物が多く堆積していた。覆土中からは大型のロクロかわらけが1点出土しているが、小片であるため図示していない。

#### 第1面構成土（第2面まで）出土遺物

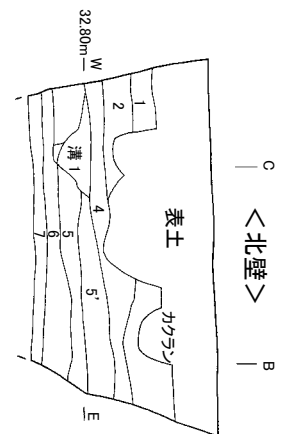
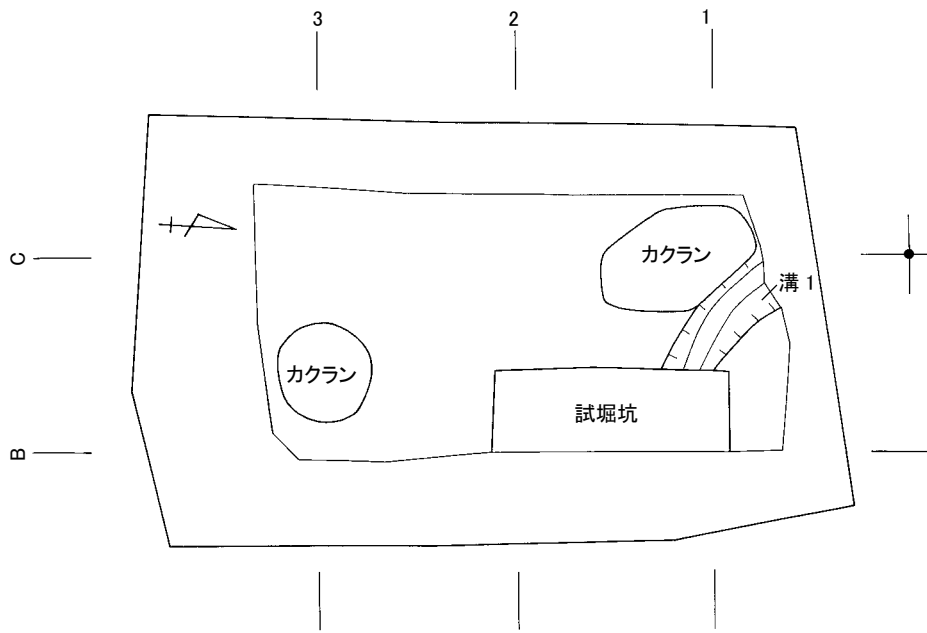
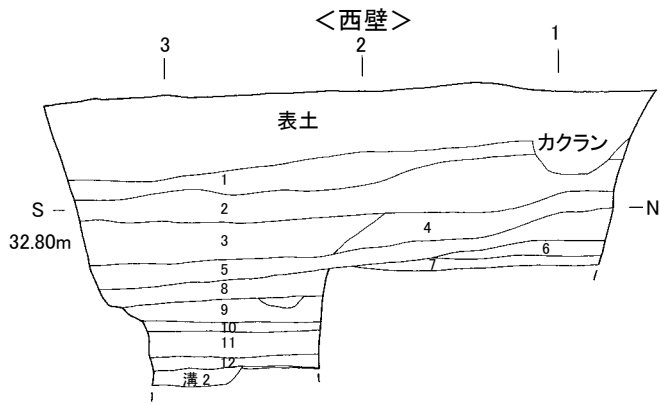
第1面構成土から出土した遺物のうち図示できたものは、図4-1が常滑甕、2が備前播鉢である。このほか小片のかわらけ・瀬戸窯製品・鉄滓が出土している。

### 2. 第2面の遺構と遺物

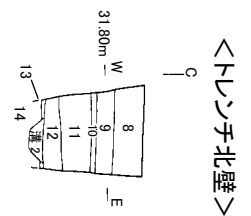
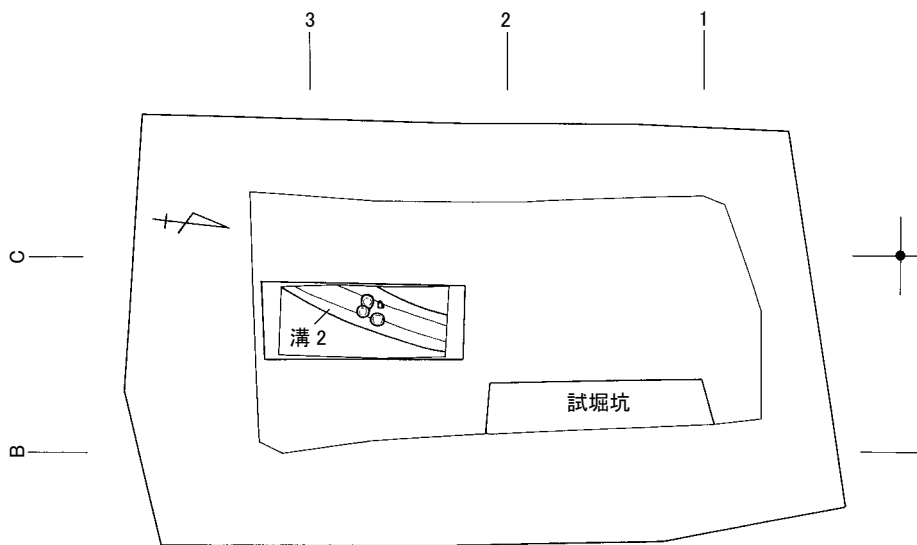
現地表下120cm～170cm、海拔標高は北壁32.8m、南壁32.2mでブロック状の凝灰質砂岩を多く含む硬化面を検出し第2a面とした。第2a面構成土を除去すると、やや粘性を有する茶褐色砂質土とブロック状凝灰質砂岩の含有率が低い茶色凝灰岩層で構成される第2b面を検出した。現地表下150cm～190cm、海拔標高は北壁32.5m、南壁32.0mで、第2b面構成土のひとつとなる茶色凝灰岩層は調査区北側1/3程度のみ堆積する。第2a面・第2b面ともに遺構は検出されなかった。

#### 第2面構成土（第3a面まで）出土遺物

第2面構成土から出土した遺物のうち図示できたものは、図4-3がかわらけである。このほか小片のかわらけ・常滑甕・吉備碗・瓦器質火鉢・獣骨が出土している。

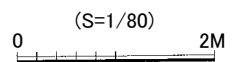


<第1面 全測図>



<第3面 全測図>

図3 堆積土層図・全測図



### 調査区壁断面図 土層注記（図3に対応）

1. 灰黒色弱粘質土：宝永火山灰を含む。締まり無し。
  2. 灰黒色砂質土：山砂。締まり無し。
  3. 灰黒色砂質土：山砂。宝永火山灰を多量に含む。締まりやや有り。
  4. 茶灰色砂質土：山砂。締まりやや有り。
  5. 灰色凝灰岩層：凝灰質砂岩がブロック状に多く混じる。締まりやや有り。
  - 5' 灰色凝灰岩層：凝灰質砂岩がブロック状に多く混じる。締まりやや有り。
  6. 茶色凝灰岩層：凝灰質砂岩の小片を含む。
  7. 茶褐色砂質土：かわらけ片を少量含む。締まり有り。
  8. 茶褐色砂質土：粘性やや有り。締まりやや有り。
  9. 灰褐色砂質土：粗砂粒、泥を含む。締まりやや有り
  10. 暗灰色砂質土：粗砂粒、泥を含む。締まりやや有り。
  11. 淡青灰色砂質土：粗砂粒、泥を含む。締まりやや有り。
  12. 灰色砂質土：粗砂粒を含む。締まりやや有り。
  13. 暗褐色粘質土：締まり有り。
  14. 灰褐色砂質土：炭粒を多少含み、凝灰質砂岩がブロック状に混じる。締まり有り。
- 溝1：灰褐色砂質土：底面に炭化物が多く堆積。締まり無し。  
溝2：灰褐色砂質土：粗砂粒、かわらけ片を多く含む。

### 3. 第3面の遺構と遺物

第2b面構成土のひとつとなる茶色凝灰岩層を除去したところで検出した、茶褐色砂質土で構成される硬化面を第3a面とした。現地表下170cm～190cm、海拔標高は北壁32.3m、南壁32.0mで、第2b面構成土と同様に調査区北側半分のみに堆積し、南半分は第2b面とした硬化面である。遺構は検出されない。第3a面構成土を除去すると、第2b面の調査区南側半分を構成していた茶褐色砂質土層が全面に広がるかたちとなり、これを第3b面とした。現地表下180cm～190cm、海拔標高は北壁32.2m、南壁32.0mで、硬化面の傾斜は緩やかとなるものの、遺構は検出されなかった。

#### 第3a面構成土（第3b面まで）出土遺物

第3a面構成土から出土した遺物はかわらけ・青白磁梅瓶、常滑窯片口鉢Ⅰ類、同Ⅱ類、玉石、人骨、炭化物が出土しているが、いずれも小片のため図示できなかった。

### 4. 第3面下トレンチの遺構と遺物

調査期間中雨天が多かった影響もあり、第3b面調査の時点で調査区壁面が一部崩落するなど、以下の平面的な調査には危険が伴うものと判断された。このため調査範囲を縮小し調査区南半部中央に南北400cm×東西160cmのトレンチを設定し、堆積土層と遺構面の確認を行うこととした。第3b面以下の土層は平坦な堆積となり、現地表下約210cm、海拔標高31.80mで検出した灰褐色砂質土層の面上に遺構が見られる。幅45cm、深さ10cmに掘り窪められているが、用途は不明である。それらの土層を除去した現地表下約270cm、海拔標高31.20mにおいて暗褐色粘質土の硬化面と、その面より掘り込まれた溝2を検出した。

#### 溝2

トレンチ内北壁中央から南壁中央へ延びる溝である。確認した長さはおよそ160cm、幅40cm、深さ

15cmで、薬研掘の形状をとる。図4 - 10 ~ 16は溝内覆土中から出土したかわらけである。このほかにかわらけ、砥石、軽石、獣骨が出土しているが、小片であるため図示していない。

**第3面下トレンチ内出土遺物**

第3面下トレンチ調査で出土した遺物は、図4 - 4 ~ 7がかわらけである。8が瓦器質火鉢、9が砥石である。

**トレンチ最下層**

トレンチ最下層では図4 - 17のかわらけが出土している。

**表採遺物**

本調査区内で採取した遺物として図4 - 18のかわらけ、19の平瓦がある。

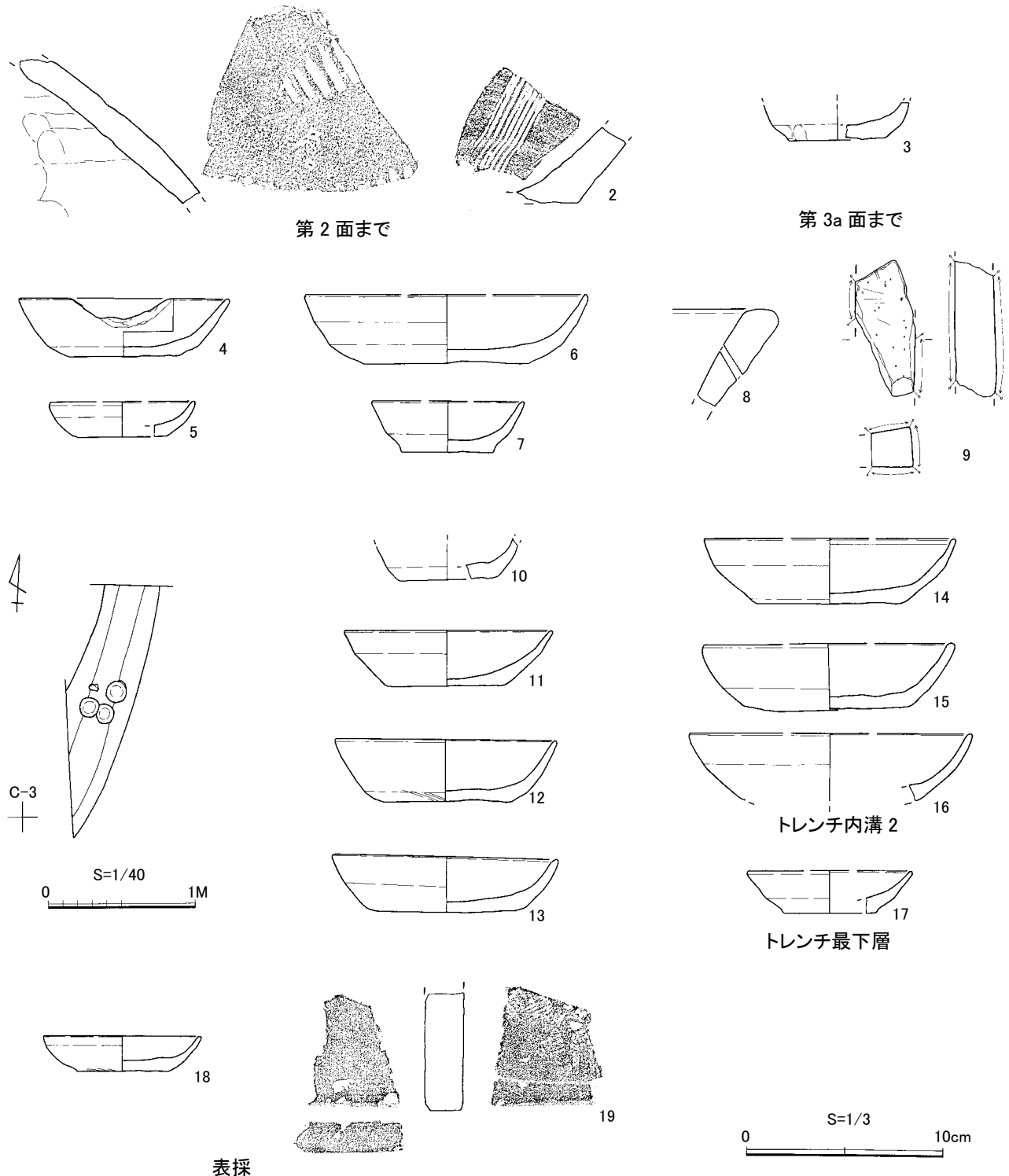


図4 出土遺物

## 第四章 まとめ

本調査地点は、南側に広がる畑の標高に対して、ある程度の高台となる土地でありつつ平坦な宅地を形成している。本調査では、第1面から第3面およびトレンチ内で硬化面を確認したが、このうち遺構を有する面は第1面とトレンチ最終面のみであった。第1面の遺物は中世期のものも含まれるが、第1面下の堆積に宝永火山灰が多量に含まれることからみれば、第1面が使用された年代は少なくとも宝永4年(1707)以降と見るべきだろう。また、それ以前の時期となる第2面から第3面にかけての層は傾斜した堆積を見せており、生活に適するとは言い難い。遺構も無く、土層の多くが山砂で構成されていることを鑑みれば、これらの土層は北側斜面からの崩落土と判断するのが自然であろう。また、降り積もった火山灰が一つの層を形成しているのではなく、砂質土層に含有する形で検出されることから見て、本調査地点の北側斜面および尾根に降り積もった火山灰が許容量を超え、火山灰下層の土層とともに連鎖的に本調査地点へと滑り落ちたものと思われる。

第3面以下となる堆積土層は上層に比べ平坦であり、遺構など生活が営まれた痕跡を確認することができた。現表土下210cmで確認したトレンチ最終面は、溝とともにまとまった量のかわけが出土しており、およそ13世紀後半から14世紀初頭の年代を充てることができる。なお、調査中に確認したところによると、この面の海拔標高は本調査地点の南面に広がる畑より低いレベルであった。このことをふまえば、佐助ヶ谷の最奥となる当地は鎌倉時代以降も使用がみられたが、江戸時代初期には一面の畑「光明寺畠」となり、江戸中期以降に宝永火山灰を含む谷戸奥の斜面堆積土が崩落し、本調査地点を含む山裾一帯が一段高くなったといった歴史を読み取ることができる。

おそらくは最終トレンチ以下の層より、本谷戸の最盛期となる生活面が広がるものと考えられる。しかしながら、本遺跡は掘削深度の安全性を考慮し、最終トレンチが限界深度であった。これまで調査機会の無かった地点での初調査として、今後の調査に有益な情報を提供できたものと考え、まとめとしたい。

出土遺物観察表

図版 番号	出土位置 出土層位	種別	遺存値	口径/長さ		底径/幅		器高/厚		a:成形・調整 b:胎土・素地・材質 c:色調 d:釉調 e:焼成 f:備考
				単位:cm ( )は復元値 ( )は残存値						
図4-1	2面まで	常滑 窯	肩部片							a:輪積み・内面指頭痕・横位ナデ b:砂粒・黒色粒・白色粒を含む灰色粗土 c:灰色 d:外面に自然降灰 e:良好・硬質 f:外面にスタンプ文
図4-2	2面まで	備前 擂鉢	底部小片							a:輪積み b:砂粒・白色粒・小石粒を含む赤褐色粗土 c:茶褐色～赤褐色 e:良好・硬質 f:条線8本
図4-3	3a面まで	かわらけ	底部1/2程度			(5.0)				a:ロクロ・内底ナデ・外底回転系切・板状圧痕 b:微砂・雲母・赤色粒・白色粒・海綿骨芯・土丹粒を含む粉質気味粗土 c:橙色 e:良好 f:底部脇に指頭痕
図4-4	トレンチ	かわらけ	ほぼ完形	10.4		5.6		3.0		a:ロクロ・内底ナデ・外底回転系切・板状圧痕 b:微砂・雲母・白色粒・小石粒・海綿骨針を含む粉質粗土 c:淡橙色 e:良好 f:口縁部一カ所打ち欠き
図4-5	トレンチ	かわらけ	1/5程度	(7.2)		(4.8)		1.8		a:ロクロ・内底ナデ・外底回転系切 b:微砂・雲母・赤色粒・土丹粒を含む粉質粗土 c:淡橙色 e:良好
図4-6	トレンチ	かわらけ	2/3程度	(14.1)		(8.0)		3.5		a:ロクロ・内底ナデ・外底回転系切・板状圧痕 b:微砂・雲母・赤色粒・白色粒・海綿骨針を含む砂質粗土 c:橙色 e:やや甘い
図4-7	トレンチ	かわらけ	2/3程度	(7.6)		(4.7)		2.6		a:ロクロ・内底ナデ・外底回転系切・板状圧痕 b:微砂・雲母・白色粒・赤色粒・海綿骨針を含む粉質良土 c:橙色 e:良好
図4-8	トレンチ	瓦器質 火鉢	口縁部片							a:輪積み・内面横～斜位ナデ・外面口縁下横ナデ・胴部指頭痕十ハケ目 b:微砂多・黒色粒・白色粒を含む灰色粗土 c:橙色～灰色 e:やや甘い・軟質 f:口縁下に穿穴あり
図4-9	トレンチ	石製品 砥石		[7.0]		3.1		2.0		a:砥面は4面使用 b:流紋岩質粗粒凝灰岩 c:黄白色 f:伊予産
図4-10	トレンチ内 溝2	かわらけ	1/3程度			(5.0)				a:ロクロ・内底ナデ・外底回転系切 b:微砂・雲母・赤色粒・白色粒・海綿骨芯・土丹粒を含む砂質気味やや粗土 c:橙色 e:甘い f:内底回転ナデ残る
図4-11	トレンチ内 溝2	かわらけ	ほぼ完形	10.4		5.9		2.8		a:ロクロ・内底ナデ・外底回転系切・板状圧痕 b:微砂・雲母・赤色粒・海綿骨芯・土丹粒・小石粒を含む粉質粗土 c:淡橙色 e:良好
図4-12	トレンチ内 溝2	かわらけ	ほぼ完形	11.1		6.8		3.2		a:ロクロ・内底ナデ・外底回転系切・板状圧痕 b:微砂多・雲母・赤色粒・海綿骨芯・土丹粒多を含む砂質粗土 c:淡橙色 e:良好
図4-13	トレンチ内 溝2	かわらけ	ほぼ完形	11.3		7.8		2.9		a:ロクロ・内底ナデ・外底回転系切・板状圧痕 b:微砂・雲母・赤色粒・海綿骨芯・土丹粒を含む砂質やや粗土 c:橙色 e:良好
図4-14	トレンチ内 溝2	かわらけ	2/3程度	(12.6)		7.2		3.3		a:ロクロ・内底ナデ・外底回転系切・板状圧痕 b:微砂・雲母・赤色粒・白色粒・海綿骨針を含む粉質良土 c:橙色 e:良好
図4-15	トレンチ内 溝2	かわらけ	4/5程度	12.6		8.6		3.5		a:ロクロ・内底ナデ・外底回転系切・板状圧痕 b:微砂・雲母・赤色粒・小石粒・海綿骨針・土丹粒多を含む砂質気味粗土 c:淡橙色 e:良好
図4-16	トレンチ内 溝2	かわらけ	口縁部片	(14.2)						a:ロクロ b:微砂・雲母・赤色粒・土丹粒・海綿骨針を含む砂質粗土 c:橙色～褐色 e:良好 f:部分的に黒く変色
図4-17	トレンチ 最下層	かわらけ	口縁部片	(8.3)		(4.8)		2.2		a:ロクロ・外底回転系切 b:微砂・雲母・赤色粒・海綿骨針・土丹粒を含む砂質気味やや粗土 c:橙色 e:良好
図4-18	表探	かわらけ	2/3程度	8.0		4.5		1.8		a:ロクロ・内底横ナデ後に見込み回転ナデ・外底回転系切・板状圧痕 b:微砂・雲母・赤色粒・海綿骨芯を含む砂質良土 c:淡橙色 e:良好
図4-19	表探	平瓦	端部片	[5.9]		[5.7]		2.0		a:凸面ナデ+離れ砂付着・凹面ナデ・側縁ケズリナデ b:砂粒・黒色粒・赤色粒・小石粒・気泡を含む灰褐色良土 c:灰色～灰褐色 e:硬質 f:側面に竹管あり

遺物破片数表

種類 \ 出土地		1面まで	1面溝1	2面まで	3a面まで	3b面まで	トレンチ	トレンチ内 溝2	トレンチ 最下層	表探	合計	%
かわらけ	ロクロ(大)	7	1	19	46	20	108	36	1	5	243	71.1
	ロクロ(中)						1	3	1		5	1.5
	ロクロ(小)	4		2	2		15	5			28	8.2
	白・手捏ね(小)						1				1	0.3
	白・ロクロ(小)						3				3	0.9
青磁	蓮弁文碗						1				1	0.3
	無文碗						1				1	0.3
青白磁	梅瓶					1					1	0.3
瀬戸	壺?						1				1	0.3
	不明			1							1	0.3
常滑	片口鉢Ⅰ類						1	2			3	0.9
	片口鉢Ⅱ類						1	1			2	0.6
備前	甕	3		7	4		3				17	5.0
	擂鉢			1							1	0.3
瓦	平瓦								1		1	0.3
瓦器	吉備碗				1		1				2	0.6
	瓦器質				1		1				2	0.6
石製品 他	砥石							1			1	0.3
	軽石							1			1	0.3
	玉石					1	13				14	4.1
鉄製品 他	鉄釘						1				1	0.3
	鉄滓			2							2	0.6
骨	獣骨				2			1			3	0.9
	人骨						1	1			2	0.6
炭							1	3			4	1.2
近現代		1									1	0.3
合計		15	1	32	56	26	157	47	2	6	342	100.0
%		4.4	0.3	9.4	16.4	7.6	45.9	13.7	0.6	1.8	100.0	





調査地点遠景



調査地点付近より銭洗弁財天方向を望む



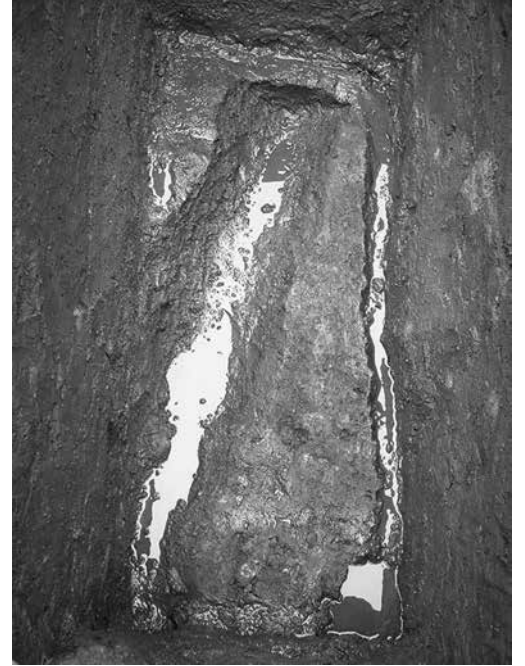
I区第1面全景(南から)



I区第3面全景(南から)

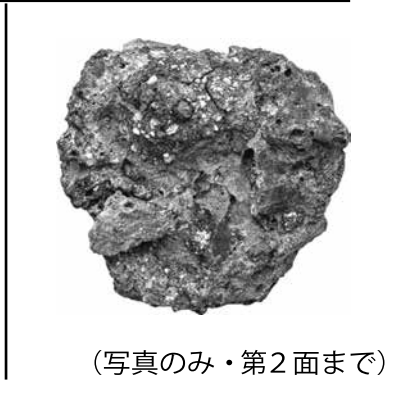
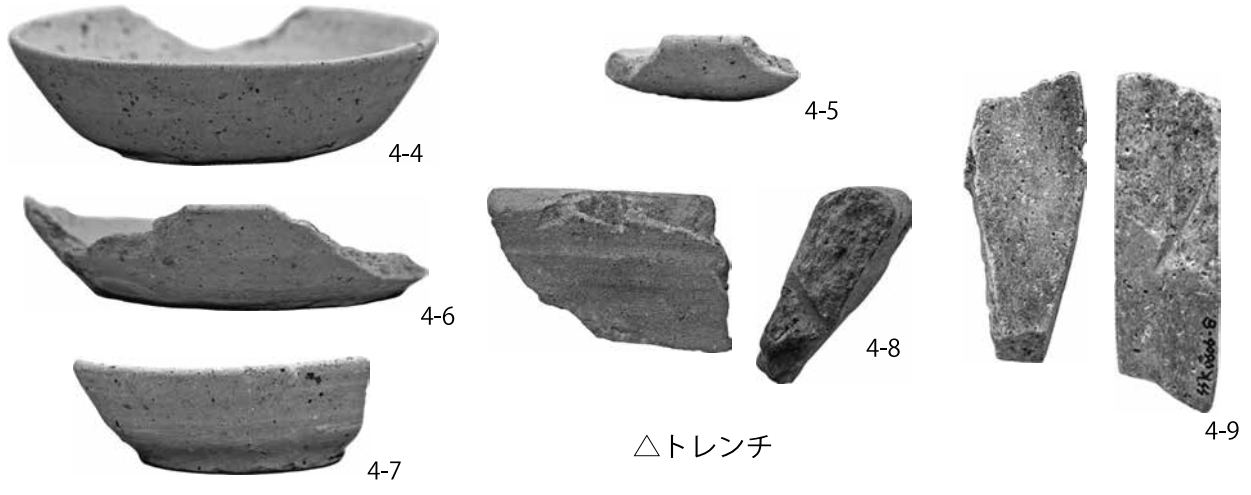


I区トレンチかわらけ出土状況(南から)



1区トレンチ溝2完掘状況(南から)

図版2



# 極楽寺旧境内遺跡 (No. 291)

極楽寺三丁目 330 番 6 地点

## 例 言

1. 本報は極楽寺旧境内遺跡 (No. 291)、極楽寺三丁目 330 番 6 地点における個人住宅建設に伴う埋蔵文化財の緊急発掘調査報告書である。
2. 発掘調査は、国庫補助事業として鎌倉市教育委員会が、平成 19 年 (2007) 2 月 5 日～同年 2 月 23 日にかけて実施したもので、調査面積は 16.0 $\text{m}^2$ である。
3. 調査の体制は以下の通りである。

### 発掘調査

調査担当者 鈴木絵美 (文化財課臨時的任用職員)、福田 誠 (教育委員会文化財課嘱託)

調査員 石元道子 本城 裕 宇都洋平 (文化財課臨時的任用職員)

作業員 社団法人鎌倉市シルバー人材センター

### 資料整理作業

調査担当者 福田 誠 (教育委員会文化財課嘱託)

4. 現地での遺構写真撮影は鈴木・福田が、資料整理時の遺物写真撮影は福田が行った。
5. 出土品、及び記録図面・写真等の資料は、鎌倉市教育委員会が保管している。
6. 本遺跡の略号は「GT3-330-6」、平成 18 年度通しNo.は GT0622 である。
7. 座標は、鎌倉市 4 級基準点 (日本測地系) を、世界測地系座標変換 Web 版 (TKY2JGD) を用いて世界測地系に変換した。

H186(X=-77,164.432 Y=-27,631.386) → (X=-76,807.616 Y=-27,924.801)

H187(X=-77,128.794 Y=-27,633.032) → (X=-76,771.978 Y=-27,926.444)

原点 1 (X=-77,131.265 Y=-27,637.292) → (X=-76,774.448 Y=-27,930.704)

原点 2 (X=-77,136.276 Y=-27,636.430) → (X=-76,779.460 Y=-27,929.843)

水準は、鎌倉市 3 級基準点 B M 53312(L=30.080 m) から移動した仮 B M (17.471 m) を使用した。

## 本文目次

第一章 調査地点の歴史的環境	22
第1節 位置と歴史的環境	
第二章 調査の経過と概要	22
第1節 調査の経緯	
第2節 土層	
第三章 検出された遺構と遺物	25
第1節 第1面の遺構と遺物	
第2節 第2面の遺構と遺物	
第四章 まとめ	28

## 挿図目次

図1 調査地点と周辺の遺跡	23	図4 第2面全測図と住居址土層図	25
図2 調査区の設定	23	図5 出土した遺物	27
図3 第1面全測図と調査区東壁の土層図	24		

## 表目次

表1 出土遺物点数表	26
表2 遺物観察表	26

## 図版目次

図版1 調査地周辺	29	図版5 住居址1-2	33
図版2 調査区セクション	30	図版6 住居址1-3	34
図版3 1面全景	31	図版7 出土した遺物	35
図版4 住居址1-1	32		

# 第一章 調査地点の歴史的環境

## 第1節 位置と歴史的環境

調査地の鎌倉市極楽寺三丁目 330 番 6 地点は、極楽寺旧境内に含まれている。月影ヶ谷の入口付近、江ノ電踏切を越え谷奥に向かい南から北に延びる市道の右側に位置する。

極楽寺は正元元年(1259)、北条義時の三男、北条重時が創建『極楽寺縁起』。子の北条長時(六代執権)が文永四年(1267)、当時多宝寺にいた忍性を招き開山。正式名称「靈鷲山感応院極楽寺」。本尊は釈迦如来立像。最盛期には七堂伽藍、四十九支院を持ち寺勢を誇った。新田義貞の鎌倉攻めにより焼失、以後再建を繰り返すが現在は吉祥院を残すのみ。忍性は人々を救済するため施薬院・悲田院・施益院・福田院を設けた。

忍性は嘉元元年(1303)7月12日、極楽寺で没する(87歳)。墓は、極楽寺背後(奥の院)にあり、安山岩製で高さ357cmの五輪塔。国の重要文化財に指定されている。

調査地点のある月影ヶ谷は、冷泉為相の母で十六夜日記の作者、阿仏尼によって弘安二年(1279)の旅日記の中で、鎌倉の住まう所として描写されている。

### 鎌倉の住居

読み下し「あづまにてすむ所は、月かげのやつとぞいふなる。浦近き山もとにて、風いとあらし。山寺のかたはらなれば、のどかにすごくて、浪の音松のかぜたえず。都のおとづれは、いつしかおぼつかなきほどにしも、うつの山にてゆきあひたりし山ぶしのたよりにことづけ申たりし人の御許より、たしかなるたよりにつけて、ありし御返しと覺しくて。」

訳文「鎌倉で住むところの名は、月影の谷というそうだ。海岸に近い山裾で、風がひどく荒い。山寺(極楽寺)のそばなので、ひっそりと物寂しく、波の音、松風が絶えず聞こえるばかり、都からの音信が早速にも待ち遠しい折りしも、宇津の山で行きあった山伏に託しておことづけをした方の方から、確実な便に頼って、いつぞやのお返事と思われるお手紙をいただいた。」(十六夜日記 岩佐美代子訳 中世日記 紀行集 1994 新編日本古典文学全集 48)

現在、稲村小学校の北側、谷内に月影地藏堂がある。元々、月影ヶ谷(江戸時代初期に描かれたと考えられている極楽寺境内絵図内、月影ヶ谷に地藏堂が描かれる。)にあり、江戸時代に移されたと伝えられている。本尊は江戸時代の木造地藏菩薩立像である。

周辺の丘陵には姥ヶ谷横穴、一ノ谷・二ノ谷横穴と云った終末期の横穴式古墳が多く点在する。奈良時代、鎌倉郡方瀬郷に含まれていた地域で、正倉院御物古裂に方瀬郷の銘が見えている。鎌倉時代以前、古墳時代末期～平安時代(7～11世紀)から人々の生活が営まれていたことが伺える地域である。

## 第二章 調査の経過と土層

### 第1節 調査の経過

調査に先行して行われた、鎌倉市教育委員会による試掘調査の結果を基に、本調査は敷地内の専用住宅建設による掘削、削平で遺構面に影響が及ぶ駐車スペース部分 16.0㎡に対して行われた。

測量は、鎌倉市4級基準点(日本測地系)H186(X=-77,164.432 Y=-27,631.386)、H187(X=-77,128.794 Y=-27,633.032)を用いた後、世界測地系座標変換 Web 版(TKY2JGD)を用いて世界測地系に変換した。(例言 7 参照) 水準は、鎌倉市3級基準点BM 53312(L=30.080 m)から移動した仮BM(17.471 m)を使用した。



図1 調査地点と周辺の遺跡

- 極楽寺旧境内遺跡(No.291)
1. 調査地点 極楽寺3-330-6地点
  2. 極楽寺3-298-1外地点(田代1992)  
「東国歴史考古学研究所研究報告第25集」
  3. 極楽寺3-298-1外地点(齋木1998)  
「極楽寺旧境内遺跡」
  4. 極楽寺3-320-1地点  
「鎌倉市埋蔵文化財緊急調査報告書13-1」
  5. 極楽寺3-358・359地点  
「鎌倉市埋蔵文化財緊急調査報告書22-2」
  6. 極楽寺3-359-8の一部地点(宮田2009)  
「極楽寺旧境内遺跡」
  7. 極楽寺3-335-3地点  
「鎌倉市埋蔵文化財緊急調査報告書13-2」
  8. 極楽寺3-340-5地点(継1992)  
「平成2年度鎌倉市内急傾斜地崩壊対策事業に伴う発掘調査報告書」
  9. 極楽寺2-18外地点  
「鎌倉市埋蔵文化財緊急調査報告書16-1」  
五合枿遺跡(No.292)
  10. 極楽寺1丁目やぐら(田代・宗臺1998)  
「東国歴史考古学研究所調査研究報告15集」  
極楽寺前やぐら(No.129)
  11. 極楽寺1丁目地内(田代1996)  
「東国歴史考古学研究所研究報告第7集」
  12. 極楽寺1丁目地内(田代1996)  
「平成6年度鎌倉市内急傾斜地崩壊対策事業に伴う発掘調査報告書」  
極楽寺中心伽藍跡(No.290)
  13. 極楽寺2-10-6・3-2-3地点(玉林1980)  
「極楽寺旧境内遺跡」
  14. 極楽寺3-1028-1一部地点(汐見2007)  
「鎌倉市埋蔵文化財緊急調査報告書23-2」
  15. 稲村ガ崎小学校第2グラウンド
  16. 忍性墓

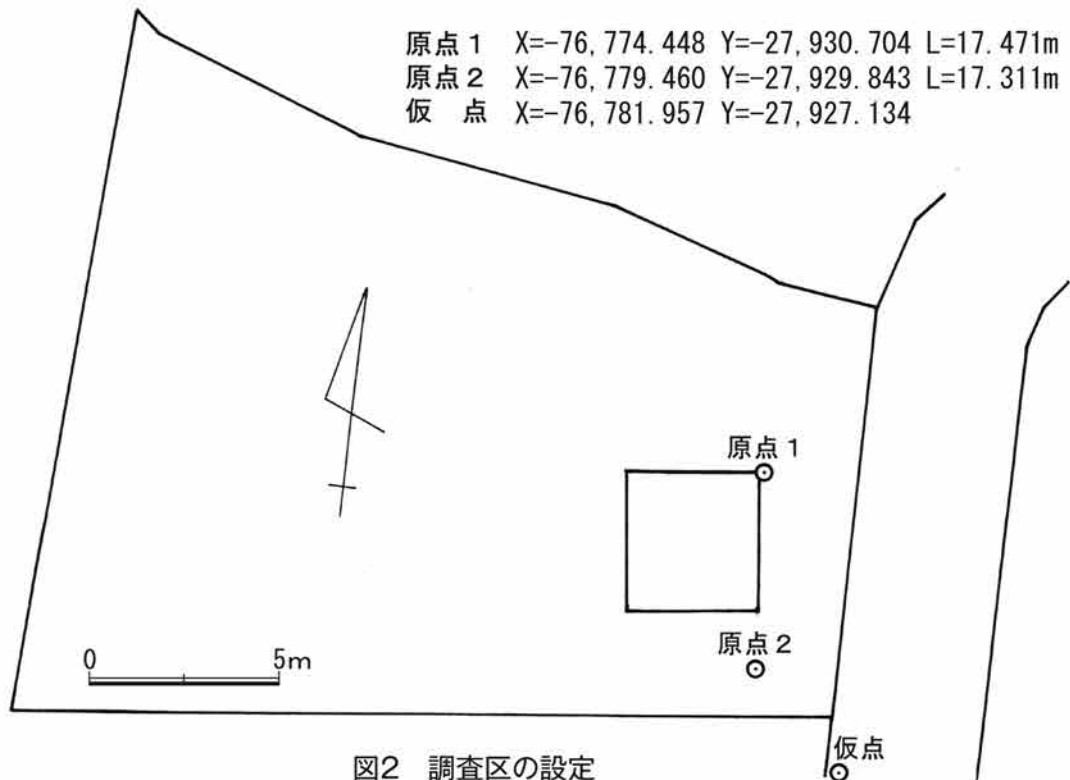
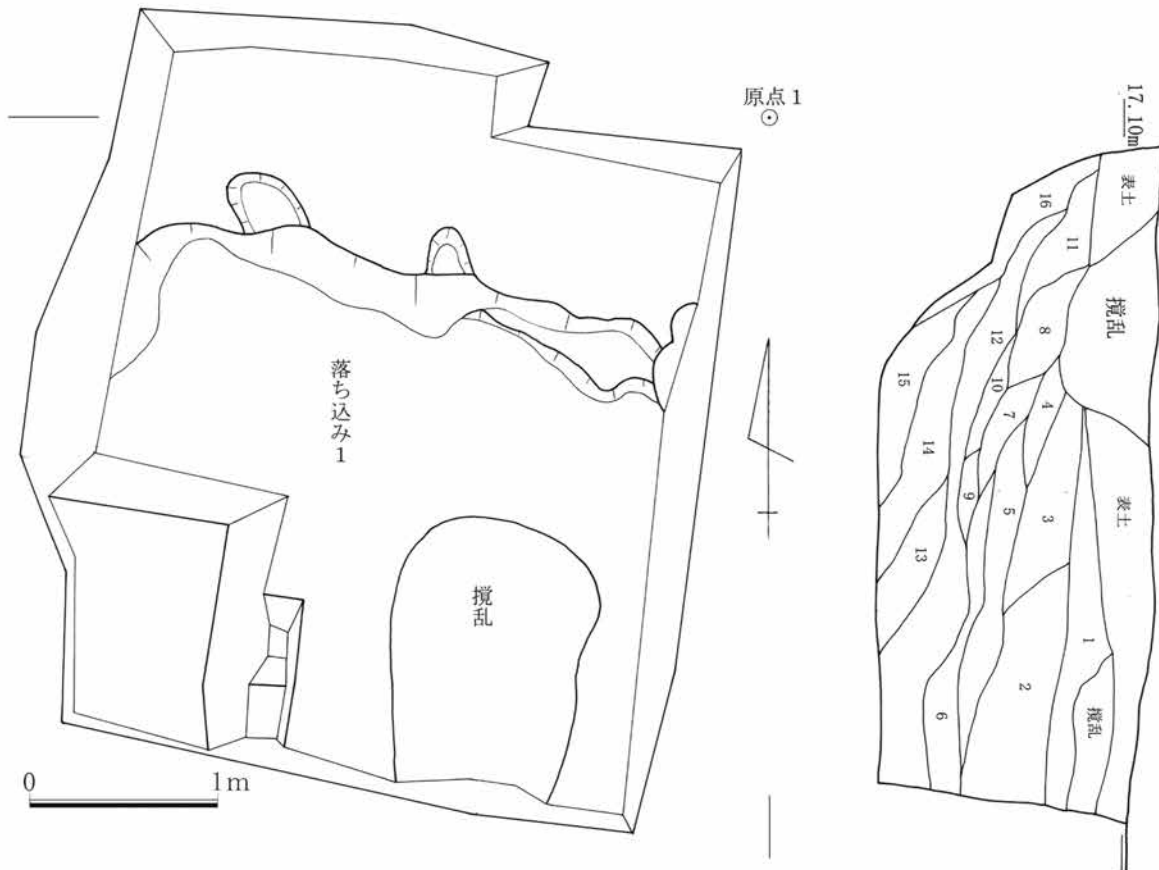


図2 調査区の設定

## 第2節 土層

現地表から遺構面までの間(34～90cm)はすべて盛土。ベースとなる基盤層は山際の岩盤～明黄褐色粘質土層(ローム層)。この基盤層からは古代の遺物(土器片)が出土する。古代の遺構の主体はやはり周辺の山際や谷の奥にあるものと推察される。



1. 黒褐色砂質土層(細かい土丹粒をごく少量含む)
2. 茶褐色砂質土層(焼土丹粒、土師器片、炭を含む)
3. 茶褐色砂質土層(細かい土丹粒をごく少量含む)
4. 茶褐色砂質土層(焼土丹粒含む、粘性有り)
5. 黒褐色砂質土層(焼土丹粒、炭をブロック状に含む)
6. 茶褐色砂質土層(焼土丹粒、土師器片、炭を少量含む)
7. 茶褐色粘質土層(土丹粒、砂を含む)粘性強い
8. 灰茶色粘質土層(径1～3cm土丹粒をやや多く含む)
9. 茶褐色砂質土層(黄茶色粘質土がマーブル状に入る)
10. 茶褐色粘質土層(径1～5cmの土丹を少量含み、炭がブロック状に入る)
11. 淡茶灰色粘質土層(灰1～5cmの土丹を多く含む 締まり強く遺物無し)
12. 淡茶灰色粘質土層(径1～拳大の土丹を含む 締まり良い)
13. 淡茶灰色粘質土層(細かい土丹粒多く含み締まり良い)
14. 淡茶褐色粘質土層(径1～土丹を少量含み締まり強い 褐鉄含む)
15. 淡茶灰色粘質土層(径1～拳大の土丹含む)
16. 黄灰色粘質土層(人頭大の土丹多い 岩盤漸移層)
17. 茶褐色砂質土層、土坑1の覆土(炭、土師器片、径1～3cmの土丹粒を含む)
18. 茶褐色砂質土層、土坑2の覆土

図3 第1面全測図と調査区東壁の土層図



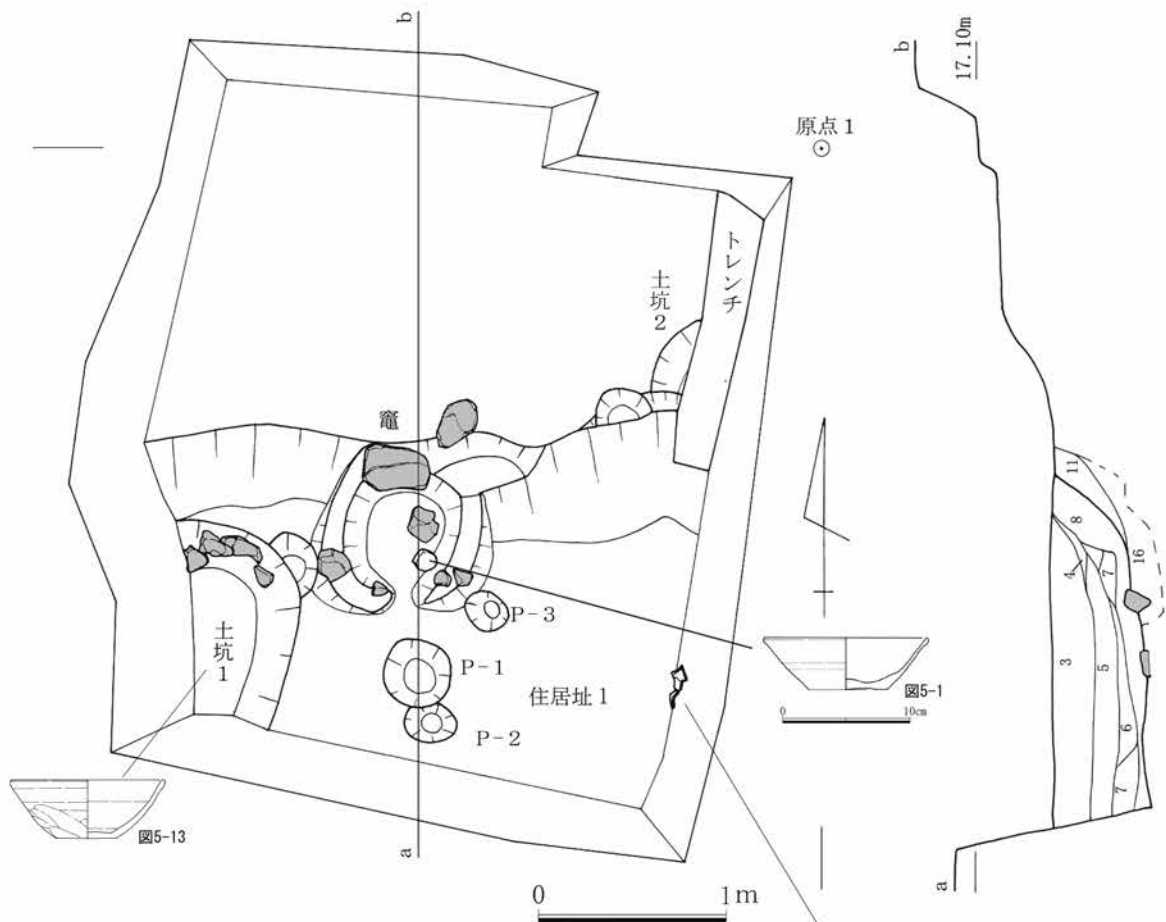
### 第三章 検出された遺構

#### 第1節 第1面の遺構と遺物 (図3・5)

##### a. 落ち込み

調査区の東西幅、約3mが南側に向かい段差約25～30cmで落ち込んでいるのが検出された。全体が大きく削平を受けているものと考えられ、土層を観察するといわゆるレンズ状堆積が見られた。比較的深結果的には、第2面で検出された竪穴住居址の廃絶後、埋没してゆく過程の窪みであることが判明した。

掘り下げる途中で、中世遺物(常滑甕 図5-19、かわらけ 図5-20、白磁口元皿 図5-21)と土師器片が出土している。



3. 茶褐色砂質土層(細かい土丹粒をごく少量含む)
4. 茶褐色砂質土層(焼土丹粒含む、粘性有り)
5. 黒褐色砂質土層(焼土丹粒、炭をブロック状に含む)
6. 茶褐色砂質土層(焼土丹粒、土師器片、炭を少量含む)
7. 茶褐色粘質土層(土丹粒、砂を含む)粘性強い
8. 灰茶色粘質土層(径1～3cm土丹粒をやや多く含む)
11. 淡茶灰色粘質土層(灰1～5cmの土丹を多く含む 締まり強く遺物無し)
15. 淡茶灰色粘質土層(径1～拳大の土丹含む)
16. 黄灰色粘質土層(人頭大の土丹多い 岩盤漸移層)
17. 茶褐色砂質土層、土坑1の覆土(炭、土師器片、径1～3cmの土丹粒を含む)
18. 茶褐色砂質土層、土坑2の覆土

図4 第2面全測図と住居址土層図

## 第2節 第2面の遺構と遺物（図4・5）

### a. 住居址1

第1面で検出した落ち込みの真下で、竪穴住居址の北辺を長さ3m分確認したものである。

調査範囲が狭いため、北辺のみの検出で規模を把握するには至らなかった。検出した住居址北辺のほぼ中央で竈を確認した。竈から北側に延びる煙道は、削平のために確認することができなかった。

確認した住居址の壁の残存高は最大で50cmである。

1面から住居の掘り下げ中で、土師器甕片69点、土師器坏2点、須恵器甕6点、須恵器坏11点が出土した。2面のそのほとんどが住居址内の床面である。2面・床面、竈周囲の土坑1、柱穴内から土師器甕16点、土師器坏3点、須恵器坏3点、鉄滓1点が出土している。

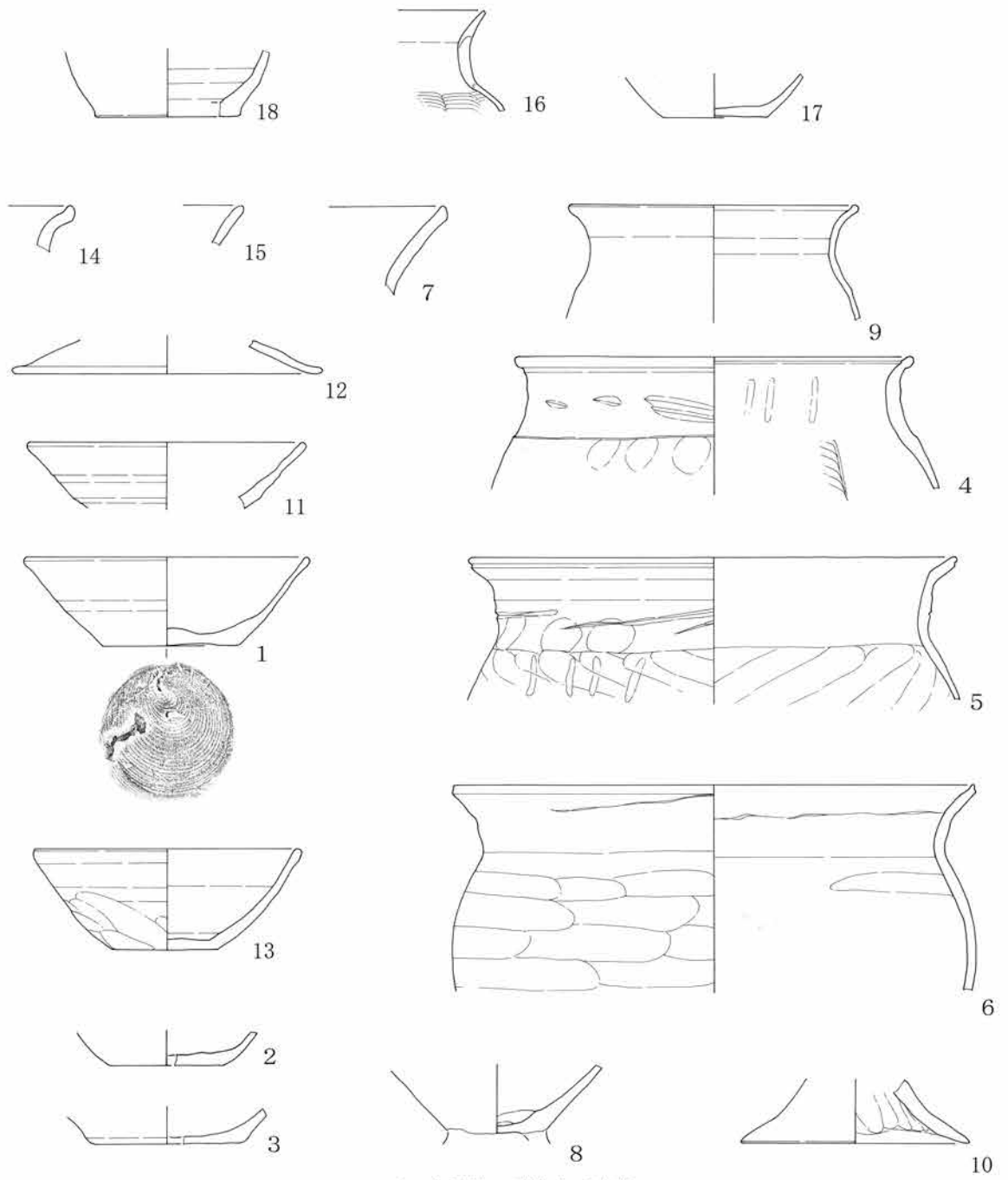
鉄滓としたものは、非常に重く、踏鞴製鉄の際にでる不純物である「ノロ」と云うよりも、金属塊と

表1 出土遺物点数表

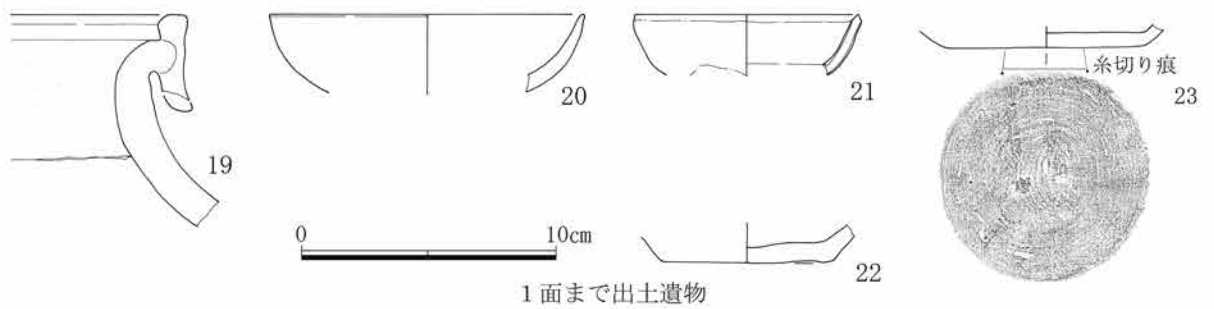
	1面まで	1面	住居床まで	2面・住居床	土坑1	P-1	P-2	点数
土師器甕	8	3	69	5	1	7	3	96
土師器坏			2	2	1			5
須恵器甕			6					6
須恵器坏	1		11	2	1			15
鉄滓				1 (580g)				1
常滑甕	6							6
かわらけ	3	1						4
白磁碗	1							1
棧瓦	25							25
点数	44	4	88	10	3	7	3	計 159点

表2 遺物観察表

図番号	面・遺構	種別	法量（口径・底径・器高）	観察
1	2面・住居床面まで	須恵器坏	口13.0cm・底6.0cm・高4.1cm	南比企窯？口縁少し肥厚 9c中
2	〃	須恵器坏	口不明・底5.2cm・高不明	南比企窯 年代観不明
3	〃	土師器坏	口不明・底6.6cm・高不明	全体に摩滅 黒色粒含む精良土 年代観不明
4	〃	土師器台付甕	口18.0cm・底不明・高不明	武蔵型 口縁の屈曲が〔字9c以降
5	〃	〃	口22.0cm・底不明・高不明	武蔵型 口縁の屈曲が〔字9c以降
6	〃	〃	口23.8cm・底不明・高不明	武蔵型 口縁の屈曲が〔字9c以降
7	〃	土師器長胴甕	口不明・底不明・高不明	相模型 年代観不明
8	〃	土師器台付甕	口不明・底不明・高不明	脚台部 胎土精良金雲母含む 年代観不明
9	2面・住居床面	土師器台付甕	口13.2cm・底不明・高不明	武蔵型 4～6と同じか 9c以降
10	〃	〃	口不明・底10.6cm・高不明	武蔵型 脚台部 年代観不明
11	〃	須恵器坏	口12.5cm・底不明・高不明	南多摩窯 or 南比企窯 1と同じ頃か
12	〃	須恵器蓋？	口14.4cm・底不明・高不明	南比企窯か 口縁反りが無いので蓋とした
13	2面・土坑1	土師器坏	口12.2cm・底4.8cm・高4.6cm	甲斐型坏 体部ナメハズリ 9c後半代
14	〃	土師器台付甕	口不明・底不明・高不明	武蔵型か 年代観不明
15	〃	須恵器坏	口不明・底不明・高不明	南多摩窯か 御殿山59窯式以降 9c中葉以降



2面・住居址・遺構出土遺物



1面まで出土遺物

図5 出土した遺物

図番号	面・遺構	種別	法量(口径・底径・器高)	観察
16	2面P-2	土師器台付甕	口不明・底不明・高不明	武蔵型 4～6 と同じか 9c以降
17	2面土坑2	須恵器坏	口不明・底 4.8cm・高不明	南多摩窯か 年代観不明
18	2面Tr	須恵器坏	口不明・底 6.6cm・高不明	南比企窯 or 東金子窯か 年代観不明
19	1面まで	常滑甕	口不明・底不明・高不明	口縁部片 6 b 型式 13c 後半
20	〃	かわらけ	口 12.6cm・底不明・高不明	白針含む精良土 焼成良好
21	〃	白磁口元皿	口 9.0cm・底不明・高不明	胎土きめ細かく乳白色の釉
22	〃	須恵器坏	口不明・底 7.0cm・高不明	南多摩窯 or 南比企窯 焼きが甘い 年代不明
23	〃	須恵器坏	口不明・底 8.0cm・高不明	南比企窯 底部糸切り→回転ヘラズリ 8c 後葉
24	2面・住居床面	鉄滓(ケラ)	重さ 580g	底面形、碗状に丸みを帯びる

して残った「ケラ」の可能性はある。「ケラ」は打ち砕かれ、日本刀の原料である良質の玉鋼と鉄器の材料である「ずく」分けられるものである。谷戸の西側、約 50 m 離れた極楽寺三丁目 358 番外地点遺跡(図 1-5)の 13 世紀後葉の溝の中から砂鉄と思われる磁石に付着する黒砂が出土している。

#### b. 土坑

##### 土坑 1

竈の左側に位置する直径 60cm 程の落ち込みで、焼けた土丹が確認されている。出土した土師器坏と床面出土の土師器坏(図 5-13)が接合した。このことから土坑は囲炉裏等の住居に伴う遺構と考えられよう。遺物は土師器甕 1 点、土師坏 1 点が出土している。

##### 土坑 2

トレンチを開けたときに検出された。住居址を切って掘り込まれていることから、住居址 1 より新しいと考えられる。年代不明の須恵器坏小片出土。

#### c. 柱穴

##### 柱穴 2

土師器台付甕片出土。住居址床面出土の遺物と同じ武蔵型の台付甕である。住居に伴う遺構と考えられるが、深さは浅い。

## 第四章 まとめ

今回の調査で、中世の遺構は確認されなかったが、不完全ながら竪穴住居址を検出・確認することができた。

住居址から出土した遺物は武蔵型の土師器甕・甲斐型坏、南比企窯、南多摩窯の須恵器甕・坏の組合せで、床面や伴う遺構から出土した遺物の年代観は 9 世紀後半を前後するものが中心であった。1 点、1 面までの出土ではあるが、8 世紀後葉代の南比企窯の須恵器坏が出土している。

また床面からの「ケラ」の出土は、近在でたたら(鑪・踏鞴)が行われていた可能性を示唆するもので興味深い。周辺の山稜地は金山と呼ばれ砂鉄が産出し、極楽寺の谷戸から流れ出る極楽寺川、稲村ヶ崎脇の河口、七里ヶ浜では現在でも海岸線が黒く砂鉄を見ることができる。

周辺の終末期の横穴墓古墳群(市史考古編 1959)の存在から見ても、七里ヶ浜一帯から極楽寺周囲の谷戸奥まで古墳時代以降人々の生活が営まれ、調査地点は中心からは外れるかもしれないが、少なくとも 8 世紀以降には多くの集落があったことを伺わせるものである。



1. 針磨橋付近（奥が月影ヶ谷）

2. 月影ヶ谷 水準点より北に向かって（谷奥に）



3. 月影ヶ谷 水準点より南に向かって（海方向）



調査地周辺

図版2



1. 調査区北壁



2. 調査区西壁



3. 調査区東壁



東壁際で検出した土師器甕  
図5-4

4. 調査区南壁



調査区セクション



1. 1面全景(南東から)

2. 1面全景(南から)



3. 1面全景(北から)

4. 1面全景(東から)



1面全景



1. 住居址1(東から)



2. 住居址1(南から)



3. 住居址1(北から)



鉄滓出土状況(図版7-24)



須恵器出土状況(図版7-1)



4. 住居址1(須恵器出土状況)

住居址1-1



1. 住居址1竈(正面)



2. 住居址1竈(セクション)

3. 住居址1竈(東から)



住居址1-2



1. 住居址 1 完掘 (南から)



2. 住居址 1 完掘 (北から)



3. 住居址 1 と土坑 1・2 (西から)



4. 住居址 1 と土坑 1・2 (東から)

住居址 1 - 3



出土した遺物



# 北条小町邸跡 (No. 282)

雪ノ下一丁目 427 番 2 外地点

## 例 言

1. 本報は、「北条小町邸跡」(No. 282)内、雪ノ下一丁目 427 番 2 外地点における埋蔵文化財発掘調査の報告である。

2. 調査期間 2007 年(平 19) 6 月 25 日～2007 年(平 19) 8 月 23 日

3. 調査面積 51.00m<sup>2</sup>

4. 略 称 YYT1427

5. 調査体制

担 当 者 馬淵和雄

調 査 員 鍛冶屋勝二・鈴木弘太・松原康子・岩崎卓司(資料整理)・岡田慶子(同前)・沖元道(同前)・本城裕(同前)

調査補助員 佐藤あおい・若松慶・佐藤千尋(資料整理)・田中聡(同前)

作 業 員 鯉沼稔・佐野吉男・田島道夫・渡辺輝彦(以上(社)鎌倉市シルバー人材センター)

6. 本報作成分担

遺構図整理 沖元

遺物実測 岩崎・本城

同墨入れ 岩崎

同観察表 岡田・沖元

同計量表 沖元・佐藤(千)

同写真撮影 馬淵

図版作成 岡田・沖元・佐藤(千)

原稿執筆 沖元

編 集 沖元

7. 整理段階において、遺物の分類及び編年は以下を参考にした。

土師器皿：馬淵和雄 1998『鎌倉大仏の中世史』新人物往来社

瓦 瓦：原 廣志 2002「第 4 章 出土瓦について」『永福寺跡－遺物・考察編－』鎌倉市教育委員会

瀬 戸：藤澤良祐 2008『中世瀬戸窯の研究』高志書院

常 滑：中野晴久 2012『愛知県史別編窯業 3 中世・近世常滑系』愛知県

渥 美：安井俊則 2012『愛知県史別編窯業 3 中世・近世常滑系』愛知県

貿易陶磁：太宰府市教育委員会 2000『大宰府条坊跡 XV－陶磁器分類編－』

本報告作成に際し、次の方々の御教示を得た。記して感謝したい。

押木弘己・汐見一夫・原廣志・松島義章

## 目次

第一章 遺跡と調査地点の概観	41
第1節. 位置と地勢	
第2節. 歴史的環境	
第二章 調査の概略	52
第1節. 調査にいたる経緯	
第2節. 調査の経過	
第3節. 調査方法	
第三章 調査結果	54
第1節 概要	
1. 層序と面の概要	
第2節 各説	
1. I a面	
2. I b面	
3. I c面	
4. II面	
5. 最終確認トレンチ	
6. 表採・攪乱坑出土遺物	
第四章 まとめと考察	96
第1節. 遺構の変遷と年代	
第2節. 調査地点周辺の土地造成について	

## 挿 図 目 次

図1 調査地点と周辺の遺跡・旧跡	42	図17 土坑6・11・14・20、同出土遺物	71
図2 明治15年頃の調査地点周辺	46	図18 土坑16・17、I a構築土出土遺物	72
図3 調査区設定図	53	図19 土坑16・17出土遺物	73
図4 調査区・土層断面図	55	図20 土坑18・19・I b面ピット・I b面構築土出土遺物	74
図5 I a面遺構全図、I a面出土遺物(1)	59	図21 I c面遺構全図、同出土遺物、溝2、同出土遺物	75
図6 I a面出土遺物(2)・土師器皿小片集中部出土遺物	60	図22 建物5、同出土遺物	77
図7 建物1、同出土遺物	61	図23 建物6、同出土遺物	78
図8 建物2、同出土遺物	62	図24 土坑10・P.65、同出土遺物、I c面ピット出土遺物	79
図9 建物3・4、同出土遺物	63	図25 II面遺構全図、溝状遺構	81
図10 落込み1、同出土遺物	64	図26 竪穴遺構・性格不明遺構・土坑21・22・23	82
図11 土坑1、同出土遺物	65	図27 最終確認トレンチ設定図、表採・攪乱坑出土遺物	83
図12 土坑2・3・7・8・9・12、同出土遺物	66	図28 遺構変遷図	97
図13 土坑13・P.12・13・14・34・75、同出土遺物	67	図29 土地造成模式図	98
図14 I a面ピット出土遺物	68		
図15 I b面遺構全図、I b面出土遺物	69		
図16 柱穴列1・溝1・土坑4・P.29・土坑5、同出土遺物	70		

## 表 目 次

表 1	出土遺物観察表 (1) ……………	85	表 7	出土遺物観察表 (7) ……………	91
表 2	出土遺物観察表 (2) ……………	86	表 8	出土遺物観察表 (8) ……………	92
表 3	出土遺物観察表 (3) ……………	87	表 9	出土遺物観察表 (9) ……………	93
表 4	出土遺物観察表 (4) ……………	88	表 10	出土遺物計量表 (1) ……………	94
表 5	出土遺物観察表 (5) ……………	89	表 11	出土遺物計量表 (2) ……………	95
表 6	出土遺物観察表 (6) ……………	90			

## 図 版 目 次

図版 1 ……………	101	7 - 3	I b・I c 面土坑 6 (西から)	
1 - 1	調査地点入口 (西から)	7 - 4	I b 面 P120 (南から)	
1 - 2	調査地点へいたる路地	図版 8 ……………		108
1 - 3	調査地点周辺	8 - 1	I b・I c 面 P53 (南から)	
1 - 4	若宮大路からのぞむ東西道	8 - 2	2 区 I c 面全景 (南から)	
図版 2 ……………	102	8 - 3	2 区 I c 面全景 (西から)	
2 - 1	2 区 I a 面全景 (西から)	8 - 4	2 区 I c 面全景 (北から)	
2 - 2	I a 面土坑 1 (西から)	図版 9 ……………		109
2 - 3	I a 面土坑 2 (東から)	9 - 1	2 区 I c 面全景 (東から)	
2 - 4	I a 面落込み 1 (北から)	9 - 2	2 区 II 面全景 (西から)	
図版 3 ……………	103	9 - 3	2 区 II 面全景 (北から)	
3 - 1	I a 面 P.42 (南西から)	9 - 4	2 区 II 面全景 (東から)	
3 - 2	I a 面 P.75 掘削前 (東から)	図版 10 ……………		110
3 - 3	I a 面 P.75 安山岩 (伊豆石) 検出状況 (東から)	10 - 1	2 区 II 面全景 (南から)	
3 - 4	I a 面 P.75 平瓦検出状況 (東から)	10 - 2	II 面溝状遺構 (東から)	
図版 4 ……………	104	10 - 3	1 区 II 面西北隅 (北から)	
4 - 1	I a 面 P.2 (南から)	10 - 4	II 面竪穴遺構 (西から)	
4 - 2	1 区 I b・I c 面全景 (東から)	図版 11 ……………		111
4 - 3	1 区 I b・I c 面全景 (西から)	11 - 1	2 区土坑 22 (北から)	
4 - 4	1 区 I b・I c 面全景 (南から)	11 - 2	1 区最終確認トレンチ南壁土層断面	
図版 5 ……………	105	図版 12 ……………		112
5 - 1	2 区 I b 面全景 (南から)	12 - 1	1 区東壁土層断面	
5 - 2	2 区 I b 面全景 (西から)	12 - 2	1 区南壁土層断面	
5 - 3	I b・I c 面土坑 4 (西から)	図版 13 ……………		113
5 - 4	I b 面土坑 17 (西から)	13 - 1	2 区西壁土層断面	
図版 6 ……………	106	13 - 2	1 区西壁 (調査区境界) 土層断面	
6 - 1	I b 面土坑 16 (南から)	図版 14	出土遺物 1 ……………	114
6 - 2	I b 面土坑 16・17 土層断面 (南西から)	図版 15	出土遺物 2 ……………	115
図版 7 ……………	107	図版 16	出土遺物 3 ……………	116
7 - 1	I b 面土坑 18・P106 (南から)			
7 - 2	I b 面土坑 10・P65 土層断面 (北から)			



# 第一章 遺跡と調査地点の概観

## 第1節. 位置と地勢

### 地勢

鎌倉中心部は、鶴岡八幡宮から海に向かって真っ直ぐ伸びる若宮大路を基軸として、それにほぼ平行した東西2本の南北大路、および直交する何本かの東西道路により区画される。市街地のほとんどの地下には中世都市遺跡が存在するが、このうち若宮大路東側の鶴岡八幡宮前面（南）にある一辺約200mの方形区画が、神奈川県遺跡台帳に「北条小町邸跡（泰時・時頼邸）」（鎌倉市No.282）として登録されている。この区画は西辺を若宮大路、東辺を小町大路、北辺は鶴岡八幡宮前の東西道路に囲まれ、鎌倉時代中～後期には幕府のあった場所とも、執権北条泰時や経時・重時らの正亭のあった場所ともいわれるが（秋山1996・1997・2006）、この点については後述する。

調査地点は、鶴岡八幡宮前の東西道路から約160m南下し、若宮大路から東に約100m、小町大路から西に100mと、東西からはほぼ中心にある。現在の地番は鎌倉市雪ノ下一丁目427番2ほか。

調査地点を地勢上からみれば、およそ次のようになる。鎌倉市東辺の山中に源を発した滑川は、西進しつつ、現在の十二所から浄明寺にかけての狭い谷を開析したあと、大倉の辺から南に向きを変えて市内中心部に沖積平野を形成しつつ、相模湾に流れ込む。この間中流域から下流では左岸の山裾を削り、右岸に河岸段丘が作られるが、調査地点は沖積平野のほぼ入口付近東寄りの滑川右岸に位置する。滑川までは約250m、現在の標高は前面の小町大路面で10.2m前後、中世期には、削平されて詳しいことは不明だが、中世基盤層はほぼ9.0～9.3m程度となっている。現況で西の若宮大路は標高8.2mほど、東の小町大路は標高9.0～9.5mほどとなっている。

## 第2節. 歴史的環境

### 縄文～古墳時代

縄文海進期、鎌倉市街地は全体的に水面下であったと考えられる。旧市内では荏柄天神社前の民家での井戸掘削時に諸磯式と阿玉台式（赤星1959）、15世紀以降に人為的に滑川を埋めた土中から加曾利E式と縄文晩期から弥生前期にかけての土器（馬淵2014）、現在の横浜国大付属小学校敷地内から称名寺式（赤星1959）の出土が知られる程度で、全体的にきわめて乏しい。

上本進二氏によれば、当初鎌倉中心部の沖積平野中心部を流れていた古滑川が、現在の位置に近い東の山裾に流路を変えるのは縄文時代晩期から弥生中期にかけてである（上本2000）。

調査地点一帯で人の生活痕跡が確認されるのは弥生時代中期後半からである。この時期以降、大倉から二階堂にかけて大規模な集落が形成され（馬淵1998・1999）、当地点付近でも中世層の中からはしばしば宮ノ台式や久ヶ原式の土器が出土する。

古墳時代の集落・住居址は、海岸部の砂丘上、二階堂付近の平坦な微高地で発見されているが、当地点付近ではまだ例がない。地点35において古墳時代土師器が出土する中世基盤層下層の粘土層内の花粉分析が行われている。この結果、イネ科のプラントオパールが検出されていることから、この一帯で水田耕作がおこなわれていた可能性がある（鈴木1996）。

### 律令期～平安時代後期

鎌倉の史料上の初出は、天平七年（735年）の裏書を持つ『相摸国封戸租交易帳』（『正倉院文書』正集十八『神奈川県史 資料編』1-58）に鎌倉郡鎌倉郷とあるものである。この『相摸国封戸租交易



図1 調査地点と周辺の遺跡・旧跡 (1/5000)

北条小町邸跡 (No. 282) 本調査地点 雪ノ下一丁目 427 番 2 外 1. 雪ノ下一丁目 377-6・7 (1994 調査) 馬淵ほか 1996「鎌倉市埋蔵文化財緊急調査報告書 12-2」鎌倉市教育委員会 2. 雪ノ下一丁目 374-2 (1985 調査) 玉林ほか 1985「鎌倉市埋蔵文化財緊急調査報告書 2」鎌倉市教育委員会 3. 雪ノ下一丁目 407-3 の一部 (2002 調査) 原ほか 2005「鎌倉市埋蔵文化財緊急調査報告書 21-2」鎌倉市教育委員会 4. 雪ノ下一丁目 395 (1988 菊川) 菊川 1989「鎌倉市埋蔵文化財緊急調査報告書 5」鎌倉市教育委員会 5. 雪ノ下一丁目 372-7 (1984 調査) 馬淵 1985「鎌倉市埋蔵文化財緊急調査報告書 1」鎌倉市教育委員会 6. 雪ノ下一丁目 371-1 (1984 調査) 馬淵 1985「北条泰時・時頼邸跡」北条泰時・時頼邸跡発掘調査団 7. 雪ノ下一丁目 403-14 (2013 調査) 8. 雪ノ下一丁目 401-5 他 (2001 調査) 馬淵ほか 2003「鎌倉市埋蔵文化財緊急調査報告書 19」鎌倉市教育委員会 9. 雪ノ下一丁目 400-1 (2000 調査) 馬淵ほか 2002「鎌倉市埋蔵文化財緊急調査報告書 18-2」鎌倉市教育委員会 10. 雪ノ下一丁目 370-1 (1996 調査) 土屋・宗臺富 1998「鎌倉市埋蔵文化財緊急調査報告書 14-1」鎌倉市教育委員会 11. 雪ノ下一丁目 369 他 (1989 調査) 12. 雪ノ下一丁目 369 (1990 調査) 瀬田 1991「鎌倉市埋蔵文化財緊急調査報告書 7」鎌倉市教育委員会 13. 雪ノ下一丁目 369-1 (1996 調査) 原ほか 1998「鎌倉市埋蔵文化財緊急調査報告書 14-2」鎌倉市教育委員会 14. 雪ノ下一丁目 367-1・368-1 (1998 調査) 森ほか「北条小町邸跡 (泰時・時頼邸跡) 発掘調査報告書」北条小町邸跡発掘調査団 15. 雪ノ下一丁目 419-3 (1986 調査) 玉林 1987「鎌倉市埋蔵文化財緊急調査報告書 3」鎌倉市教育委員会 16. 雪ノ下一丁目 432-2 (1988 調査) 菊川 1989「鎌倉市埋蔵文化財緊急調査報告書 5」鎌倉市教育委員会 17. 雪ノ下一丁目 440 の一部 (2004 調査) 馬淵ほか 2010「鎌倉市埋蔵文化財緊急調査報告書 26-1」鎌倉市教育委員会

史跡 鶴岡八幡宮境内 18. (1979 調査) 宮田ほか 1983「直会殿用地発掘調査報告書」鎌倉市鶴岡八幡宮 19. (1982 調査) 松尾 1985「鶴岡八幡宮境内発掘調査報告書」鎌倉市教育委員会 20. (1981-1982 調査) 齋木ほか 1983「研修道場用地発掘調査報告書」鎌倉市鶴岡八幡宮

政所跡 (No. 247) 21. 雪ノ下三丁目 965 (1990 調査) 瀬田 1992「鎌倉市埋蔵文化財緊急調査報告書 8」鎌倉市教育委員会 22. 雪ノ下三丁目 966-1 (1990 調査) 瀬田 1992「鎌倉市埋蔵文化財緊急調査報告書 8」鎌倉市教育委員会 23. 雪ノ下三丁目 971-6 (1997 調査) 24. 雪ノ下三丁目 970-2 外 (1997 調査) 野本 1999「鎌倉市埋蔵文化財緊急調査報告書 15-2」鎌倉市教育委員会 25. 雪ノ下三丁目 989-4 (1999 調査) 宗臺秀ほか 2001「鎌倉市埋蔵文化財緊急調査報告書 17-1」鎌倉市教育委員会 26. 雪ノ下三丁目 988 (1991 調査) 手塚・田畑 1993「鎌倉市埋蔵文化財緊急調査報告書 9-3」鎌倉市教育委員会 27. 雪ノ下三丁目 987 - 1・2 (1990 調査) 手塚・宮田 1991「政所跡」政所跡発掘調査団

宇津宮辻子幕府跡 (No. 239) 28. 小町二丁目 366-1 (1990 - 1991 調査) 田畑 1991「第 1 回鎌倉市遺跡調査・発表会発表要旨」鎌倉考古学研究所・中世都市研究会 29. 小町二丁目 361-1 (1996 調査) 原ほか 1996「宇津宮辻子幕府跡発掘調査報告書」宇津宮辻子幕府跡発掘調査団 30. 小町二丁目 360-1 (2012 調査) 31. 小町二丁目 354-2 (1997 調査) 32. 小町二丁目 354-12 外 (1991 調査) 熊谷ほか 1993「鎌倉市埋蔵文化財緊急調査報告書 9-3」鎌倉市教育委員会 33. 小町二丁目 374-1 (1998 調査) 原 1998「第 22 回神奈川県遺跡調査・研究会発表要旨」神奈川県考古学会 34. 小町二丁目 354-2 (1992 調査) 継 1993「第 3 回鎌倉市遺跡調査・研究発表会発表要旨」鎌倉考古学研究所・中世都市研究会 35. 小町二丁目 389-1 (1994 調査) 原・佐藤 1996「鎌倉市埋蔵文化財緊急調査報告書 12-1」鎌倉市教育委員会 36. 小町二丁目 390-2 外 (2004 調査) 宇都 2010「鎌倉市埋蔵文化財緊急調査報告書 26」鎌倉市教育委員会

北条時房・顕時邸跡 (No. 278) 37. 小町一丁目 264-4 (2002 調査) 福田ほか 2005「鎌倉市埋蔵文化財緊急調査報告書 21-1」鎌倉市教育委員会 38. 雪ノ下一丁目 265-3 (1988 調査) 田代・原 1989「鎌倉市埋蔵文化財緊急調査報告書 6」鎌倉市教育委員会、宗臺秀・宗臺富 1999「北条時房・顕時邸跡」東国歴史考古学研究所 39. 雪ノ下一丁目 267-2・4 (2010 調査) 熊谷 2014「北条時房・顕時邸跡発掘調査報告書」株式会社博通 40. 雪ノ下一丁目 269-1 (2006 調査) 41. 雪ノ下一丁目 271-1 (1987 調査) 原・田代 1989「北条時房・顕時邸跡」北条時房・顕時邸跡発掘調査団 42. 雪ノ下一丁目 271-3 (1998 調査) 馬淵 2000「鎌倉市埋蔵文化財緊急調査報告書 16-2」鎌倉市教育委員会 43. 雪ノ下一丁目 271-4 (1998 調査) 馬淵 2000「鎌倉市埋蔵文化財緊急調査報告書 16-2」鎌倉市教育委員会 44. 雪ノ下一丁目 272 (1996 調査) 宗臺秀・宗臺富 1998「鎌倉市埋蔵文化財緊急調査報告書 14-1」鎌倉市教育委員会 45. 雪ノ下一丁目 273 - ロ (1986 調査) 原ほか 1988「鎌倉市埋蔵文化財緊急調査報告書 4」鎌倉市教育委員会 46. 雪ノ下一丁目 273- イ (1997 調査) 瀬田ほか 1999「鎌倉市埋蔵文化財緊急調査報告書 15-1」鎌倉市教育委員会、齋木ほか 1999「北条時房・顕時邸跡」北条時房・顕時邸跡発掘調査団・鎌倉遺跡調査会 47. 雪ノ下一丁目 236-1 (2004 調査) 原 2010「鎌倉市埋蔵文化財緊急調査報告書 26-1」鎌倉市教育委員会 48. 雪ノ下一丁目 233-9 (1986 調査) 馬淵 1987「鎌倉市埋蔵文化財緊急調査報告書 3」鎌倉市教育委員会 49. 雪ノ下一丁目 274-2 (1986 調査) 原・福田 1988「北条時房・顕時邸跡」北条時房・顕時邸跡発掘調査団 50. 雪ノ下一丁目 234-3 (2008 調査)

北条高時邸跡 (No. 281) 51. 小町三丁目 451-1 (2004 調査) 菊川・森 2004「北条高時邸跡」株式会社齊藤建設 52. 小町三丁目 426-3 (1994 調査) 原 1996「鎌倉市埋蔵文化財緊急調査報告書 12-1」鎌倉市教育委員会

若宮大路周辺遺跡群 (No. 242) 53. 小町三丁目 425-3 (2005 調査) 原・宇都 2013「鎌倉市埋蔵文化財緊急調査報告書 29-1」鎌倉市教育委員会 54. 小町三丁目 425-1 外 (2005 調査) 原・宇都 2012「鎌倉市埋蔵文化財緊急調査報告書 28-1」鎌倉市教育委員会 55. 小町三丁目 422-2 外 (2005 調査) 伊丹ほか 2013「鎌倉市埋蔵文化財緊急調査報告書 29-1」鎌倉市教育委員会 56. 小町三丁目 418-5 (2010 調査) 57. 小町二丁目 402-9 外 (2004 調査) 馬淵・伊丹 2007「鎌倉市埋蔵文化財緊急調査報告書 23-2」鎌倉市教育委員会 58. 小町二丁目 402-5 (1999 調査) 手塚・野本 2001「鎌倉市埋蔵文化財緊急調査報告書 17-1」鎌倉市教育委員会 59. 小町二丁目 408-4 外 2 筆 (2008 調査) 熊谷 2009「若宮大路周辺遺跡群」鎌倉遺跡調査会 60. 小町二丁目 364-17 (2009 調査) 押木「鎌倉市埋蔵文化財緊急調査報告書 30-2」鎌倉市教育委員会 61. 小町二丁目 349-1 の一部 (2008 調査) 62. 小町二丁目 345-2 (1983 調査) 馬淵 1985「小町 2-345 番 2 地点遺跡発掘調査報告書」小町二丁目 345 番 -2 地点遺跡発掘調査報告書 63. 小町一丁目 321-1 (1993 調査) 宮田 1996「若宮大路周辺遺跡群発掘調査報告書」若宮大路周辺遺跡群 (鎌倉警察署構内) 発掘調査団 64. 小町一丁目 322-2 (1987 調査) 1989「神奈川県埋蔵文化財調査報告 30」神奈川県教育委員会 65. 小町一丁目 325- イ (1992 - 1993 調査) 佐藤・原 1994「鎌倉市埋蔵文化財緊急調査報告書 10-3」鎌倉市教育委員会 66. 小町一丁目 319-2 (1978 調査) 松尾 1983「鎌倉市埋蔵文化財発掘調査年報 I」鎌倉市教育委員会 67. 小町一丁目 309-5 (1982 調査) 齋木 1983「小町一丁目 390 番 5 地点発掘調査報告」(推定) 藤内定員邸跡発掘調査団 68. 小町一丁目 309-4 (1978 調査) 松尾 1983「鎌倉市埋蔵文化財発掘調査年報 I」鎌倉市教育委員会 69. 小町一丁目 322-1 (1992 調査) 宮田 1997「若宮大路周辺遺跡群発掘調査報告書」若宮大路周辺遺跡発掘調査団 70. 小町一丁目 329-1 (2010・2011・2012 調査) 滝澤・安藤 2014「若宮大路周辺遺跡群 (No. 242) 発掘調査報告書」株式会社博通 71. 小町一丁目 329-7 (2013 調査) 72. 小町一丁目 331-1 (2012 調査) 73. 小町一丁目 333-15 (2010 調査) 74. 小町

一丁目 333-2 (2007 調査) 原「貿易陶磁研究 28」貿易陶磁研究会 75. 小町一丁目 891 (1979・1980 齋木) 齋木 1985「(推定) 藤内定員跡遺跡」鎌倉市教育委員会 76. 小町一丁目 305・308 (1975 齋木) 松尾 1983「鎌倉市埋蔵文化財調査年報 I」鎌倉市教育委員会 77. 小町一丁目 302 (1977 調査) 78. 小町一丁目 302 (1982 調査) 79. 小町一丁目 287-13 (1992 調査) 齋木 1992「鎌倉考古 22」鎌倉考古学研究所 80. 小町一丁目 276-18・22・38 (2005 調査) 宮田 2006「若宮大路周辺遺跡発掘調査報告書」株式会社博通 81. 小町一丁目 1028-1 (1990 調査) 大河内 1997「若宮大路周辺遺跡群発掘調査報告書」若宮大路周辺遺跡群発掘調査団 82. 大町一丁目 1032-1 (1982 調査) 神奈川県教育委員会 1984「神奈川県埋蔵文化財調査報告 26」神奈川県教育委員会 83. 大町 1084-4 (2007 調査) 84. 大町一丁目 1034-9 (2010 調査) 85. 雪ノ下一丁目 148-4・190-1 (2013 宮田) 86. 雪ノ下一丁目 187-4 (2008 調査) 87. 雪ノ下一丁目 200-3 (2001 調査) 宗臺秀・宗臺富 2003「鎌倉市埋蔵文化財緊急調査報告書 19」鎌倉市教育委員会 88. 雪ノ下一丁目 210 (1988 調査) 馬淵 1991「鎌倉市埋蔵文化財緊急調査報告書 6」鎌倉市教育委員会 89. 雪ノ下一丁目 198-1 (2002 調査) 神奈川県教育委員会 2003「神奈川県埋蔵文化財調査報告 45」神奈川県教育委員会 90. 雪ノ下一丁目 198-6 (1998 調査) 小林ほか 2000「鎌倉市埋蔵文化財緊急調査報告書 16-1」鎌倉市教育委員会 91. 小町二丁目 39-6 (1987-88 調査) 田代ほか 1989「鎌倉市埋蔵文化財緊急調査報告書 5」鎌倉市教育委員会 92. 小町二丁目 24-14 (2007 調査) 93. 小町二丁目 24-20 (2007 調査) 滝澤 2010「若宮大路周辺遺跡発掘調査報告書」株式会社博通 94. 小町二丁目 43-2 (2008 調査) 95. 小町二丁目 54-3 (1998 調査) 原 2000「第 8 回鎌倉市内遺跡調査・研究発表会」96. 小町二丁目 276 他 (1987 調査) 神奈川県教育委員会 1990「神奈川県埋蔵文化財調査報告書 31」神奈川県教育委員会 97. 小町二丁目 279-2 (1989 調査) 神奈川県教育委員会 1991「神奈川県埋蔵文化財調査報告 33」神奈川県教育委員会 98. 小町二丁目 280-3・12 (1999 調査) 齋木・降矢 1999「鎌倉考古 45」鎌倉考古学研究所 99. 小町二丁目 280-2 (1989 調査) 田代・原 1990「鎌倉市埋蔵文化財緊急調査報告書 6」鎌倉市教育委員会 100. 小町二丁目 280-18 (1982 調査) 神奈川県教育委員会 1984「神奈川県埋蔵文化財調査報告 26」神奈川県教育委員会 101. 小町二丁目 48-10 外 (2003 調査) 原 2009「鎌倉市埋蔵文化財緊急調査報告書 25-1」鎌倉市教育委員会 102. 小町二丁目 281-2 (2012 調査) 103. 小町二丁目 281-1 (1989 調査) 神奈川県教育委員会 1991「神奈川県埋蔵文化財調査報告 33」神奈川県教育委員会 104. 小町二丁目 281 (1977 調査) 松尾 1983「鎌倉市埋蔵文化財調査年報 I」鎌倉市教育委員会 105. 小町二丁目 28-3・5 (1996 調査) 原ほか 1998「鎌倉市埋蔵文化財緊急調査報告書 14-2」鎌倉市教育委員会 106. 小町二丁目 69-6 (1989 調査) 田代・原 1991「鎌倉市埋蔵文化財緊急調査報告書 7」鎌倉市教育委員会 107. 小町二丁目 19 外 (2009 調査) 108. 小町二丁目 5-27・32・34・35 (2013 調査) 109. 小町二丁目 12-15 (1990 調査) 菊川 1992「鎌倉市埋蔵文化財緊急調査報告書 8」鎌倉市教育委員会 110. 小町二丁目 12-18 (1987 調査) 馬淵 1989「鎌倉市埋蔵文化財緊急調査報告書 5」鎌倉市教育委員会 111. 小町二丁目 11-2 (2005 調査) 森 2012「鎌倉市埋蔵文化財緊急調査報告書 28-1」鎌倉市教育委員会 112. 小町二丁目 12-10 (1991 調査) 大河内 1991「鎌倉考古 20」鎌倉考古学研究所 113. 小町二丁目 63-3 (1992 調査) 齋木ほか 1993「鎌倉市埋蔵文化財緊急調査報告書 9-1」114. 小町二丁目 5-8 (1997 調査) 福田ほか 1999「鎌倉市埋蔵文化財緊急調査報告書 15-1」鎌倉市教育委員会 115. 小町二丁目 5-7 (2012 調査) 116. 小町二丁目 281-16・26・36・283-9・10 (2013 調査) 117. 小町二丁目 4-19 (1990 調査) 118. 小町二丁目 4-4 (1989 調査) 119. 小町二丁目 283-6 (1997 宮田) 宮田 1998「若宮大路周辺遺跡群発掘調査報告書」鎌倉市教育委員会 120. 小町二丁目 5-23 (1989 福田) 福田 1990「鎌

倉市埋蔵文化財緊急調査報告書 6」鎌倉市教育委員会 121. 小町二丁目 4-6 (1986 調査) 神奈川県教育委員会 1989「神奈川県埋蔵文化財調査報告 30」神奈川県教育委員会 122. 小町二丁目 4-9 (1996 調査) 野本 1997「第 7 回鎌倉市遺跡調査・研究発表会 発表要旨」123. 小町二丁目 4-1 (2005 調査) 菊川 2006「若宮大路周辺遺跡群 (No. 242) 発掘調査報告書」株式会社齊藤建設 124. 小町二丁目 283 の一部 (2003 調査) 滝澤・宮田 2007「鎌倉市埋蔵文化財緊急調査報告書 23-1」鎌倉市教育委員会 125. 小町二丁目 1-14 (1986 調査) 126. 小町二丁目 394 (2005 調査) 神奈川県教育委員会 2007「神奈川県埋蔵文化財調査報告 51」神奈川県教育委員会 127. 小町二丁目 1-15 (1986 調査) 神奈川県教育委員会 1989「神奈川県埋蔵文化財調査報告 30」神奈川県教育委員会 128. 小町二丁目 1-6 (2002 調査) 神奈川県教育委員会 2003「神奈川県埋蔵文化財調査報告 45」神奈川県教育委員会 129. 小町一丁目 120-1 (1986 調査) 手塚 1989「小町一丁目 120 番 1 地点」風門社ビル発掘調査団 130. 小町一丁目 116 (1985 調査) 馬淵 1986「鎌倉市埋蔵文化財緊急調査報告書 2」鎌倉市教育委員会 131. 小町一丁目 116-4 (1989 調査) 手塚 1999「若宮大路周辺遺跡群」若宮大路周辺遺跡群発掘調査団 132. 小町一丁目 117-3 他 4 筆 (2005 調査) 滝澤 2006「若宮大路周辺遺跡群発掘調査報告書」有限会社鎌倉遺跡調査会 133. 小町一丁目 106-1 (1987 調査) 手塚 1999「若宮大路周辺遺跡群」若宮大路周辺遺跡群発掘調査団 134. 小町一丁目 107-7 (2010 調査) 滝澤 2013「若宮大路周辺遺跡群 (No. 242) 発掘調査報告書」株式会社博通 135. 小町一丁目 65-26 (2009 調査) 136. 小町一丁目 65-30 (2005 鈴木) 神奈川県教育委員会 2007「神奈川県埋蔵文化財調査報告 51」神奈川県教育委員会 137. 小町一丁目 65-10 (1977 調査) 松尾 1983「鎌倉市埋蔵文化財発掘調査年報 I」鎌倉市教育委員会 138. 小町一丁目 66-3 (1977 調査) 松尾 1983「鎌倉市埋蔵文化財調査年報 I」鎌倉市教育委員会 139. 小町一丁目 66-5 (1996 調査) 神奈川県教育委員会 1997「神奈川県埋蔵文化財調査報告 39」神奈川県教育委員会 140. 小町一丁目 67-2 (1987 調査) 福田 1994「若宮大路周辺遺跡群発掘調査報告書」鎌倉市教育委員会 141. 小町一丁目 65-21 (1979 調査) 齋木ほか 1982「小町 2 丁目 65 番地 21 号地点・小町 1 丁目 75 番地 1 号地点」鎌倉考古学研究所 142. 小町一丁目 75-1 (1979 調査) 齋木 1982「小町 2 丁目 65 番地 21 号地点・小町 1 丁目 75 番地 1 号地点」鎌倉考古学研究所 143. 小町一丁目 75-1 (1979 調査) 齋木 1982「小町 2 丁目 65 番地 21 号地点・小町 1 丁目 75 番地 1 号地点」鎌倉考古学研究所 144. 小町一丁目 103-9 (1982 調査) 服部 1984「蔵屋敷遺跡」鎌倉駅舎改築にかかると遺跡調査会 145. 小町一丁目 81-18 (1998 調査) 宮田 2000「鎌倉市埋蔵文化財緊急調査報告書 16-1」146. 小町一丁目 81-23 (1988 調査) 神奈川県教育委員会 1990「神奈川県埋蔵文化財調査報告 32」神奈川県教育委員会 147. 小町一丁目 81-8 (1991 調査) 森 1995「若宮大路周辺遺跡群発掘調査報告書 - 鎌倉市小町一丁目 81 番 8 地点 -」若宮大路周辺遺跡群発掘調査団 148. 雪ノ下一丁目 161-33 (2003 調査) 馬淵 2006「鎌倉市埋蔵文化財緊急調査報告書 22-2」鎌倉市教育委員会 149. 扇ガ谷一丁目 110-8 (2009 宮田) 滝澤 2012「若宮大路周辺遺跡群 (No. 242) 発掘調査報告書」株式会社博通 150. 御成町 123-5 (1997 調査) 汐見 1999「鎌倉市埋蔵文化財緊急調査報告書 15-1」鎌倉市教育委員会 151. 御成町 123-3 (2004 調査) 福田 2009「鎌倉市埋蔵文化財緊急調査報告書 25-1」鎌倉市教育委員会 152. 御成町 11-15 (1981 調査) 手塚ほか 1983「蔵屋敷東遺跡」江ノ電鎌倉ビル発掘調査団 153. 小町一丁目 83-1 (1990 調査) 佐々ほか 1993「鎌倉市早見芸術学園改築工事に伴う埋蔵文化財発掘調査報告」株式会社四門 154. 小町一丁目 83-3・32 (2007 調査) 宮田 2008「若宮大路周辺遺跡群発掘調査報告書」株式会社博通 155. 御成町 872-11 (2012 齋木) 156. 御成町 872-14 (1991 調査) 木村ほか 1992「鎌倉市埋蔵文化財緊急調査報告書 8」鎌倉市教育委員会 157. 御成町 884-6

(1997 調査) 宮田ほか 1999「若宮大路周辺遺跡群発掘調査報告書」若宮大路周辺遺跡群発掘調査団 宮田事務所  
上杉定正邸跡 (No. 188) 158. 扇ガ谷二丁目 195-2 (2009 調査) 山口・松吉 2014「鎌倉市埋蔵文化財緊急調査報告書 30-2」鎌倉市教育委員会  
華光院跡やぐら群 (No. 101) 159. 扇ガ谷二丁目 191 (2002 調査) 汐見・田畑 2003「鎌倉市埋蔵文化財緊急調査報告書 19」鎌倉市教育委員会  
巨福呂坂周辺遺跡 (No. 256) 160. 雪ノ下二丁目 144-1 (2011 調査) 滝澤 2011「巨福呂坂周辺遺跡 (No. 256) 発掘調査報告書」株式会社博通  
大倉幕府周辺遺跡群 (No. 49) 161. 雪ノ下三丁目 606-1 (1991 調査) 菊川 1993「鎌倉市埋蔵文化財緊急調査報告書 9-3」鎌倉市教育委員会 162. 雪ノ下三丁目 607 外 (1992 調査) 菊川 1994「鎌倉市埋蔵文化財緊急調査報告書 10-1」鎌倉市教育委員会 163. 雪ノ下三丁目 607-1 (2004 調査) 降矢・小島 2004「鎌倉市埋蔵文化財緊急調査報告書 20-2」鎌倉市教育委員会 164. 雪ノ下四丁目 600 (1980 試掘) 165. 雪ノ下四丁目 610-2 (1983-84 調査)  
東勝寺跡 (No. 246) 166. 小町三丁目 538-3 (2004 調査) 原 2011「鎌倉市埋蔵文化財緊急調査報告書 27-1」鎌倉市教育委員会 167. 小町三丁目 538-8 (2004 調査) 原 2011「鎌倉市埋蔵文化財緊急調査報告書 27-1」鎌倉市教育委員会 168. 小町三丁目 523-14 (1999 調査) 汐見ほか 2001「鎌倉市埋蔵文化財緊急調査報告書 17-2」鎌倉市教育委員会 169. 小町三丁目 468-2 外 (1999 調査) 滝澤・宮田 2000「東勝寺跡発掘調査報告書」東勝寺跡発掘調査団 170. 小町三丁目 468-10 (2000 調査) 宮田 2002「鎌倉市埋蔵文化財緊急調査報告書 18-1」鎌倉市教育委員会 171. 小町三丁目 497 (1975・76 調査) 赤星ほか 1977「東勝寺跡発掘調査報告書」鎌倉市教育委員会  
妙本寺遺跡 (No. 232) 172. 大町一丁目 1146 (1992 調査) 継ほか 1994「鎌倉市埋蔵文化財緊急調査報告書 10-1」鎌倉市教育委員会 173. 大町一丁目 1158-5 (1990 調査) 宗臺秀 1991「鎌倉市埋蔵文化財緊急調査報告書 7」鎌倉市教育委員会 174. 大町一丁目

1158-1 (1987 調査) 福田 1988「鎌倉市埋蔵文化財緊急調査報告書 4」鎌倉市教育委員会  
小町大路東遺跡 (No. 233) 175. 大町一丁目 1147 (2013 調査) 176. 大町一丁目 1181 (1980 調査) 原 1980「鎌倉考古 2」鎌倉考古学研究所  
下馬周辺遺跡 (No. 200) 177. 大町二丁目 1001-4 (2005 調査) 馬淵 2011「鎌倉市埋蔵文化財緊急調査報告書 27-1」鎌倉市教育委員会 178. 大町二丁目 975-6 (2003 調査) 森 2006「鎌倉市埋蔵文化財緊急調査報告書 22」鎌倉市教育委員会  
米町遺跡 (No. 245) 179. 大町二丁目 993-1 外 (2008 調査) 山口 2013「鎌倉市埋蔵文化財緊急調査報告書 29-2」鎌倉市教育委員会 180. 大町二丁目 992-7 外 (2003 調査) 滝澤・森 2006「鎌倉市埋蔵文化財緊急調査報告書 22-2」鎌倉市教育委員会  
名越ヶ谷遺跡 (No. 231) 181. 大町三丁目 1230-4 外 (2006 調査)

帳』に見える郷名のうち、他に尺度郷、荏草郷が鎌倉郡内とされる。承平年間 (931 年 -938 年) に編纂された『和名類聚抄』(高山寺本『神奈川県史 資料編』1 - 490) には、鎌倉郡内の郷名として沼濱、鎌倉、埼立、荏草、梶原、尺度、大島が見える。この他に天平勝宝元年 (749 年) の『調庸布墨書』(東大寺正倉院御物『神奈川県史 資料編』1 - 102) に鎌倉郡方瀬郷の名が見える。これらの郷のうち荏草郷について、『新編相模国風土記稿』は、「荏草」は鎌倉市二階堂の荏柄天神社の「荏柄」の旧唱であり、「えがら」は「えがや」の転訛としている。また、現在の鎌倉市内中心部は鎌倉郷にあたとされ (鈴木・鈴木 1984)、調査地点も鎌倉郷内に含まれると考えられる。奈良時代の遺物の出土は市内各所で確認できるものの、層位的に良好な出土事例は少ない。

奈良から平安後期の鎌倉には二十近い寺社があり、12 世紀初頭までに都市神の勧請もおこなわれているので、このころすでにかかなりの都市的な集住形態が形成されていた可能性が指摘されている (野口 1993・馬淵 1994)。地点 43 では定窯白磁、地点 69 では渥美刻画文壺といった、鎌倉時代以前の遺物が出土しており、地点 19 では鶴岡八幡宮創建以前の層から板製五輪塔を伴う男女二体の合葬墓が検出されている。また地点 43・44・45 では、切り合いから見て最も古い若宮大路と異なる軸線を持つ溝が検出されており、平安後期には調査地点周辺でも人的営為の痕跡は確認できるが、鎌倉時代に大規模な削平を受けている可能性もあり、良好な検出事例は乏しい。

## 鎌倉時代

鎌倉時代、当地点一帯は政治的中心であった。北側には大路をはさんで鶴岡八幡宮と政所跡 (No. 247)、



図2 明治15年頃の調査地点周辺（『迅速測図』）（1/20000）

東側には東勝寺跡（No. 246）、南側には宇津宮辻子幕府跡（No. 239）がある。東北にある宝戒寺はもと執権邸といわれ、北条高時邸跡（No. 281）として遺跡指定されている場所である。そして当遺跡は北条小町邸跡（No. 282）とも「若宮大路幕府」跡ともいわれる場所である（高柳 1959）。以下、『吾妻鏡』の記載に基づいて小町周辺の状況を試みる。

『吾妻鏡』建久二年（1191年）三月四日条に「陰。南風烈。丑剋小町大路邊失火。江間殿（北条義時）。相模守。村上判官代。比企右衛門尉。同藤内。佐々木三郎。昌寛法橋。新田四郎。工藤小次郎。佐貫四郎已下人屋数十字焼亡。餘炎如飛而移于鶴岡馬場本之塔婆。此間幕府同災。即亦若宮神殿廻廊經所等悉以化灰燼。供僧房等少々同不遁此災云云。」とあり、小町大路辺りで出火した火災が、御家人の邸宅を巻き込みつつ大倉幕府や鶴岡八幡宮まで延焼したことがみえる。

『吾妻鏡』承元四年（1210年）十一月廿日条に「戌剋焼亡。北風甚利。相模太郎（北条泰時）殿小町御亭并近隣御家人宅等災。其後不及他所。」とあり、泰時邸が小町に所在したことがわかる。

『吾妻鏡』建保元年（1213年）五月二日条に「先囿幕府南門并相州御第（小町上）。西北両門。」とあり、和田合戦の際に、小町の義時邸の西門、北門が攻撃されたことがみえる。続く建保元年（1213年）五月

七日条に「今日。相州自大倉渡御若宮大路御亭。其後祇候人等蒙勲功之賞云云。」とある。秋山哲雄氏はこの「若宮大路御亭」を泰時の「小町御亭」とみており(秋山 2006)、北条義時小町邸の所在地は貫達人氏、秋山氏両名とも現在の宝戒寺あたりとみている(貫 1971・秋山 2006)。

『吾妻鏡』承久元年(1219年)正月廿七日条にも「右京兆(北条義時)俄有心神御違例事。讓御劔於仲章朝臣。退去給。於神宮寺。御解脱之後。令歸小町御亭給。」とあり、義時の小町御亭がみえる。

『吾妻鏡』承久二年(1220年)二月廿六日条に「亥刻。大町上失火。於武州(北条泰時)亭前火止訖。」とあり、大町から出火し泰時小町亭前まで延焼したと解釈することも可能。

『吾妻鏡』元仁元年(1224年)六月廿七日条に「依爲吉日。武州(北条泰時)被移鎌倉亭(小町西北)。日者所被加修理也。関左近大夫将監實忠。尾藤左近将監景綱兩人宅。在此郭内也。」とあり、泰時小町亭と同区画内に関左近大夫将監實忠、尾藤左近将監景綱の邸宅があったことがわかる。

『吾妻鏡』嘉禄元年(1225年)十月三日条に「雨降。相州(北条時房)。武州(北条泰時)參御所給。當御所可被移於宇津宮辻子之由。有其沙汰。又可被建若宮大路東頬歟之旨。同及群儀云云。」とあり、宇津宮辻子への御所移転が群議されている。翌十月四日条には「相州(北条時房)。武州(北条泰時)。相具人々而。宇津宮辻子并若宮大路等。令巡檢。而始被打丈尺。」とあり、候補地を巡検していることがわかる。同年十二月五日条に「新御所上棟也」とあり、新御所が完成している。その後、十二月廿日条に「今日若君御移徒之儀。」とあり、宇津宮辻子幕府への移転の儀が行われたことがわかる。

このときの御所移転について、須藤博史氏・貫達人氏らは『鎌倉市史 総説編』の考察の誤りを指摘している(須藤/貫 1963・貫 1989)。その指摘は、『吾妻鏡』嘉禄元年十一月廿日条にみえる「東西二百五十六丈五尺。南北六十一丈」という長さが、新御所の大きさではなく、方違えにもなる測距の数値である、というものである。また、松尾剛次氏は宇津宮辻子幕府の比定地を図示している。松尾氏によれば、宇津宮辻子幕府は現若宮大路二ノ鳥居交差点から東の小町大路にいたる道の北側東半部ということになる(松尾 1993)。しかし、松尾氏が図示しているものは実際の子午線によって東西南北が設定されていることと、基準となる伊賀朝行邸の位置が確定していないため、論理の補強ないし修正の必要がでてくる可能性もある。このうち子午線に関しては、川副武胤氏によって、中世鎌倉にあっては若宮大路が子午線とみなされていた可能性が指摘されている(川副 1980)。

松尾氏は『吾妻鏡』嘉禄元年(1225年)十月四日条の「而始被打丈尺。」という記載から、北条泰時が御所移転に際し、鎌倉にはじめて丈尺制を導入したことを指摘している。松尾氏によれば「丈尺制」は平城京や平安京で施行されていた家地用の単位である。また、松尾氏はこの時に連動して戸主制度と保の制度が導入されたと推測している。これらのことをまとめて、「宇津宮辻子への御所の移転は、丈尺制(戸主制度)・保制度という京都をモデルにした土地制度・行政制度の導入の契機となった。」と評している(松尾 1993)。

『吾妻鏡』嘉禄元年(1225年)十月十九日条「於武州(北条泰時)御亭。相州(北条時房)已下有御所御地定。小路(宇津宮辻子)東西間何方可被用哉之事。人々意見区々。」とある。秋山氏はこれを宇津宮辻子の東と西いずれかを採用するか人々によって意見が割れたためとし、『吾妻鏡』嘉禄元年(1225年)十月廿日条「若宮大路者。可謂四神相応勝地也。西者大道南行。東有河。北有鶴岡。南湛海水。可准池沼云云。依之此地可被用之旨。治定畢。但東西之事者。被聞食御占。西方最可爲吉之由。面々申之。信賢一人不同申之。東西共不吉也云云。」とあるのは、御所を若宮大路周辺へ移転することになったが、東西のいずれにするかはまだ決定されていないとし、宇津宮辻子が南北道路である可能性を示している(秋山 2006)。

『吾妻鏡』嘉禄二年（1226年）十二月十三日条に「自政所前失火。尾藤左近将監。平三郎左衛門尉。清右衛門志。彈正忠。大和左衛門尉。近藤刑部丞等家焼亡云云。」とあり、泰時小町亭と同区画内にある尾藤左近将監の邸宅も焼亡しているように解釈できる。

『吾妻鏡』安貞元年（1227年）二月八日条に「子一點。幕府東西人等并武州（北条泰時）納所一字焼亡。御所中。及相州（北条時房）。武州両亭。竹御所等殊令驚給。然而各無為云云。」とあることから、泰時邸、時房邸、宇津宮辻子幕府が近在していたことが読み取れる。

『吾妻鏡』寛喜二年（1230年）六月廿八日条に「於後藤判官大倉宅被評定。日來於武州（北条泰時）御亭被行之。依禁忌今及此儀。」とある。これに関して秋山氏は「御所との近い関係によって政治の中樞を担うようになった泰時邸の敷地は徐々に広がり、周辺の御家人宅を吸収して一区画を占拠するようになったと想像できる。」としている（秋山2006）。

『吾妻鏡』嘉禎二年（1236年）三月廿日条に「可被新造幕府并御持佛堂等於若宮大路東頼事。今日。於御所有其定。日次以下事。召陰陽道勘文。晴賢・文元等所令連署也。」とあり、再度の幕府の移転が決定されている。松尾氏によれば、『吾妻鏡』嘉禎二年（1236年）二月一日条「御不例余氣不令散給事。若土公奉成崇歟之由。有職人々依申之爲武州御沙汰。被行其祭。入夜。於御所。晴賢朝臣奉仕之云々。今日。上野入道日阿於御所進下若等。」とあることから、この移転は御所内の土公の崇りを避けるために行われたという。土公の崇りを避けることから同一区画内では意味がないという（松尾1992・1993）。

同年八月四日条に「將軍家若宮大路新造御所御移徙也。自武州（北条泰時）御亭渡御。〈御装束〉。御乗車。仰前大監物文元。參轅内勤反問入御自新御所南門。御車入門内經二丈余之後下御。」とあり、この日に若宮大路幕府への移転が行われている。

同年十二月十九日条に「亥刻。武州（北条泰時）御亭御移徙也。日來。御所北方所被新造也。被建檜皮葺屋并車宿。是爲將軍家入御云々。御家人等同構家屋。南門東脇尾藤太郎。同西平左衛門尉。同並西大田次郎。南角諏方兵衛入道。北土門東脇万年右馬允。同西安東左衛門尉。同並南篠左衛門尉宅等也云々。」とあり、新築された泰時亭の南側に他の御家人の邸宅があるように解釈できるが、貫氏は身内の宅と解釈する余地があることを指摘している（貫1971）。

『吾妻鏡』嘉禎三年（1237年）四月廿二日条に「天晴。申刻日色赤如蝕。今日。將軍家入御左京権大夫（北条泰時）亭。爲此御料被新造御所〈檜皮葺〉之間。渡御始也。御儲每事過差云々。」とあり、時頼元服のために新築された建物の存在が窺える。

『吾妻鏡』延応元年（1239年）四月廿五日条「未刻。前武州俄御違例。戌刻以後。御心神殊違亂云々。諸人群參。織部正光重爲將軍御使參入。于時匠作（北条時房）御亭〈前武州向顔〉酒宴亂舞折節也。」とある。秋山氏は「向顔」を「向頼」の誤りとし、北条時房邸が北条泰時亭の道を挟んだ向かい側、すなわち現在の宝戒寺あたりとしている（秋山2006）。

『吾妻鏡』延応元年（1239年）十二月廿七日条に「天晴。未刻。前武州（北条泰時）南御近隣有失火。人屋六宇災。」とあり泰時亭近くで火災が発生したことがわかる。

『吾妻鏡』寛元二年（1244年）十二月廿六日条「卯尅。武州（北条経時）并北条左親衛（北条時頼）等第依失火災。餘焰飛行。政所焼亡云々。」

『吾妻鏡』寛元三年（1245年）六月廿七日条「今日戌尅。武州（北条経時）花第〈故武州禅室（北条泰時）第北隣〉并左親衛（北条時頼）第各有移徙之儀云々。日來新造功已成云々。」

『吾妻鏡』宝治元年（1247年）七月十七日条「相州（北条重時）自六波羅參着〈去三日出京〉。以故入道武州経時小町上舊宅〈御所北面若宮大路也〉。爲居所。是前武州禅室（北条泰時）跡也。武州経時被相



傳之處。去寛元二年十二月焼亡。然而如元新造。於第被害取終之後。于今無其主云云。」とあり、経時邸、時頼邸が火災にあい、その後新造されたうちの経時邸に重時が入ったことがわかる。貫氏は御所北面若宮大路という割注から経時邸は若宮大路と鶴岡八幡宮前の東西道路に面するとしている（貫 1971）。

『吾妻鏡』宝治元年（1247年）八月九日条「左親衛（北条時頼）令移住于檜皮寝殿給。以本御居所。依可被加修理也。」

『吾妻鏡』宝治元年（1247年）十月十八日条「今日。左親衛（北条時頼）寝殿被曳移傍地。大略新造云々。」

『吾妻鏡』宝治元年（1247年）十月廿一日条「左親衛（北条時頼）御第上棟。」

『吾妻鏡』宝治元年（1247年）十一月十四日条「相州（北条重時）新造花亭有移徙之儀。評定所并訴訟人等着座屋。東小侍等。今度始所造加也。」とあり、時頼邸内で新造の建物が造られたことが窺える。

『吾妻鏡』建長二年（1250年）九月廿六日条「亥尅。相州（北条時頼）御亭失火。」

『吾妻鏡』建長二年（1250年）九月廿八日条「今日。奥州（北条重時）被進調度等於相州（北条時頼）依火事也。」とあり、北条時頼邸において火災があったことがわかる。

『吾妻鏡』建長三年（1251年）十月八日条「戌刻。相州（北条時頼）新造御第〈小町〉御移徙。」とある。貫氏はこれを焼跡への新築としている（貫 1971）。

『吾妻鏡』建長四年（1252年）四月一日条「中下馬橋東行。経小町口。入御相州（北条時頼）御亭〈于時申一點〉。」とあり、貫氏は將軍宗尊親王が小町大路から北条時頼邸に入ったと解釈している（貫 1971）。

『吾妻鏡』建長四年（1252年）五月十七日条「陰。奥州（北条重時）相州（北条時頼）并前転厩（北条政村）。前尾州（北条時章）以下。參會評定所。將軍御方違事。被経評議。以奥州亭可被用御本所云云。而自當御所〈相州御亭〉当西方。大將軍方可有憚之由。晴賢。晴茂。爲親。廣資。晴憲。以平。晴宗。等一同申之。仍被定出羽前司長村車大路亭云云。自當御所正方南也。」とある。貫氏は出羽前司長村の車大路亭が若宮大路にも面しているとし、北条時頼邸を北条重時邸の東隣としている（貫 1971）

『吾妻鏡』建長四年（1252年）七月九日条「今日、新御所門々上棟。亦當時御所〈相州御亭〉。壞南面平門。始被新造門。是相州（北条時頼）御沙汰也。」とあり、ここでも北条時頼邸内で建て替えがあったことがわかる。

『吾妻鏡』建長四年（1252年）十一月十一日条「天顔快晴。申尅。將軍家新御所御移徙也。時刻寄御車〈庇〉於寝殿〈相州御亭〉南面妻戸間。」

『吾妻鏡』康元元年（1256年）十一月廿二日条「今日。被讓執權於武彘〈北条長時〉。又武蔵國務。侍別當。并鎌倉第同被預申之。但家督（北条時宗）幼稚之程眼代也。」とあり、北条長時に執權を讓る際に「鎌倉第」も讓っていることがわかる。貫氏はこの「鎌倉第」を赤橋亭（経時旧宅）の東隣としている（貫 1971）。

『吾妻鏡』文応元年（1260年）三月廿一日条「天晴風静。戌尅御息所入御。先寄御輿於東御亭〈相州太郎（北条時宗）御亭檜皮寝殿妻戸。東御方被參儲。相州（北条政村）武州（北条長時）被候之。次自同西門〈平門〉出御。難色二人取松明前行。町大路南行。入御所東門〈棟門〉。経東北庭。將軍家於東侍密々御見物。土御門中納言。花山院中納言。一条少将雅有朝臣。弾正少弼業時。木工権頭親家。相模三郎時利。越後四朗時方。前陰陽少允晴宗朝臣等候其所。寄御輿於中御所南渡廊西向妻戸内。東御方一条局同前。」とあり、北条時宗の東御亭の西門から出御し、小町大路を南下し御所の東門から入っている。このことから、貫氏は東御亭は現在の宝戒寺あたりとしている（貫 1971）。

『吾妻鏡』文永三年（1266年）七月三日条「天晴。巳一點。甲冑軍士揚旗。自東西馳集。窺參相州（北条時宗）門外。次於政所南大路相。一同時音。」とあり、時宗邸の門と政所南大路とが近いことがわかる（貫

1971)。

このように、本地点周辺の状況を示す可能性のある記載が「吾妻鏡」中にみえるが、この点については貫達人氏、秋山哲雄氏が整理している（貫 1971・秋山 2006）。

貫氏によれば、北条義時小町邸は現在の宝戒寺のあたりに比定され、確実にこの地に邸宅を構えたのは時宗の東御亭と高時としている。それ以外は義時後に時房が、時宗後に貞時が継承した可能性を指摘しているのみである。また、北条小町邸跡(No.282)として遺跡指定されている区画のうち西側については、泰時から経時、重時と継承され、東側は時頼から長時へと継承された可能性を指摘している（貫 1971）。

一方、秋山氏によれば、建保元年（1213）頃、当遺跡方形区画の北半部に泰時亭、宝戒寺の場所に義時亭があり、嘉禄元年（1225）に幕府が宇津宮辻子に移転した後は、嘉禎二年（1236）の幕府再移転まで当区画の大部分を泰時亭が占めるようになる。嘉禎二年（1236）に「若宮大路の東類」へ再移転した後、当遺跡方形区画は南側に幕府、北側に経時亭、その間に泰時亭と三つに分割される。宝治元年（1247）前後以降、経時亭および泰時亭は合わせて重時に相伝される。一方宝戒寺の地は義時から時房へと継承された後、宝治元年前後以降、時頼亭となり以後「執権第」となるという。時宗以後の当遺跡地方形区画については、南半部に幕府を想定し、北域は不明としている（2006 秋山）。

#### 近在の寺社

**宝戒寺** 金龍山積満院円頓宝戒寺と号す。天台宗。もと東叡山寛永寺末で現在は比叡山延暦寺末。『新編相模国風土記稿』によれば「古は四宗兼学という」。開山、恵鎮。開基、後醍醐天皇。開山は恵鎮であるが、実際の実務は二世惟賢が行っていたようである。また、寛永十一年（1634）付の『山門三院執行探題（天海）置文』（『寶戒寺文書』鎌倉市史史料編 1-474）に「於法勝寺諸末寺中、無止事勝地、代々將軍家并諸侍受戒靈場也」とあり、宝戒寺に対する近世における認識が把握できる。

建武二年（1335）三月廿八日付『足利尊氏寄進状案』（『寶戒寺文書』神奈川県史 3-3206）に「當今皇帝帝施仁慈之哀恤、爲度怨念之幽靈、於高時法師之舊居、被建圓頓寶戒之梵宇」とあり、宝戒寺は後醍醐天皇により北条高時の冥福を祈るために、北条高時邸跡に建立しようとしたものであることがわかる。

ただ、宝戒寺そのものができるのは遅く、慎重な検討が必要、としつつも文和二・三年（1353・4）頃であるという（貫・川副・佐脇 1959）。貞和四年（1348）十一月七日付『恵鎮書状』（『寶戒寺文書』神奈川県史 3-4003）に「當寺敷地白幡谷口四方各三十丈御寄附事、領主吉良左京大夫殿御状并施行如此候」、観応三年（1352）七月四日付『將軍（足利尊氏）寄進状案』（『寶戒寺文書』神奈川県史 3-4176）に「寄進 圓頓寶戒寺 上総国武射郡内小松村（工藤中務右衛門跡）、并出羽國小田嶋庄内（東根孫五郎跡）事 右、爲當寺造営料所」、文和元年（1352）十二月廿七日付『將軍（足利尊氏）御教書案』（『寶戒寺文書』神奈川県史 3-4211）に「圓頓寶戒寺造營事、木作始可爲明春之間、於下野・下総两国中、令取棟別拾文錢賃、可被終營作功之状如件」、『惟賢灌頂授与記』（『寶戒寺文書』鎌倉市史史料編 1-418）に「同（文和）三年甲午四月十三日巳辛（於塔辻宝戒寺始修之）」とあり、土地の寄進から造営にかかる費用の工面までの経緯が読み取れ、文和三年（1354）には宝戒寺において初めて灌頂受戒が行われていることがわかる。

**妙隆寺** 叡昌山妙隆寺と号す。日蓮宗。もと中山法華経寺末。開山妙親寺日英。開基は千葉大隅守胤貞と伝えられる。また、二世日親は鍋被日親と称せられる傑僧であった、という（貫・川副・佐脇 1959）。

「伝日蓮辻説法跡」とされる場所の北 100 m ほどにある。「寺地は千葉氏の屋敷跡とも伝える」という（鈴木・鈴木監修 1984）。万治元年（1658）の『妙隆寺由緒明細覚帳』（妙法寺蔵）によると、開山日英、開基千葉胤貞、至徳二年の創建という。しかし、「胤貞の存命は日英誕生以前であり、おそらく、本山の下

総中山法華経寺から胤貞が請負開基として祀られたのであろう」という（鈴木・鈴木監修 1984）。

境内には日親が荒行したという「行の池」がある。『新編鎌倉志』には「日親此池に手を浸し、一日に一指づゝ、十指の爪をはなし、百日の間に本の如く生復らば、所願成就と誓ひ、出る血を此池にて洗ひ、其水を滴で曼荼羅を書。爪切の曼荼羅と云て此寺に有しを、法理の異論に依て、住持退院の時、盗み去となり。」とある。

本覚寺 妙巖山本覚寺と号す。日蓮宗。もと身延山久遠寺末中本寺。開山、一乗日出。「創建は、宝永三年（1706）の寺々境内開基年数改帳（寺蔵）は応永二十八年（1421）と伝え、「石渡新造左衛門之碑銘」では永享八年（1436）の開創と伝え、」とある（鈴木・鈴木監修 1984）。また、「寺伝ではこの地に天台宗の夷堂があったのを日出が改宗したといひ、」とある（鈴木・鈴木監修 1984）。『新編相模国風土記稿』には「本尊三寶を安ず、又釋迦文殊普賢の像あり、元の本尊と云。」とあり、これが夷堂の本尊であったと認識されていたようである。

蛭子神社 ヒルコと読む。祭神大己貴尊<sup>おおなむちみこと</sup>。貫氏によれば、「本殿は明治七年八月、鶴岡八幡宮の末社今宮の社殿を金十円で譲りうけて建立したものである（『小町一村宝戒寺鎮守普請積立金連名帳』）」（貫・川副・佐脇 1959）。また、「この所にはもと小町下町の鎮守七面大明神が祀られていたが、神仏分離により本覚寺の鎮守であった夷三郎社をここに移し、かつ上町下町が一村に合され一村に鎮守は一社しかおかぬという達しによって、小町上町の宝戒寺鎮守山王大権現も合祀したという（『小町一村宝戒寺鎮守普請積立金連名帳』）」（貫・川副・佐脇 1959）。

蛇苦止堂 『吾妻鏡』文應元年（1260年）十月十五日条に「相州政村息女煩邪氣。今夕殊惱亂。爲比企判官女讚岐局靈崇之由。及自詫云々。件局爲大蛇。頂有大角。如火炎。常受苦。當時在比企谷土中之由發言。聞之人堅身毛云々。」、同十一月廿七日条に「相副政村被頓寫一日経。是息女惱邪氣。依比企判官能員女子靈詫。爲資彼苦患也。入夜有供養之儀。請若宮別當僧正爲唱導。説法最中。件姫君惱亂。出舌舐唇。動身延足。偏似蛇身之令出現。爲聽聞靈氣來臨之由云々。僧正令加持之後。惘然而止言。如眠而復本云々。」とあり、北条政村の娘が比企能員の娘、讚岐局の祟りにより苦しんだ様子が記されている。

『新編相模国風土記稿』には「是比企能員の女、讚岐局の靈を祀れるなり、文應元年其靈北條時村の女に着し、大蛇となりて常に苦を受る由自詫せし事【東鑑】に見えたり、故に此時其鬼崇を鎮めんが爲爰に崇祀し託言に因て此神號を授けしなるべし」とあり、近世後期には比企の女の祟りと関連づけられて認識されていたことがわかる。

巽神社 祭神は奥津日子神・奥津日女神・火産靈神<sup>ほむすび</sup>。天正十九年（1591）十一月日付『徳川家康社領寄進状案』（『巽荒神社文書』鎌倉市史史料編 1-406）には「寄進 荒神」とあり、『新編鎌倉志』及び『鎌倉攬勝考』は「巽荒神」としている。この他に「荒神社（『浄光明寺領荒神社領租税録』）」（貫・川副・佐脇 1959）という呼び名もある。「勧請年月未詳。延暦二十年、坂上田村麿が葛原岡に勧請したと伝えられている」という（貫・川副・佐脇 1959）。『新編鎌倉志』には「今小路の南、壽福寺の巽にあり。故に名く、本壽福寺の鎮守なり。今は浄光明寺の玉泉院の持分也。」とあり、もとは壽福寺の鎮守であり、その壽福寺の巽の方角に所在することが名の由来であることが示されている。なお、「明治二年の前掲『租税録』（『浄光明寺領荒神社領租税録』）」には、「当山鎮守、荒神社」とあり、浄光明寺の鎮守となっている。」とある（貫・川副・佐脇 1959）。

## 第二章 調査の概要

### 第1節. 調査にいたる経緯

雪ノ下一丁目 427 番 2 外で個人専用住宅建設の照会があった。当該地点は北条小町邸跡 (No. 282) として県遺跡台帳に登録されている周知の遺跡であるため、2007 年 1 月 16～19 日に 1×3 m の試掘坑を設定して調査した。深さ 100cm まで掘削した結果、地表下約 50cm で遺構面を確認し、さらに下層に少なくとも 2 枚の遺構面があることが確認できた。

建築計画では鋼管杭の打設による基礎工事を伴い、遺構の損傷は避けられないが、強度維持の関係上設計変更は困難なため、国庫補助事業として本発掘調査が実施されることとなった。

あらかじめ同年 6 月 20 日に重機による表土掘削を行ない、調査は同年 6 月 25 日から開始された。

### 第2節. 調査の経過

#### 日誌抄

6月20日 (水)	重機による表土掘削	8月3日 (金)	2区 I a面全景写真撮影
6月25日 (月)	1区 I 面調査開始	8月7日 (火)	2区 I b面全景写真撮影
7月18日 (水)	1区 I c面全景写真撮影	8月14日 (火)	2区 I c面全景写真撮影
7月23日 (月)	1区 II 面全景写真	8月17日 (金)	2区 II 面全景写真撮影
7月24日 (火)	1区東壁際確認トレンチ	8月20日 (月)	2区調査区壁分層と写真撮影
7月25日 (水)	1区調査区壁分層と写真撮影	8月23日 (木)	機材撤収
7月26日 (木)	重機により調査区反転		

### 第3節. 調査方法

#### 掘削方法

掘削にあたって、残土は場内処理とし、置場を確保するため建設予定範囲 51m<sup>2</sup> を南北に二分割し、前半を「1区」、後半を「2区」とした。作業効率を考慮して、分割は均等ではなく、前者を後者に比べいくらか広く取った。

#### 測量基準の設定

ここでは作業効率を考慮して、調査区長軸中心部を通る測量基準線と、それに直交する基準線を 5 m おきに配した。そして、のちこれらを世界測地系に座標変換するという方法を採用した。

調査区は以下の範囲内にある。

[エリア 9] X - 75 195.15～X - 75 205.00  
Y - 25 285.17～Y - 25 295.22

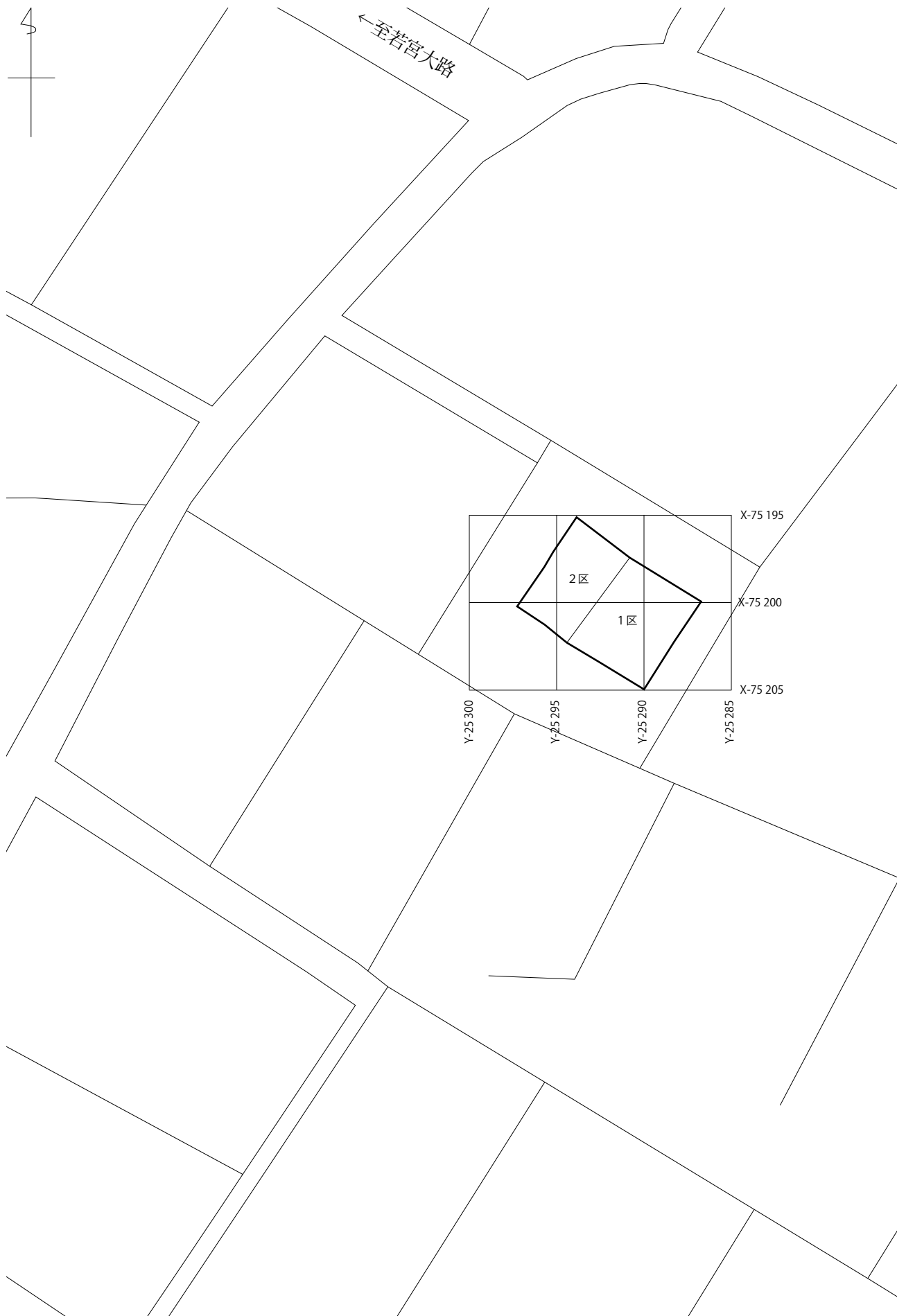


図3 調査区設定図 (1/300)

## 第三章 調査結果

### 第1節 概要

#### 1. 層序と面の概要

##### 地表面と表土

地表面の標高は 12.60 m～10.80 m ほどで、ほぼ平坦な面になっている。表土層は 50～70cm ほどあり、一部深くなっているものの、おおむね水平に堆積している。この表土層を除くとすぐに中世層が現われ、I a 面検出面となる。迅速測図では本地点周辺は畑となっており、後世の耕作や近現代以降の開発で I a 面より上層は削平を受けている。

##### I a 面

表土層の下に現われる最初の検出面。標高 9.56 m～9.77 m 程度で、後世の削平を受けている。

調査開始当初の 1 区調査時には、I 面遺構群として捉え、順次遺構検出を行っていたが、1 区調査時の土層断面の検討の結果、2 層に分けられることが判明した。さらに、2 区調査時に間にもう 1 枚遺構面があることが判明した。このため、整理時に I 面遺構群を I a 面、I b 面、I c 面として細分した。

調査の際に、1 区では I b 面に相当する 13 層上まで掘り下げた箇所もあるが、調査区壁土層とベルト土層、切り合い関係及び検出順序を元に上層遺構を抽出した。

後世の削平を受けているため、2 区調査時の I a 面の検出は I a 面構築土中での検出となっている。残存する I a 面構築土は暗灰色粘質土と黒灰色弱粘質土を中心とする。

直上が表土層であるため、検出面上では近代以降の遺物も混ざる状況となっている。

##### I b 面

I a 面を 5 cm～20cm 掘り下げると、調査区西側の 2 区側で暗茶褐色砂質土が現れる。2 区調査時には、ここで遺構検出を行っており、これを整理時に I b 面とした。調査区東側にあたる 1 区側では、I a 面の下層は 2 区側の I c 面に相当する暗灰色粘質土の 13 層となっており、I b 面と I c 面の二時期にわたって使用されたと考えられる。標高は 9.48 m～9.69 m。

##### I c 面

調査区西側の 2 区の I b 面を構成する砂質土を剥がすと、標高 9.23 m～9.53 m に暗灰色粘質土層が現われる。これを整理時に I c 面とした。前述したように、調査区東側の 1 区側では、2 区の I b 面に該当する層がなく、I b 面と I c 面の二時期にわたって同一の面が使用されたと考えられる。

##### II 面

I c 面下に 30～50cm ほどの厚さで堆積する暗灰色粘質土層を掘り下げ、黄灰茶色弱粘質土層で遺構検出を行った。その後の土層断面の検討の結果、暗灰色粘質土層の 15 層上面が本来の遺構面である可能性が高いと判断した。検出高は標高 8.94 m～9.13 m だが、実際の遺構面は標高 9.13 m～9.35 m になる。

##### 確認トレンチ

1 区調査の際に東壁際にトレンチを入れ、下層の土層堆積を把握した。

1 層より下層は遺物の出土が全くなく、土層堆積も水平堆積であるため、自然堆積と考えられるが、この堆積が形成された時期や堆積要因までは把握できなかった。

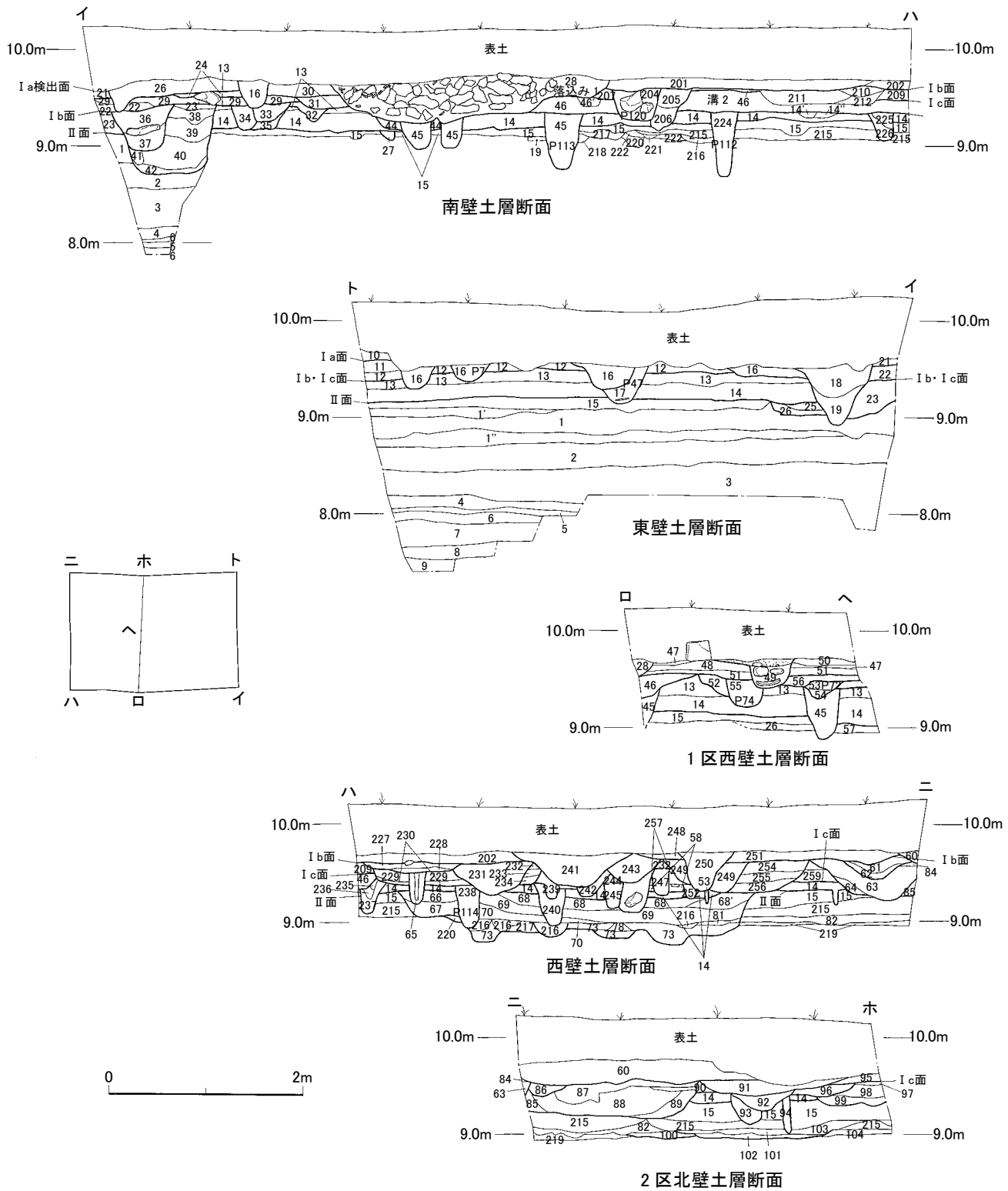


図4 調査区土層断面図

1. 黄茶灰色弱砂質土 炭化物・鉄分・暗灰色粘土粒混入
- 1' 1に多量の暗灰色粘土塊混入
- 1" 1と同質。灰色砂質土を少量含む
2. 黒灰色粘質土 炭化物・鉄分含む、灰色スコリア微量含む。粘性強
3. 明黄灰色粘質土 鉄分含む、ごく微量の炭化物含む
4. 黒灰色粘質土 火山灰の堆積層か？
5. 茶灰色粘土
6. 黒色粘土
7. 明灰色粘質土 微量の鉄分含む
8. 暗灰色粘質土
9. 青灰色弱粘質土 砂質土多く含む
10. 暗茶褐色弱砂質土 泥岩粒・土師器皿細片・炭化物・小礫多量に含む。しまり悪い
11. 暗灰色粘質土 粗質の白色粒子多量に含む、炭化物・土師器皿細片・鉄分含む
12. 暗灰色粘質土 11より含有量少なく、固くしまる
13. 暗灰色粘質土 鉄分・白色粒子やや多く含む、炭化物・土師器皿細片混入。固くしまる
14. 暗灰色粘質土 鉄分・白色粒子多量に含む、炭化物・土師器皿細片含む
15. 暗灰色粘質土 微量の鉄分・白色粒子・炭化物を含む。12～14に比べ粘性強い
16. 暗灰色弱粘質土 山砂・白色粒子・土師器皿細片・炭化物・遺物片含む。しまり弱い（遺構覆土）
17. 建物3、P.4覆土（図9 建物3参照）
18. 建物3、P.5覆土（図9 建物3参照）
19. 建物3、P.5覆土（図9 建物3参照）
20. 暗灰色粘質土 泥岩粒・土師器皿細片・炭化物・小礫・山砂を少量含む
21. 暗茶褐色弱砂質土 少量の炭化物・土師器皿細片を含む、山砂混入
22. 茶褐色弱砂質土 多量の貝砂粒を含む、泥岩粒・炭化物・土師器皿細片含む
23. 茶褐色弱砂質土 多量の貝砂粒を含む、泥岩粒・炭化物・土師器皿細片含む（遺構覆土）
24. 暗灰色粘質土 20と同質。含有物20より微量
25. 溝状遺構覆土（図25 溝状遺構参照）
26. 溝状遺構覆土（図25 溝状遺構参照）
27. 黒灰色粘質土 鉄分・白色粒子少量含む
28. 明灰褐色弱粘質土 多量の泥岩を含む、小礫・炭化物・鉄分・土師器皿細片多く含む、山砂含む（落込み1覆土）
29. 暗茶褐色弱粘質土 小石大の泥岩・山砂多く含む、小礫・炭化物を含む
30. 暗灰色粘質土 多くの炭化物を含む、拳大の泥岩・泥岩粒・土師器皿細片を含む、小礫・粘土粒混入
31. 暗灰色粘質土 30と同質土。30より多くの泥岩含む（遺構覆土）
32. 暗茶褐色弱粘質土 山砂・泥岩粒・炭化物を含む（遺構覆土）
33. 暗灰色粘質土 微量の山砂・炭化物・土師器皿細片・泥岩粒を含む（遺構覆土）
34. 暗灰色粘質土 ごく微量の土師器皿細片・炭化物を含む。粘性強。（遺構覆土）
35. 暗灰色粘質土 炭化物を含む（遺構覆土）
36. ビット覆土（図17 土坑6参照）
37. ビット覆土（図17 土坑6参照）
38. 土坑6覆土（図17 土坑6参照）
39. 土坑6覆土（図17 土坑6参照）
40. 土坑6覆土（図17 土坑6参照）
41. 土坑6覆土（図17 土坑6参照）
42. 土坑6覆土（図17 土坑6参照）
43. 暗灰色粘質土 粘性強
44. 暗灰色粘質土 微量の土師器皿細片・白色粒子・炭化物を含む（土坑10覆土）
45. 暗灰色粘質土 微量の炭化物・茶灰色粘土粒・白色粒子含む（遺構覆土）
46. 黒灰褐色粘質土 多量の炭化物・焼土・土師器皿細片含む、泥岩粒少量含む（溝2覆土、図21 溝2土層1と同じ）
47. 赤橙色粘土（焼土） 多量の炭化物・土師器皿細片含む
48. 暗茶褐色弱粘質土 多量の泥岩粒・炭化物・焼土粒を含む、小石大泥岩・山砂を含む
49. P.75（図13 P.75参照）
50. 暗茶褐色弱砂質土 10に似る
51. 暗茶褐色弱砂質土 炭化物多く含む、泥岩粒・焼土片含む
52. 暗灰色弱粘質土 山砂・炭化物・土師器皿細片やや多く含む（遺構覆土）
53. 暗灰色弱粘質土 山砂多く含む、炭化物・泥岩粒含む（遺構覆土）
54. 暗灰色粘質土 土師器皿細片多く含む、炭化物含む（遺構覆土）
55. 暗灰色粘質土 45と同質。炭化物やや多く含む（遺構覆土）
56. 暗茶褐色弱粘質土 山砂・炭化物・泥岩粒多く含む、貝殻片・焼土片含む
57. 暗灰色粘質土 15と同質だが、やや15より色調暗い
58. 暗褐色粘質土 257と同質。茶灰色粘土・山砂・炭化物・土師器皿細片を含む
59. 暗灰色粘質土 少量の焼土・炭化物・白色粒子・山砂・茶灰色粘土を含む
60. 明灰褐色砂質土 多量の山砂・茶灰色砂を含む、少量の土師器皿細片・炭化物・小礫・泥岩粒を含む
61. ビット覆土（図17 土坑14・20参照）
62. ビット覆土（図17 土坑14・20参照）
63. 土坑14覆土（図17 土坑14・20参照）
64. 土坑14覆土（図17 土坑14・20参照）
65. 暗灰色粘質土 白色粒子・炭化物を含む（遺構覆土）
66. 暗灰色粘質土 多量に鉄分を含む、白色粒子・炭化物を含む（遺構覆土）
67. 暗灰色粘質土 微量の白色粒子・炭化物を含む、鉄分を含む（遺構覆土）
68. 竪穴遺構覆土（図26 竪穴遺構参照）
- 68'. 竪穴遺構覆土（図26 竪穴遺構参照）
69. 竪穴遺構覆土（図26 竪穴遺構参照）
70. 竪穴遺構覆土（図26 竪穴遺構参照）
73. 竪穴遺構覆土（図26 竪穴遺構参照）
78. 竪穴遺構覆土（図26 竪穴遺構参照）
81. 竪穴遺構覆土（図26 竪穴遺構参照）
82. 暗灰色粘質土 微量の黄茶色粘土粒・鉄分・炭化物を含む
84. 土坑14覆土（図17 土坑14・20参照）
85. 土坑20覆土（図17 土坑14・20参照）
86. P.86覆土（図17 土坑14・20参照）
87. 土坑20覆土（図17 土坑14・20参照）
88. 土坑20覆土（図17 土坑14・20参照）
89. 土坑20覆土（図17 土坑14・20参照）
90. 暗茶褐色弱砂質土 多量の山砂・炭化物を含む、焼土粒・白色粒子含む、暗灰色粘土混入
91. 土坑11覆土（図17 土坑11参照）
92. 茶褐色弱砂質土 多量の山砂・貝砂粒・小石大までの泥岩粒・小礫・炭化物を含む、土師器皿細片を含む（遺構覆土）
93. 暗灰色粘質土 微量の鉄分・炭化物・白色粒子を含む（遺構覆土）
94. 暗灰色粘質土 鉄分を多く含む（遺構覆土）
95. 暗灰褐色弱粘質土 黄茶色粘土小塊・土師器皿細片やや多く含む、山砂・炭化物・焼土粒を含む（Ia面構成土）
96. 暗灰褐色粘質土 やや多くの鉄分含む、微量の炭化物・白色スコリア・焼土粒を含む、粘性強（遺構覆土）
97. 暗灰褐色粘質土 やや多くの炭化物、少量の鉄分・山砂・白色粒子を含む



98. 暗灰褐色粘質土 多量の鉄分・白色粒子、少量の炭化物を含む（遺構覆土）
99. 暗灰褐色粘質土 98より多量の白色粒子を含む、多量の鉄分、少量の炭化物を含む、しまり良い、粘性強（遺構覆土）
100. 土坑22覆土（図26 土坑21・22参照）
101. 土坑21覆土（図26 土坑21・22参照）
102. 土坑21覆土（図26 土坑21・22参照）
103. 土坑21覆土（図26 土坑21・22参照）
104. 103と同質
201. 灰褐色弱粘質土
202. 黒灰色弱粘質土 焼土・炭化物・小礫多量に含む（Ia面構成土）
203. 灰褐色粘質土 破碎泥岩多量に含む、炭化物含む。地行土
204. 灰褐色粘質土 泥岩塊・礫・炭化物多量に含む（遺構覆土）
205. 溝1覆土（図16 溝1参照）
206. 溝1覆土（図16 溝1参照）
207. 灰褐色粘質土 炭化物多量に含む
208. 黒灰褐色粘質土 多量の焼土・炭化物・土師器皿細片含む、少量の泥岩粒含む（1区南壁土層No.46と同じ）
- 208'. 炭化物・スコリア多く含む
209. 灰褐色粘質土 黄褐色粘質土塊・炭化物含む
210. 灰褐色粘質土 山砂・白色粒子・焼土粒・炭化物・土師器皿細片・泥岩粒やや多く含む
211. 灰褐色粘質土 46と同質だが含有物46より少なく粘性強、しまり良い
212. 灰褐色粘質土 炭化物多く含む、微量の山砂・白色粒子含む。粘性強
215. 暗灰色粘質土 14・15に比べ色調暗い。微量の炭化物・鉄分・白色粒子含む
216. 堅穴遺構（図26 堅穴遺構参照）
217. 堅穴遺構（図26 堅穴遺構参照）
218. 暗灰色粘質土 216と同質
219. 黄茶色強粘質土 微量の黒灰色強粘質土が混入
220. 土坑23覆土（図26 土坑23参照）
223. 暗灰色粘質土 炭化物・黄茶色強粘質土やや多く含む、白色粒子・小礫・土師器皿細片含む
224. 45と同質（遺構覆土）
225. 暗灰色弱粘質土 炭化物多く含む。しまり弱い（遺構覆土）
226. 暗灰色粘質土 炭化物・鉄分含む、粘性強（遺構覆土）
227. 茶褐色弱粘質土 拳大までの泥岩粒多く含む、炭化物・土師器皿細片含む（遺構覆土）
228. 黒灰色粘質土 多量の炭化物・土師器皿細片含む（遺構覆土）
229. 暗灰色粘質土 炭化物・鉄分・小石大までの泥岩粒・山砂多く含む（遺構覆土）
230. 暗灰色粘質土 炭化物・砂粒含む。粘性強（遺構覆土）
231. 暗茶褐色弱砂質土 山砂多く含む、泥岩粒・炭化物・土師器皿細片やや多く含む
232. 茶褐色弱砂質土 山砂多く含む、炭化物・砂粒・土師器皿細片含む（遺構覆土）
233. 暗灰褐色弱砂質土 多くの炭化物含む、山砂・土師器皿細片含む（遺構覆土）
234. 暗灰色粘質土 炭化物・山砂・白色粒子を含む（遺構覆土）
235. 暗灰色粘質土 炭化物・白色粒子含む（遺構覆土）
236. 暗灰色粘質土 炭化物・焼土多く含む、山砂含む（遺構覆土）
237. 暗灰色粘質土 微量の炭化物・鉄分・白色粒子含む、粘性強（遺構覆土）
238. 暗灰色粘質土 237と同質（遺構覆土）
239. 暗灰色弱砂質土 多くの焼土粒・炭化物・砂粒を含む、山砂・土師器皿細片含む
240. 暗灰色粘質土 237・238と同質（遺構覆土）
241. 明茶褐色弱砂質土 多くの山砂含む、炭化物・小礫・土師器皿細片含む。下層部に拳大までの泥岩が集中する（遺構覆土）
242. 暗茶褐色弱砂質土 炭化物・山砂・砂粒多く含む、小石大の泥岩・土師器皿細片含む
243. 明茶褐色弱砂質土 241と同質。半人頭大までの泥岩塊・泥岩粒含む（遺構覆土）
244. 茶褐色弱砂質土 山砂・焼土粒・炭化物を多く含む（遺構覆土）
245. 暗褐色弱粘質土 山砂・炭化物やや多く含む、微量の焼土粒・小石大の泥岩粒含む（遺構覆土）
246. 暗褐色弱粘質土 245と同質。土師器皿細片・礫含む（遺構覆土）
247. 暗褐色弱粘質土 245と同質
248. 明褐色粘質土 少量の焼土粒・炭化物を含む、泥岩粒・土師器皿細片を含む
249. 明茶褐色弱砂質土 多量の泥岩粒・炭化物・土師器皿細片含む、小礫含む（遺構覆土）
250. 明茶褐色弱砂質土 241と同質（遺構覆土）
251. 明茶褐色弱砂質土 多量の山砂・泥岩粒含む、炭化物・小礫・土師器皿細片含む
252. 炭土
253. 暗灰色粘質土 鉄分により硬化
254. 茶褐色弱砂質土 焼土粒・炭化物・泥岩粒やや多く含む（遺構覆土）
255. 暗褐色粘質土 少量の山砂・炭化物・焼土粒を含む（遺構覆土）
256. 暗灰色粘質土 多量の炭化物・焼土を含む、茶灰色粘土・山砂含む（遺構覆土）
257. 暗褐色粘質土 多量の炭化物・山砂・白色粒子を含む、微量の焼土含む

## 第2節 各説

### 1. Ia面

#### 面の概要（図5・6）

検出高：9.56 m～9.77 m 面構成土：暗灰色粘質土・暗茶褐色弱砂質土・灰褐色弱粘質土・黒灰色弱粘質土・明褐色粘質土・明茶褐色弱砂質土・明灰褐色砂質土 検出遺構：建物4棟・落込み1基・土坑10基・ピット66穴 Ia面出土遺物：土師器皿T種小型（1～11）・土師器皿R種小型（11～20）・土師器皿R種大型（21・22）・伊勢系鋳鍋（23）・尾張山茶碗系片口鉢（24）・瓦器質火鉢（25）・常滑片口鉢I類（26）・

常滑甕 (27)・渥美甕 (28)・瀬戸卸し皿 (29)・青白磁小皿 (30)・同安窯系青磁皿 (31)・竜泉窯青磁画花文碗 (32・33)・竜泉窯青磁鉢 (34)・竜泉窯青磁折縁鉢 (35)・軒丸瓦 (36)・丸瓦 (37)・平瓦 (38・39)・砥石中砥 (40)・滑石鍋転用品 (41・42)・鉄釘 (43～47)・開元通宝 (48)・用途不明加工鹿角 (49)・用途不明加工骨 (50) 土師器皿小片集中部出土遺物：土師器皿 R 種大型 (51) 特記事項：上面を大きく削平されており、実際の I a 面は東壁土層断面 11 層上面にわずかに残るのみ。2 区調査時における遺構検出面は I a 面構築土中となっている。このため出土遺物は 13 世紀中葉以降 15 世紀代までのものが混在している。37 の丸瓦、38 の平瓦は永福寺Ⅱ期以降、39 の平瓦は永福寺Ⅲ期以降。23 の伊勢系鏝鍋は 14 世紀末以降のものである可能性が考えられる。

#### 建物 1 (図 7)

位置：X( - 75 200.70 ～ - 75 203.80) Y - 25 287.94 ～ - 25 292.43 規模：東西 1 間, 2.00 m × 南北 2 間, 4.00 m 主軸方位：N - 37° - E 重複関係：土坑 2・9 を切る 出土遺物：(P.2) 竜泉窯青磁櫛描蓮弁文碗 (1)・渥美・湖西片口鉢 (2) 特記事項：南東端は I b 面土坑 6 を先に検出したため、柱穴の有無は確認できず。また、南北方向と東方向は調査区外であるため、建物の正確な大きさは不明。1 の青磁碗は 13 世紀前半のもの、2 の渥美・湖西片口鉢は安井編年 2 b 期のもの。

#### 建物 2 (図 8)

位置：X - 75 197.94 ～ - 75 203.74 Y( - 25 288.44) ～ ( - 25 295.21) 規模：東西 3 間, 2.00 m × 南北 1 間, 2.00 m 主軸方位：N - 124° - E 重複関係：土坑 7・8・12 に切られる。建物 3・P.75 を切る。出土遺物：土師器皿 R 種小型 (1・2)・青磁鎬蓮弁文碗 (3)・鉄製品かすがい (4) 特記事項：南北方向、東西方向ともに調査区外のため正確な規模は確定できない。P.2 は試掘坑内検出のため正確な掘り込み面は不明だが、柱穴が並んだため、当建物のものとした。P.2 東隣は土坑 7・8 構築の際に滅失か。北東隅の柱穴も検出できず。P.6 が非常に浅い構造となっており、東隅は礎石建ちの可能性もある。1・2 の土師器皿は 13 世紀前葉、3 の青磁碗は 13 世紀中葉から後半のもの。

#### 建物 3 (図 9)

位置：X( - 75 199.22) ～ ( - 75 204.41) Y( - 25 287.14) ～ ( - 25 291.48) 規模：東西 1 間, 2.00 m × 南北 2 間, 4.00 m 主軸方位：N - 36° - E 重複関係：建物 2・土坑 9 に切られる。建物 4 を切る。出土遺物：(P.2) 東遠型山茶碗 (1)・土師器皿 R 種小型 (2)・土師器皿 R 種大型 (3) 特記事項：北東隅の柱穴は調査区外のため検出できず。南北方向、東方向は調査区外のため、正確な規模を確定できず。2・3 の土師器皿は 13 世紀前半。

#### 建物 4 (図 9)

位置：X - 75 198.35 ～ - 75 202.84 Y - 25 288.57 ～ - 25 292.66 規模：東西 1 間, 2.00 m × 南北 2 間, 4.00 m 主軸方位：N - 35° - E 重複関係：建物 3 に切られる。出土遺物：(P.3) 土師器皿 T 種小型 (4) 特記事項：北東隅の柱穴は調査区外のため検出できず。南北方向、東方向は調査区外のため、正確な規模を確定できず。4 の土師器皿は 13 世紀前葉。

#### 落込み 1 (図 10)

位置：X - 75 202.20 ～ ( - 75 203.42) Y - 25 292.95 ～ ( - 25 294.55) 充填土：明灰褐色弱砂質土 平面形：涙滴型か 断面形：深鉢形 規模：最大幅 (0.98 m) × 長さ 2.73 m × 深さ 0.55 m 主軸方位：N-58° - W 重複関係：P.25 に切られる 出土遺物：土師器皿 R 種小型 (1～5)・土師器皿 T 種大型 (6・7) 土師器皿 R 種中型 (8・9)・土師器皿 R 種大型 (10～12)・渥美・湖西片口鉢 (13～17)・渥美甕 (18～20)・常滑甕 (21・22)・青白磁合子身 (23)・鉄釘 (24) 特記事項：15～17 の渥美・湖西片口鉢は

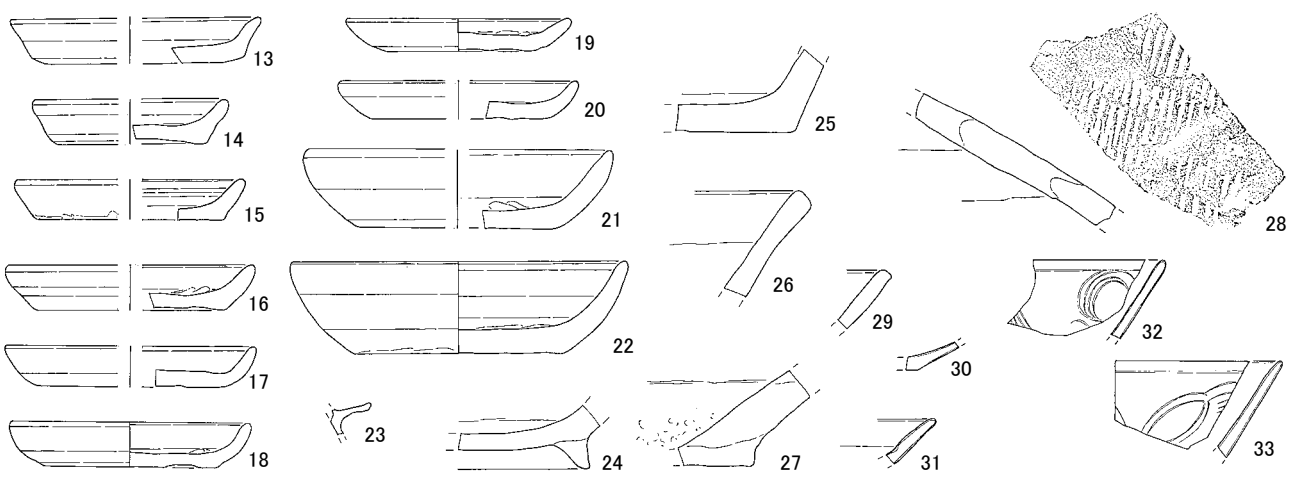
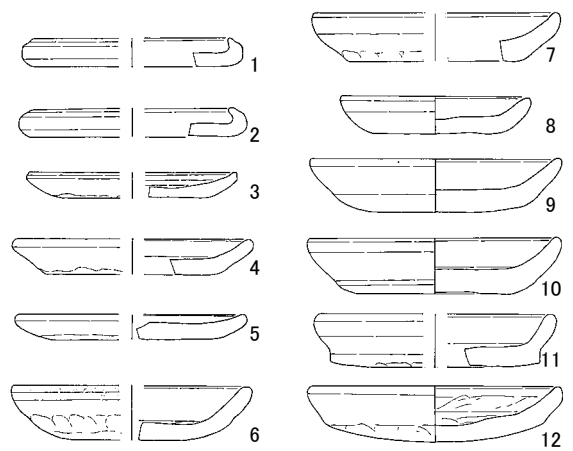
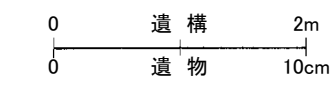
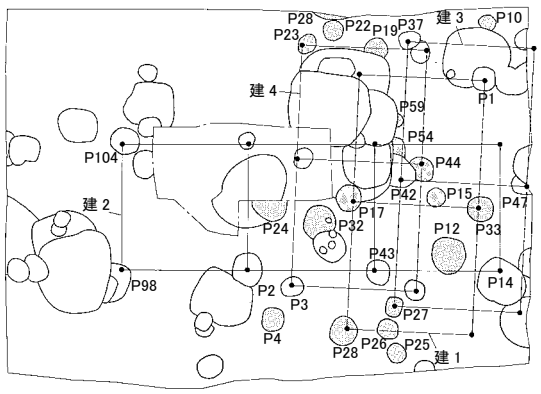
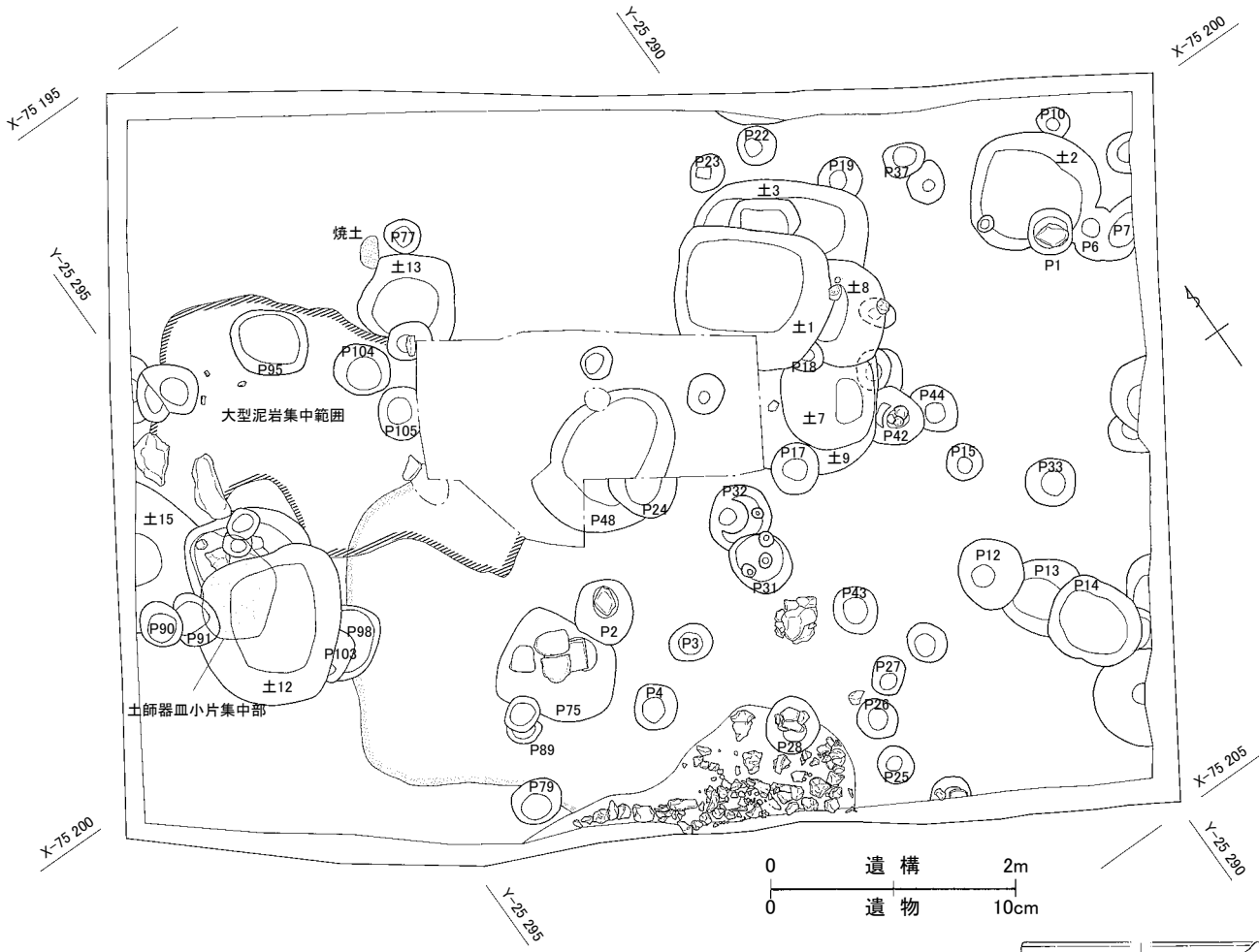


图5 I a面遺構全圖、I a面出土遺物(1)

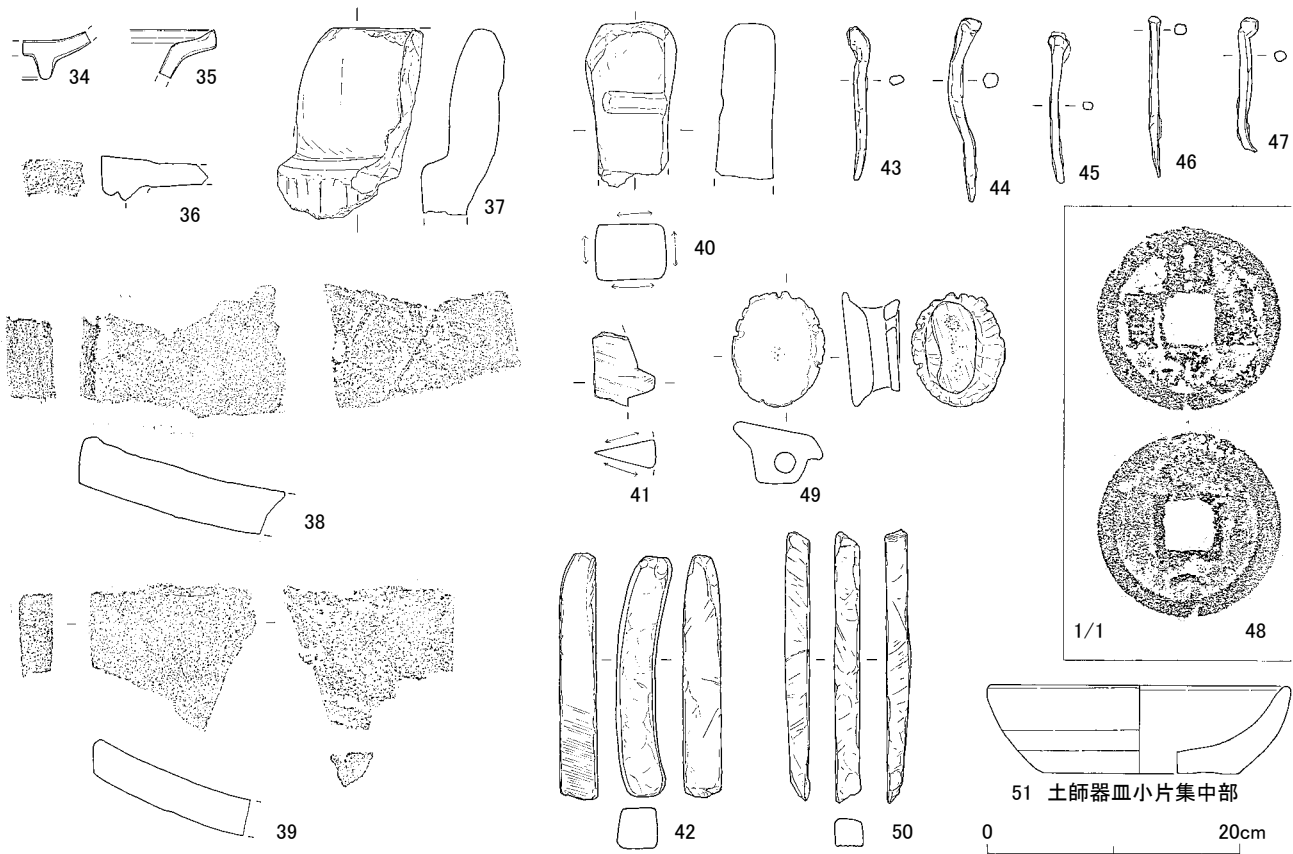


図6 I a 面出土遺物 (2)・土師器皿小片集中部出土遺物

安井編年 2 b 期。土師器皿は 13 世紀中葉から 13 世紀後葉以降のものが出土。13 世紀初頭までの渥美・湖西片口鉢も出土することから、客土によって埋められたと考えられる。

土坑 1 (図 11)

位置: X - 75 198.78 ~ - 75 200.18 Y - 25 289.75 ~ (- 25 291.09) 充填土: 暗茶褐色弱砂質土・暗褐色弱砂質土・暗灰色弱砂質土・暗灰色粘質土 平面形: 隅丸方形 断面形: 深鉢形 規模: 長径 1.30 m × 短径 1.13 m × 深さ 0.56 m 主軸方位: N-50° -W 重複関係: 土坑 3・7・8・9・P.18 を切る 出土遺物: 土師器皿 T 種小型 (1)・伊勢系鏝鍋 (2)・丸瓦 (3)・平瓦 (4)・鉄釘 (5) 特記事項: 3 の丸瓦は永福寺 II 期以降、4 の平瓦は永福寺 III 期以降。

土坑 2 (図 12)

位置: X - 75 199.62 ~ - 75 200.60 Y - 25 288.63 ~ - 25 287.48 充填土: 暗褐色粘質土・暗茶褐色粘質土・暗褐色粘質土 平面形: 楕円形 断面形: 深皿形 規模: 長径 1.06 m × 短径 0.95 m × 深さ 0.20 m 主軸方位: N-55° -W 重複関係: P.1 に切られる、P.10 を切る 出土遺物: 土師器皿 R 種小型 (1・2)・土師器皿 T 種大型 (3) 特記事項: 1 は 13 世紀中葉、2・3 は 13 世紀前半のもの。

土坑 3 (図 12)

位置: X - 75 198.65 ~ (- 75 199.85) Y - 25 289.25 ~ (- 25 290.49) 充填土: 暗茶褐色粘質土 平面形: 隅丸方形か 断面形: 浅鉢形 規模: 長径 (0.98 m) × 短径 2.73 m × 深さ 0.58 m 主軸方位: N-50.5° -W 重複関係: 土坑 1・8 に切られる 出土遺物: 土師器皿 T 種小型 (4・5)・土師器皿 R 種小型 (6)・土師器皿 R 種大型 (7) 特記事項: 5 は 13 世紀前葉、6、7 は 13 世紀中葉のもの。

土坑 7 (図 12)

位置: X (- 75 200.16) ~ - 75 201.11 Y - 25 289.96 ~ (- 25 290.71) 充填土: 茶褐色粘質土 平面形: 隅丸方形 断面形: 浅皿形 規模: 長径 (0.77 m) × 短径 (0.70 m) × 深さ 0.10 m 主軸方位: N-36° -W 重複関係: 土坑 1・9・P.42・54 を切る、土坑 8 に切られる 特記事項: 土坑が群集するうちの一つ。

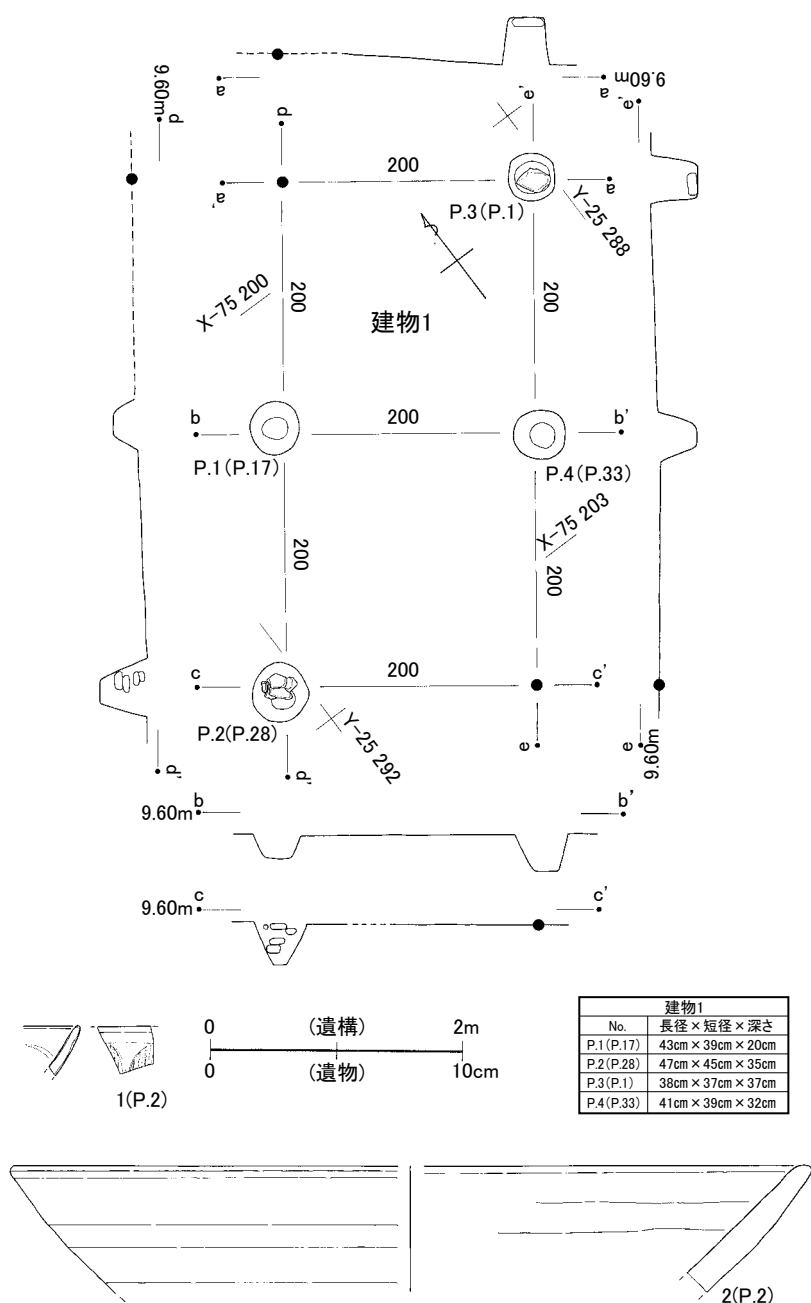


図7 建物1、同出土遺物

型(12)・竜泉窯青磁碗(13)・用途不明加工石(14)・東遠型山茶碗(15) 特記事項：土坑が群集するうちのひとつ。土師器皿は13世紀前葉から13世紀中葉のものが出土。13の青磁碗は13世紀中葉のもの。

土坑12(図12)

位置：X - 75 198.82 ~ - 75 200.14 Y - 25 294.49 ~ - 25 295.82 充填土：茶褐色弱砂質土・暗灰色粘質土・暗茶褐色弱粘質土・暗灰褐色粘質土・暗灰褐色弱粘質土・灰褐色弱砂質土 平面形：不整形 断面形：深鉢形 規模：長径1.33m×短径1.17m×深さ0.82m 主軸方位：N-33°-W 重複関係：P.91に切られる、P.98・P.102・P.103を切る 出土遺物：土師器皿T種小型(16・17)・土師器皿R種小型(18・19)土師器皿R種大型(20・21)・竜泉窯青磁碗(22)・軒丸瓦(23)・軒平瓦(24)・平瓦(25・26) 特記事項：土師器皿は13世紀前葉から13世紀末以降、21の青磁碗は大宰府分類I類。22~25の瓦は永福寺Ⅲ期併行のもの、精良な土を使用していることから同一工房の製品である可能性もある。

土坑8(図12)

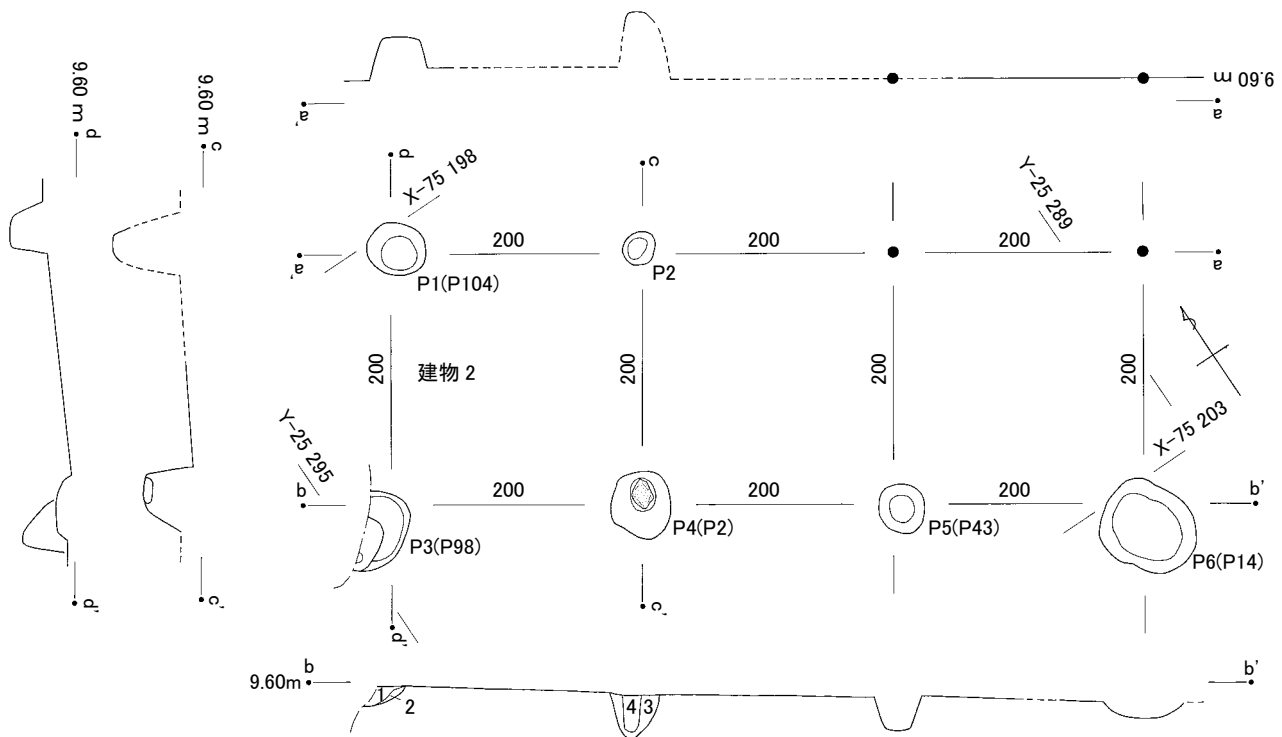
位置：X (- 75 199.37) ~ - 75 200.51 Y - 25 289.51 ~ (- 25 290.25) 充填土：茶褐色粘質土 平面形：隅丸方形 断面形：深鉢形 規模：長径(0.87m)×短径(0.57m)×深さ0.26m 主軸方位：N-40°-W 重複関係：土坑3・7・9・P.54・59を切る、土坑1に切られる 出土遺物：土師器皿R種大型(10) 特記事項：土坑が群集するうちのひとつ。土師器皿は13世紀後葉以降のものが出土。

土坑7・8出土遺物(図12)

出土遺物：土師器皿R種小型(8・9) 特記事項：7・8ともに13世紀前葉のもの。

土坑9(図12)

位置：X (- 75 200.04) ~ - 75 201.11 Y - 25 289.89 ~ (- 25 290.15) 充填土：茶褐色粘質土・灰茶褐色粘質土 平面形：隅丸方形 断面形：深皿形 規模：長径(0.96m)×短径(0.95m)×深さ0.30m 主軸方位：N-32°-W 重複関係：土坑1・7・8・P.17・18に切られる、P.42・54を切る 出土遺物：土師器皿T種小型(11)・土師器皿R種大



1. 茶褐色弱砂質土 多量の山砂含む、少量の炭化物・土師器皿細片含む
2. 黒灰色粘質土 多量の炭化物含む、山砂含む、微量の鉄分含む
3. 茶褐色粘質土 炭化物・泥岩粒・土師器皿細片・黄茶色砂ブロック含む。しまりやや悪い。
4. 黄茶褐色弱砂質土 黄褐色砂塊多量に含む、炭化物・土師器皿細片やや多く含む。しまりやや悪い。

建物 2	
No.	長径×短径×深さ
P1(P104)	47cm × 42cm × 34cm
P2	63cm × 46cm × 16cm
P3(P98)	27cm × 26cm × 54cm
P4(P2)	54cm × 48cm × 36cm
P5(P43)	39cm × 36cm × 28cm
P6(P14)	78cm × 66cm × 14cm

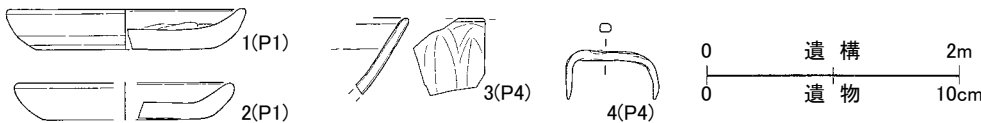


図8 建物2、同出土遺物

### 土坑 13 (図 13)

位置: X - 75 197.50 ~ (- 75 198.38) Y - 25 292.31 ~ (- 25 293.16) 平面形: 不整隅丸方形 断面形: 浅皿形 規模: 長径 (0.80 m) × 短径 0.68 m × 深さ 0.10 m 主軸方位: N-55.5° -W 重複関係: ピットに切られる 出土遺物: 土師器皿 T 種大型 (1) 特記事項: 土師器皿は 13 世紀前葉までのもの。

### P.12 (図 13)

位置: X - 75 262.21 ~ - 75 263.79 Y - 25 289.60 ~ - 25 290.14 充填土: 暗茶褐色粘質土 平面形: 不整円形 断面形: 深鉢形 規模: 長径 0.56 m × 短径 0.55 m × 深さ 0.50 m 主軸方位: N-32° -W 重複関係: P.13 を切る 出土遺物: 土師器皿 T 種小型 (2・3)・土師器皿 T 種大型 (4) 特記事項: 土師器皿は 13 世紀前葉のもの。

### P.13 (図 13)

位置: X (- 75 262.60) ~ (- 75 263.19) Y (- 25 289.66) ~ (- 25 290.24) 充填土: 暗茶褐色粘質土 平面形: 不整円形 断面形: 深鉢形 規模: 長径 0.64 m × 短径 0.48 m × 深さ 0.13 m 主軸方位: N-32° -W 重複関係: P.12・14 に切られる 出土遺物: 図化可能遺物なし

### P.14 (建物2構成ピット) (図 13)

位置: X - 75 262.93 ~ - 75 263.72 Y - 25 289.95 ~ - 25 290.67 充填土: 明茶褐色弱砂質土 平面形: 不整楕円形 断面形: 浅皿形 規模: 長径 0.78 m × 短径 0.68 m × 深さ 0.17 m 主軸方位: N-32° -W 重複関係: P.34・他ピット2穴を切る 出土遺物: 図化可能遺物なし 特記事項: 建物2を構成する柱

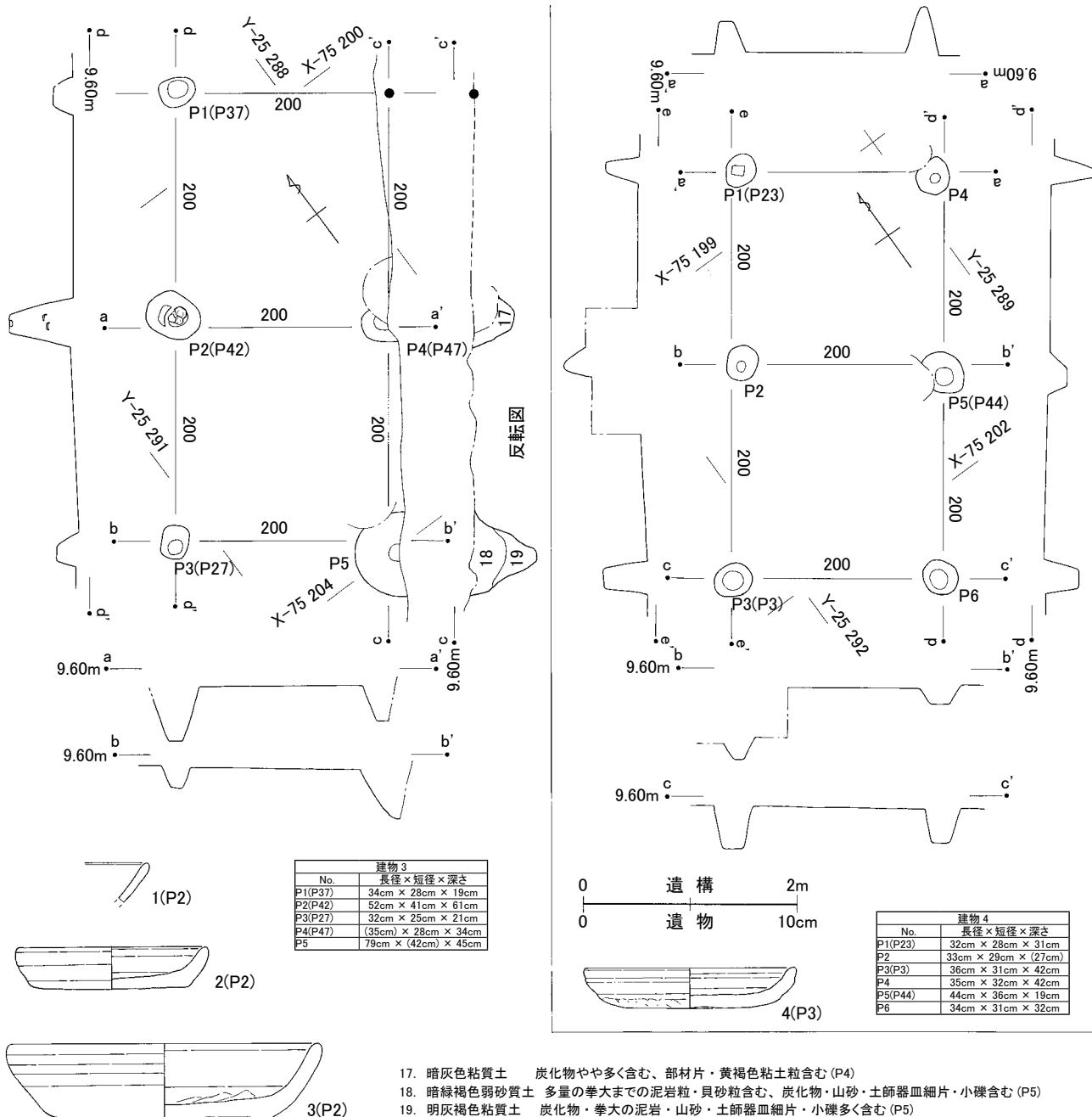


図9 建物3・4、同出土遺物

穴ないし礎石痕と判断したが、他ピットとの切合いを示すため再度提示した。

P.13・14 出土遺物 (図 13)

出土遺物：土製品土錘 (5)

P.34 (図 13)

位置：X (- 75 263.41 ~ - 75 263.77) Y (- 25 290.45 ~ - 25 290.73) 充填土：暗褐色粘質土・茶褐色弱砂質土 平面形：不明 断面形：漏斗形 規模：長径 (0.35 m) × 短径 (0.14 m) × 深さ (0.71 m) 主軸方位：N-32° -W 重複関係：P.14・他ピット 1 穴に切られる、他ピット 1 穴を切る 出土遺物：図化可能遺物なし

P.75 (図 13)

位置：X - 75 200.68 ~ - 75 201.69 Y (- 25 293.96) ~ - 25 294.03 充填土：暗茶褐色弱砂質土・暗茶褐色弱粘質土 平面形：隅丸方形 断面形：深鉢形 規模：長径 0.98 m × 短径 0.82 m × 深さ 0.31 m

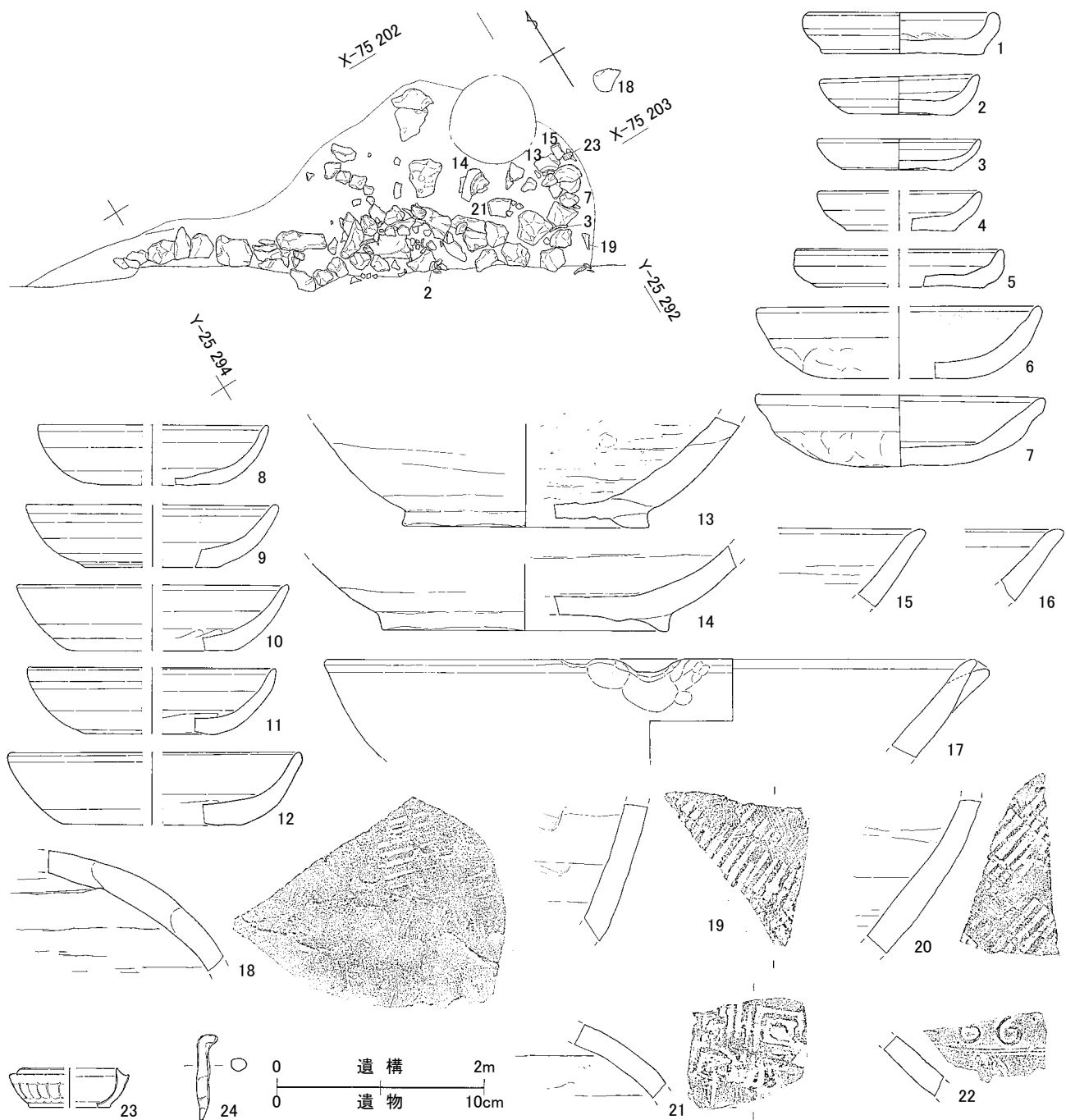


図 10 落込み 1、同出土遺物

主軸方位：N-36° -W 重複関係：P.2・他ピット 1 穴に切られる 出土遺物：平瓦 (1) 特記事項：完形の平瓦の上に伊豆石 (安山岩) を敷き、最上面は小礫を敷きつめた構造となっている。出土した瓦は永福寺Ⅲ期併行のもの。

I a 面ピット出土遺物 (図 14)

出土遺物：(P.7) 鉄釘 (1)・(P.54) 土師器皿 T 種大型 (2)・(P.79) 渥美・湖西片口鉢 (3)・(P.91) 平瓦 (4)・(P.92) 軒丸瓦 (5)・(P.105) 常滑片口鉢 I 類 (6)・鉄釘 (7) 特記事項：2 の土師器皿は 13 世紀前葉、3 の渥美・湖西片口鉢は安井編年 2 b 期、4 の平瓦は永福寺Ⅲ期、5 の軒丸瓦は永福寺Ⅲ期併行のもの。



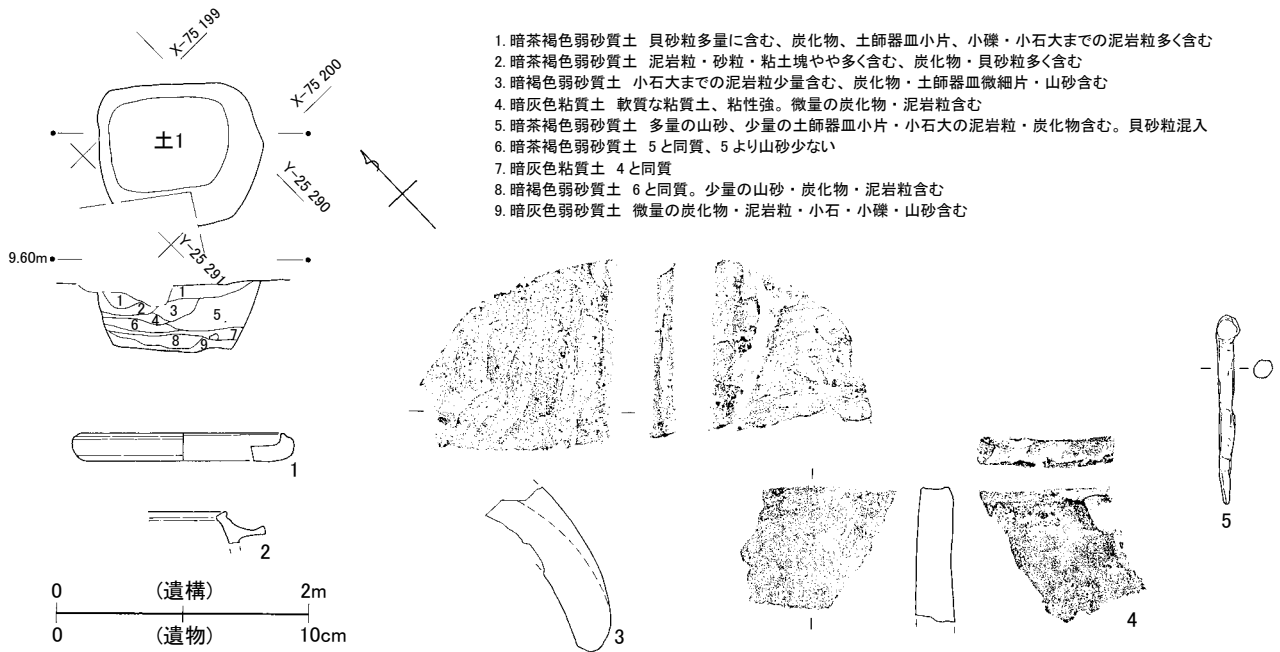


図 11 土坑 1、同出土遺物

## 2. I b 面

### 面の概要 (図 15)

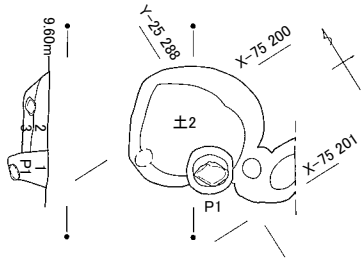
検出高: 9.48 m ~ 9.69 m 面構成土: 灰褐色粘質土・暗灰色粘質土・暗灰褐色粘質土・暗茶褐色弱粘質土・茶褐色弱砂質土・暗茶褐色弱砂質土 検出遺構: 溝 1・柱穴列 1 列・土坑 10 基・ピット 71 穴 I b 面出土遺物: 土師器皿 T 種小型 (1・2)・土師器皿 R 種小型 (3)・土師器皿 R 種大型 (4)・白色系土師器皿 R 種大型 (5)・土製品羽口 (6)・渥美甕 (7・8)・軒平瓦 (9)・平瓦 (10)・鉄製品蓋 (11)・鉄釘 (12) 特記事項: 調査区東側の 1 区では調査区西側の 2 区に存在した下層面が存在しない。このため調査区東側の 1 区では I c 面と同一の面が I b 面として使用されたと考えられることから、調査区東側の 1 区に関しては I c 面と同一の遺構図を提示した。土師器皿は 12 世紀末～13 世紀初頭のものから 13 世紀後葉のものまで出土。9 の軒平瓦、10 の平瓦ともに永福寺 III 期以降のもの。

### 溝 1 (図 16)

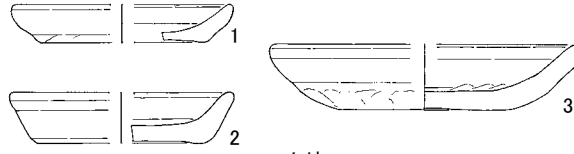
位置: X (- 75 198.70) ~ (- 75 201.75) Y (- 25 293.13) ~ (- 25 295.20) 充填土: 黒褐色粘質土 断面形: 逆台形 規模: 最大幅 (0.66 m) × 長さ (3.58 m) × 深さ 0.27 m 主軸方位: N-31° -E 重複関係: 土坑 17・19・P.120 に切られる 出土遺物: 砥石中砥 (1)・平瓦 (2) 特記事項: 2 の平瓦は永福寺 III 期か

### 柱穴列 1 (図 16)

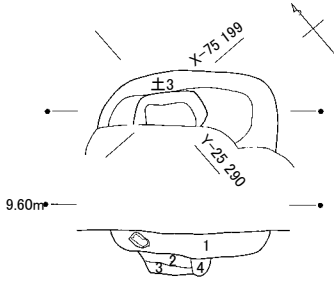
位置: X - 75 197.80 ~ - 75 201.37 Y - 25 287.84 ~ - 25 293.34 規模: 東西 3 間 (柱間距離 2.00 m) 主軸方位: N - 58° - W 重複関係: 土坑 18・P.36・80 他ピット 1 穴を切る 出土遺物: (P.1) 土師器皿 T 種小型 (3)・土師器皿 R 種大型 (4)・常滑片口鉢 II 類 (5)・常滑甕 (6)・元豊通宝 (7)・(P.2) 鉄製品刀子 (8)・(P.4) 竜泉窯青磁画花文碗 (9) 特記事項: 南東端は I b 面土坑 6 を先に検出したため、柱穴の有無は確認できず。また、南北方向と東方向は調査区外であるため、建物の正確な大きさは不明。3 の土師器皿は 13 世紀前葉のもの、4 の土師器皿は 13 世紀中頃までのもの。5 の常滑鉢は 6 b ~ 7 とされるバリエーションが豊富な時期のもの。9 の青磁碗は 13 世紀前葉までのもの。



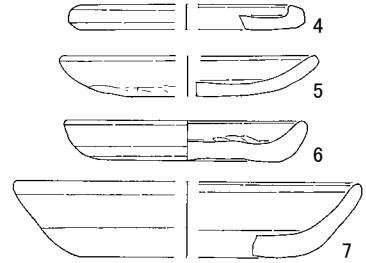
1. 暗褐色粘質土 泥岩粒・炭化物・土師器皿小片含む(P1)
2. 暗茶褐色粘質土 炭化物・土師器皿小片・黄褐色砂塊含む(土2)
3. 暗褐色粘質土 拳大泥岩・炭化物・黄褐色砂塊含む(土2)



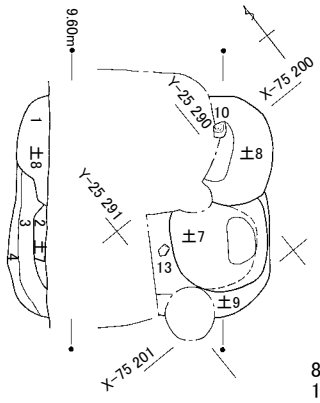
土坑 2



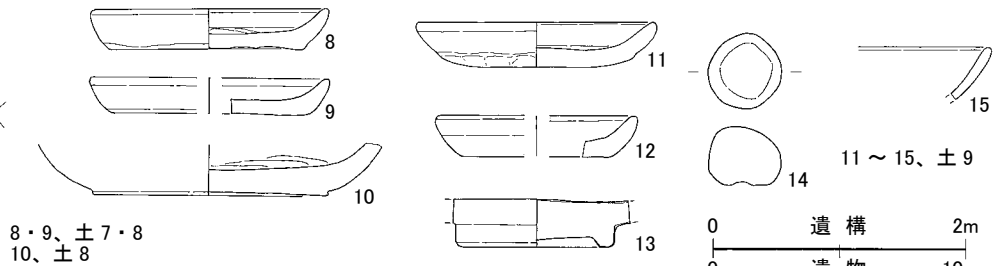
1. 暗茶褐色粘質土 大きめの炭化物やや多く含む、泥岩粒・土師器皿小片・白色粒・黄褐色砂塊含む
2. 暗茶褐色粘質土 1より炭化物少ない
3. 暗茶褐色粘質土 微量の炭化物含む、白色粒・灰色砂含む
4. 暗茶褐色粘質土 微量の炭化物・土師器皿小片含む、白色粒・黄褐色砂塊含む



土坑 3

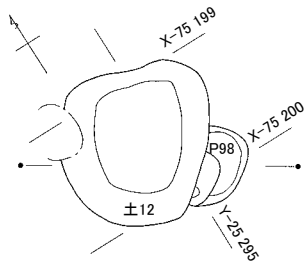


1. 茶褐色粘質土 大きめの炭化物・泥岩細粒・土師器皿小片・黄灰色砂質土塊含む。しまりやや悪い(土8)
2. 茶褐色粘質土 炭化物・黄灰色砂質土塊含む、土師器皿小片1より多い。しまり1より良い(土7)
3. 茶褐色粘質土 大きめの炭化物・土師器皿小片含む、黄褐色砂質土混ざる。1・2より粘性強い(土9)
4. 灰茶褐色粘質土 炭化物・泥岩粒・土師器皿小片を含む。粘性やや強(土9)



8・9、土7・8  
10、土8

土坑 7・8・9



1. 茶褐色弱砂質土 多量の貝砂粒・炭化物・山砂・土師器皿小片・小礫・泥岩粒含む
2. 暗灰色粘質土 軟質。微量の炭化物含む。粘性強
3. 暗茶褐色弱粘質土 多量の泥岩粒含む、炭化物・貝砂粒・山砂・小礫含む、暗灰色粘土混ざる
4. 暗灰褐色粘質土 軟質。少量の炭化物・山砂・泥岩粒・鉄分含む。粘性強
5. 暗灰褐色弱粘質土 やや多くの炭化物・土師器皿小片・泥岩粒含む、微量の山砂含む
6. 暗灰色粘質土 2・4と同質。含有物は微量
7. 灰褐色弱砂質土 多量の炭化物・山砂含む、少量の土師器皿小片・泥岩粒・鉄分含む
8. 茶褐色弱砂質土 多量の山砂含む、少量の炭化物・土師器皿小片含む
9. 黒灰色粘質土 多量の炭化物含む、微量の山砂・鉄分含む

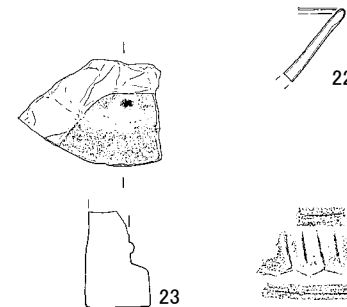
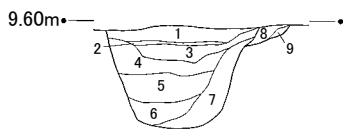
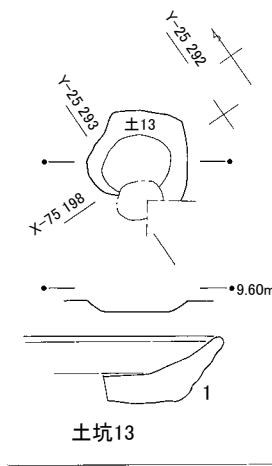
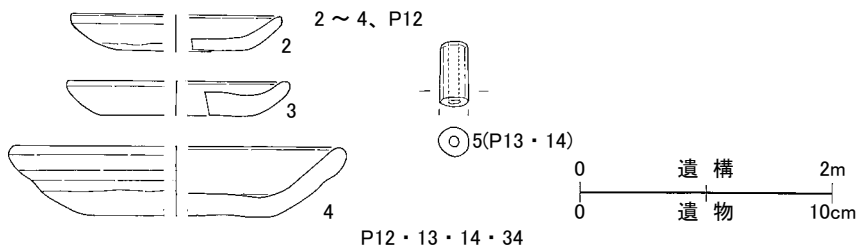


図 12 土坑 2・3・7・8・9・12、同出土遺物

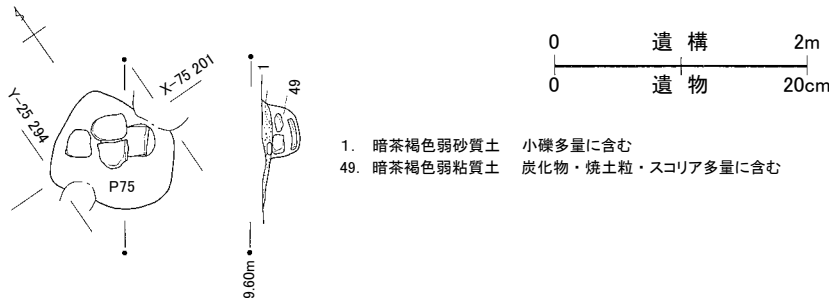


土坑13

1. 明茶褐色弱砂質土 貝砂・山砂・多量に含む、炭化物やや多く含む、小石大の泥岩・土師器血細片含む
2. 明灰褐色弱砂質土 炭化物・土師器血細片・泥岩粒含む。やや粘性あり
3. 暗褐色粘質土 炭化物・黄茶色粘土塊多量に含む
4. 暗褐色粘質土 微量の炭化物・泥岩粒含む、粘性強
5. 茶褐色弱砂質土 山砂多量に含む、炭化物・土師器血細片・泥岩粒やや多く
6. 暗褐色粘質土 泥岩粒含む、少量の炭化物・黄茶色粘土塊含む。しまり悪い、粘性強



P12・13・14・34



1. 暗茶褐色弱砂質土 小礫多量に含む
49. 暗茶褐色弱粘質土 炭化物・焼土粒・スコリア多量に含む

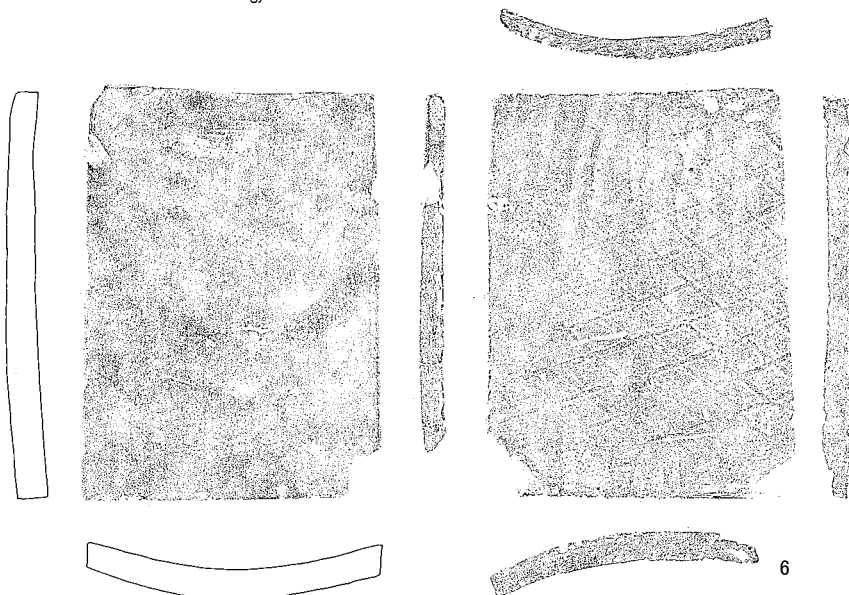


図13 土坑13・P.12・13・14・34・75、同出土遺物

### 土坑4 (図16)

位置：X - 75 200.68 ~ - 75 201.81 Y - 25 291.86 ~ - 25 292.99 充填土：暗茶褐色粘質土 平面形：楕円形 断面形：皿形 規模：長径 1.14 m × 短径 1.03 m × 深さ 0.13 m 主軸方位：N-56.5° -W 重複関係：P.29・30 に切られる 出土遺物：図化可能遺物なし

### 土坑5 (図16)

位置：X (- 75 197.49) ~ - 75 198.45 Y (- 25 289.80) ~ - 25 290.76 充填土：暗茶褐色粘質土・暗茶褐色弱砂質土・茶褐色弱砂質土 平面形：隅丸方形 断面形：逆台形 規模：長径 1.12 m × 短径 0.28 m × 深さ 0.65 m 主軸方位：N-55° -W 出土遺物：図化可能遺物なし

### 土坑6 (図17)

位置：X - 75 203.38 ~ (- 75 204.56) Y (- 25 290.00) ~ (- 25 291.08) 充填土：暗灰色粘質土・暗茶褐色弱粘質土・暗茶褐色弱砂質土・暗灰褐色弱砂質土 平面形：隅丸方形 断面形：逆台形 規模：長径 (0.97 m) × 短径 0.98 m × 深さ 0.72 m 主軸方位：N-13° -E 重複関係：P.68・70 他ピット 1 穴を切る、ピット 1 穴に切られる 出土遺物：土師器皿 T 種小型 (1)・土師器皿 R 種小型 (2・3)・土師器皿 T 種小型 (4)・渥美甕 (5・6)・青白磁合子

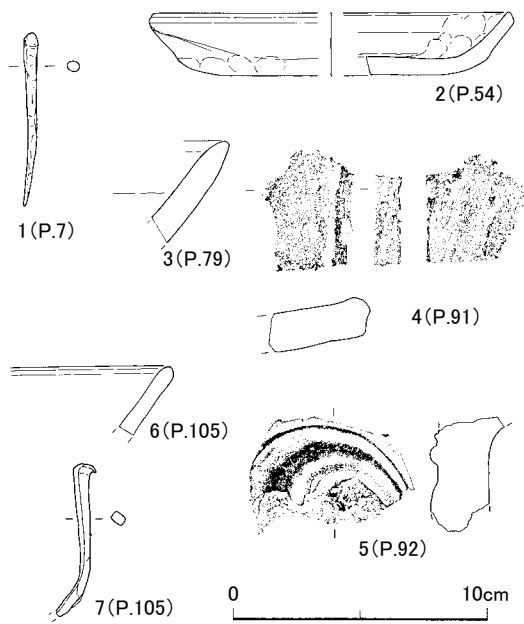


図14 I a面ピット出土遺物

身(7)・丸瓦(8)・平瓦(9)・鉄釘(10)・東遠型山茶碗(11) 特記事項:土師器皿は13世紀中頃までのもの。8の丸瓦は永福寺Ⅱ期以降、9の平瓦は永福寺Ⅲ期併行。

土坑11(図17)

位置: X(-75 196.42) ~ -75 197.64 Y(-25 290.86) ~ -25 292.26 充填土: 茶褐色弱砂質土 平面形: 楕円形 断面形: 皿型 規模: 長径1.67m × 短径(0.49m) × 深さ0.16m

主軸方位: N-52° -W 出土遺物: 鉄製品刀子(12)

土坑14(図17)

位置: X-75 195.59 ~ (-75 196.47) Y-25 293.38 ~ (-25 294.24) 充填土: 茶褐色弱粘質土・茶褐色弱砂質土・暗灰色粘質土

平面形: 楕円形か 断面形: 深鉢形 規模: 長径(1.68m) × 短径0.88m × 深さ0.35m 主軸方位: N-53° -W 重複関係: 土坑20・P.86を切る、ピット2穴に切られる 出土遺物: 土師器皿T種小型(13)・土師器皿R種小型(14)・土師器碗(15) 特記事項: 14の土師器皿は13世紀中頃までのもの、15の土師器碗の類例の出土事例は現時点では非常に少ない。

土坑20(図17)

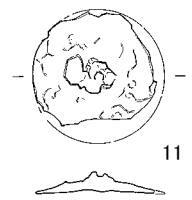
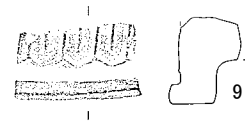
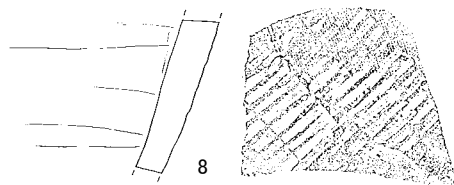
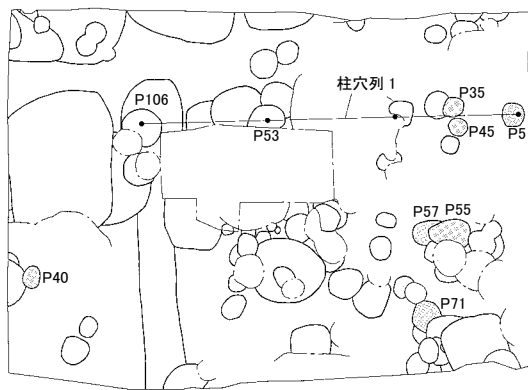
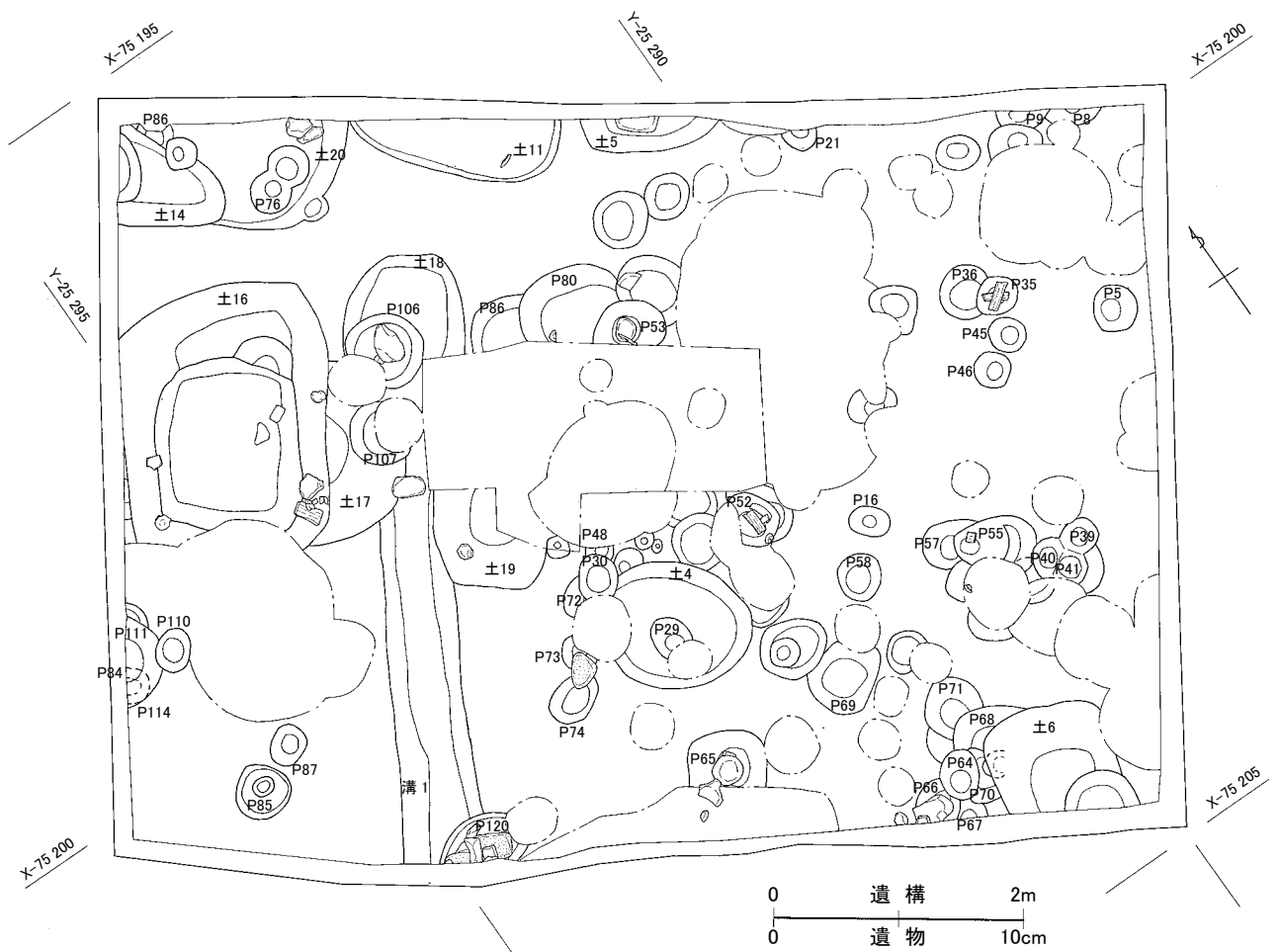
位置: X(-75 195.38) ~ -75 196.94 Y(-25 292.24) ~ (-25 293.64) 充填土: 暗灰色粘質土・明茶褐色弱粘質土・明茶褐色弱砂質土 平面形: 隅丸方形 断面形: 逆台形 規模: 長径(0.88m) × 短径0.81m × 深さ0.48m 主軸方位: N-54.5° -W 重複関係: 土坑14・P.76・86に切られる 出土遺物: 凶化可能遺物なし

土坑16(図18・19)

位置: X-75 196.77 ~ -75 199.04 Y-25 293.22 ~ -25 294.49 充填土: 暗灰色粘質土・黒灰色粘質土・暗茶褐色粘質土・暗茶褐色粘質土・暗茶褐色粘質土・暗茶褐色粘質土・暗茶褐色粘質土・暗茶褐色粘質土 平面形: 隅丸方形 断面形: 逆台形 規模: 長径2.20m × 短径1.70m × 深さ0.63m 主軸方位: N-28° -E 重複関係: 土坑17他ピット1穴を切る 出土遺物: 土師器皿T種小型(18)・土師器皿R種小型(19)・土師器皿T種大型(20)・渥美広口壺(21)・常滑甕(22)・不明木製品(23)・箸状木製品(24)・不明木製品(25)・棒状木製品(26) 特記事項: 形状と堆積土から方形の井戸枠をもつ井戸址の可能性が高いと判断したが、便槽の可能性もある。21の渥美広口壺は出土層位が多岐にわたるも、出土層位のうちで出土破片数が最も多く最下層にあたる遺構が土坑16であるため、土坑16出土遺物とした。土師器皿は13世紀前半、21の渥美広口壺は安井編年2b期のもの。

土坑17(図18・19)

位置: X-75 198.00 ~ -75 199.21 Y-25 293.22 ~ -25 294.49 充填土: 暗茶褐色粘質土・灰茶褐色粘質土・黒褐色弱粘質土・青灰色粘質土・青灰色弱砂質土 平面形: 隅丸方形 断面形: 深鉢形 規模: 長径1.45m × 短径0.84m × 深さ(1.65m) 主軸方位: N-27° -E 重複関係: 土坑16・P.107に切られる 出土遺物: (土坑17上層) 渥美・湖西片口鉢転用摩耗陶片(27)・(土坑17下層) 土師器皿T種小型(28・29)・土師器皿R種小型(30) 特記事項: 円形素掘りの井戸の可能性はある。



暗茶褐色粘質土

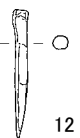
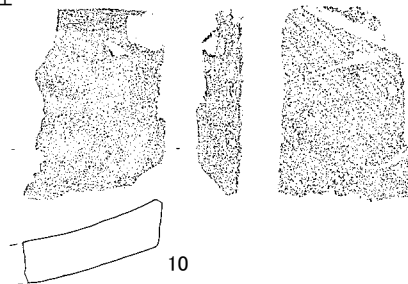
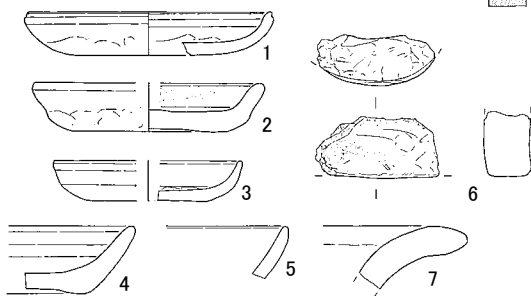
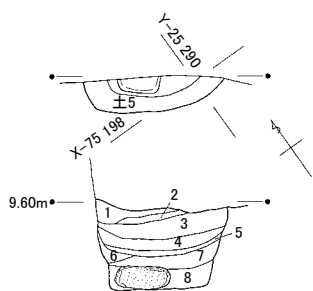
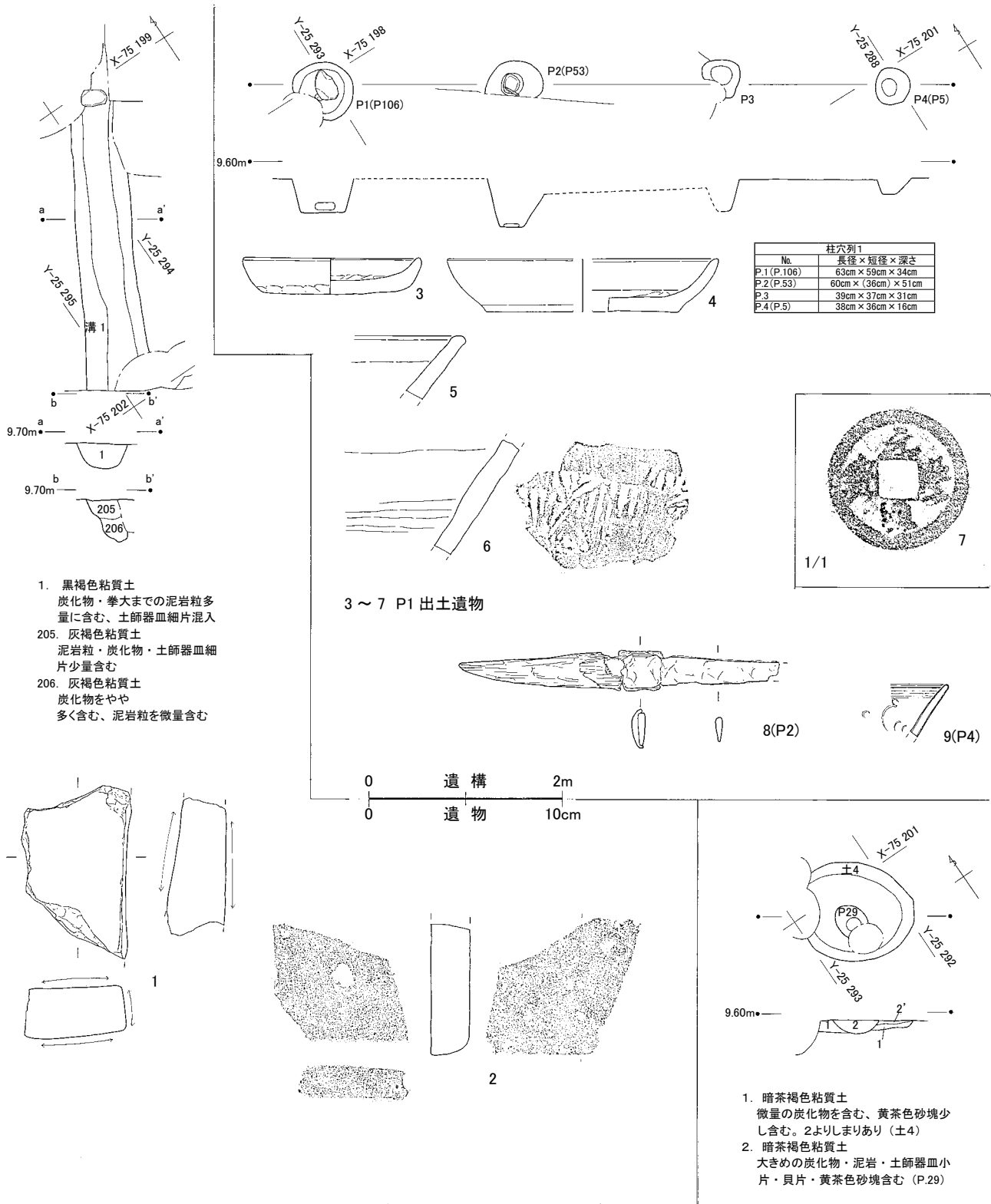
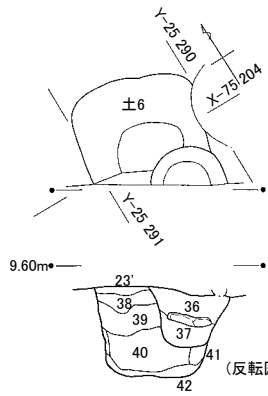


图 15 I b 面遺構全圖、I b 面出土遺物

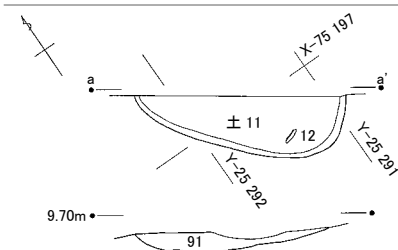
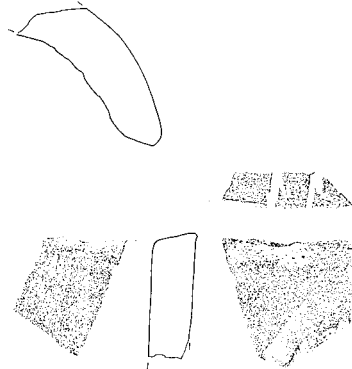
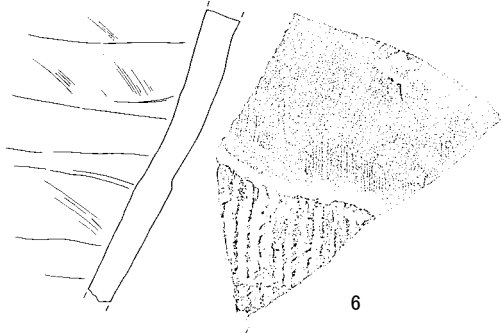
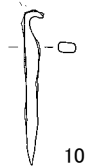
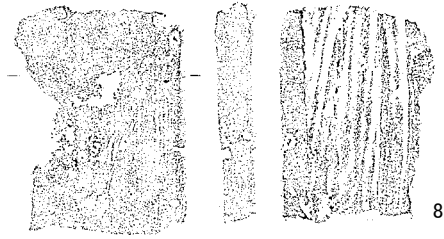
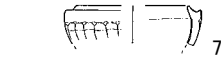
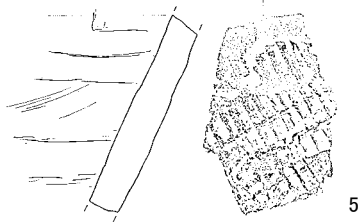
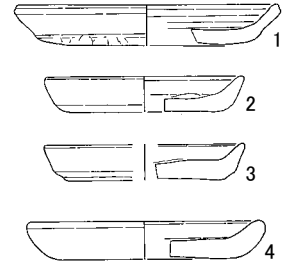


1. 暗茶褐色粘質土 炭化物・土師器皿小片・2cm泥岩粒・茶褐色砂塊少量含むが、混入物は少ない
2. 茶褐色弱砂質土 炭化物・土師器皿小片・泥岩粒含む。しまり悪い
3. 茶褐色弱砂質土 玉砂利・炭化物・2cm大までの泥岩粒・土師器皿小片を多く含む、全体に貝細片含む。しまり悪い
4. 茶褐色弱砂質土 土師器皿小片・泥岩細粒を少し含む。しまり悪い
5. 暗茶褐色粘質土 炭化物・土師器皿小片少し含む
6. 暗茶褐色弱砂質土 炭化物・泥岩細粒・土師器皿小片少し含む。しまりやや悪い
7. 茶褐色弱砂質土 玉砂利・炭化物・泥岩細粒・土師器皿小片含む。石直上に貝細片ブロック状に集中。しまりやや悪い
8. 暗茶褐色粘質土 玉砂利やや多く含む、炭化物・卵大泥岩・土師器皿小片含む

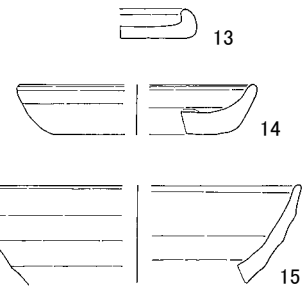
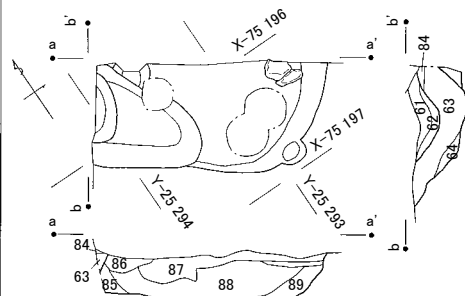
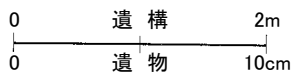
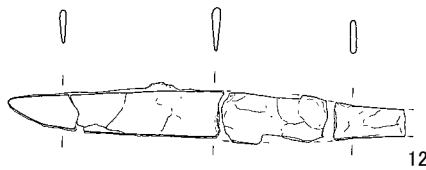
図16 柱穴列1・溝1・土坑4・P29・土坑5、同出土遺物



- 23. 茶褐色弱砂質土 多量の貝砂粒を含む、泥岩粒・炭化物・土師器皿細片含む
- 36. 茶褐色弱砂質土 23'と同質。暗灰色粘土粒やや多く含む。
- 37. 暗茶褐色弱砂質土 山砂・泥岩粒・炭化物を含む、微量の貝砂粒を含む
- 38. 暗茶褐色弱粘質土 拳大の泥岩・泥岩粒・炭化物・土師器皿細片を含む
- 39. 茶褐色弱砂質土 23'と同質
- 40. 暗灰褐色弱砂質土 多量の貝砂含む、泥岩粒・炭化物・小礫・土師器皿片細片含む
- 41. 暗茶褐色弱砂質土 山砂・炭化物含む
- 42. 暗灰色粘質土 微量の山砂・炭化物・貝砂粒・土師器皿細片含む

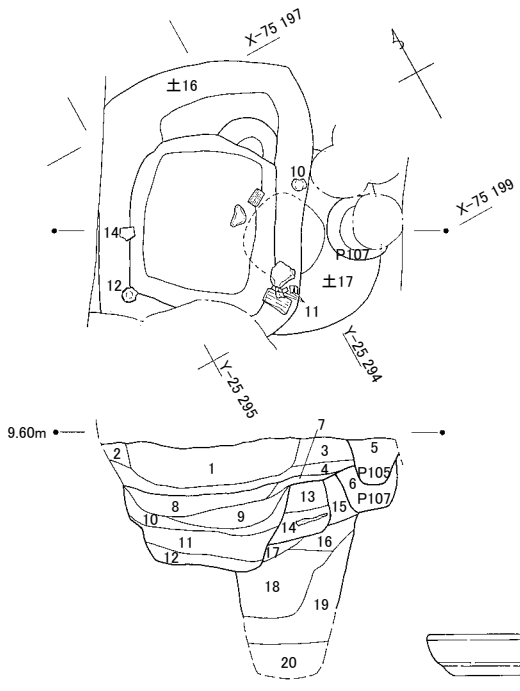


- 91. 茶褐色弱砂質土 多量の山砂、やや多くの炭化物・焼土粒を含む、鉄分・泥岩粒・黄茶色粘土塊・小礫含む。下層は暗灰色粘土粒混入



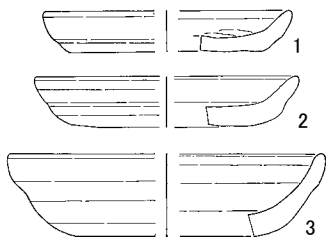
- 61. 茶褐色弱粘質土 拳大までの泥岩多量につまる、炭化物・土師器皿細片含む(ピット)
- 62. 茶褐色弱砂質土 山砂多量に含む、炭化物を含む(ピット)
- 63. 暗灰色粘質土 炭化物・茶色粘土・鉄分・土師器皿細片・焼土粒多量に含む、礫片含む(土14)
- 64. 暗灰色粘質土 炭化物・焼土粒少量含む(土14)
- 84. 暗灰色粘質土 炭化物・泥岩粒・黄茶色粘土含む、山砂・焼土粒・土師器皿細片少量含む(土14)
- 85. 暗灰色粘質土 85と同質。炭化物・焼土粒・土師器皿細片多く含む(土20)
- 86. 明茶褐色弱砂質土 多量の山砂・泥岩粒を含む、炭化物・土師器皿細片を含む(P.86)
- 87. 暗茶褐色弱粘質土 炭化物・山砂・拳大までの泥岩多量に含む、土師器皿細片・礫片混入(土20)
- 88. 暗灰色粘質土 炭化物・焼土粒多量に含む、山砂・黄茶色粘土塊・泥岩粒・土師器皿細片含む(土20)
- 89. 暗灰色粘質土 88と同質。山砂少量含む。88より色調黒い(土20)

図 17 土坑 6・11・14・20、同出土遺物



1. 大型泥岩層 多量の炭化物含む (I a 面構築土)
2. 暗褐色粘質土 多量の炭化物・土師器皿小片含む (I a 面構築土)
3. 暗茶褐色弱粘質土 多量の半人頭大から粒子の泥岩含む、炭化物・山砂・土師器皿小片含む。半地行土 (I a 面構築土)
4. 明茶褐色砂質土 多量の山砂含む、炭化物・泥岩粒・土師器皿小片少量含む (I a 面構築土)
5. 茶褐色弱粘質土 拳大から粒子の泥岩多量に含む、炭化物・土師器皿小片含む (P.105)
6. 黒褐色粘質土 多量の炭化物含む、山砂・茶褐色粘土塊混入 (P.107)
7. 暗灰色粘質土 炭化物・山砂・土師器皿片含む。しまり悪い (土 16)
8. 暗灰色粘質土 7と同質。多量の炭化物、微量の山砂含む。粘性強 (土 16)
9. 黒灰色粘質土 炭土と茶褐色粘土 (腐植土) がつまる。木片・遺物片多量に含む。粘性強く、しまり悪い (土 16)
10. 暗茶褐色粘質土 炭化物・木片・遺物片含む。粘性強い、しまり弱い (土 16)
11. 暗茶褐色粘質土 軟質。繊維質腐植土多量に含む、炭化物・木片・泥岩混入 (土 16)
12. 暗灰褐色弱砂質土 小石大～拳大の泥岩やや多く含む (土 16)
13. 暗茶褐色粘質土 炭化物・黄茶色粘土塊混入。ややしる (土 20)
14. 暗茶褐色粘質土 軟質。粘性強い。13に比べ炭化物多く、粘土塊含まず (土 20)
15. 暗茶褐色粘質土 13と似る。炭化物・黄茶色粘土塊少量含む。ややしる (土 17)
16. 灰茶褐色弱粘質土 ぼそぼそとした土。山砂含む、腐植土が混入 (土 17)
17. 黒褐色弱粘質土 炭化物・木片多量に含む (土 17)
18. 黒褐色弱粘質土 木片・貝砂粒多量に含む、小石大～拳大の泥岩・遺物片含む (土 17)
19. 青灰色弱砂質土 炭化物・貝砂粒含む (土 17)
20. 青灰色粘質土 炭化物・鉄分混入。含有物少ない。ややしる (土 17)

6 ~ 17 4 層出土遺物



1 ~ 5 1・3 層出土遺物

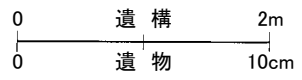
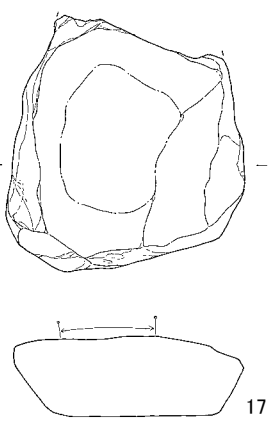
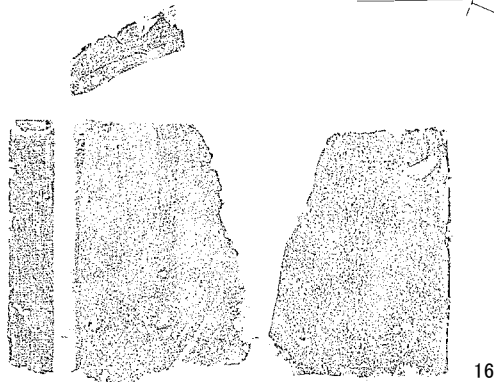
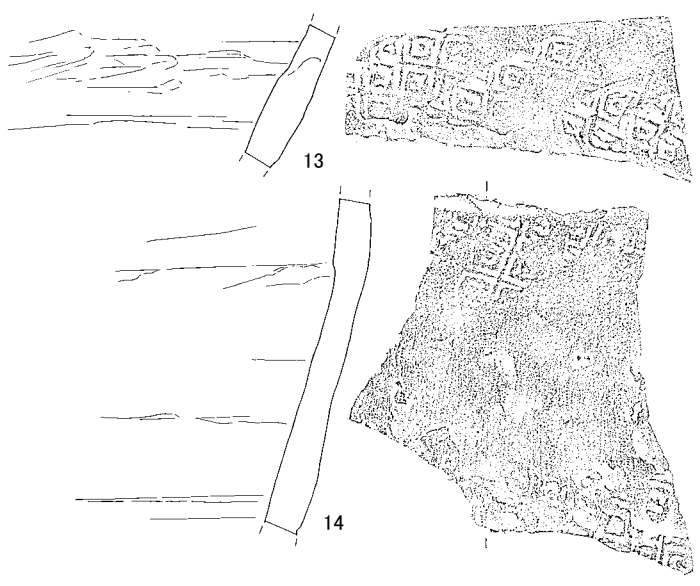
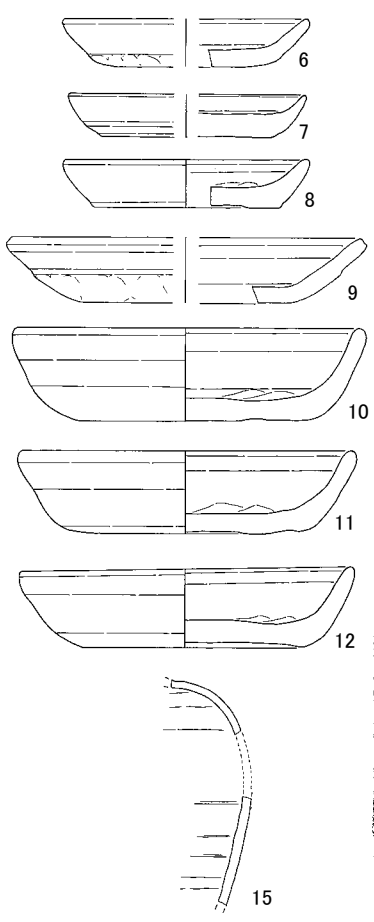
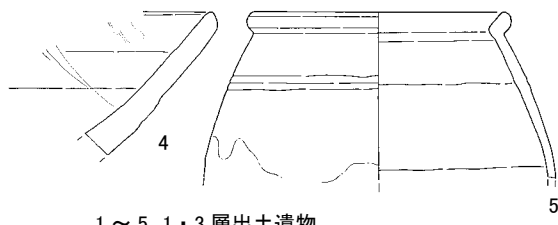


図 18 土坑 16・17、I a 構築土出土遺物



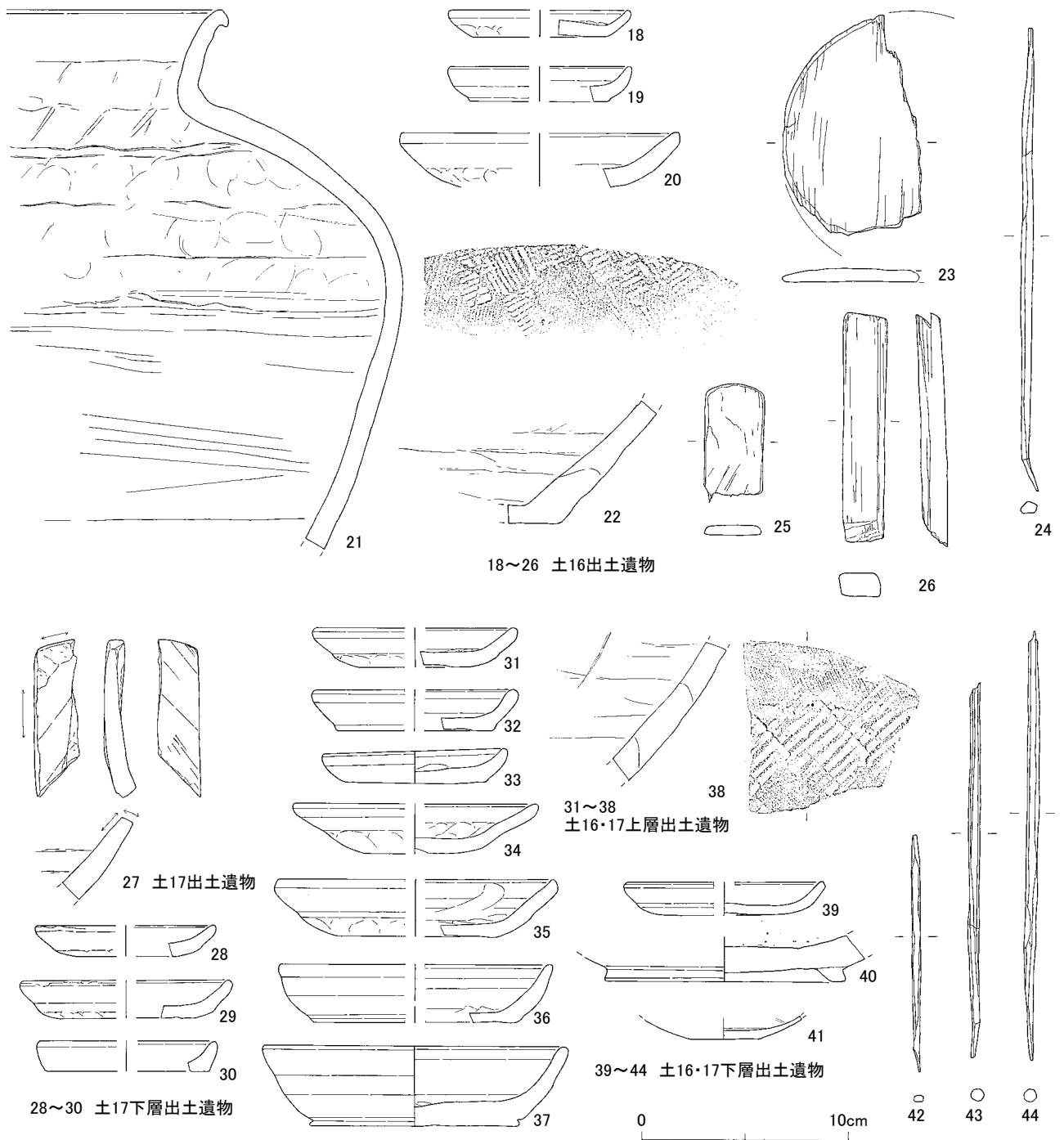


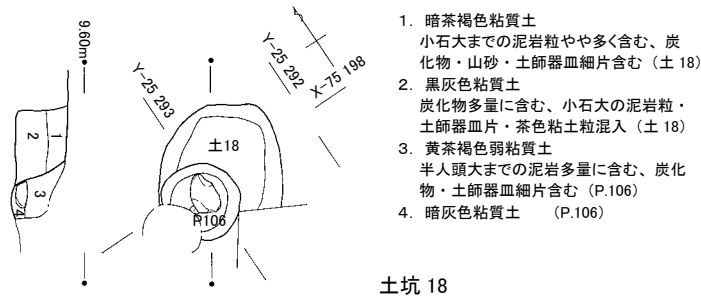
図19 土坑16・17出土遺物

土坑16・17ベルト土層図1・3層（I a面構築土）出土遺物（図18）

土師器皿R種小型（1）・土師器皿T種小型（2）・土師器皿R種大型（3）・常滑片口鉢I類（4）・舶載緑褐釉広口無頸壺（5） 特記事項：土坑16・17ベルト土層断面からI a構築土中の遺物と判断したが、構築土内の出土を明確にするためここに提示した。土師器皿は13世紀前半、4の常滑鉢は3型式～4型式のものか。

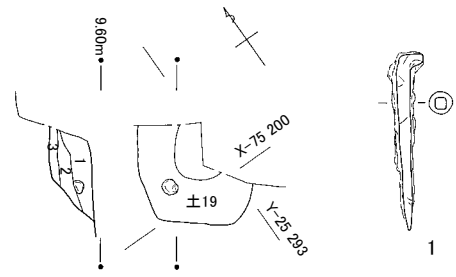
土坑16・17ベルト土層図4層（I a面構築土内）出土遺物（図18）

土師器皿T種小型（6）・土師器皿R種小型（7・8）・土師器皿T種大型（9）・土師器皿R種大型（10～12）・常滑甕（13・14）・舶載褐釉壺（15）・平瓦（16）・安山岩（17） 特記事項：土坑16・17ベルト土



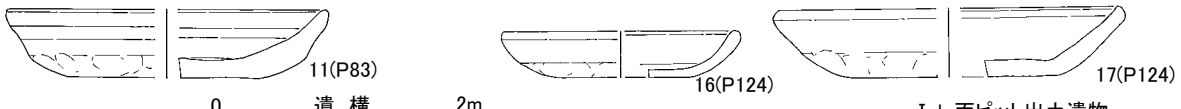
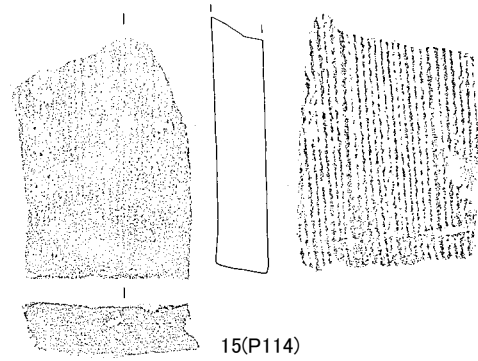
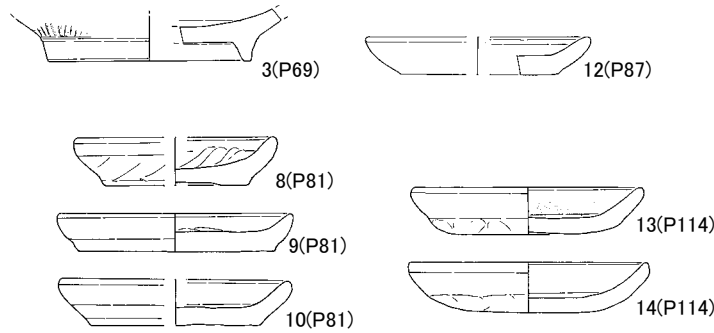
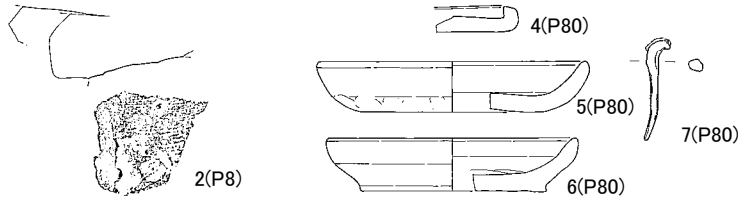
1. 暗茶褐色粘質土  
小石大までの泥岩粒やや多く含む、炭化物・山砂・土師器皿細片含む (土 18)
2. 黒灰色粘質土  
炭化物多量に含む、小石大の泥岩粒・土師器皿片・茶色粘土粒混入 (土 18)
3. 黄茶褐色弱粘質土  
半人頭大までの泥岩多量に含む、炭化物・土師器皿細片含む (P.106)
4. 暗灰色粘質土 (P.106)

土坑 18



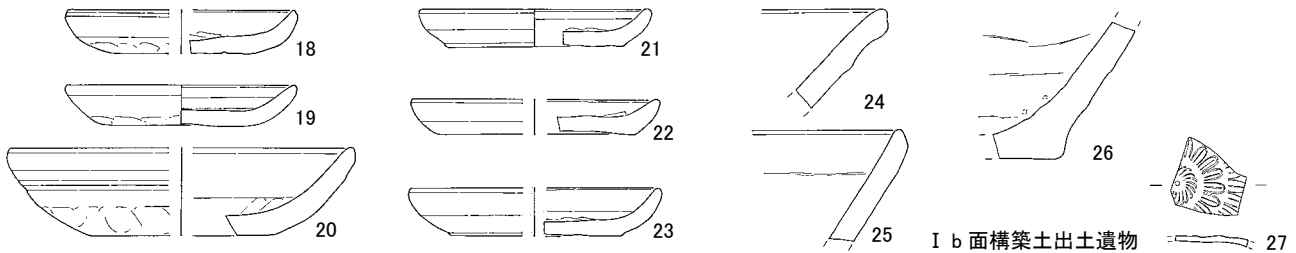
1. 暗茶褐色弱粘質土  
小石大～拳大の泥岩粒多量に含む、炭化物含む
2. 暗灰色弱粘質土  
炭化物多量に含む、焼土・山砂・泥岩粒・小礫を含む
3. 暗灰色粘質土  
少量の泥岩粒・スコリア・炭化物含む、微量の焼土含む

土坑 19



0 遺構 2m  
0 遺物 10cm

I b 面ピット出土遺物



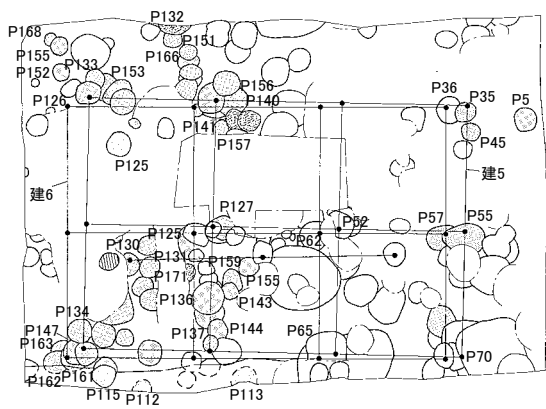
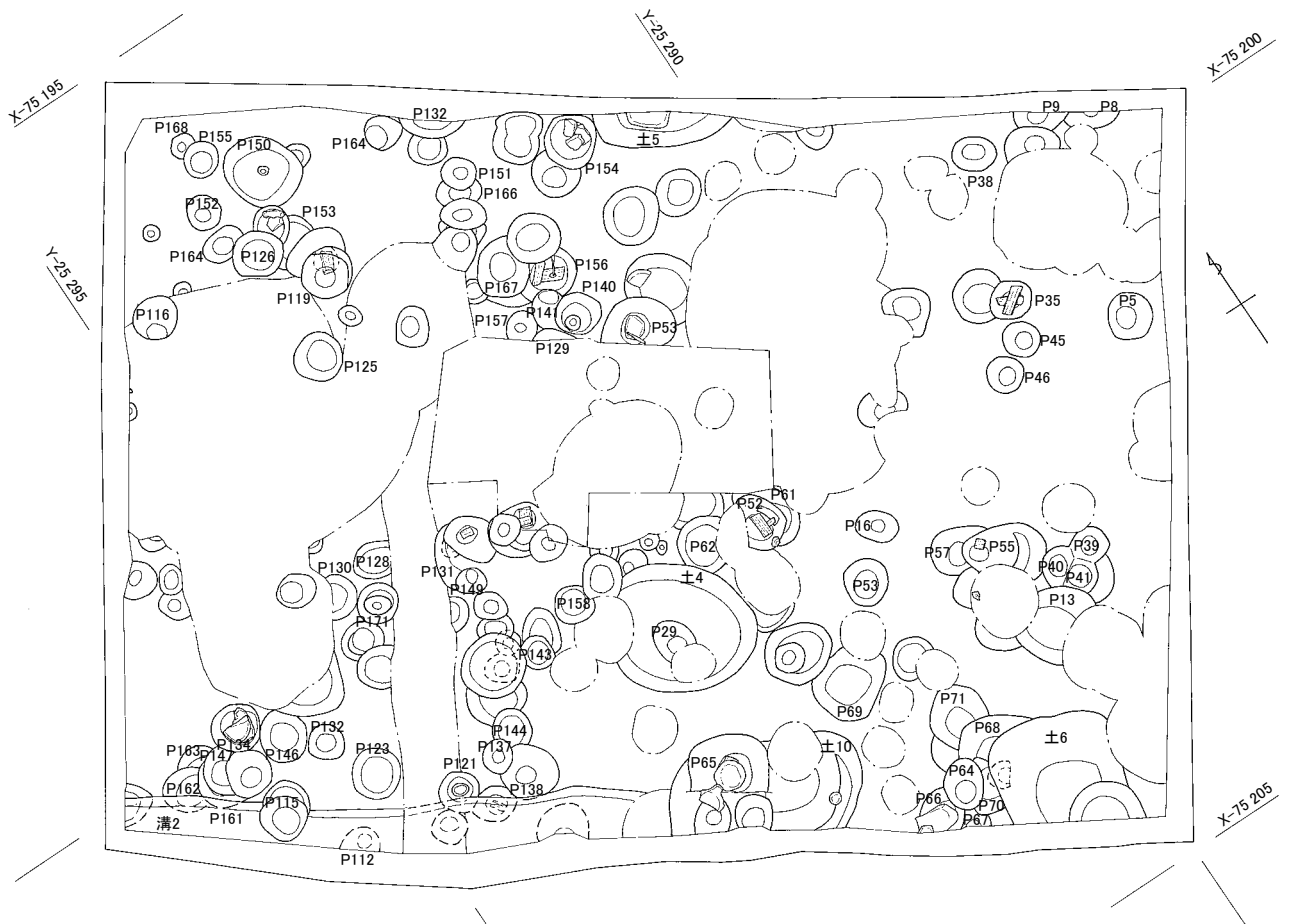
I b 面構築土出土遺物





図 20 土坑 18・19・I b 面ピット・I b 面構築土出土遺物

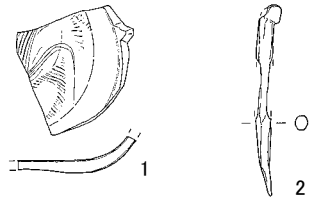
層断面から I a 構築土中の遺物と判断したが、構築土内の出土を明確にするためここに提示した。土師器皿は 13 世紀前半、16 の平瓦は 13 世紀後半のもの。

土坑 16・17 上層出土遺物 (図 19)

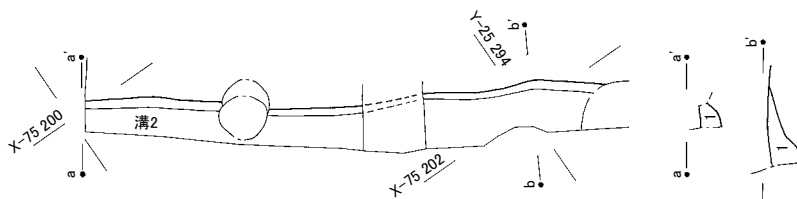
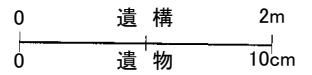
土師器皿 T 種小型 (31)・土師器皿 R 種小型 (32・33)・土師器皿 T 種大型 (34・35)・土師器皿 R 種大型 (36・37)・渥美甕 (38) 特記事項：土師器皿は 13 世紀前半のもの。



-  暗茶褐色粘質土
-  暗灰色粘質土
-  明茶褐色粘質土
-  暗黒褐色粘質土



I c面上出土遺物



1. 黒灰褐色粘質土 多量の炭化物・焼土・土師器皿  
細片含む、泥岩粒少量含む

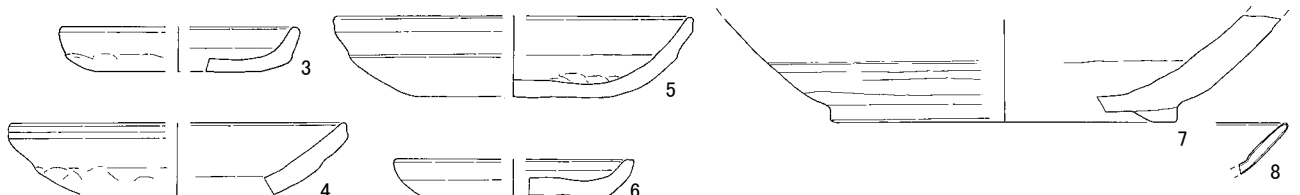


図 21 I c 面遺構全図、同出土遺物、溝 2、同出土遺物

### 土坑 16・17 下層出土遺物 (図 19)

土師器皿 T 種小型 (39)・渥美・湖西片口鉢 (40)・青白磁皿 (41)・箸状木製品 (42～44)

### 土坑 18 (図 20)

位置：X - 75 197.50 ～ - 75 198.50 Y - 25 292.25 ～ - 25 293.37 充填土：暗茶褐色粘質土・黒灰色粘質土 平面形：隅丸方形 断面形：逆台形 規模：長径 (0.85 m) × 短径 0.98 m × 深さ 0.41 m 主軸方位：N-32° -E 重複関係：P.106 に切られる 出土遺物：図化可能遺物なし

### 土坑 19 (図 20)

位置：X (- 75 199.25) ～ - 75 200.33 Y - 25 292.92 ～ - 25 293.69 充填土：暗茶褐色弱砂質土・暗褐色弱砂質土・暗灰色弱砂質土・暗灰色粘質土 平面形：隅丸方形 断面形：逆台形 規模：長径 (0.80 m) × 短径 0.80 m × 深さ 0.33 m 主軸方位：N-35° -E 重複関係：溝 1 を切る 出土遺物：鉄釘 (1)

#### I b 面 Pit 出土遺物 (図 20)

出土遺物：(P.8) 軒丸瓦 (2)・(P.69) 白磁端反碗 (3)・(P.80) 土師器皿 T 種小型 (4・5)・土師器皿 R 種小型 (6)・鉄釘 (7) (P.81) 土師器皿 R 種小型 (8～10)・(P.83) 土師器皿 T 種大型 (11)・(P.87) 土師器皿 R 種小型 (12)・(P.114) 土師器皿 T 種小型 (13・14)・平瓦 (15)・(P.124) 土師器皿 T 種小型 (16)・土師器皿 T 種大型 (17) 特記事項：2 の平瓦は 13 世紀中頃の埼玉県児玉郡美里町周辺の瓦窯の製品か 13 世紀第 3 四半期頃に鎌倉周辺で生産されたもの。15 の平瓦は永福寺 I 期、土師器皿は 13 世紀前半のもの。

#### I b 面構築土出土遺物 (図 20)

出土遺物：土師器皿 T 種小型 (18・19)・土師器皿 T 種大型 (20)・土師器皿 R 種小型 (21～23)・常滑片口鉢 I 類 (24)・常滑片口鉢 II 類 (25)・常滑甕 (26)・青白磁合子蓋 (27) 特記事項：土師器皿は 12 世紀末から 13 世紀前葉のもの。24 の常滑鉢は 3 型式から 4 型式のもの。

### 3. I c 面

#### 面の概要 (図 21)

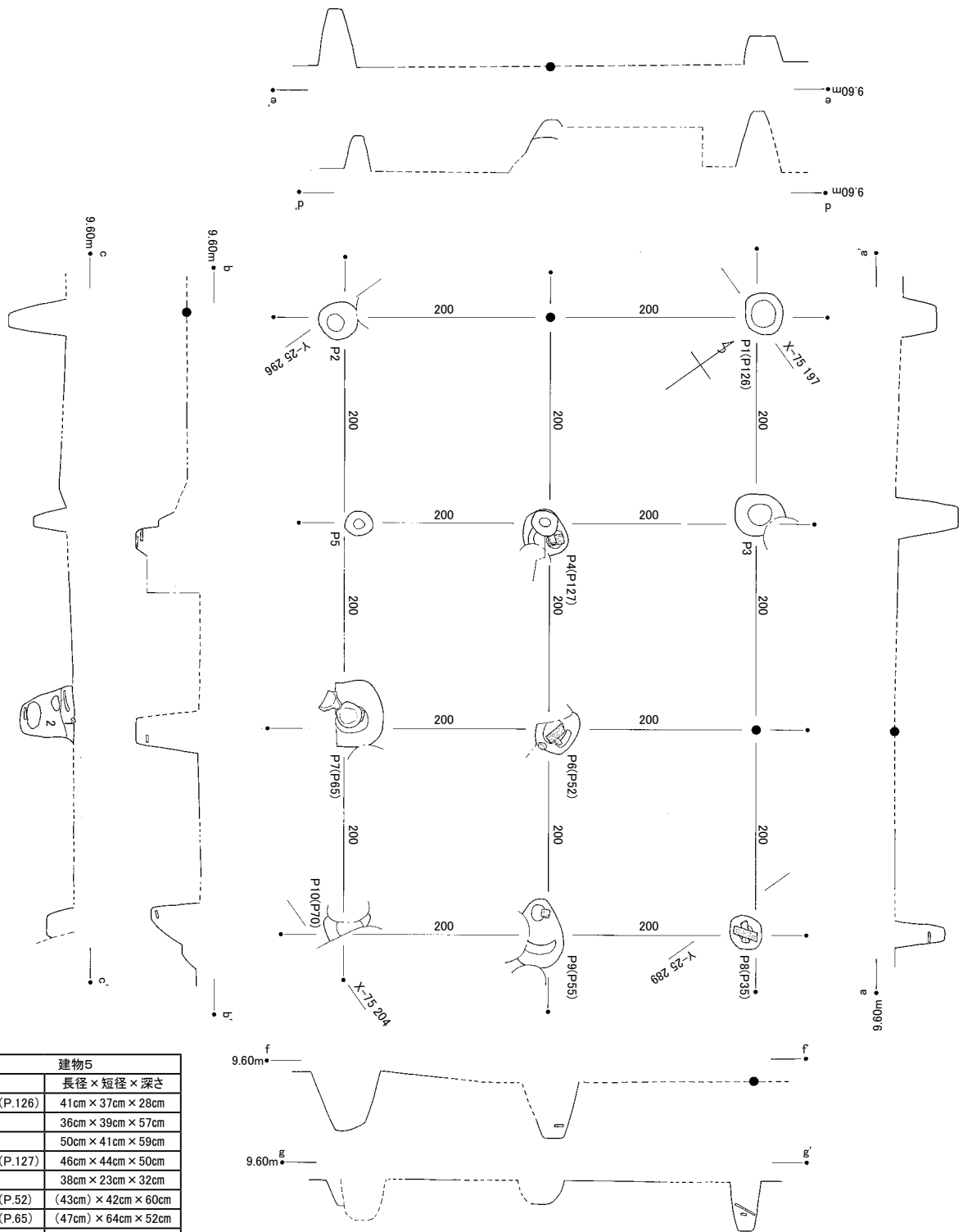
検出高：9.23 m～9.53 m 面構成土：暗灰色粘質土・茶褐色弱砂質土 検出遺構：建物 2 棟・土坑 4 基・ピット 137 穴 I c 面出土遺物：同安窯系青磁皿 (1)・鉄釘 (2) 特記事項：先述したように、調査区東側の 1 区では調査区西側の 2 区よりも遺構面の枚数が少ない。調査区東側の 1 区では I b 面と同一の面が I c 面として使用されたと考えられる。このため、調査区東側の 1 区に関しては I b 面と同一の遺構図を提示した。

#### 溝 2 (図 21)

位置：X (- 75 199.94) ～ (- 75 202.37) Y (- 25 293.38) ～ (- 25 296.97) 充填土：黒灰褐色粘質土 断面形：浅鉢形か 規模：最大幅 (0.45 m) × 長さ (4.10 m) × 深さ 0.25 m 主軸方位：N-57° -W 重複関係：P.112・121・138・162 他ピット 5 穴に切られる 出土遺物：土師器皿 T 種小型 (3)・土師器皿 T 種大型 (4・5) 土師器皿 R 種小型 (6)・渥美・湖西片口鉢 (7)・同安窯系青磁皿 (8) 特記事項：図化遺物は 12 世紀末から 13 世紀初頭。上層の落込み 1 に切られるため、構築時の長さは不明。

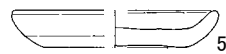
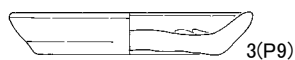
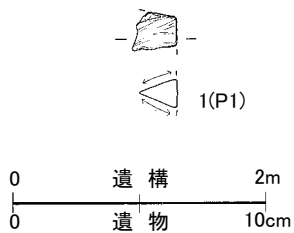
#### 建物 5 (図 22)

位置：X - 75 196.73 ～ - 75 203.90 Y - 25 289.41 ～ - 25 296.09 規模：東西 3 間, 6.00 m × 南北 2 間, 4.00 m 主軸方位：N - 36° - E 重複関係：建物 6・土坑 10・P.67・127・144・133・153・156・161 他 6 穴を切る、溝 2・土坑 6・P.40・61・134 他ピット 1 穴に切られる 出土遺物：(P.1) 滑石鍋転用加工品 (1)・(P.8) 土師器皿 R 種小型 (2)・(P.9) 土師器皿 R 種小型 (3)・(P.10) 土師器皿 R 種小型 (4)・



建物5	
No.	長径×短径×深さ
P.1 (P.126)	41cm×37cm×28cm
P.2	36cm×39cm×57cm
P.3	50cm×41cm×59cm
P.4 (P.127)	46cm×44cm×50cm
P.5	38cm×23cm×32cm
P.6 (P.52)	(43cm)×42cm×60cm
P.7 (P.65)	(47cm)×64cm×52cm
P.8 (P.35)	33cm×31cm×48cm
P.9 (P.55)	67cm×45cm×56cm
P.10 (P.70)	45cm×(25cm)×27cm

1. 黒灰色粘質土 多量の炭化物含む、遺物片・泥岩粒含む。しまり悪い
2. 暗灰色粘質土 多量の炭化物含む、微量の遺物片・木片・泥岩粒含む。しまり悪い



4～6  
P10出土

図22 建物5、同出土遺物

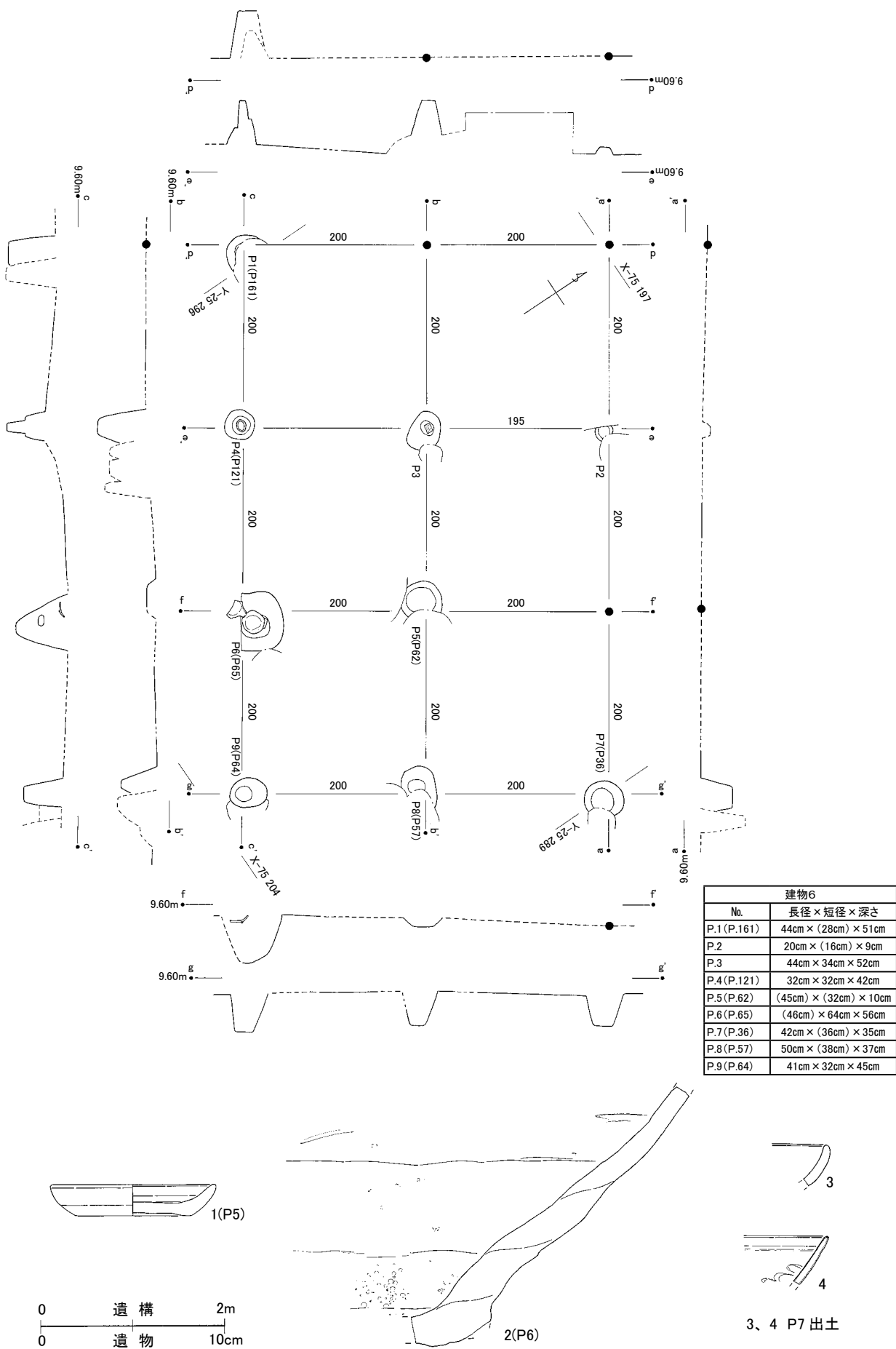
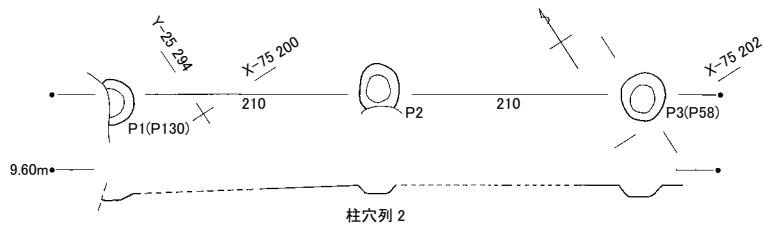
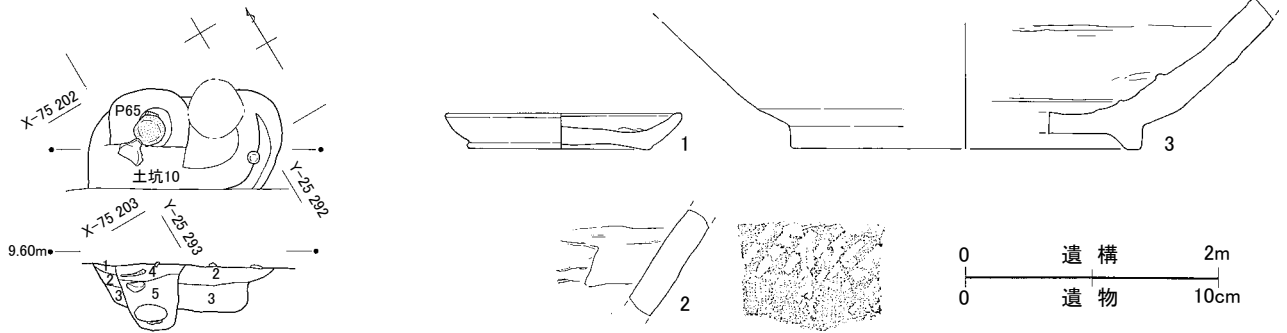


図 23 建物6、同出土遺物



柱穴列2	
No.	長径×短径×深さ
P.1(P.130)	37cm×(36cm)×7cm
P.2	(37cm)×31cm×8cm
P.3(P.58)	39cm×35cm×10cm



1. 黒灰色粘質土 多量の炭化物・土師器皿小片・泥岩粒含む (土 10)
2. 黒灰色粘質土 上層に多量の炭化物、下層にいくにつれ固くしまる。白色スコリア多く含む。粘性強 (土 10)
3. 暗茶灰色粘質土 鉄分やや多く含む、微量の白色スコリア・炭化物・泥岩粒含む。固くしまる (土 10)
4. 黒灰色粘質土 多量の炭化物含む、遺物片・泥岩粒含む。しまり悪い (P.65)
5. 暗灰色粘質土 多量の炭化物含む、微量の遺物片・木片・泥岩粒含む。しまり悪い (P.65)

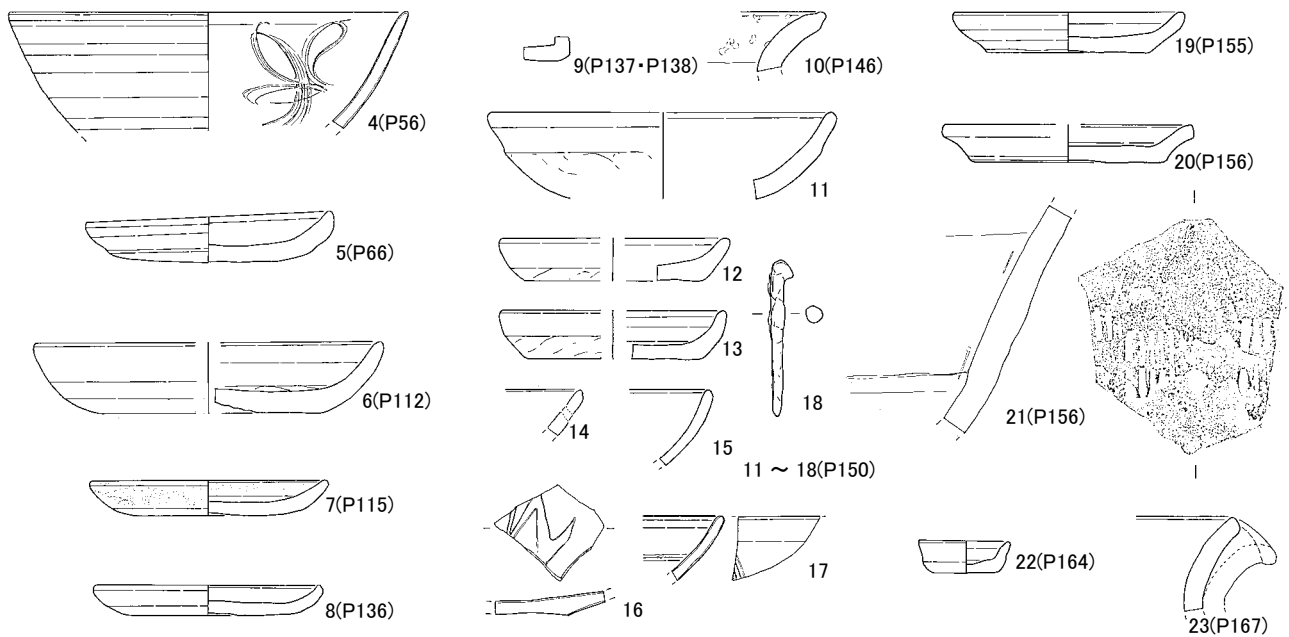


図 24 土 10・P.65、同出土遺物、I c 面ピット出土遺物

5)・土師器皿 T 種小型 (6) 特記事項：P.10 のみ建物 6 との切合い関係が逆転している。これは検出ミスか同様の位置に新しくピットが掘り込まれたかのいずれかであろう。上層で井戸状の土坑等大型の遺構が検出された地点では、ピットが確認できず。図化した土師器皿は 12 世紀末～13 世紀初頭のもの。  
建物 6 (図 23)

位置：X - 75 196.87 ~ - 75 203.36 Y - 25 288.76 ~ - 25 296.31 規模：東西 3 間，6.00 m × 南北 2 間，4.00 m 主軸方位：N - 34.5° - E 重複関係：土坑 10・P.66・67・68・131・161・163 他ピット 2 穴を切る、溝 2・建物 6・土坑 4・P.134 他ピット 2 穴に切られる 出土遺物：(P.5) 土師器皿 R 種小型 (1)・(P.6)

常滑甕 (2)・(P.7) 白色系土師器皿 T 種大型 (3)・竜泉窯青磁画花文碗 (4) 特記事項：前述したように P.9 のみ建物 5 との切合い関係が逆転している。これは検出ミスか同様の位置に新しくピットが掘り込まれたかのいずれかであろう。上層で井戸状の土坑等大型の遺構が検出された地点では、ピットが確認できず。図化した土師器皿は 12 世紀末～13 世紀初頭のもの。

#### 柱穴列 2 (図 24)

位置：X - 75 199.36 ~ - 75 201.97 Y - 25 290.79 ~ - 25 294.67 規模：東西 2 間 (柱間距離 2.10 m)  
主軸方位：N - 57° - W 重複関係：土坑 4・P.158 を切る 出土遺物：図化可能遺物なし 特記事項：  
南東西方向・北方向ともに関連するピットは確認できなかったが、3 穴が並んだので提示した。

#### 土坑 10 (図 24)

位置：X - 75 202.17 ~ - 75 203.71 Y - 25 291.78 ~ - 25 293.39 充填土：黒灰色粘質土・暗茶灰色粘質土 平面形：楕円形 断面形：深皿形 規模：長径 1.53 m × 短径 (0.79 m) × 深さ 0.37 m 主軸方位：  
N-59.5° -W 重複関係：ピット 2 穴を切る、P.65 に切られる 出土遺物：土師器皿 R 種小型 (1) 特記事項：  
土師器皿は 13 世紀初頭までのもの。

#### 土坑 10・P.65 出土遺物 (図 24)

渥美甕 (2)・渥美・湖西片口鉢 (3) 特記事項：3 の渥美・湖西鉢は安井編年 2 b 期のもの。

#### I c 面ピット出土遺物 (図 24)

出土遺物：(P.56) 竜泉窯青磁画花文碗 (4)・(P.66) 土師器皿 T 種小型 (5)・(P.112) 土師器皿 R 種大型 (6)・  
(P.115) 土師器皿 T 種小型 (7)・(P.136) 土師器皿 T 種小型 (8)・(P.137・138) 土師器皿 T 種小型 (9)・(P.140)  
常滑甕 (10)・(P.150) 土師器皿 T 種大型 (11)・土師器皿 R 種小型 (12・13)・穿孔土師器皿 T 種大型  
(14)・白色系土師器皿 T 種大型 (15)・同安窯系青磁皿 (16)・同安窯系青磁碗 (17)・鉄釘 (18)・(P.155)  
土師器皿 R 種小型 (19)・(P.156) 土師器皿 T 種小型 (20)・常滑甕 (21)・(P.164) 瀬戸入子か (22)・  
(P.167) 瀬戸片口小瓶 (23) 特記事項：土師器皿は 12 のみが 13 世紀前半のもので、他は 12 世紀末から  
13 世紀初頭のもの。

## 4. II 面

### 面の概要 (図 25)

検出高：8.94 m ~ 9.13 m 面構成土：暗灰色粘質土 検出遺構：溝状遺構 1 条・竪穴 1 基・土坑 2 基・  
性格不明遺構 1 特記事項：黄茶灰色弱粘質土層である 1 層上面で遺構検出を行ったが、土層断面の検  
討から標高 9.13 m ~ 9.35 m にあたる暗灰色粘質土の 15 層上面が実際の遺構面である可能性が高い。

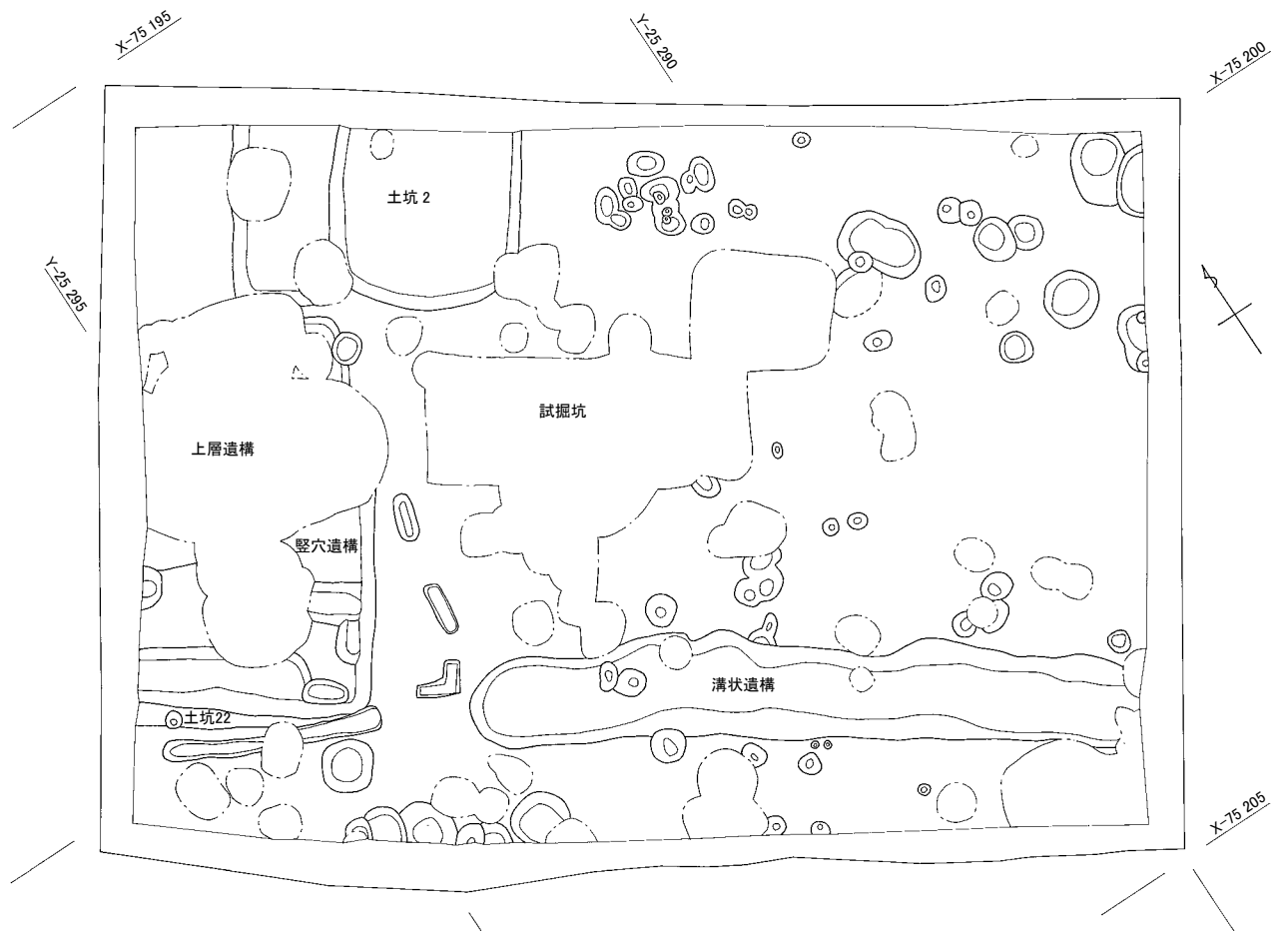
### 溝状遺構 (図 25)

位置：X - 75 200.68 ~ - 75 203.95 Y - 25 289.57 ~ - 25 296.16 充填土：暗灰色粘質土 断面形：  
逆台形 規模：最大幅 0.82 m × 長さ (5.34 m) × 深さ 0.14 m 主軸方位：N-57° -W 特記事項：黄茶  
灰色弱粘質土層である 1 層上面で検出したため非常に浅くなっているが、土層断面の検討結果、暗灰色  
粘質土の 14 層上面から掘り込まれているため、本来の深さとは異なる。

### 竪穴遺構 (図 26)

位置：X - 75 197.54 ~ - 75 202.38 Y - 25 293.31 ~ - 25 296.27 充填土：暗灰色粘質土・黄茶色粘質土・  
明灰色粘質土・黄灰色弱砂質土 平面形：隅丸方形 断面形：逆台形 規模：長軸 3.17 m × 短軸 (1.84 m)  
× 深さ 0.51 m 主軸方位：N-33.5° -E 特記事項：黄茶灰色弱粘質土層である 1 層上面で検出したため  
非常に浅くなっているが、土層断面の検討結果、暗灰色粘質土の 14 層上面から掘り込まれているため、





1. 暗灰色粘質土 炭化物・黒色粘土塊含む、微量の鉄分含む。軟質で粘性強い
2. 暗灰色粘質土 1の土に3の粘土少量混入。鉄分含む
3. 茶灰色弱粘質土 鉄分・1の土が若干混入。
25. 暗灰色粘質土 炭化物・黄灰色粘土粒含む
26. 暗灰色粘質土 26より黄灰色粘土多く含む

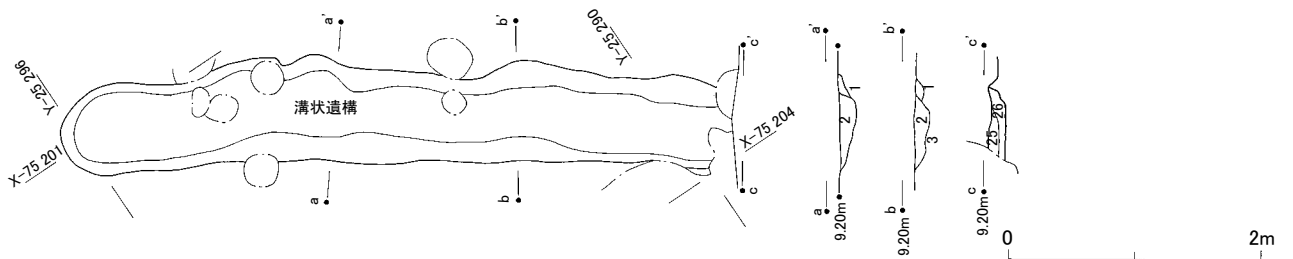


図 25 II面遺構全図、溝状遺構

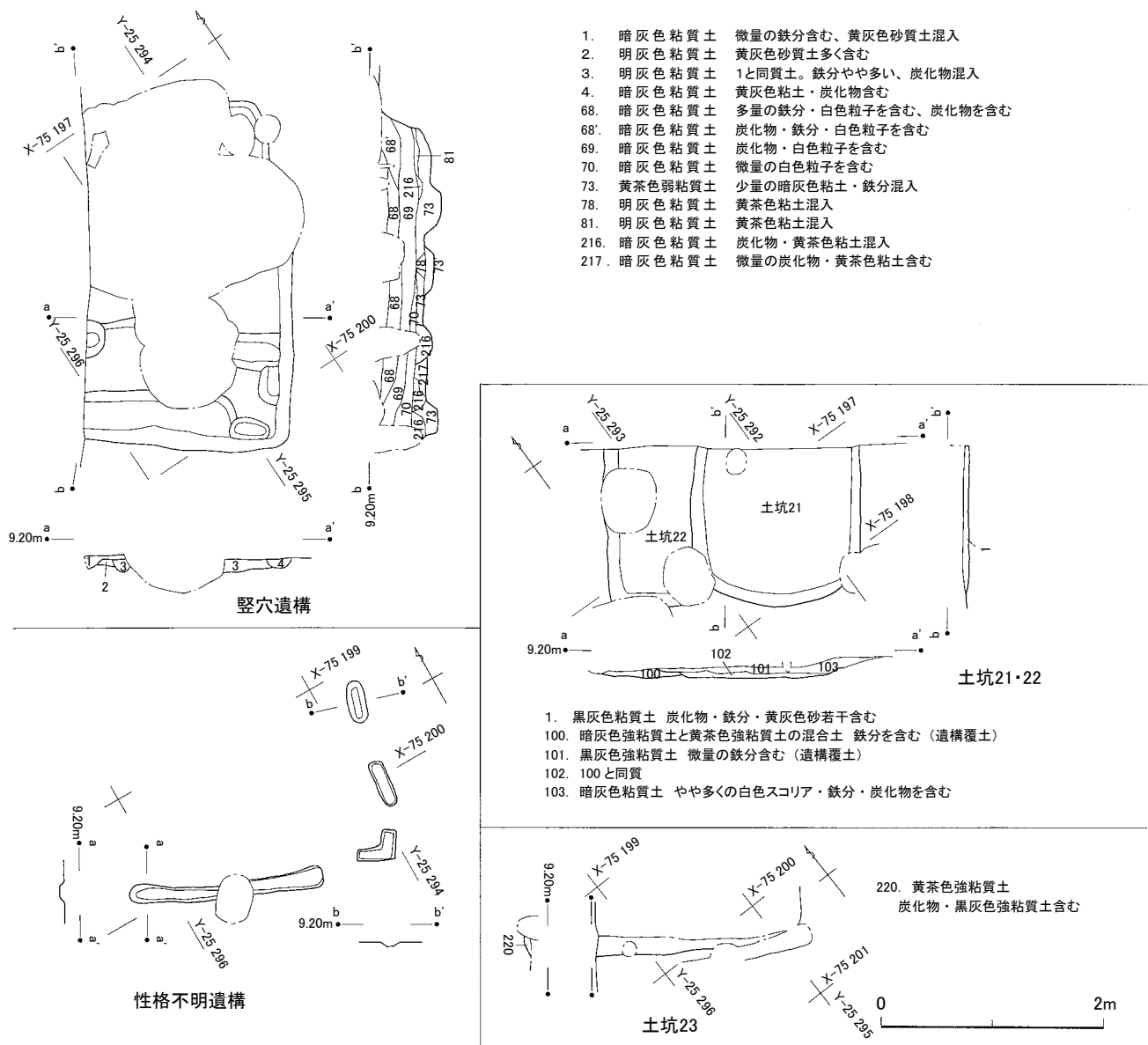


図 26 竪穴遺構・性格不明遺構・土坑 21・22・23

本来の深さとは異なる。

性格不明遺構 (図 26)

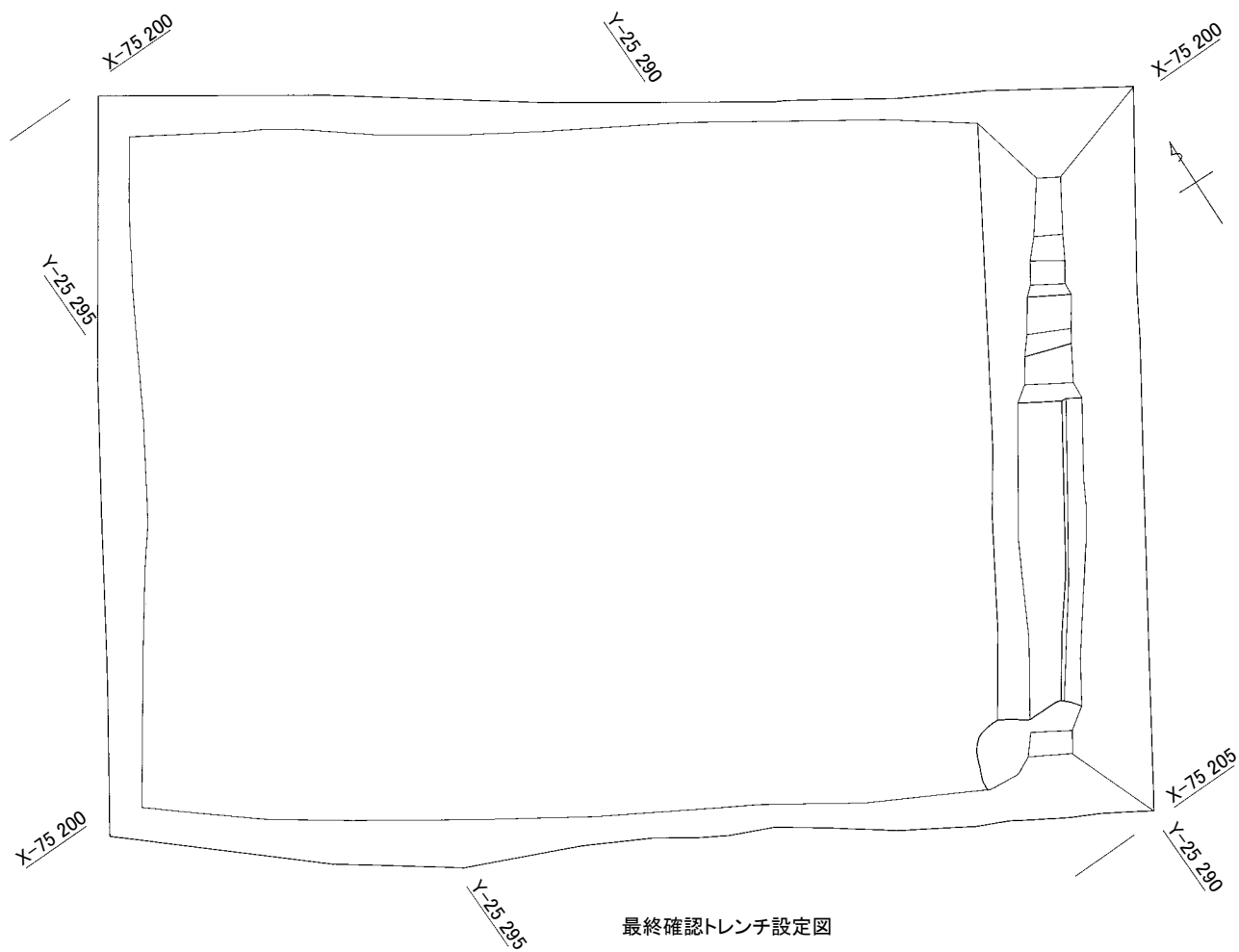
位置：X - 75 199.12 ~ - 75 200.71 Y - 25 293.58 ~ - 25 296.35 充填土：暗灰色粘質土 平面形：L字型か 断面形：逆台形 規模：長軸 (2.44 m) × 短軸 (1.84 m) × 深さ 0.05 m 主軸方位：N-67°-W ) 特記事項：黄茶灰色弱粘質土層である 1 層上面で検出したため非常に浅くなっており、全容は不明。このため性格等の判断は出来ないが、規則的に並んだため提示した。

土坑 21 (図 26)

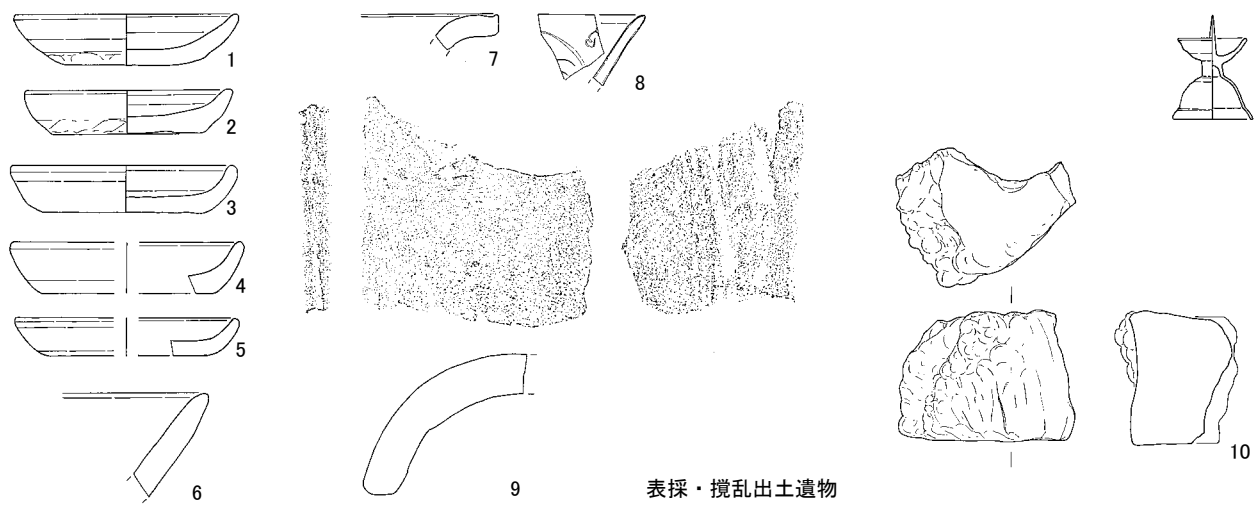
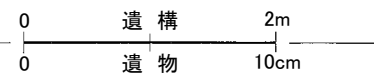
位置：X - 75 196.41 ~ - 75 198.21 Y - 25 291.22 ~ - 25 293.05 充填土：黒灰色粘質土・黒灰色強粘質土 平面形：隅丸方形か 断面形：皿形 規模：最大幅 1.53 m × 長さ (1.43 m) × 深さ 0.06 m 主軸方位：N-34°-E 特記事項：他の遺構と違い、検出面である黄茶灰色弱粘質土層から掘り込まれている。水中での堆積の際に、窪みに見える堆積が形成された可能性もある。

土坑 22 (図 26)

位置：X - 75 196.95 ~ - 75 197.48 Y - 25 292.52 ~ - 25 293.86 充填土：暗灰色強粘質土と黄茶色強粘質土の混合土 平面形：隅丸方形か 断面形：皿形 規模：最大幅 (0.81 m) × 長さ (1.45 m) ×



最終確認トレンチ設定図



表採・攪乱出土遺物

図 27 最終確認トレンチ設定図、表採・攪乱坑出土遺物

深さ 0.08 m 主軸方位：N-35.5° -E 特記事項：他の遺構と違い、検出面である黄茶灰色弱粘質土層から掘り込まれている。水中での堆積の際に窪みが形成された可能性もある。

#### 土坑 23 (図 26)

位置：X - 75 199.36 ~ - 75 200.28 Y - 25 294.89 ~ - 25 296.40 充填土：黄茶色粘土に炭化物・黒灰色粘土混入 平面形：形状不明 断面形：皿形か 規模：最大幅 0.19 m × 長さ (1.71 m) × 深さ 0.06 m 主軸方位：N-55° -W 特記事項：上層の 66・67 層と同一の遺構の可能性もあるが、別遺構として提示。

### 4. 最終確認トレンチ

#### 概要 (図 4・27)

標高 9.10 m ほどのⅡ面検出面から 1 区東壁際に幅 70cm ほどで確認トレンチを開け、標高 7.40 m (深さ 1.70 m) ほどまで掘り下げた。1 層より下層は遺物の出土が全くなく、土層堆積も水平堆積であるため、自然堆積とみて問題ないであろう。

### 5. 表採・攪乱坑出土遺物 (図 27)

土師器皿 T 種小型 (1)・土師器皿 R 種小型 (2～5)・渥美・湖西片口鉢 (6)・常滑甕 (7)・竜泉窯青磁画花文碗 (8)・丸瓦 (9)・材質不明鋳物 (10)・銅製品ロウソク立て 特記事項：10 の鋳物は材質・製品ともに不明である。攪乱坑からの出土であるため、近現代の所産である可能性も充分にある。11 のロウソク立ては台座と受皿をネジ式で結合しているため、近現代の製品。

(沖元)

表1 遺物観察表(1)

挿図番号	出土遺構	種別	備考
図5-1	I a面	土師器Ⅲ T種小型	口径(7.8)cm 底径(8.0)cm 器高1.1cm 手づくね後、口縁部ナデ 胎土は橙色で黒色光沢粒子・赤色粒子・海綿骨芯を含む
2	I a面	土師器Ⅲ T種小型	口径(7.8)cm 底径(8.0)cm 器高1.1cm 手づくね後、口縁部ナデ 胎土は橙色で黒色光沢粒子・黒色粒子・海綿骨芯を含む
3	I a面	土師器Ⅲ T種小型	口径(8.1)cm 底径(5.8)cm 器高1.0cm 手づくね後、内底部・口縁部ナデ 胎土は淡橙色で黒色光沢粒子・赤色粒子を含む
4	I a面	土師器Ⅲ T種小型	口径(9.2)cm 底径(6.8)cm 器高1.4cm 手づくね後、内底部・口縁部ナデ 胎土は黄橙色で赤色粒子・海綿骨芯を含む
5	I a面	土師器Ⅲ T種小型	口径(9.0)cm 底径(5.9)cm 器高1.0cm 手づくね後、内底部・口縁部ナデ 胎土は黄橙色で赤色粒子・赤色礫片・泥岩粒・海綿骨芯を含む
6	I a面	土師器Ⅲ T種小型	口径(9.2)cm 底径(5.2)cm 器高2.2cm 手づくね後、内底部・口縁部ナデ 胎土は褐橙色で黒色光沢粒子・白色粒子・赤色粒子を含む 口縁部外側に煤付着
7	I a面	土師器Ⅲ T種小型	口径(9.6)cm 底径(6.8)cm 器高1.9cm 手づくね後、口縁部ナデ 胎土は橙色で黒色光沢粒子・赤色粒子・海綿骨芯を含む
8	I a面	土師器Ⅲ T種小型	口径(7.3)cm 底径(5.3)cm 器高1.5cm 手づくね後、内底部に渦状ナデ・口縁部ナデ 胎土は黒色光沢粒子・赤色粒子・泥岩粒・海綿骨芯を含む
9	I a面	土師器Ⅲ T種小型	口径(9.8)cm 底径(7.2)cm 器高2.1cm 手づくね後、内底部・口縁部ナデ 枝状圧痕 胎土は淡橙色で雲母・金雲母・黒色光沢粒子・赤色粒子・海綿骨芯を含む
10	I a面	土師器Ⅲ T種小型	口径(9.8)cm 底径(6.5)cm 器高2.1cm 手づくね後、内底部・口縁部ナデ 胎土は黒色光沢粒子・海綿骨芯を含む 二次焼成を受けた為か黒褐色に変色
11	I a面	土師器Ⅲ T種小型	口径(9.2)cm 底径(7.9)cm 器高2.1cm 手づくね後、内底部・口縁部ナデ 胎土は橙色で黒色光沢粒子・黒色粒子・海綿骨芯を含む
12	I a面	土師器Ⅲ T種小型	口径(9.7)cm 器高2.2cm 手づくね後、口縁部・内底部ナデ 器表は暗褐色 胎土は黄橙色で金雲母・黒色光沢粒子・黒色粒子・白色粒子・海綿骨芯を含む
13	I a面	土師器Ⅲ R種小型	口径(9.8)cm 底径(8.0)cm 器高1.8cm 回転ロクロ 外底部回転糸切り 板状圧痕 外底部外周・内底部ナデ 胎土は黄橙色で黒色光沢粒子・赤色粒子・赤色礫片・海綿骨芯を含む
14	I a面	土師器Ⅲ R種小型	口径(7.5)cm 底径(5.9)cm 器高1.8cm 回転ロクロ 外底部回転糸切り 板状圧痕 内底部ナデ 胎土は黄橙色で雲母・黒色光沢粒子・黒色粒子・赤色粒子・海綿骨針を含む
15	I a面	土師器Ⅲ R種小型	口径(8.9)cm 底径(7.5)cm 器高1.6cm 回転ロクロ 外底部回転糸切り 板状圧痕 胎土は赤褐色(一部黄褐色)で黒色光沢粒子・黒色粒子・海綿骨芯を含む
16	I a面	土師器Ⅲ R種小型	口径(9.6)cm 底径(7.3)cm 器高1.8cm 回転ロクロ 外底部回転糸切り 強い板状圧痕 胎土は淡橙色で黒色光沢粒子・黒色粒子・泥岩粒・海綿骨芯を含む
17	I a面	土師器Ⅲ R種小型	口径(9.8)cm 底径(7.5)cm 器高2.1cm 回転ロクロ 外底部回転糸切り 板状圧痕 内底部ナデ 胎土は淡橙色で黒色光沢粒子・赤色粒子・海綿骨芯を含む
18	I a面	土師器Ⅲ R種小型	口径(9.4)cm 底径(6.9)cm 器高1.8cm 回転ロクロ 外底部回転糸切り 板状圧痕 内底部ナデ 胎土は橙色で黒色光沢粒子・赤色粒子・礫片・海綿骨芯を含む
19	I a面	土師器Ⅲ R種小型	口径(8.7)cm 底径(6.0)cm 器高1.3cm 回転ロクロ 外底部回転糸切り 板状圧痕 内底部ナデ 胎土は淡橙色で黒色光沢粒子・黒色粒子・赤色粒子を含む
20	I a面	土師器Ⅲ R種小型	口径(9.2)cm 底径(7.0)cm 器高1.5cm 回転ロクロ 外底部回転糸切り 板状圧痕 内底部ナデ 胎土は橙色で黒色光沢粒子・黒色粒子・赤色粒子を含む
21	I a面	土師器Ⅲ R種大型	口径(12.0)cm 底径(8.0)cm 器高3.1cm 回転ロクロ 外底部回転糸切り 板状圧痕 内底部ナデ 胎土は淡橙色で黒色光沢粒子・赤色粒子・泥岩粒・礫片・海綿骨芯を含む
22	I a面	土師器Ⅲ R種大型	口径(13.2)cm 底径(8.4)cm 器高3.6cm 回転ロクロ 外底部回転糸切り 板状圧痕 内底部ナデ 胎土は橙色で雲母・赤色粒子・礫片・海綿骨芯を含む
23	I a面	伊勢系 鍔鍋	器表は白橙色 胎土は暗灰色で金雲母・白色粒子・赤色粒子を含む
24	I a面	尾張山茶碗系 片口鉢	底部片 輪積み成形の後、ロクロ整形 胎土は灰色で長石・石英・黒色粒子を含む堅緻なもの 内底部：使用により摩耗
25	I a面	瓦器質 火鉢	底部片 胎土は灰白色 白色粒子・黒色粒子を含む 器表は縦方向と横方向の磨きと黒色処理 内面はナデ調整
26	I a面	常滑 片口鉢 I 類	口縁部片 輪積み成形の後、ロクロ整形 胎土は黄灰色で長石・白色粒子・礫片を含む
27	I a面	常滑 甕	底部片 輪積み成形 胎土は灰褐色で長石・礫片を含む 器表内面に黄灰白色の降灰
28	I a面	渥美 甕	肩部片 輪積み成形 胎土は暗褐色で石英・白色粒子を含む 内面に指頭痕とヨコナデあり 器表に工具による叩き目あり
29	I a面	瀬戸 卸し皿	口縁部小片 器表に灰白色の灰釉ハケ塗り 胎土は灰色 前Ⅱ期か
30	I a面	青白磁 小皿	底部小片 ロクロ成形 素地は黒色粒子・白色粒子を含む 釉薬は青白色半透明 内底面に櫛描き文あり
31	I a面	同安窯系青磁 皿	口縁部片 ロクロ成形 素地は青灰色 黒色粒子を含む 釉薬は灰緑色半透明
32	I a面	竜泉窯青磁 画花文碗	口縁部片 ロクロ成形 素地は灰色 釉薬は灰緑色不透明
33	I a面	竜泉窯青磁 画花文碗	口縁部片 ロクロ成形 素地は灰色で黒色粒子を含む 釉薬は灰緑色半透明

表2 遺物観察表(2)

挿図番号	出土遺構	種別	備考
図6-34	I a面	竜泉窯青磁鉢か	底部小片 ロクロ成形 素地は灰白色で黒色粒子・白色粒子を含む 釉薬は緑灰色半透明 高台畳み付き釉薬ケズリとりにより露胎
35	I a面	竜泉窯青磁折縁鉢	口縁部片 ロクロ成形 素地は灰白色 黒色粒子・白色粒子を含む 釉薬は緑灰色不透明、釉層厚い
36	I a面	軒丸瓦	縁部小片 胎土は灰褐色で黒色粒子・白色粒子・礫を含む 丸瓦との接合部分で剥離 永福寺Ⅲ期併行
37	I a面	丸瓦	玉縁部片 外面は淡橙白色 胎土は白色で白色粒子・赤色粒子・礫多く含む 永福寺Ⅲ期
38	I a面	平瓦	胎土は灰色 白色粒子・礫多く含む 凸面は細目斜格子、凹面は離れ砂 側面へラ削りの後ナデ 永福寺Ⅲ期併行
39	I a面	平瓦	胎土は灰色 黒色粒子・白色粒子・1cm大の礫含む 凸面凹面とも離れ砂付着 側面へラ削り後ナデ 永福寺Ⅲ期併行
40	I a面	砥石中砥	残存長(6.0)cm 残存幅(3.5)cm 厚さ2.3cm 灰緑色 上野砥 四面使用、内一面に溝状の研痕あり
41	I a面	滑石鍋転用品	器表は黒灰色 加工面は灰白色 両面に研磨痕
42	I a面	滑石鍋転用品	残存長(9.5)cm 残存幅(1.6)cm 厚さ1.6cm
43	I a面	鉄釘	残存長(6.1)cm 残存幅(0.6)cm 厚さ0.4cm 重量4.7g
44	I a面	鉄釘	残存長(7.3)cm 残存幅(0.6)cm 厚さ0.6cm 重量5.3g
45	I a面	鉄釘	残存長(6.0)cm 残存幅(0.4)cm 厚さ0.4cm 重量3.4g
46	I a面	鉄釘	残存長(6.4)cm 残存幅(0.6)cm 厚さ0.6cm 重量2.8g
47	I a面	鉄釘	残存長(6.4)cm 残存幅(0.4)cm 厚さ0.4cm 重さ4.5g
48	I a面	開元通寶	唐621年 隸書 背文字「下月」
49	I a面	用途不明加工鹿角	残存長(4.5)cm 残存幅(3.7)cm 厚さ2.2cm 鹿角の付根部分を使用 中央部と上部に穿孔
50	I a面	用途不明加工骨	残存長(10.8)cm 残存幅(1.1)cm 厚さ1.1cm
51	土師器皿小片集中部	土師器皿R種大型	口径(11.7)cm 底径(7.8)cm 器高3.5cm 回転ロクロ 外底部回転系切り 板状圧痕 内底部ナデ 胎土は橙色で黒色光沢粒子・白色粒子・赤色粒子・海綿骨芯を含む
図7-1	I a面建物1・P2	竜泉窯青磁榭描蓮弁文碗	口縁部小片 素地は白色で黒色粒子・白色粒子を含む 釉薬は灰緑色透明 内・外面に文様あり 内面画花文・外面榭描き蓮弁文
2	I a面建物1・P2	渥美・湖西片口鉢	口径(31.6)cm 口縁部片 輪積み成形後、ロクロ整形 残存内面下部に剥離するほどの使用痕
図8-1	I a面建物2・P1	土師器皿R種小型	口径(9.3)cm 底径(7.0)cm 器高1.6cm 回転ロクロ 外底部回転系切り 板状圧痕 内底部ナデ 胎土は黄橙色で黒色光沢粒子(多)・海綿骨芯を含む
2	I a面建物2・P1	土師器皿R種小型	口径(8.5)cm 底径(6.3)cm 器高1.5cm 回転ロクロ 外底部回転系切り 板状圧痕 内底部ナデ 胎土は黄橙色で黒色光沢粒子(多)・赤色粒子を含む
3	I a面建物2・P14	竜泉窯青磁鎚蓮弁文碗	口縁部片 ロクロ成形 素地は白灰色で黒色粒子を含む 釉薬は青緑灰色不透明
4	I a面建物2・P4	鉄製品かすがい	幅3.8cm 高1.9 径0.4~0.3 重さ2.1g
図9-1	I a面建物3・P2	東遠型山茶碗	口縁部片 輪積み成形後、ロクロ整形 胎土は灰色で黒色粒子(微量)を含む
2	I a面建物3・P2	土師器皿R種小型	口径(8.6)cm 底径(7.4)cm 器高2.0cm 回転ロクロ 外底部回転系切り 板状圧痕 内底部ナデ 胎土は黄橙色で黒色光沢粒子・赤色粒子・海綿骨芯を含む
3	I a面建物3・P2	土師器皿R種大型	口径(14.4)cm 底径(9.6)cm 器高3.5cm 回転ロクロ 外底部回転系切り 板状圧痕 内底部ナデ 胎土は橙色で黒色光沢粒子・黒色粒子・赤色粒子・海綿骨芯を含む
4	I a面建物4・P3	土師器皿T種小型	口径(9.8)cm 底径(6.5)cm 器高1.9cm 手づくね後、口縁部ナデ 胎土は黄橙色で黒色光沢粒子・黒色粒子・海綿骨芯を僅かに含む
図10-1	I a面落ち込み1	土師器皿R種小型	口径(8.9)cm 底径(7.6)cm 器高2.0cm 回転ロクロ 外底部回転系切り 板状圧痕 内底部ナデ 胎土は橙色で黒色光沢粒子・白色粒子・赤色粒子・泥岩粒・海綿骨芯を含む 白色粒子以外は微量
2	I a面落ち込み1	土師器皿R種小型	口径(7.6)cm 底径(5.2)cm 器高1.8cm 回転ロクロ 外底部回転系切り 板状圧痕 内底部ナデ 胎土は淡橙色で黒色光沢粒子・黒色粒子・赤色粒子・海綿骨芯を含む
3	I a面落ち込み1	土師器皿R種小型	口径(7.7)cm 底径(5.3)cm 器高1.5cm 回転ロクロ 外底部回転系切り 板状圧痕 内底部ナデ 胎土は橙色で黒色光沢粒子・赤色粒子・海綿骨芯(微量)を含む
4	I a面落ち込み1	土師器皿R種小型	口径(7.8)cm 底径(5.2)cm 器高1.9cm 回転ロクロ 外底部回転系切り 板状圧痕 内底部ナデ 胎土は橙色で白色粒子・赤色粒子を含む
5	I a面落ち込み1	土師器皿R種小型	口径(9.8)cm 底径(8.2)cm 器高1.8cm 回転ロクロ 外底部回転系切り 板状圧痕 内底部ナデ 胎土は黄橙色で黒色光沢粒子・黒色粒子・赤色粒子を含む
6	I a面落ち込み1	土師器皿T種大型	口径(13.5)cm 器高3.5cm 手づくね後、口縁部ナデ 胎土は黄橙色で黒色光沢粒子・黒色粒子・海綿骨芯を含む
7	I a面落ち込み1	土師器皿T種大型	口径(13.8)cm 器高3.5cm 手づくね後、口縁部ナデ 内底部ナデ 胎土は橙色で雲母・黒色光沢粒子・泥岩粒・海綿骨芯を含む
8	I a面落ち込み1	土師器皿R種中型	口径(11.1)cm 底径(6.7)cm 器高2.9cm 回転ロクロ 外底部回転系切り 板状圧痕 内底部ナデ 胎土は橙色で金雲母・黒色光沢粒子・赤色粒子を含む

表3 遺物観察表(3)

挿図番号	出土遺構	種別	備考
図10-9	I a面 落ち込み1	土師器皿 R種中型	口径(12.0)cm 底径(6.6)cm 器高3.0cm 回転ロクロ 外底部回転糸切り 板状圧痕 内底部ナデ 黒色光沢粒子・赤色粒子・泥岩粒・海綿骨芯を含む 口縁部煤付着
10	I a面 落ち込み1	土師器皿 R種大型	口径(13.0)cm 底径(8.4)cm 器高3.2cm 回転ロクロ 外底部回転糸切り 板状圧痕 内底部ナデ 黒色光沢粒子・赤色粒子・礫片を含む
11	I a面 落ち込み1	土師器皿 R種中型	口径(11.8)cm 底径(6.5)cm 器高3.2cm 回転ロクロ 外底部回転糸切り 胎土は橙色で金雲母・黒色粒子・赤色粒子を含む
12	I a面 落ち込み1	土師器皿 R種大型	口径(13.8)cm 底径(8.9)cm 器高3.5cm 回転ロクロ 外底部回転糸切り 板状圧痕 内底部ナデ 胎土は黄橙色で黒色光沢粒子・黒色粒子・赤色粒子・泥岩粒を含む
13	I a面 落ち込み1	渥美・湖西 片口鉢	底部片 輪積み成形の後、ロクロ整形 胎土は灰色で白色粒子・小石粒・礫片を含む 残存内面上部:摩耗 内面下部:著しく剥離 付高台(台形) 外面下部:回転ヘラケズリ 2b期
14	I a面 落ち込み1	渥美・湖西 片口鉢	底部片 輪積み成形の後、ロクロ整形 胎土は灰色で黒色粒子・白色粒子を含む 下部:回転ヘラケズリ確認出来ず 2b期
15	I a面 落ち込み1	渥美・湖西 片口鉢	口縁部片 輪積み成形の後、ロクロ整形 胎土は暗灰色で白色粒子・小石粒を含む 2b期
16	I a面 落ち込み1	渥美・湖西 片口鉢	口縁部片 輪積み成形の後、ロクロ整形 胎土は暗灰色で白色粒子を含む 2b期
17	I a面 落ち込み1	渥美・湖西 片口鉢	口径(31.0)cm 口縁部片 輪積み成形の後、ロクロ整形 器表は灰黒色 胎土は暗灰色で黒色粒子・小石粒を含む 2b期
18	I a面 落ち込み1	渥美 甕	肩部片 輪積み成形 器表面一部に灰白色の降灰あり 胎土は灰色で赤色粒子・小石粒を含む 器表面に叩き目、内面に指頭痕あり
図10-19	I a面 落ち込み1	渥美 甕	肩部片 輪積み成形 胎土は灰褐色で混入物ほとんど無し 器表面に叩き目あり
20	I a面 落ち込み1	渥美 甕	胴部片 輪積み成形 胎土は灰褐色で白色粒子ごく微量・礫片を含む 器表面に叩き目あり
21	I a面 落ち込み1	常滑 甕	肩部片 輪積み成形 胎土は灰色で黒色粒子・白色粒子・礫片を含む 器表面に暗灰色の自然釉、叩き目あり
22	I a面 落ち込み1	常滑 甕	胴部片 輪積み成形 胎土は灰茶色で黒色粒子・白色粒子・礫片を含む 器表面は茶色でスタンプあり 裏面は黄灰白色の降灰
23	I a面 落ち込み1	青白磁 合子・身	口径(4.5)cm 底径(3.9)cm 器高1.9cm 型入れ成形 胎土は灰白色で黒色粒子・白色粒子を含む 釉薬は青白色透明 内外面施釉 胴部下部から底部にかけては釉なし
24	I a面 落ち込み1	鉄釘	残存長(5.3)cm 幅(0.6)cm 厚さ0.6cm 重量4.1g
図11-1	I a面 土坑1	土師器皿 T種小型	口径(8.0)cm 底径(7.8)cm 器高1.1cm 手づくね後、口縁部ナデ 胎土は淡橙色で黒色光沢粒子・黒色粒子・赤色粒子を含む
2	I a面 土坑1	伊勢系 鍔鍋	鍔部片 器表面は白橙色 胎土は暗灰色で黒色粒子・赤色粒子を含む
3	I a面 土坑1	軒丸瓦	残存長(7.7)cm 残存幅(7.2)cm 厚さ2.7cm 胎土は淡灰橙色で赤色粒子・白色粒子・礫片 多く含む 凸面ナデ、凹面布目痕・ナデ 側面ヘラケズリ後、ナデ 永福寺Ⅲ期か
4	I a面 土坑1	平瓦	残存長(5.4)cm 残存幅(5.6)cm 厚さ1.4cm 胎土は灰色で黒色粒子・赤色粒子を含む 凹凸面ともに灰茶色 離れ砂 永福寺Ⅲ期併行
5	I a面 土坑1	鉄釘	残存長(7.6)cm 幅(0.7)cm 厚さ0.7cm 重量4.7g
図12-1	I a面 土坑2	土師器皿 R種小型	口径(8.6)cm 底径(6.6)cm 器高1.5cm 回転ロクロ 外底部回転糸切り 板状圧痕 内底部ナデ 胎土は橙色で黒色光沢粒子・黒色粒子・赤色粒子・海綿骨芯を含む
2	I a面 土坑2	土師器皿 R種小型	口径(8.8)cm 底径(6.6)cm 器高2.0cm 回転ロクロ 外底部回転糸切り 板状圧痕 胎土は橙色で黒色光沢粒子・黒色粒子・赤色粒子・海綿骨芯を含む
3	I a面 土坑2	土師器皿 T種大型	口径(12.0)cm 器高2.6cm 手づくね後、口縁部・底ナデ 胎土は黄橙色で雲母・黒色光沢粒子・黒色粒子・赤色粒子・海綿骨芯を含む
4	I a面 土坑3	土師器皿 T種小型	口径(8.3)cm 器高1.0cm 手づくね後、口縁部・内底部ナデ 胎土は淡橙色で黒色光沢粒子・黒色粒子・赤色粒子・海綿骨芯を含む
5	I a面 土坑3	土師器皿 T種小型	口径(10.0)cm 器高1.6cm 手づくね後、口縁部・内底部ナデ 胎土は橙色で黒色粒子・白色粒子・赤色粒子・泥岩粒・海綿骨芯を含む
6	I a面 土坑3	土師器皿 R種小型	口径(9.4)cm 底径(7.2)cm 器高1.6cm 回転ロクロ 外底部回転糸切り 板状圧痕 内底部ナデ 胎土は黄橙色で黒色光沢粒子・黒色粒子を非常に多く含む
7	I a面 土坑3	土師器皿 R種大型	口径(13.4)cm 底径(8.6)cm 器高3.0cm 回転ロクロ 外底部回転糸切り 胎土は橙色で黒色光沢粒子・黒色粒子・赤色粒子を含む
8	I a面 土坑7・8	土師器皿 R種小型	口径(9.1)cm 底径(7.6)cm 器高1.6cm 回転ロクロ 外底部回転糸切り 板状圧痕 内底部ナデ 胎土は橙色で黒色光沢粒子・黒色粒子・赤色粒子を含む
9	I a面 土坑7・8	土師器皿 R種小型	口径(9.2)cm 底径(7.8)cm 器高1.4cm 回転ロクロ 外底部回転糸切り 板状圧痕 胎土は灰褐色で黒色光沢粒子・黒色粒子を含む
10	I a面 土坑8	土師器皿 R種大型	底径(9.2)cm 回転ロクロ 外底部回転糸切り 板状圧痕 内底部ナデ 胎土は黄橙色で黒色光沢粒子・黒色粒子・赤色粒子・泥岩粒・海綿骨芯を含む
11	I a面 土坑9	土師器皿 T種小型	口径(9.3)cm 器高2.7cm 手づくね後、口縁部ナデ 胎土は橙色で黒色光沢粒子・黒色粒子・赤色粒子を含む
12	I a面 土坑9	土師器皿 R種小型	口径(7.7)cm 底径(5.8)cm 器高1.6cm 回転ロクロ 外底部回転糸切り 板状圧痕 胎土は橙色で黒色光沢粒子・黒色粒子・赤色粒子・海綿骨芯を含む

表4 遺物観察表(4)

挿図番号	出土遺構	種別	備考
図12-13	I a面 土坑9	竜泉窯青磁 碗	底径5.8cm ロクロ成形 素地は白灰色で黒色粒子を含む 釉薬は青緑灰色半透明
14	I a面 土坑9	用途不明 泥岩加工品	残存長(3.0)cm 残存幅(2.8)cm 厚さ2.3cm 底部中央に0.6cmの浅いくぼみあり 泥岩(土丹)を加工
15	I a面 土坑9	東遠型 山茶碗	口縁部片 輪積み成形後、ロクロ整形 胎土は灰色で黒色粒子を僅かに含む
16	I a面 土坑12	土師器皿 T種小型	口径(9.6)cm 器高1.9cm 手づくね後、口縁部・内底部ナデ 胎土は黄橙色で黒色光沢粒子・黒色粒子・赤色粒子・海綿骨芯を含む
17	I a面 土坑12	土師器皿 T種小型	口径(8.5)cm 器高1.6cm 手づくね後、口縁部・内底部ナデ 胎土は橙色で黒色粒子・赤色粒子を含む
18	I a面 土坑12	土師器皿 R種小型	口径(8.6)cm 底径(6.8)cm 器高1.5cm 回転ロクロ 外底部回転糸切り 板状圧痕 内底部ナデ 雲母・黒色粒子・赤色粒子を含む
19	I a面 土坑12	土師器皿 R種小型	口径(8.5)cm 底径(6.0)cm 器高1.8cm 回転ロクロ 外底部回転糸切り 板状圧痕 内底部ナデ 胎土は橙色で金雲母・黒色粒子・赤色粒子・泥岩粒を覆含む
20	I a面 土坑12	土師器皿 R種大型	口径(12.1)cm 底径(7.0)cm 器高3.1cm 回転ロクロ 外底部回転糸切り 胎土は黄橙色で黒色光沢粒子・黒色粒子・泥岩粒・海綿骨芯を含む
21	I a面 土坑12	土師器皿 R種大型	口径(13.6)cm 底径(9.2)cm 器高3.1cm 回転ロクロ 外底部回転糸切り 内底部ナデ 胎土は橙色で黒色粒子・赤色粒子・泥岩粒を含む
22	I a面 土坑12	竜泉窯青磁 碗	口縁部片 ロクロ成形 素地は灰色で黒色粒子を含む精良土 釉薬は青緑灰色で半透明、釉層薄い
23	I a面 土坑12	軒丸瓦	残存長(5.5)cm 残存幅(4.2)cm 厚さ2.6cm 胎土は淡橙色で黒色粒子・小石粒・礫片を含む 永福寺Ⅲ期併行
24	I a面 土坑12	軒平瓦	残存長(3.7)cm 残存幅(5.5)cm 厚さ2.5cm 胎土は灰褐色で白色粒子・礫片を含む 下向き剣頭文 永福寺Ⅲ期併行
25	I a面 土坑12	平瓦	残存長(4.2)cm 残存幅(3.5)cm 厚さ1.5cm 胎土は灰茶色で黒色光沢粒子・黒色粒子・白色粒子・小石粒を含む 凹凸面ともに離れ砂 側面ヘラケズリ後、ナデ 永福寺Ⅲ期併行
26	I a面 土坑12	平瓦	残存長(5.0)cm 残存幅(2.8)cm 厚さ1.5cm 胎土は橙色で黒色粒子・白色粒子・小石粒を含む 凸面縄目ナデ消し、凹面離れ砂 側面ヘラケズリ 永福寺Ⅲ期併行
図13-1	I a面 土坑13	土師器皿 T種大型	口縁部片 手づくね後、口縁部ナデ 胎土は淡橙色で雲母・黒色粒子・海綿骨芯を含む
2	I a面 P12	土師器皿 T種小型	口径(8.3)cm 器高1.4cm 手づくね後、口縁部ナデ 胎土は橙色で黒色光沢粒子・黒色粒子を含む
3	I a面 P12	土師器皿 R種小型	口径(8.7)cm 底径(6.0)cm 器高1.4cm 回転ロクロ 外底部回転糸切り 板状圧痕不明瞭 胎土は灰橙色で黒色光沢粒子・黒色粒子を含む
4	I a面 P12	土師器皿 T種大型	口径(13.0)cm 器高2.8cm 手づくね後、口縁部・内底部ナデ 胎土は灰黄色で雲母・黒色光沢粒子・黒色粒子・白色粒子を含む 二次焼成を受けている
5	I a面 P13・14	土製品 土錘	残存長(2.7)cm 最大径1.2cm 孔径0.4cm 胎土は橙色で赤色粒子・白色粒子を含む
6	I a面 P75	平瓦	残存長(32.0)cm 残存幅(23.0)cm 厚さ2.4cm 胎土は暗灰色で黒色粒子・小石粒・礫片を含む均質土 凸面は斜格子の叩き目と、文字・記号等が組み込んである 永福寺Ⅱ期 水殿瓦窯産
図14-1	I a面 P7	鉄釘	残存長(7.0)cm 残存幅(0.5)cm 厚さ0.4cm 重さ3.1g
2	I a面 P54	土師器皿 T種大型	口径(14.0)cm 器高2.5cm 手づくね後、口縁部ナデ 胎土は黄橙色で黒色光沢粒子・黒色粒子・泥岩粒を含む
3	I a面 P79	渥美・湖西 片口鉢	口縁部片 輪積み形成の後、ロクロ整形 器表は黒灰色 胎土は暗灰色で黒色粒子・小石粒・礫片を含む、緻密で混入物の少ない均質土
4	I a面 P91	平瓦	残存長(4.8)cm 残存幅(4.2)cm 厚さ1.5cm 胎土は白橙色で赤色粒子・白色粒子・礫片を多く含む 側面ヘラケズリ後、ナデ 永福寺Ⅲ期
5	I a面 P92	軒丸瓦	残存長(5.5)cm 残存幅(6.5)cm 厚さ2.3cm 胎土は灰褐色で白色粒子・小石粒・礫片を含む 三巴文 永福寺Ⅲ期併行
6	I a面 P105	常滑 片口鉢Ⅰ類	口縁部片、輪積み成形後、ロクロ整形 胎土は灰色で長石・黒色粒子を含む 器表にごく薄く自然釉がかかる
7	I a面 P105	鉄釘	残存長(6.1)cm 残存幅(0.5)cm 厚さ0.4cm 重さ4.2g
図15-1	I b面	土師器皿 T種小型	口径(9.6)cm 器高1.7cm 手づくね後、口縁部・内底部ナデ 胎土は黒色光沢粒子・黒色粒子を含む
2	I b面	土師器皿 T種小型	口径(8.9)cm 器高1.9cm 手づくね後、口縁部・内底部ナデ 器表は暗褐色 胎土は黄橙色で黒色光沢粒子・黒色粒子を含む 二次焼成を受け煤付着
3	I b面	土師器皿 R種小型	口径(7.2)cm 底径(5.0)cm 器高1.6cm 回転ロクロ 外底部回転糸切り 板状圧痕 内底部ナデ 胎土は橙色で金雲母・黒色粒子・赤色粒子・海綿骨芯を含む
4	I b面	土師器皿 R種大型	ゆがみ著しい 回転ロクロ 外底部回転糸切り 板状圧痕 器表は暗灰褐色 胎土は暗黄褐色で黒色粒子を含む 二次焼成を受けている
5	I b面	白色系土師器皿 R種大型	回転ロクロ 胎土は乳白色で黒色粒子を含む



表5 遺物観察表(5)

挿図番号	出土遺構	種別	備考
図15-6	I b面	フイゴ羽口	残存長(2.5)cm 残存幅(4.8)cm 厚さ1.5cm 胎土は灰橙色で赤色粒子・白色粒子・泥岩粒・礫片を含む
7	I b面	渥美甕	口縁部片 輪積み成形 器表は黒灰色 黄緑白色の降灰 胎土は灰色で小石粒・礫片を含む良土
8	I b面	渥美甕	胴部片 輪積み成形 胎土は暗灰色で白色粒子を含む均質土 器表に叩き目あり
9	I b面	軒平瓦	残存長(3.5)cm 残存幅(5.0)cm 厚さ1.5cm 胎土は灰橙色で赤色粒子・礫片を含む 下向き剣頭文 永福寺Ⅲ期併行
10	I b面	平瓦	残存長(7.7)cm 残存幅(5.5)cm 厚さ1.9cm 胎土は灰橙色で黒色粒子・白色粒子を含む 凸面に離れ砂、叩き目による溝状痕跡 凹面に布目痕 側面ヘラケズリ 狭端部ヘラケズリ 永福寺Ⅲ期併行
11	I b面	鉄製品蓋	直径5.2cm 高0.9cm 重さ10.4g
12	I b面	鉄釘	残存長(5.0)cm 残存幅(0.6)cm 厚さ0.6cm 重さ1.7g
図16-1	I b面溝1	砥石中砥	残存長(9.0)cm 残存幅(5.3)cm 厚さ2.5cm 天草産 3面使用
2	I b面溝1	平瓦	胎土は灰色で黒色粒子・赤色粒子・白色粒子・小石粒を多く含む 側面部ヘラケズリ、ナデ 永福寺Ⅲ期併行
3	I b面柱穴列1P1	土師器Ⅲ T種小型	口径(9.1)cm 器高1.9cm 手づくね後、口縁部・内底部ナデ 胎土は淡橙色で黒色光沢粒子・黒色粒子・海綿骨芯を僅かに含む
4	I b面柱穴列1P1	土師器Ⅲ R種大型	口径(10.9)cm 底径(7.0)cm 器高2.7cm 回転ロクロ 外底部回転糸切り 胎土は黄橙色で黒色光沢粒子・黒色粒子(多)・赤色粒子・海綿骨芯を含む
5	I b面柱穴列1P1	常滑片口鉢Ⅱ類	口縁部片 輪積み成形 口縁部ナデ 表記面は茶褐色、内面は黄灰色の降灰 胎土は暗灰色で黒色粒子・白色粒子・小石粒を含む
6	I b面柱穴列1P1	常滑甕	胴部片 器表は淡褐色～淡黄褐色 胎土は黄灰色で黒色粒子・白色粒子を含む 叩き目あり
7	I b面柱穴列1P1	元豊通宝	北宋 初鑄1078年 行書
8	I b面柱穴列1P2	鉄製品刀子	残存長(16.6)cm 残存幅(2.0)cm 最大厚(0.8)cm 重さ36.8g 中茎を納める木製の板部が不完全ではあるが残っている
9	I b面柱穴列1P4	竜泉窯青磁画花文碗	口縁部片 ロクロ成形 素地は灰色 釉薬は灰緑色透明、釉層薄い
図17-1	I b面土坑6	土師器Ⅲ T種小型	口径(10.2)cm 器高1.6cm 手づくね後、口縁部ナデ 胎土は黄灰色で黒色光沢粒子・黒色粒子・海綿骨芯を含む
2	I b面土坑6	土師器Ⅲ R種小型	口径(7.7)cm 底径(6.0)cm 器高1.4cm 回転ロクロ 外底部回転糸切り 胎土は橙色で黒色光沢粒子・黒色粒子・赤色粒子・海綿骨芯を含む
3	I b面土坑6	土師器Ⅲ R種小型	口径(7.9)cm 底径(6.0)cm 器高1.4cm 回転ロクロ 外底部回転糸切り 胎土は黄橙色で黒色光沢粒子・黒色粒子(多)・海綿骨芯を含む
4	I b面土坑6	土師器Ⅲ T種小型	口径(9.0)cm 底径(7.0)cm 器高1.5cm 手づくね後、口縁部・内底部ナデ 胎土は橙色で黒色光沢粒子・黒色粒子・海綿骨針を含む
5	I b面土坑6	渥美甕	胴部部片 輪積み成形 胎土は灰色で白色粒子を含む 器表に叩き目あり
6	I b面土坑6	渥美甕	胴部部片 輪積み成形 胎土は灰色で白色粒子・礫片を含む 器表に叩き目あり
7	I b面土坑6	青白磁合子・身	口縁部片 型入れ成形 素地は乳白色で黒色粒子を含む 釉薬は青白色透明 口縁部及び胴部下部は無釉
8	I b面土坑6	丸瓦	残存長(6.5)cm 残存幅(9.0)cm 最大厚(2.0)cm 胎土は灰白色で黒色粒子・白色粒子・小石粒・礫片を含む 凸面：縄目痕、凹面：布痕 側面ヘラケズリ・ナデ 永福寺Ⅱ期以降
9	I b面土坑6	平瓦	器表は黒灰色 胎土は灰色で黒色粒子・白色粒子・礫片を含む 凹凸面ともに離れ砂 端面ヘラケズリ 永福寺Ⅲ期併行
10	I b面土坑6	鉄釘	残存長(6.3)cm 残存幅(0.7)cm 厚さ0.4cm 重さ3.9g
11	I b面土坑6	東遠型山茶碗	口縁部小片 輪積み成形後、ロクロ整形 胎土は灰色で白色微粒を含む
12	I b面土坑11	鉄製品刀子	残長(15.9)cm 最大幅(2.0)cm 最大厚(0.3)cm 重さ27.2g
13	I b面土坑14	土師器Ⅲ T種小型	口縁部片 手づくね後、口縁部ナデ 胎土は黄橙色で黒色光沢粒子・黒色粒子・赤色粒子を含む
14	I b面土坑14	土師器Ⅲ R種小型	口径(9.3)cm 底径(6.8)cm 器高1.9cm 回転ロクロ 外底部回転糸切り 胎土は黄橙色で黒色光沢粒子・黒色粒子・赤色粒子・海綿骨芯を含む
15	I b面土坑14	土師器碗	口径(12.9) 胎土は暗灰色で長石・黒色粒子・白色粒子を含む 土師器より硬質な焼き 回転ロクロを使用 12c中葉以前か
図18-1	I a面構築土	土師器Ⅲ R種小型	口径(9.7)cm 底径(7.6)cm 器高1.6cm 回転ロクロ 外底部回転糸切り 板状圧痕 胎土は橙色で黒色光沢粒子・黒色粒子・赤色粒子・海綿骨芯を含む
2	I a面構築土	土師器Ⅲ T種小型	口径(10.7)cm 器高2.0cm 手づくね後、口縁部ナデ 胎土は淡橙色で黒色光沢粒子・黒色粒子・赤色粒子を含む

表6 遺物観察表(6)

挿図番号	出土遺構	種別	備考
図 18-3	I a 面 構築土	土師器皿 R 種大型	口径(12.6)cm 底径(8.6)cm 器高 3.3cm 回転ロクロ 外底部回転糸切り 板状圧痕 胎土は淡橙色で黒色光沢粒子・黒色粒子・赤色粒子を含む
4	I a 面 構築土	常滑 片口鉢 I 類	口縁部片 輪積み成形の後、ロクロ整形 胎土は灰橙色で黒色粒子・白色粒子・小石粒・礫片を含む
5	I a 面 構築土	舶載緑褐釉 無頸広口壺	口縁部片 ロクロ成形 胎土は暗灰色で黒色粒子・白色粒子を含み、若干の気泡が入る 釉薬は灰褐色不透明
6	I a 面 構築土	土師器皿 T 種小型	口径(7.9)cm 器高 1.9cm 手づくね後、口縁部ナデ 胎土は橙色で黒色光沢粒子・黒色粒子・白色粒子を含む
7	I a 面 構築土	土師器皿 R 種小型	口径(9.3)cm 底径(6.7)cm 器高 1.7cm 回転ロクロ 外底部回転糸切り 板状圧痕 胎土は黄橙色で黒色光沢粒子(多)・黒色粒子(多)・赤色粒子・泥岩粒を含む
8	I a 面 構築土	土師器皿 R 種小型	口径(9.5)cm 底径(7.4)cm 器高 2.0cm 回転ロクロ 外底部回転糸切り 胎土は黄灰色で黒色光沢粒子・黒色粒子(多)を含む
9	I a 面 構築土	土師器皿 T 種大型	口径(13.9)cm 器高 2.6cm 手づくね後、口縁部ナデ 胎土は橙色で黒色光沢粒子・黒色粒子(多)・赤色粒子・海綿骨芯を含む
10	I a 面 構築土	土師器皿 R 種大型	口径(13.7)cm 底径(9.3)cm 器高 3.7cm 回転ロクロ 外底部回転糸切り 板状圧痕 内 底部ナデ 胎土は黄橙色で黒色光沢粒子・黒色粒子(多)・赤色粒子・泥岩粒を含む
11	I a 面 構築土	土師器皿 R 種大型	口径(13.0)cm 底径(10.2)cm 器高 3.3cm 回転ロクロ 外底部回転糸切り 板状圧痕 内底部ナデ 胎土は淡橙色で黒色光沢粒子・黒色粒子(多)・赤色粒子・泥岩粒・海綿骨芯を含む
12	I a 面 構築土	土師器皿 R 種大型	口径(13.1)cm 底径(8.9)cm 器高 3.1cm 回転ロクロ 外底部回転糸切り 板状圧痕 内 底部ナデ 胎土は淡橙色で黒色光沢粒子・白色粒子・赤色粒子・海綿骨芯を含む
13	I a 面 構築土	常滑 甕	胴部片 輪積み成形 胎土は黄灰色で黒色粒子・白色粒子を含む 粒子の細かい均質な胎土を使用
14	I a 面 構築土	常滑 甕	胴部片 輪積み成形 胎土は灰褐色で黒色粒子・白色粒子・長石・礫片を含む 器表に叩き
15	I a 面 構築土	舶載陶器 褐釉壺	肩部・胴部小片 ロクロ成形 素地は暗灰色で黒色粒子・白色粒子を含む精良土 釉薬は黒褐色不透明
16	I a 面 構築土	平瓦	残存長(10.5)cm 残存幅(7.0)cm 厚さ 1.7cm 表面は灰褐色 胎土は橙色～灰褐色で黒色粒子・白色粒子・礫片を含む 凹凸面ともに離れ砂付着 側面部ヘラケズリの後、ナデ 永福寺Ⅲ期以降
17	I a 面 構築土	安山岩	長(20.4)cm 幅(18.4)cm 厚さ 6.4cm 中心部に壊滅痕 礎石として使用か
図 19-18	I b 面 土坑 16	土師器皿 T 種小型	口径(8.7)cm 器高 1.3cm 手づくね後、口縁部・内底部ナデ 胎土は灰褐色で黒色光沢粒子・黒色粒子・赤色粒子を含む 混入物少ない
19	I b 面 土坑 16	土師器皿 R 種小型	口径(8.6)cm 底径(6.7)cm 器高 1.7cm 回転ロクロ 外底部回転糸切り 胎土は淡褐色で黒色光沢粒子・黒色粒子・赤色粒子・泥岩粒を含む
20	I b 面 土坑 16	土師器皿 T 種大型	口径(13.4)cm 手づくね青、口縁部ナデ 胎土は淡褐色で黒色粒子泥岩粒・海綿骨芯を含む 口縁部～胴部片 輪積み成形 胎土は灰色で黒色粒子・白色粒子・礫片が混入 多数の指頭痕あり 粒子の細かい均質な胎土を使用 釉薬は灰釉ハケ塗り 体部は緑灰色及び白灰色の自然釉が広くかかっている為、施釉の有無は確認出来ない 頸部内面は自然釉が厚くかかり、肩部内側にはナデにより二条一単位の不規則な溝がつく
21	I b 面 土坑 16	渥美 広口壺	底部片 輪積み成形 胎土は灰褐色で長石・石英・礫片を含む 器表は褐色 内面は緑褐色の自然釉が薄くかかる
22	I b 面 土坑 16	常滑 甕	残存長(12.8)cm 残存幅(6.4)cm 厚さ 0.6cm 円盤状 柘目
23	I b 面 土坑 16	不明 木製品	残存長(22.5)cm 残存幅(0.6)cm 厚さ 0.6cm 両口
24	I b 面 土坑 16	箸状 木製品	残存長(5.5)cm 残存幅(2.9)cm 厚さ 0.5cm 端部曲線状に加工
25	I b 面 土坑 16	不明 木製品	残存長(11.2)cm 残存幅(20.0)cm 厚さ 10.1cm 両端部刃物による切れ込み
26	I b 面 土坑 16	棒状 木製品	
27	I b 面 土坑 17 上層	渥美・湖西片口鉢 転用摩耗陶片	渥美湖西片口鉢胴部片 端部・側面部が摩耗 回転ヘラケズリあり 胎土は灰白色で混入物なし 二次焼成のためか器表面は灰黒色を呈する
28	I b 面 土坑 17 下層	土師器皿 T 種小型	口径(8.5)cm 器高 1.5cm 手づくね後、口縁部・内底部ナデ 胎土は黄褐色で黒色光沢粒子・黒色粒子・白色粒子を含む
29	I b 面 土坑 17 下層	土師器皿 T 種小型	口径(10.1)cm 器高 1.8cm 手づくね後、口縁部ナデ 板状圧痕 胎土は橙色、胎芯は灰黒色で黒色粒子・赤色粒子・海綿骨芯を含む
30	I b 面 土坑 17 下層	土師器皿 R 種小型	口径(8.4)cm 底径(7.9)cm 器高 1.5cm 回転ロクロ 外底部回転糸切り 胎土は赤褐色、胎芯は灰黒色で黒色粒子・赤色粒子・海綿骨芯を含む
31	I b 面 土 16・17 上層	土師器皿 T 種小型	口径(9.7)cm 器高 2.2cm 手づくね後、口縁部・内底部ナデ 胎土は黄褐色で黒色光沢粒子・黒色粒子・白色粒子を含む
32	I b 面 土 16・17 上層	土師器皿 R 種小型	口径(9.6)cm 底径(7.7)cm 器高 2.0cm 回転ロクロ 外底部回転糸切り 板状圧痕 内底部ナデ 胎土は淡褐色で黒色光沢粒子・黒色粒子(多)・赤色粒子・泥岩粒を含む
33	I b 面 土 16・17 上層	土師器皿 R 種小型	口径(8.8)cm 底径(7.1)cm 器高 1.6cm 回転ロクロ 外底部回転糸切り 板状圧痕 内底部ナデ 胎土は橙色で黒色光沢粒子・黒色粒子・赤色粒子を含む
34	I b 面 土 16・17 上層	土師器皿 T 種大型	口径(11.7)cm 器高 2.3cm 手づくね後、口縁部・内底部ナデ 胎土は黄褐色で黒色光沢粒子・黒色粒子・泥岩粒・海綿骨芯を含む

表7 遺物観察表(7)

挿図番号	出土遺構	種別	備考
図19-35	I b面 土16・17 上層	土師器皿 T種大型	口径(13.3)cm 器高2.8cm 手づくね後、口縁部・内底部ナデ 胎土は橙色で雲母・黒色粒子・赤色粒子・海綿骨芯を含む
36	I b面 土16・17 上層	土師器皿 R種大型	口径(13.0)cm 底径(9.8)cm 器高2.8cm 回転ロクロ 外底部回転糸切り 板状圧痕 内底部ナデ 胎土は黄橙色で黒色光沢粒子・黒色粒子(多)・赤色粒子・泥岩粒を含む
37	I b面 土16・17 上層	土師器皿 R種大型	口径(14.5)cm 底径(10.2)cm 器高3.9cm 回転ロクロ 外底部回転糸切り 板状圧痕 内底部ナデ 胎土は橙色で黒色光沢粒子・黒色粒子(多)・赤色粒子・海綿骨芯を含む
38	I b面 土16・17 上層	渥美 甕	胴部片 輪積み成形 胎土は暗灰色で白色粒子・礫片を含む 叩き目あり
39	I b面 土16・17 上層	土師器皿 T種小型	口径(9.4)cm 器高1.6cm 手づくね後、口縁部・内底部ナデ 胎土は淡橙色で黒色光沢粒子・黒色粒子・赤色粒子・海綿骨芯を含む
40	I b面 土16・17 下層	渥美・湖西 片口鉢	底部片 輪積み成形の後、ロクロ整形 胎土は灰色で白色粒子・小石粒・礫片を含む 2b期
41	I b面 土16・17 下層	青白磁 皿	底部片 素地は乳白色で黒色微粒を含む良土 釉薬は青白色半透明 外底部は無釉 内面に圈線あり
42	I b面 土16・17 下層	箸状 木製品	残存長(11.7)cm 残存幅(0.4)cm 厚さ0.3cm 両口
43	I b面 土16・17 下層	箸状 木製品	残存長(18.3)cm 残存幅(0.6)cm 厚さ0.7cm 両口
44	I b面 土16・17 下層	箸状 木製品	残存長(20.8)cm 残存幅(0.6)cm 厚さ0.6cm 両口
図20-1	I b面 土坑19	鉄釘	残存長(6.4)cm 残存幅(0.9)cm 厚さ0.8cm 重さ8.5g
2	I b面 P.8	軒丸瓦	残存長(6.4)cm 残存幅(5.0)cm 厚さ1.9cm 表面は橙色 胎土は灰色で黒色粒子・白色粒子・小石粒・礫片を含む 凸面：ナデ 凹面：布目痕
3	I b面 P.69	白磁 端反碗	底部片 ロクロ成形 素地は灰白色で黒色粒子を含む 釉薬は淡灰緑不透明 みこみ部分のみ施釉 内底面に環状釉ハギ
4	I b面 P.80	土師器皿 T種小型	手づくね後、口縁部ナデ 胎土は淡橙色で黒色光沢粒子・黒色粒子・赤色粒子・海綿骨芯を含む
5	I b面 P.80	土師器皿 T種小型	口径(10.4)cm 器高2.0cm 手づくね後、口縁部・内底部ナデ 胎土は黄橙色で黒色光沢粒子・黒色粒子・赤色粒子を含む
6	I b面 P.80	土師器皿 R種小型	口径(9.7)cm 底径(7.3)cm 器高2.1cm 回転ロクロ 外底部回転糸切り 板状圧痕 内底部ナデ 胎土は淡橙色で黒色光沢粒子・黒色粒子・海綿骨芯を含む 焼成非常に良い
7	I b面 P.80	鉄釘	残存長(4.1)cm 残存幅(0.5)cm 厚さ0.4cm 重さ1.4g
8	I b面 P.81	土師器皿 R種小型	口径(7.7)cm 底径(5.4)cm 器高1.9cm 回転ロクロ 外底部回転糸切り 板状圧痕 内底部ナデ 胎土は橙色で黒色光沢粒子・黒色粒子・赤色粒子・海綿骨芯を含む 焼成非常に良い
9	I b面 P.81	土師器皿 R種小型	口径(9.1)cm 底径(7.7)cm 器高1.5cm 回転ロクロ 外底部回転糸切り 板状圧痕 胎土は橙色で黒色光沢粒子・黒色粒子・海綿骨芯を含む 焼成非常に良い
10	I b面 P.81	土師器皿 R種小型	口径(9.0)cm 底径(6.6)cm 器高1.8cm 回転ロクロ 外底部回転糸切り 板状圧痕 内底部ナデ 胎土は橙色で黒色光沢粒子・黒色粒子・赤色粒子・海綿骨芯を含む 焼成非常に良い
11	I b面 P.83	土師器皿 T種大型	口径(12.5)cm 器高2.7cm 手づくね後、口縁部・内底部ナデ 胎土は橙色で黒色光沢粒子・黒色粒子・赤色粒子・海綿骨芯を含む 焼成良い
12	I b面 P.87	土師器皿 R種小型	口径(8.8)cm 底径(6.2)cm 器高1.5cm 回転ロクロ 外底部回転糸切り 板状圧痕 胎土は橙色で黒色粒子・赤色粒子を含む 二次焼成の為に表面が荒れている
13	I b面 P.114	土師器皿 T種小型	口径(9.1)cm 器高1.9cm 手づくね後、口縁部・内底部ナデ 板状圧痕 焼成非常に良い 胎土は橙色で黒色光沢粒子・黒色粒子・赤色粒子を含む 内面は灰色(焼成ムラ?)
14	I b面 P.114	土師器皿 T種小型	口径(9.4)cm 器高2.0cm 手づくね後、口縁部・内底部ナデ 板状圧痕 胎土は淡橙色で黒色光沢粒子・黒色粒子・赤色粒子・海綿骨芯を含む 焼成非常に良い
15	I b面 P.114	平瓦	残存長(9.8)cm 残存幅(7.2)cm 厚さ2.0cm 胎土は灰色で黒色粒子・白色粒子・礫片を含む 凸面：縄目痕 凹面：布目痕 離れ砂 側面・端面ヘラケズリ 永福寺1期 水殿瓦窯産
16	I b面 P.124	土師器皿 T種小型	口径(9.3)cm 器高1.8cm 手づくね後、口縁部・内底部ナデ 胎土は淡橙色で黒色粒子を僅かに含む粉質精良土 焼成非常に良い
17	I b面 P.124	土師器皿 T種大型	口径(13.5)cm 器高2.7cm 手づくね後、口縁部ナデ 胎土は淡橙色で黒色光沢粒子・黒色粒子・赤色粒子を含む 焼成非常に良い
18	I b面 構築土	土師器皿 T種小型	口径(8.5)cm 器高1.6cm 手づくね後、口縁部・内底部ナデ 胎土は橙色で黒色粒子・赤色粒子を含む 二次焼成の為に表面が荒れている
19	I b面 構築土	土師器皿 T種小型	口径(9.0)cm 器高1.6cm 手づくね後、口縁部・内底部ナデ 胎土は橙色で雲母・黒色粒子・赤色粒子を含む 焼成良い
20	I b面 構築土	土師器皿 T種大型	口径(13.6)cm 器高3.5cm 手づくね後、口縁部ナデ 胎土は黄橙色で雲母・黒色粒子・赤色粒子・海綿骨芯を含む 焼成良い
21	I b面 構築土	土師器皿 R種小型	口径(9.0)cm 底径(7.0)cm 器高1.5cm 回転ロクロ 外底部回転糸切り 板状圧痕 胎土は灰橙色で黒色粒子・赤色粒子を含む 焼成非常に良い
22	I b面 構築土	土師器皿 R種小型	口径(9.7)cm 底径(7.9)cm 器高1.4cm 回転ロクロ 外底部回転糸切り 板状圧痕 内底部ナデ 胎土は橙色で黒色光沢粒子・黒色粒子・海綿骨芯を僅かに含む 焼成良い
23	I b面 構築土	土師器皿 R種小型	口径(9.7)cm 底径(7.9)cm 器高1.4cm 回転ロクロ 外底部回転糸切り 板状圧痕 内底部ナデ 胎土は橙色で黒色光沢粒子・黒色粒子・海綿骨芯を含む 焼成非常に良い

表8 遺物観察表(8)

挿図番号	出土遺構	種別	備考
図20-24	I b面 構築土	常滑 片口鉢Ⅰ類	口縁部片 輪積み成形の後、ロクロ整形 胎土は灰色で長石・石英・礫片を含む 4型式
25	I b面 構築土	常滑 片口鉢Ⅱ類	口縁部片 輪積み成形 器表は赤褐色 胎土は茶褐色で白色粒子・礫片を含む 内面は灰白色の降灰 鉄分の吹き出しあり
26	I b面 構築土	常滑 甕	底部片 輪積み成形 胎土は灰白色で黒色粒子・白色粒子・礫片を含む 粒子の細かい精良土を使用 器表は灰茶色 内面は灰緑色の自然釉
27	I b面 構築土	青白磁 合子蓋	蓋上面部片 型入れ成形 素地は乳白色で黒色微粒を含む 釉薬は青白色半透明、釉層ごく薄い
図21-1	I c面	同安窯青磁 画花文皿	底部片 ロクロ成形 外底部へラケズリ 素地は灰白色で黒色微粒を含む 釉薬は青灰緑色透明で、釉層ごく薄い 底部無釉
2	I c面	鉄釘	残存長(7.2)cm 残存幅(0.7)cm 厚さ0.5cm 重さ5.4g
3	I c面 溝2	土師器皿 T種小型	口径(9.2)cm 器高1.8cm 手づくね後、口縁部ナデ 胎土は橙色で雲母・黒色粒子・赤色粒子を含む 焼成良い
4	I c面 溝2	土師器皿 T種大型	口縁部片 手づくね後、口縁部ナデ 胎土は橙色で赤色粒子・海綿骨芯を含む 焼成非常に良い
5	I c面 溝2	土師器皿 T種大型	口径(14.2)cm 器高3.2cm 手づくね後、口縁部・内底部ナデ 胎土は黄橙色で雲母・黒色粒子・赤色粒子・海綿骨芯を含む
6	I c面 溝2	土師器皿 R種小型	口径(9.3)cm 底径(7.1)cm 器高1.5cm 回転ロクロ 外底部回転糸切り 板状圧痕 内底部ナデ 胎土は橙色で黒色粒子・赤色粒子を含む 二次焼成の為に表面が荒い
7	I c面 溝2	渥美・湖西 片口鉢	底部片 輪積み成形の後、ロクロ整形 胎土は灰色で黒色粒子・白色粒子・礫片を含む 内面著しく剥離
8	I c面 溝2	同安窯系青磁 皿	口縁部片 ロクロ成形 素地は灰緑色で黒色粒子・気泡を含む 釉薬は灰緑色半透明
図22-1	I c面 建物5 P1	滑石鍋 転用品	器表は黒灰色 加工面は灰白色 2面に研磨痕
2	I c面 建物5 P8	土師器皿 R種小型	口径(9.3)cm 底径(6.8)cm 器高1.7cm 回転ロクロ 外底部回転糸切り 板状圧痕 内底部ナデ 胎土は黄橙色で黒色光沢粒子・黒色粒子・赤色粒子を含む 二次焼成の為に表面が荒い
3	I c面 建物5 P9	土師器皿 R種小型	口径(9.6)cm 底径(7.2)cm 器高2.2cm 回転ロクロ 外底部回転糸切り 板状圧痕 内底部ナデ 胎土は淡橙色で雲母・黒色粒子・赤色粒子を含む
4	I c面 建物5 P10	土師器皿 R種小型	口径(7.5)cm 底径(6.3)cm 器高1.9cm 回転ロクロ 外底部回転糸切り 胎土は淡橙色で黒色光沢粒子・黒色粒子・海綿骨芯を含む 焼成良い
5	I c面 建物5 P10	土師器皿 R種小型	口径(8.0)cm 底径(5.6)cm 器高1.5cm 回転ロクロ 外底部回転糸切り 板状圧痕 内底部ナデ 胎土は橙色で黒色粒子・海綿骨芯を含む 焼成非常に良い
6	I c面 建物5 P10	土師器皿 T種大型	口径(15.5)cm 器高3.0cm 手づくね後、口縁部ナデ 胎土は灰橙色で黒色光沢粒子・黒色粒子を含む 二次焼成により大きく変形
図23-1	I c面 建物6 P5	土師器皿 R種小型	口径(8.9)cm 底径(6.3)cm 器高1.7cm 回転ロクロ 外底部回転糸切り 板状圧痕 内底部ナデ 胎土は淡橙色で黒色光沢粒子・黒色粒子・赤色粒子・海綿骨芯を含む 焼成非常に良い 13c第1四半期
2	I c面 建物6 P6	常滑 甕	底部片 輪積み成形 胎土は灰褐色で黒色粒子・白色粒子・長石・礫片を含む 粒子の細かい胎土使用 器表は褐色の自然釉に黄灰色の降灰、叩き目あり 裏面は緑白色の降灰が全体に広がる 内底部に窯クソ付着
3	I c面 建物6 P7	白色系土師器皿 T種大型	口縁部片 手づくね後、口縁部ナデ 胎土は乳白色、胎芯は灰黒色で黒色粒子を含む良土
4	I c面 建物6 P7	竜泉窯青磁 画花文碗	口縁部片 ロクロ成形 素地は灰色で黒色微粒・気泡を含む 釉薬は灰緑色半透明で釉層ごく薄い
図24-1	I c面 土坑10	土師器皿 R種小型	口径(9.2)cm 底径(7.1)cm 器高1.4cm 回転ロクロ 外底部回転糸切り 板状圧痕 内底部ナデ 胎土は黄橙色で黒色光沢粒子・黒色粒子・赤色粒子を含む 焼成非常に良い
2	I c面 土坑10	渥美 甕	胴部片 輪積み成形 胎土は灰色で黒色粒子・白色粒子・礫片を含む 器表に叩き目あり
3	I c面 土坑10	渥美・湖西 片口鉢	底部片 輪積み成形 胎土は暗灰色で黒色粒子・白色粒子・小石粒・礫を含む 胴部下、回転へラケズリ確認できず 内面上部摩耗 内底部剥離
4	I c面 P.56	竜泉窯青磁 画花文碗	口径(15.6)cm ロクロ成形 素地は灰色で黒色微粒・白色微粒を含む 釉薬は灰緑色半透明で、釉層ごく普通
5	I c面 P.66	土師器皿 T種小型	口径(9.5)cm 器高1.9cm 手づくね後、口縁部・内底部ナデ 胎土は黄橙色で黒色光沢粒子(多)・黒色粒子(多)・赤色粒子を含む
6	I c面 P.112	土師器皿 R種大型	口径(13.6)cm 底径(8.8)cm 器高2.8cm 回転ロクロ 外底部回転糸切り 板状圧痕 内底部ナデ 胎土は黄橙色で黒色光沢粒子・黒色粒子・赤色粒子・海綿骨芯を含む
7	I c面 P.115	土師器皿 T種小型	口径(9.2)cm 器高1.4cm 手づくね後、口縁部・内底部ナデ 胎土は淡橙色で黒色光沢粒子・黒色粒子を含む 二次焼成の為に大部分が黒く変色
8	I c面 P.136	土師器皿 T種小型	口径(8.9)cm 器高1.2cm 手づくね後、口縁部・内底部ナデ 胎土は橙色で黒色光沢粒子・黒色粒子を含む良土 焼成非常に良い
9	I c面 P.137 P.138	土師器皿 T種小型	残存長(1.8)cm 残存幅(2.2)cm 厚さ0.6cm 胎土は灰褐色で黒色光沢粒子・黒色粒子をむ
10	I c面 P.140	常滑 甕	口縁部片 輪積み成形 胎土は灰緑色で白色粒子を含む 緑灰色の自然釉 窯クソ付着
11	I c面 P.140	土師器皿 T種大型	口径(13.5)cm 手づくね後、口縁部ナデ 胎土は黄橙色で黒色光沢粒子・黒色粒子・赤色粒子・海綿骨芯を含む

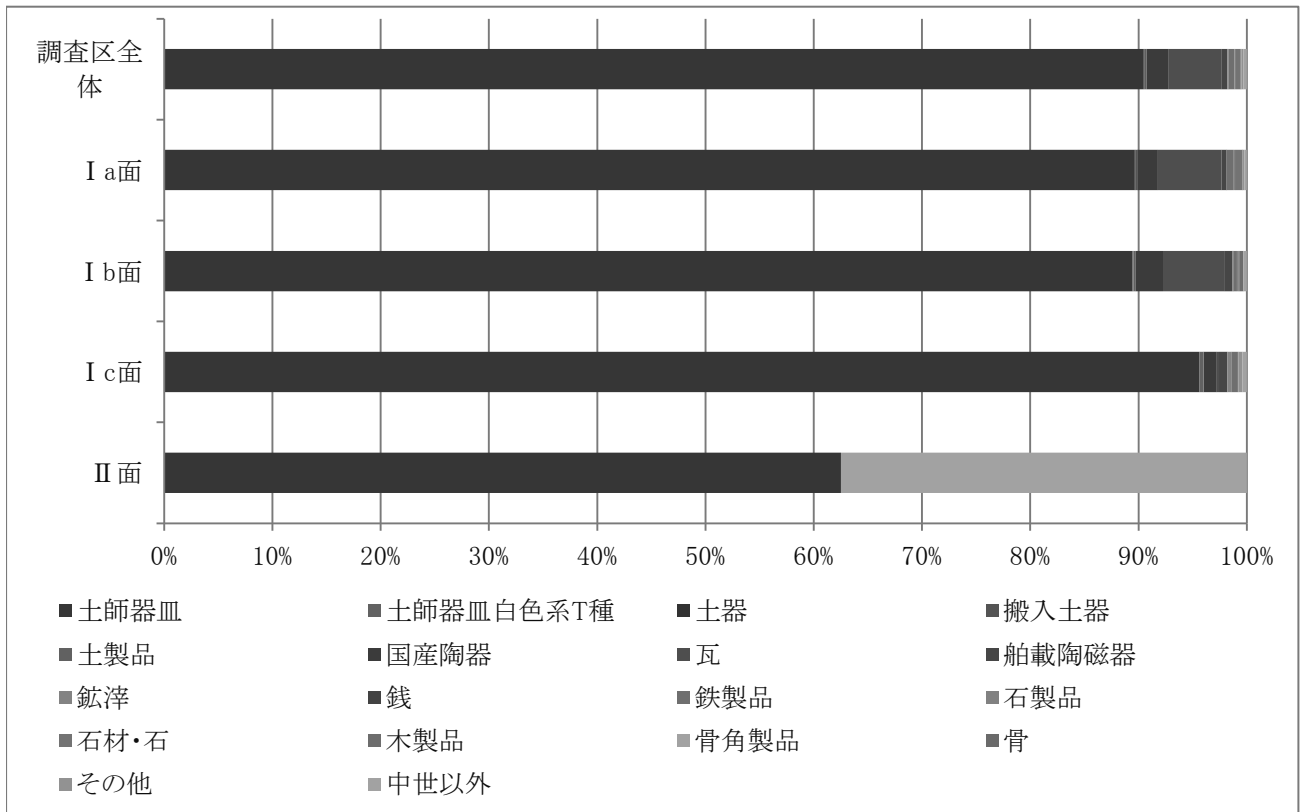
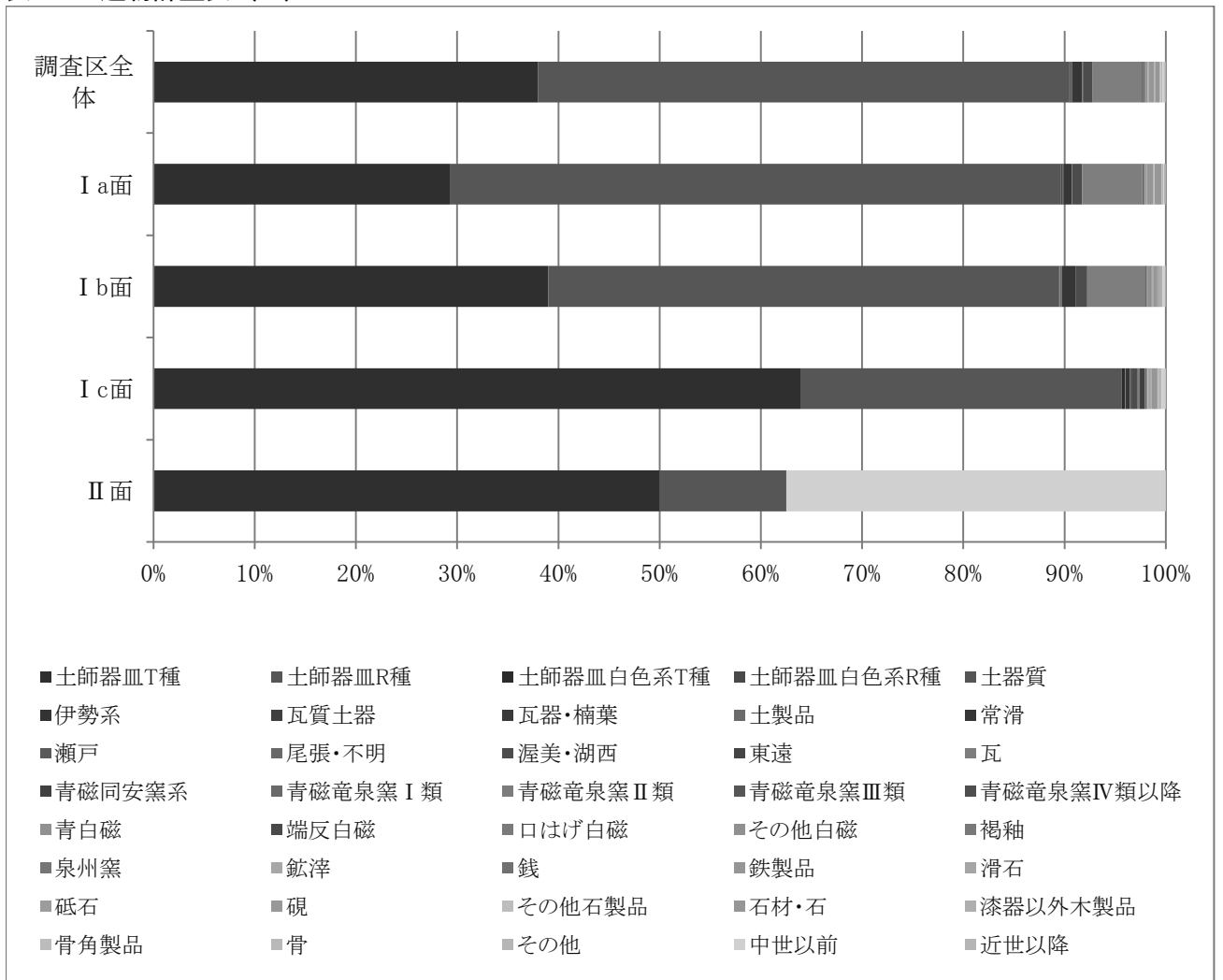
表9 遺物観察表(9)

挿図番号	出土遺構	種別	備考
図24-12	I c面 P.140	土師器皿 R種小型	口径(9.0)cm 底径(7.0)cm 器高1.7cm 回転ロクロ 外底部回転糸切り 板状圧痕 胎土は橙色で黒色光沢粒子・黒色粒子・赤色粒子・海綿骨芯を含む
13	I c面 P.140	土師器皿 R種小型	口径(8.7)cm 底径(7.1)cm 器高1.9cm 回転ロクロ 外底部回転糸切り 板状圧痕 胎土は橙色で黒色光沢粒子(多)・黒色粒子(多)・赤色粒子を含む 焼成非常に良い
14	I c面 P.140	穿孔土師器皿 R種大型	残存長(1.9)cm 残存幅(2.3)cm 厚さ0.6cm 孔径0.3cm 口縁部片 胎土は淡橙色で雲母・黒色粒子・赤色粒子を含む
15	I c面 P.140	白色系土師器皿 T種大型	口縁部片 胎土は乳白色で黒色粒子を含む粉質土
16	I c面 P.140	同安窯系青磁 皿	底部片 ロクロ成形 素地は灰色で黒色微粒を含む 釉薬は緑灰色半透明、釉層ごく薄い 底部無釉 外底部：回転ヘラケズリ後、ヘラケズリ
17	I c面 P.140	同安窯系青磁 碗	口縁部片 ロクロ成形 素地は灰色で黒色微粒・白色微粒を含む 釉薬は灰緑色半透明、釉層ごく薄い 外面に櫛描き文
18	I c面 P.140	鉄釘	残存長(6.2)cm 残存幅(0.6)cm 厚さ0.7cm
19	I c面 P.155	土師器皿 R種小型	口径(8.9)cm 底径(6.4)cm 器高1.6cm 回転ロクロ 外底部回転糸切り 板状圧痕 内底部ナデ 胎土は黄橙色で黒色光沢粒子・黒色粒子を多く・泥岩粒を含む
20	I c面 P.156	土師器皿 T種小型	口径(9.6)cm 器高1.5cm 手づくね後、口縁部・内底部ナデ 胎土は黄橙色で黒色光沢粒子・黒色粒子を非常に多く・海綿骨芯を含む 口縁部が二次焼成の為に黒く変色 焼成良い
21	I c面 P.156	常滑 甕	胴部片 輪積み成形 胎土は灰色で白色粒子・長石・礫を含む、粒子の細かい均質土を使用 器表は灰褐色で叩き目あり
22	I c面 P.164	瀬戸 入子か	口径(3.4)cm 底径(2.6)cm 器高1.3cm 胎土は灰色で黒色粒子・白色粒子を含む 尾張型山茶碗に使用される土と似たものを使用
23	I c面 P.167	瀬戸 片口小瓶	口縁部片 胎土は灰色で黒色粒子を含む均質土 頸部は黄灰白色の灰釉をハケ塗り 内面は灰白色の灰釉ハケヌリ 器表面は二次被焼の為に淡褐色に変色
図27-1	表採・攪乱	土師器皿 T種小型	口径(8.8)cm 器高2.0cm 手づくね後、口縁部・内底部ナデ 胎土は橙色で黒色粒子・赤色粒子を含む良土 焼成非常に良い
2	表採・攪乱	土師器皿 R種小型	口径(8.0)cm 底径(6.0)cm 器高1.7cm 回転ロクロ 外底部回転糸切り 板状圧痕 黒色光沢粒子・黒色粒子・赤色粒子・海綿骨芯を含む 内面に煤
3	表採・攪乱	土師器皿 R種小型	口径(8.8)cm 底径(6.4)cm 器高1.9cm 回転ロクロ 外底部回転糸切り 板状圧痕 内底部ナデ 胎土は黄橙色で黒色光沢粒子・黒色粒子を多く・泥岩粒を含む 焼成良い
4	表採・攪乱	土師器皿 R種小型	口径(9.0)cm 底径(7.0)cm 器高2.0cm 回転ロクロ 外底部回転糸切り 胎土は橙色で黒色光沢粒子・黒色粒子・赤色粒子・海綿骨芯を含む良土 焼成非常に良い
5	表採・攪乱	土師器皿 R種小型	口径(8.7)cm 底径(6.4)cm 器高1.5cm 回転ロクロ 外底部回転糸切り 胎土は黄橙色で雲母・黒色粒子・赤色粒子を含む 口縁部に煤付着 焼成良い
6	表採・攪乱	渥美・湖西 片口鉢	口縁部片 輪積み成形の後、ロクロ整形 胎土は暗灰色で白色粒子・礫を含む
7	表採・攪乱	常滑 甕	口縁部片 輪積み成形 胎土は灰色で黒色粒子・白色粒子・長石・礫を含む 口縁内面に白灰緑色の自然釉
8	表採・攪乱	竜泉窯系青磁 画花文碗	口縁部片 ロクロ成形 素地は黄灰色で黒色微粒を含む精良土 釉薬は黄灰緑色に窯変、釉層ごく薄い
9	表採・攪乱	丸瓦	残存長(8.5)cm 残存幅(8.5)cm 厚さ1.6cm 凹面に布痕 側面ヘラケズリ後ナデ 胎土は灰白色で黒色光沢粒子・黒色粒子・白色粒子・礫を含む 永福寺Ⅲ期
10	表採・攪乱	材質不明 鋳物	残存長(5.0)cm 残存幅(7.0)cm 厚さ3.7~1.7cm 重さ313.3g 上下両端切断面、胴部面の一部に泡状の突起した集合物が見られる
11	表採・攪乱	銅製品 ロウソク立て	高さ4.1cm 底径3.3cm 重さ23.3g 台部と皿部はネジ式で結合 近現代

表 10 遺物計量表 (1)

			I a 面	I b 面	I c 面	II 面	表採	総計	
中世以前			弥生土器	3 0.06%	5 0.20%	1 0.07%	3 37.50%	1 0.24%	13 0.13%
			古墳土師器	0 0.00%	1 0.04%	5 0.35%	0 0.00%	0 0.00%	6 0.06%
土器	土師器皿	T種	大	1380 25.56%	841 33.98%	806 55.93%	4 50.00%	203 49.15%	3234 33.21%
			小	198 3.67%	123 4.97%	114 7.91%	0 0.00%	20 4.84%	455 4.67%
			特殊小型	6 0.11%	2 0.08%	1 0.07%	0 0.00%	0 0.00%	9 0.09%
		R種	大	2862 53.00%	1063 42.95%	364 25.26%	1 12.50%	126 30.51%	4416 45.35%
			中	4 0.07%	0 0.00%	0 0.00%	0 0.00%	0 0.00%	4 0.04%
			小	388 7.19%	185 7.47%	93 6.45%	0 0.00%	24 5.81%	690 7.09%
			12c 碗	0 0.00%	1 0.04%	0 0.00%	0 0.00%	0 0.00%	1 0.01%
		T種白色系	大	1 0.02%	1 0.04%	5 0.35%	0 0.00%	0 0.00%	7 0.07%
			R種白色系	大	1 0.02%	1 0.04%	0 0.00%	0 0.00%	0 0.00%
		土器質	火鉢	0 0.00%	0 0.00%	0 0.00%	0 0.00%	1 0.24%	1 0.01%
	鍔鍋		1 0.02%	0 0.00%	0 0.00%	0 0.00%	0 0.00%	1 0.01%	
伊勢系	鍋	7 0.13%	0 0.00%	0 0.00%	0 0.00%	0 0.00%	7 0.07%		
瓦質土器	火鉢	2 0.04%	0 0.00%	0 0.00%	0 0.00%	0 0.00%	2 0.02%		
	桶葉	1 0.02%	0 0.00%	0 0.00%	0 0.00%	0 0.00%	1 0.01%		
土製品	羽口	0 0.00%	4 0.16%	1 0.07%	0 0.00%	0 0.00%	5 0.05%		
	球状土製品	0 0.00%	0 0.00%	0 0.00%	0 0.00%	1 0.24%	1 0.01%		
	土錘	1 0.02%	0 0.00%	0 0.00%	0 0.00%	0 0.00%	1 0.01%		
	壺	1 0.02%	0 0.00%	0 0.00%	0 0.00%	0 0.00%	1 0.01%		
	甕	38 0.70%	26 1.05%	6 0.42%	0 0.00%	7 1.69%	77 0.79%		
国産陶器	常滑	片口鉢	I類	4 0.07%	4 0.16%	0 0.00%	0 0.00%	4 0.97%	12 0.12%
			II類	0 0.00%	4 0.16%	0 0.00%	0 0.00%	0 0.00%	4 0.04%
		天目茶碗	0 0.00%	0 0.00%	0 0.00%	0 0.00%	1 0.24%	1 0.01%	
		御皿	1 0.02%	0 0.00%	0 0.00%	0 0.00%	0 0.00%	1 0.01%	
	瀬戸	御目付大皿	1 0.02%	0 0.00%	0 0.00%	0 0.00%	0 0.00%	1 0.01%	
		入子	0 0.00%	0 0.00%	1 0.07%	0 0.00%	0 0.00%	1 0.01%	
		片口小瓶	0 0.00%	0 0.00%	1 0.07%	0 0.00%	0 0.00%	1 0.01%	
	尾張	器種不明	2 0.04%	0 0.00%	0 0.00%	0 0.00%	0 0.00%	2 0.02%	
		山茶碗系片口鉢	1 0.02%	0 0.00%	0 0.00%	0 0.00%	0 0.00%	1 0.01%	
		壺	1 0.02%	0 0.00%	0 0.00%	0 0.00%	0 0.00%	1 0.01%	
	渥美・湖西	壺	40 0.74%	20 0.81%	7 0.49%	0 0.00%	3 0.73%	70 0.72%	
		大口壺	0 0.00%	1 0.04%	0 0.00%	0 0.00%	0 0.00%	1 0.01%	
	東遠	片口鉢	10 0.19%	6 0.24%	2 0.14%	0 0.00%	1 0.24%	19 0.20%	
		片口鉢転用摩耗陶片	0 0.00%	1 0.04%	0 0.00%	0 0.00%	0 0.00%	1 0.01%	
		山茶碗	2 0.04%	1 0.04%	0 0.00%	0 0.00%	0 0.00%	3 0.03%	
		平瓦	233 4.31%	101 4.08%	3 0.21%	0 0.00%	9 2.18%	346 3.55%	
	瓦	軒平瓦	1 0.02%	1 0.04%	0 0.00%	0 0.00%	0 0.00%	2 0.02%	
丸瓦		49 0.91%	28 1.13%	0 0.00%	0 0.00%	2 0.48%	79 0.81%		
軒丸瓦		12 0.22%	9 0.36%	0 0.00%	0 0.00%	0 0.00%	21 0.22%		
不明		22 0.41%	1 0.04%	0 0.00%	0 0.00%	0 0.00%	23 0.24%		
搬入瓦 (東遠か)		1 0.02%	0 0.00%	0 0.00%	0 0.00%	0 0.00%	1 0.01%		
舶載陶磁器		青磁同安窯系	碗	0 0.00%	0 0.00%	3 0.21%	0 0.00%	0 0.00%	3 0.03%
			皿	1 0.02%	0 0.00%	4 0.28%	0 0.00%	0 0.00%	5 0.05%
			太宰府 I 類	9 0.17%	5 0.20%	3 0.21%	0 0.00%	2 0.48%	19 0.20%
		青磁竜泉窯系	太宰府 II 類	1 0.02%	1 0.04%	0 0.00%	0 0.00%	0 0.00%	2 0.02%
			太宰府 III 類	1 0.02%	1 0.04%	0 0.00%	0 0.00%	0 0.00%	2 0.02%
			太宰府 IV 以降	2 0.04%	0 0.00%	0 0.00%	0 0.00%	0 0.00%	2 0.02%
		青白磁	梅瓶	0 0.00%	0 0.00%	0 0.00%	0 0.00%	1 0.24%	1 0.01%
			合子	1 0.02%	3 0.12%	0 0.00%	0 0.00%	0 0.00%	4 0.04%
			碗	1 0.02%	0 0.00%	0 0.00%	0 0.00%	0 0.00%	1 0.01%
	皿		1 0.02%	2 0.08%	0 0.00%	0 0.00%	0 0.00%	3 0.03%	
	白磁	端反	0 0.00%	1 0.04%	0 0.00%	0 0.00%	0 0.00%	1 0.01%	
		口はげ	0 0.00%	2 0.08%	0 0.00%	0 0.00%	0 0.00%	2 0.02%	
		碗	1 0.02%	1 0.04%	0 0.00%	0 0.00%	0 0.00%	2 0.02%	
		不明	0 0.00%	0 0.00%	1 0.07%	0 0.00%	0 0.00%	1 0.01%	
壺		1 0.02%	0 0.00%	0 0.00%	0 0.00%	0 0.00%	1 0.01%		
褐釉	壺	2 0.04%	0 0.00%	0 0.00%	0 0.00%	0 0.00%	2 0.02%		
	小壺	0 0.00%	1 0.04%	0 0.00%	0 0.00%	0 0.00%	1 0.01%		
	緑褐釉壺	1 0.02%	0 0.00%	0 0.00%	0 0.00%	0 0.00%	1 0.01%		
泉州窯	洗	1 0.02%	0 0.00%	0 0.00%	0 0.00%	0 0.00%	1 0.01%		
	器種不明	1 0.02%	0 0.00%	0 0.00%	0 0.00%	0 0.00%	1 0.01%		
	鉢	1 0.02%	2 0.08%	6 0.42%	0 0.00%	0 0.00%	9 0.09%		
金属製品	銭	中国銅銭	1 0.02%	1 0.04%	0 0.00%	0 0.00%	0 0.00%	2 0.02%	
		釘	29 0.54%	5 0.20%	7 0.49%	0 0.00%	4 0.97%	45 0.46%	
		刀子	1 0.02%	2 0.08%	0 0.00%	0 0.00%	0 0.00%	3 0.03%	
	鉄	皿	1 0.02%	0 0.00%	0 0.00%	0 0.00%	0 0.00%	1 0.01%	
		かすがい	1 0.02%	0 0.00%	0 0.00%	0 0.00%	0 0.00%	1 0.01%	
		蓋	0 0.00%	1 0.04%	0 0.00%	0 0.00%	0 0.00%	1 0.01%	
		器種不明	0 0.00%	0 0.00%	1 0.07%	0 0.00%	0 0.00%	1 0.01%	
石製品	滑石	鍋	2 0.04%	0 0.00%	0 0.00%	0 0.00%	0 0.00%	2 0.02%	
		鍋転用品	1 0.02%	0 0.00%	1 0.07%	0 0.00%	0 0.00%	2 0.02%	
	砥石	鳴滝	3 0.06%	2 0.08%	0 0.00%	0 0.00%	0 0.00%	5 0.05%	
		天草	0 0.00%	1 0.04%	0 0.00%	0 0.00%	0 0.00%	1 0.01%	
	硯	上野	1 0.02%	0 0.00%	0 0.00%	0 0.00%	0 0.00%	1 0.01%	
		赤間	2 0.04%	0 0.00%	0 0.00%	0 0.00%	0 0.00%	2 0.02%	
石材・石	その他	泥岩加工品	1 0.02%	0 0.00%	0 0.00%	0 0.00%	0 0.00%	1 0.01%	
	玉石	36 0.67%	0 0.00%	0 0.00%	0 0.00%	0 0.00%	36 0.37%		
	安山岩 (伊豆石)	2 0.04%	0 0.00%	0 0.00%	0 0.00%	0 0.00%	2 0.02%		
木製品	漆器以外木製品	安山岩質凝灰岩 (搬入)	0 0.00%	4 0.16%	0 0.00%	0 0.00%	0 0.00%	4 0.04%	
		箸 (両口)	0 0.00%	4 0.16%	0 0.00%	0 0.00%	0 0.00%	4 0.04%	
		用途不明	0 0.00%	2 0.08%	0 0.00%	0 0.00%	0 0.00%	2 0.02%	
骨角製品	加工骨	棒状	0 0.00%	1 0.04%	0 0.00%	0 0.00%	0 0.00%	1 0.01%	
		加工鹿角	1 0.02%	0 0.00%	0 0.00%	0 0.00%	0 0.00%	1 0.01%	
自然遺物	骨	加工骨	1 0.02%	0 0.00%	0 0.00%	0 0.00%	0 0.00%	1 0.01%	
		獣骨	1 0.02%	0 0.00%	0 0.00%	0 0.00%	0 0.00%	1 0.01%	
		不明	0 0.00%	1 0.04%	0 0.00%	0 0.00%	0 0.00%	1 0.01%	
その他	産地不明陶器	器種不明土器	1 0.02%	0 0.00%	0 0.00%	0 0.00%	0 0.00%	1 0.01%	
		焼粘土塊	5 0.09%	1 0.04%	5 0.35%	0 0.00%	0 0.00%	11 0.11%	
		材質不明鑄物	0 0.00%	0 0.00%	0 0.00%	0 0.00%	1 0.24%	1 0.01%	
		近代	8 0.15%	0 0.00%	0 0.00%	0 0.00%	1 0.24%	9 0.09%	
近世以降	近代	近代	2 0.04%	0 0.00%	0 0.00%	0 0.00%	1 0.24%	3 0.03%	
		合計	5400 100%	2475 100%	1441 100%	8 100%	413 100%	9737 100%	

表 11 遺物計量表 (2)



## 第四章 まとめと考察

### 第1節. 遺構の変遷と年代

#### 1期

Ⅱ面が相当する。実際の遺構面よりも下層で検出を行ったため、全ての遺構を検出できたとは言えない。溝状遺構と竪穴遺構の軸方位は上層遺構とほぼ同様のため、上層遺構と同じような規制の下に構築されたことが考えられる。

遺物は小破片がわずかに出土したのみで、年代を推測するにはいたらない。

#### 2期

I c面が相当する。調査区西側でピットが多く検出され、特に建物5・6の柱穴周辺に群集する状況が窺える。このことから、同様の位置で複数回の建て直しが行われた可能性が考えられる。調査区内のほとんどを建物が占めることから、屋敷地の1区画を検出した可能性があるが、調査区の狭小さから建物の正確な規模を確認するまでには至っていない。

出土遺物は13世紀第1四半期までのものが多いが、13世紀前葉と評価できるものも含まれる。このことから、本期の年代は12世紀末から13世紀前葉であろう。

#### 3期

I b面が相当する。調査区西側において井戸の可能性のある深い土坑が2基検出された。この土坑の東隣に溝が検出されている。この溝の主たる性格が区画を示すものか、排水を目的とするものかは不明であるが、井戸の可能性のある深い土坑とは出土遺物からみると時期が違うと言える。

本期は2期の建物が建つ区画から、井戸の可能性のある深い土坑を中心とする区画に変化したと言える。ただ、広大な屋敷地内の一部を検出した可能性もあるので、調査地点内での土地利用に変化があることによって、場の性格が変化したとは言いきれない。

13世紀前半までの遺物しか出土しない遺構と、13世紀第4四半期の遺物が含まれる遺構とがある。このことから、複数の時期の遺構を同一検出面で検出したと言える。これが、同一の遺構面を長期間に渡って使用した結果であるのか、複数回の盛土と削平を行った結果、同一の検出面での検出となったかは定かではない。

#### 4期

I a面が相当する。建物を四棟検出しているが、いずれの建物も調査区外へと広がる可能性がある。

ピットは調査区東半分集中することから、建物を建てる位置が変化していることは読み取れるが、調査区が狭小なため詳細は不明である。

遺構の軸方位は1期から全く変化していないため、区画利用の基準は変化していないと考えられる。

上層を後世に大きく削平されているため、検出面上の出土遺物には近現代までの遺物が含まれるが、遺構内の出土遺物は13世紀末14世紀中頃までのもので収まる。層位的にみて、本期は13世紀後葉以降となるが、14世紀前半代の出土遺物は非常に少ない。14世紀以降の遺構面は削平された可能性があると言える。



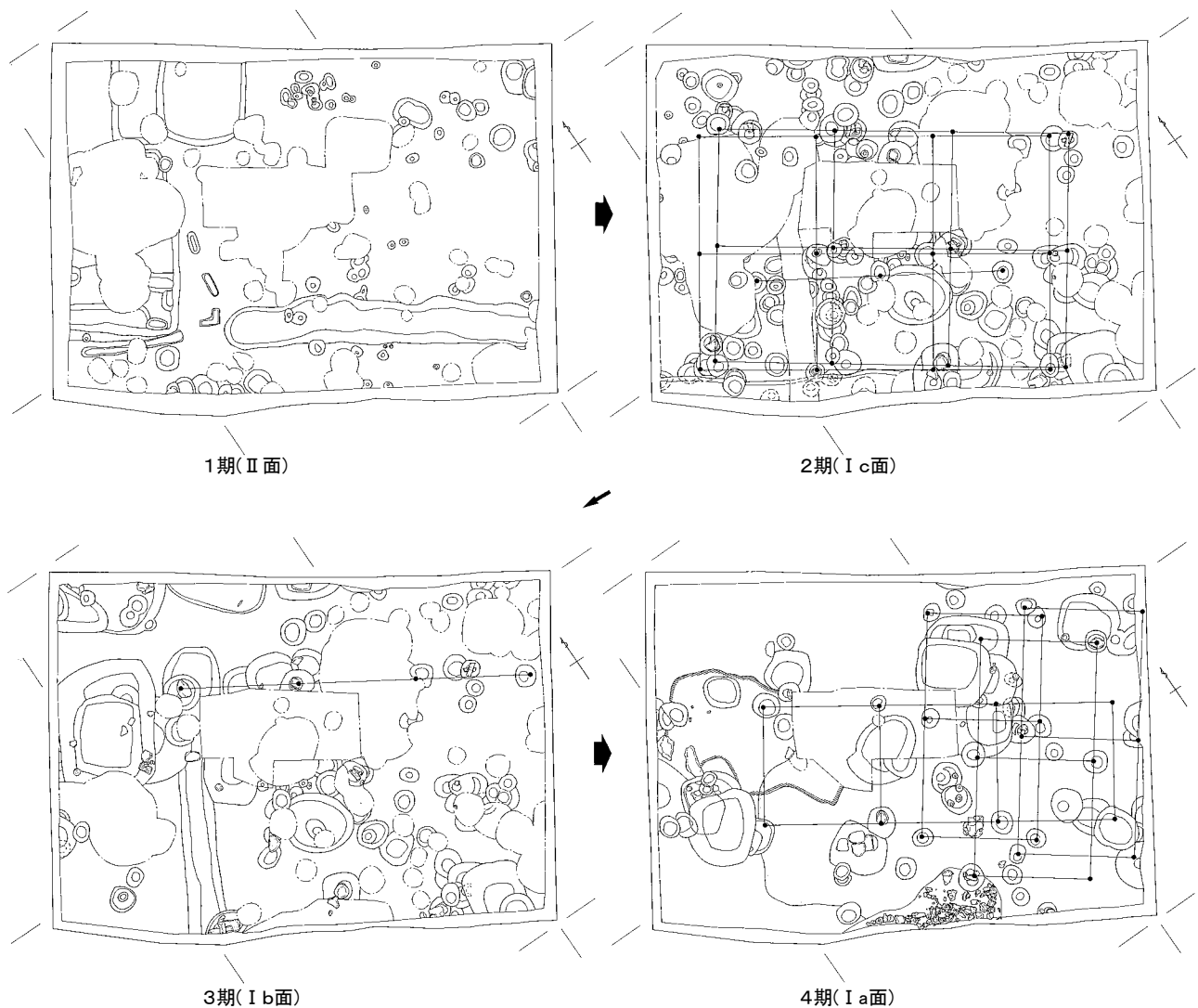


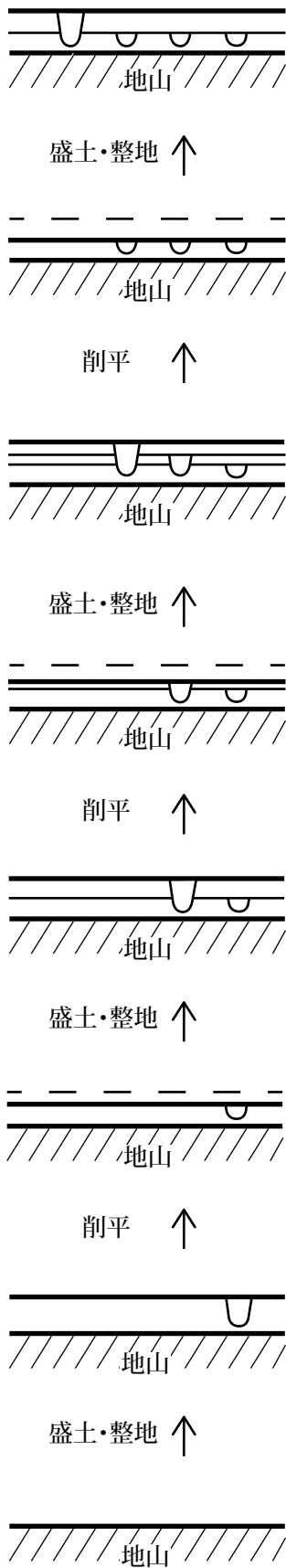
図 28 遺構変遷図

## 第 2 節. 調査地点周辺の土地造成について

Ⅱ面・Ⅰc面までは13世紀前葉までの遺構で構成されている。一方、Ⅰb面は13世紀前半の遺構と13世紀第4四半期の遺構とが併存している状況であり、Ⅰb面の上層にあたるⅠa面は13世紀後葉以降の遺構のみとなっている。層位的な矛盾があるとは言えないが、13世紀中葉と確実に判断できる遺構の存在を確認することができなかった。また、Ⅰb面では同一の検出面で13世紀前半と13世紀後葉の遺構を検出している。第1章で示した通り本調査地点周辺は幕府や北条氏邸が存在していた区画内であり、鎌倉幕府開府当初から少なくとも鎌倉幕府滅亡までは人の活動は盛んであったと考えられる。また、『吾妻鏡』の記事から、付近で頻繁に火災が起きていた様子が窺えるが、良好な火災面を検出することはできなかった。これらの状況を、実際の遺構面と遺構の検出状況と『吾妻鏡』に記載のある火災や建て替え、建物の新造を手掛かりに、当地で行われていた土地造成について若干の考察を行ってみたい。

まず、『吾妻鏡』に記載のみられる火災記事の中で、調査地点周辺まで延焼した可能性のあるものを抽出してみたい。

建久二年(1191年)三月四日条「小町大路边」から失火し、大倉幕府、鶴岡八幡宮まで延焼



承元四年（1210年）十一月廿日条

北条泰時小町邸と近隣御家人宅焼亡

承久二年（1220年）二月廿六日条

大町で失火、北条泰時邸前まで延焼か

嘉禄二年（1226年）十二月十三日条

政所前から失火、北条泰時小町邸と同一区画内まで延焼か

安貞元年（1227年）二月八日条

幕府東西人と北条泰時納所一字焼亡。宇津宮辻子幕府近くでの火災

延応元年（1239年）十二月廿七日条

北条泰時邸南から失火、六字焼亡か

寛元二年（1244年）十二月廿六日条

北条経時邸、北条時頼邸から失火、政所まで延焼

建長二年（1250年）九月廿六日条 北条時頼邸失火

次に調査地点周辺で建物の建築が確認できるもの抜き出す。

元仁元年（1224年）六月廿七日条 北条泰時小町邸内で修理

嘉禄元年（1225年）十月卅日条

御所（宇津宮辻子幕府）予定地で大土公祭

嘉禎二年（1236年）二月十九日条 北条泰時邸新築

嘉禎二年（1236年）四月二日条 若宮大路御所の造営開始

嘉禎三年（1237年）四月廿二日条 北条泰時邸内で新造の建物

寛元三年（1245年）六月廿七日条

北条経時邸、北条時頼邸火災後の新築か

宝治元年（1247年）八月九日条に始まる記載

北条時頼邸内で修理及び新築

建長三年（1251年）十月八日条

北条時頼邸で新築、火災が原因か

建長四年（1252年）七月九日条 北条時頼邸内で建て替え

筆者は文献史学の専門ではないため、全てを抽出できた、とは言えないが、13世紀中頃の建長年間までで、火災は8件、新造・修理は9件確認できる。

火災や建物の新造・修理のたびに区画の変更や盛土・整地層が形成された、とは断言できず、また『吾妻鏡』に記載された出来事が本調査地点でのこと、とは言えないが、本調査地点周辺では火災、新造・修理は頻繁に起こること、とも言える。

特に嘉禄元年（1225年）と嘉禎二年（1237年）には将軍御所の造営が行われており、大規模な土木工事が行われた可能性を指摘できる。

図 29 土地造成模式図

これらの史料上の記載と調査結果を照らし合わせてみると、I c面が13世紀前葉までで、二回の將軍御所の造営と時期が重なる可能性もあるが、地行層は1層しか確認できていない。また、I b面で13世紀前半までの遺物しか出土していない遺構もあるため、I b面までが將軍御所の造営に伴うという解釈も不可能ではない。ただし、I b面には13世紀後葉まで存続する遺構があることや、さらに上層での地行層が確認できることも確実である。また、火災の記録を最低8回は確認できたが、遺構覆土や面構築土（含地行層）に炭化物をよく含むものの、明確な火災痕跡と判断できる状況は確認できていない。I a面は確実に13世紀後葉以降となるので、今回抽出した史料上の出来事以後と言える。いずれにしろ、史料上で確認できる火災や建物の新築・修理の回数に比べると、I b面までで確認できた地行層の枚数は少ない。

このことから、史料にみられる大規模土木工事が想定される事象と、発掘調査における成果を即結びつけることは不可能である、と言える。当然、大規模な区画変更を伴う土木工事があったとしても、盛土・整地を行わず、同一遺構面を継続的に使用していた可能性も十分ありえるが、削平による前代の盛土・整地層の消失の可能性も考慮に入れておかなければならない。少なくとも本調査地点を含めて、周辺の調査において、明確な火災痕跡は確認されていないため、火災後に清掃を行っている可能性もあり、その際に削平を伴う可能性も捨てきれないことは事実である。

図29は削平を伴う整地が行われた際に、おこりえる遺構検出状況を模式図化したものである。あくまで、模式図として提示するため、煩雑さを避ける目的で地山までの削平を伴うモデルケースは呈示しなかった。本調査地点においては13世紀中葉と明確に限定できる遺構は検出されていないため、鎌倉時代における削平により、13世紀中葉の遺構群が消滅した可能性を指摘できる。また、本調査地点における最上層遺構群に含まれるI a面落込み1において、13世紀前葉までに限定できる遺物が接合する状況で多く確認できることから、本地点においては大規模な土の移動が行われ、落込み1を埋めるために使われた可能性を指摘できる。

削平を受けていることを想定した場合、遺構の切り合いや出土遺物の年代により、時期の違いを明確にすることが求められるので、現地調査・整理時によりいっそうの丁寧な分析が必要となってくる。この丁寧な分析が鎌倉前期の様相を知る上で、重要な作業になってくるであろう。

引用・参考文献（本報全体に共通）

- 赤星直忠 1959『鎌倉市史 考古編』吉川弘文館
- 秋山哲雄 2006『北条氏権力と都市鎌倉』吉川弘文館
- 蘆田伊人編 1958『大日本地誌大系（二十一） 新編鎌倉志 鎌倉攬勝考』雄山閣
- 蘆田伊人編 1998『大日本地誌大系 22 新編相模国風土記稿』
- 神奈川県史編纂室編 1971『神奈川県史 資料編 1 古代・中世（1）』神奈川県史編纂室
- 神奈川県史編纂室編 1979『神奈川県史 資料編 3 古代・中世（3下）』神奈川県史編纂室
- 鎌倉教育研究所編 1979『かまくら子ども風土記（改訂九版）』鎌倉市教育委員会
- 川副武胤 1980「鎌倉時代鎌倉の方位の観測」『日本歴史』第 382 号 日本歴史学会
- 黒板勝美編 1933『新訂増補国史大系 吾妻鏡』吉川弘文館
- 鈴木茂 1996「宇津宮辻子幕府跡の花粉化石」（「宇津宮辻子幕府跡」附編）『鎌倉市埋蔵文化財緊急調査報告書 12（第 1 分冊）』  
鎌倉市教育委員会
- 鈴木棠三・鈴木良一監修 1984『神奈川県地名』平凡社
- 須藤博史／貫達人 1963「宇津宮辻子幕府の位置について」『鎌倉』11 鎌倉文化研究会
- 高柳光寿 1959『鎌倉市史 総説編』吉川弘文館
- 貫達人・川副武胤・佐脇栄智 1959『鎌倉市史 社寺編』吉川弘文館
- 貫達人 1971「北条氏亭址考」『金沢文庫研究紀要 第 8 号』神奈川県立金沢文庫
- 貫達人 1989「第二章 古代・中世の鎌倉」『鎌倉市史 近世通史編』吉川弘文館
- 野口実 1993「頼朝以前の鎌倉」『古代文化』45（財）古代学協会
- 野本賢二 2001「若宮大路周辺遺跡群一小町二丁目 402 番 5 地点一」『鎌倉市埋蔵文化財緊急調査報告書 17（第 1 分冊）』  
鎌倉市教育委員会
- 原廣志 1996「北条高時邸跡一小町三丁目 426 番 3 地点一」『鎌倉市埋蔵文化財緊急調査報告書 12（第 1 分冊）』鎌倉市教育委員会
- 原廣志 1998「鎌倉市宇津宮辻子幕府跡」『第 22 回神奈川県遺跡調査・研究発表会 発表要旨』神奈川県考古学会・鎌倉市教育委員会
- 馬淵和雄 1994「武士の都 鎌倉—その成立と構想をめぐって—」『都市鎌倉と坂東の海に暮らす』（『中世の風景を読む』2）  
新人物往来社
- 馬淵和雄ほか 1996「北条小町邸跡（泰時・時頼邸） 雪ノ下一丁目 377 番 7 地点」『鎌倉市埋蔵文化財緊急調査報告書 12（第 2 分冊）』  
鎌倉市教育委員会
- 馬淵和雄 1998「大倉幕府周辺遺跡群 雪ノ下四丁目 620 番 5 地点」『鎌倉市埋蔵文化財緊急調査報告書 14（第 2 分冊）』  
鎌倉市教育委員会
- 馬淵和雄 1999『大倉幕府周辺遺跡群 雪ノ下四丁目 620 番 5 地点』大倉幕府周辺遺跡群発掘調査団
- 馬淵和雄 2014「大倉幕府周辺遺跡群 雪ノ下四丁目 570 番 1 地点」『鎌倉市埋蔵文化財緊急調査報告書 30（第 1 分冊）』  
鎌倉市教育委員会
- 松尾剛次 1993『中世都市鎌倉の風景』吉川弘文館



1-1 調査地点入口（西から）



1-2 調査地点へいたる路地



1-3 調査地点周辺



1-4 若宮大路からのぞむ東西道

図版2



2-1 2区I a面全景 (西から)



2-2 I a面土坑1 (西から)



2-3 I a面土坑2 (東から)



2-4 I a面落込み1 (北から)



3-1 I a面 P.42 (南西から)



3-2 I a面 P.75 掘削前 (東から)



3-3 I a面 P.75 安山岩 (伊豆石) 検出状況 (東から)

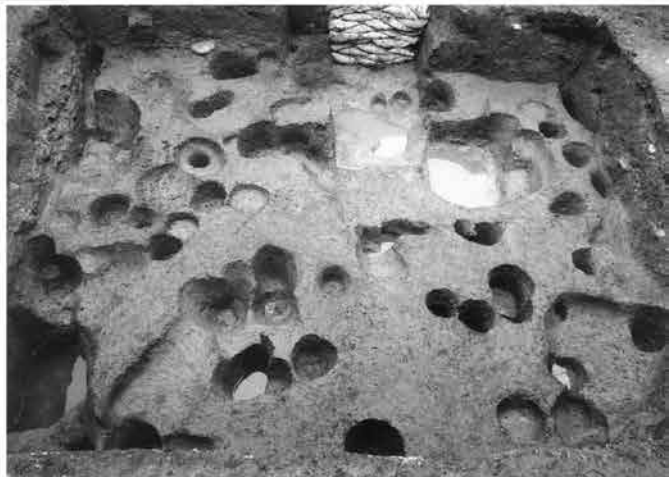


3-4 I a面 P.75 平瓦検出状況 (東から)

図版4



4-1 I a面P.2 (南から)



4-2 1区I b・I c面全景 (東から)



4-3 1区I b・I c面全景 (西から)



4-4 1区I b・I c面全景 (南から)





5-1 2区I b面全景 (南から)



5-2 2区I b面全景 (西から)



5-3 I b・I c面土坑4 (西から)



5-4 I b面土坑17 (西から)

図版6



6-1 I b面土坑 16 (南から)

6-2 I b面土坑 16・17 土層断面 (南西から)





7-1 I b面土坑 18・P.106 (南から)



7-2 I b面土坑 10・P.65 土層断面 (北から)



7-3 I b・I c面 土坑 6 (西から)



7-4 I b面 P.120 (南から)

図版8



8-1 I b・I c面 P.53 (南から)



8-2 2区I c面全景(南から)



8-3 2区I c面全景(西から)



8-4 2区I c面全景(北から)



9-1 2区I c面全景(東から)



9-2 2区II面全景(西から)



9-3 2区II面全景(北から)



9-4 2区II面全景(東から)

図版 10



10-1 2区Ⅱ面全景（南から）



10-2 Ⅱ面溝状遺構（東から）



10-3 1区Ⅱ面西北隅（北から）



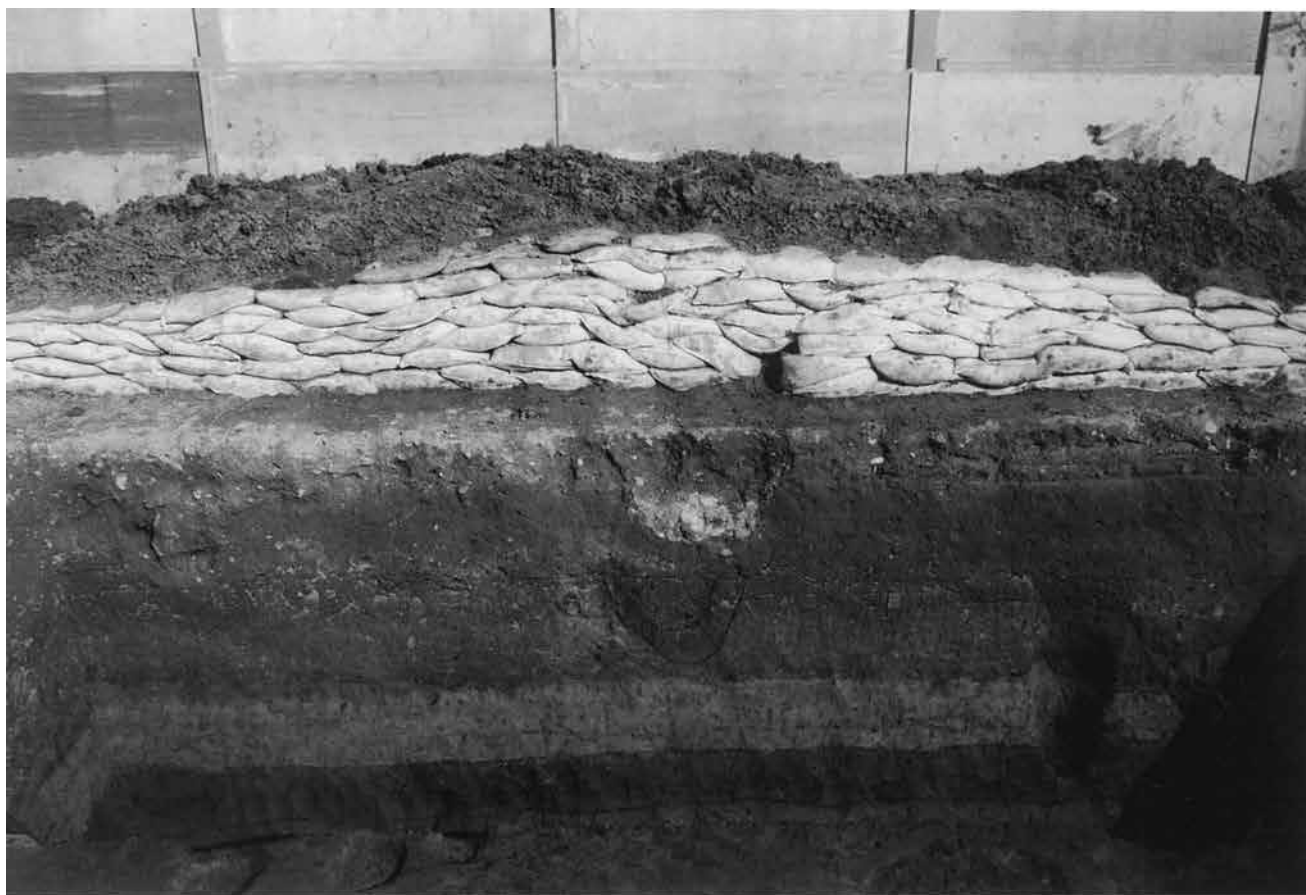
10-4 Ⅱ面堅穴遺構（西から）



11 - 1 II区土坑 22 (北から)



11 - 2 1区最終確認トレンチ  
南壁土層断面



12-1 1区東壁土層断面

12-2 1区南壁土層断面





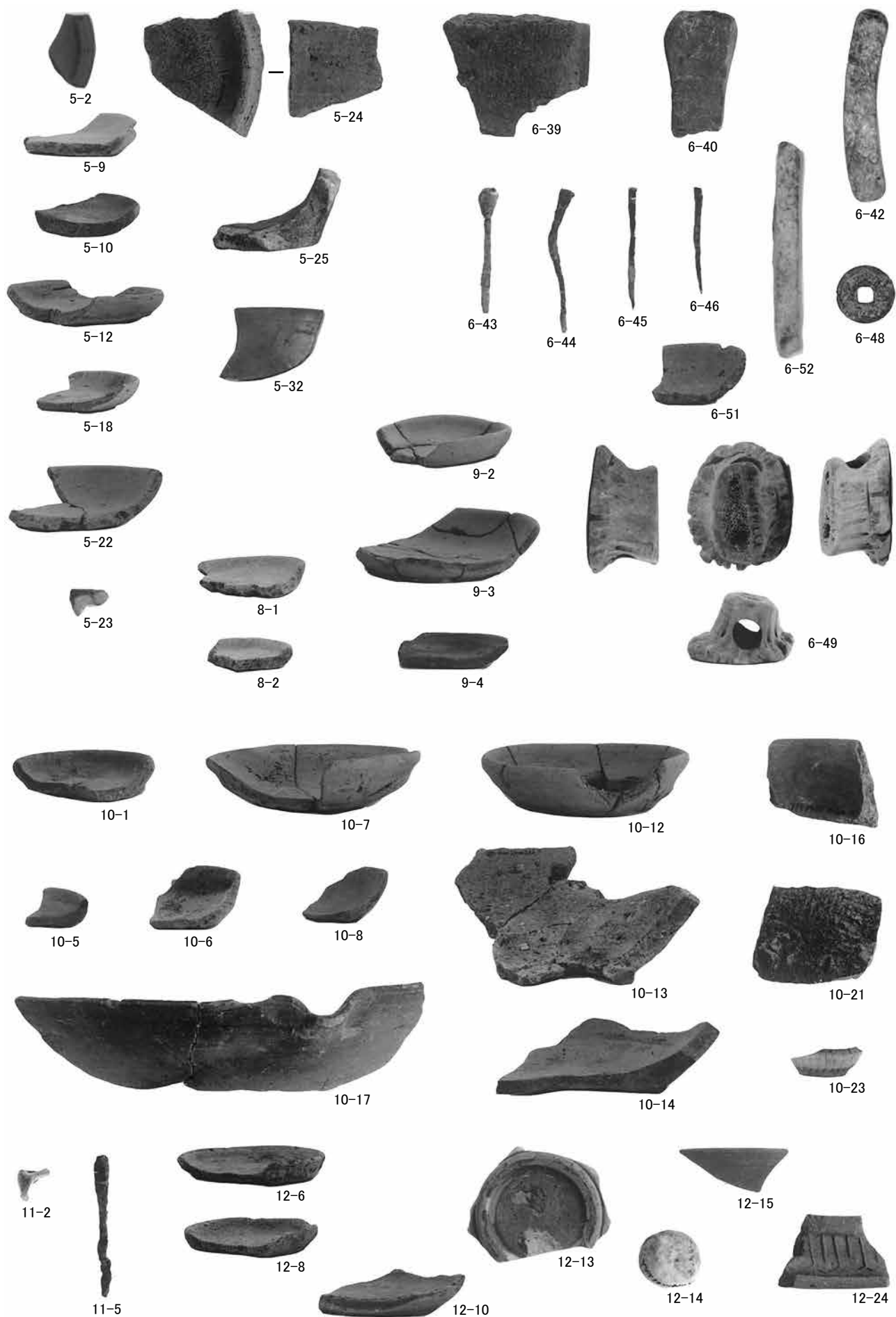


13-1 2区西壁土層断面

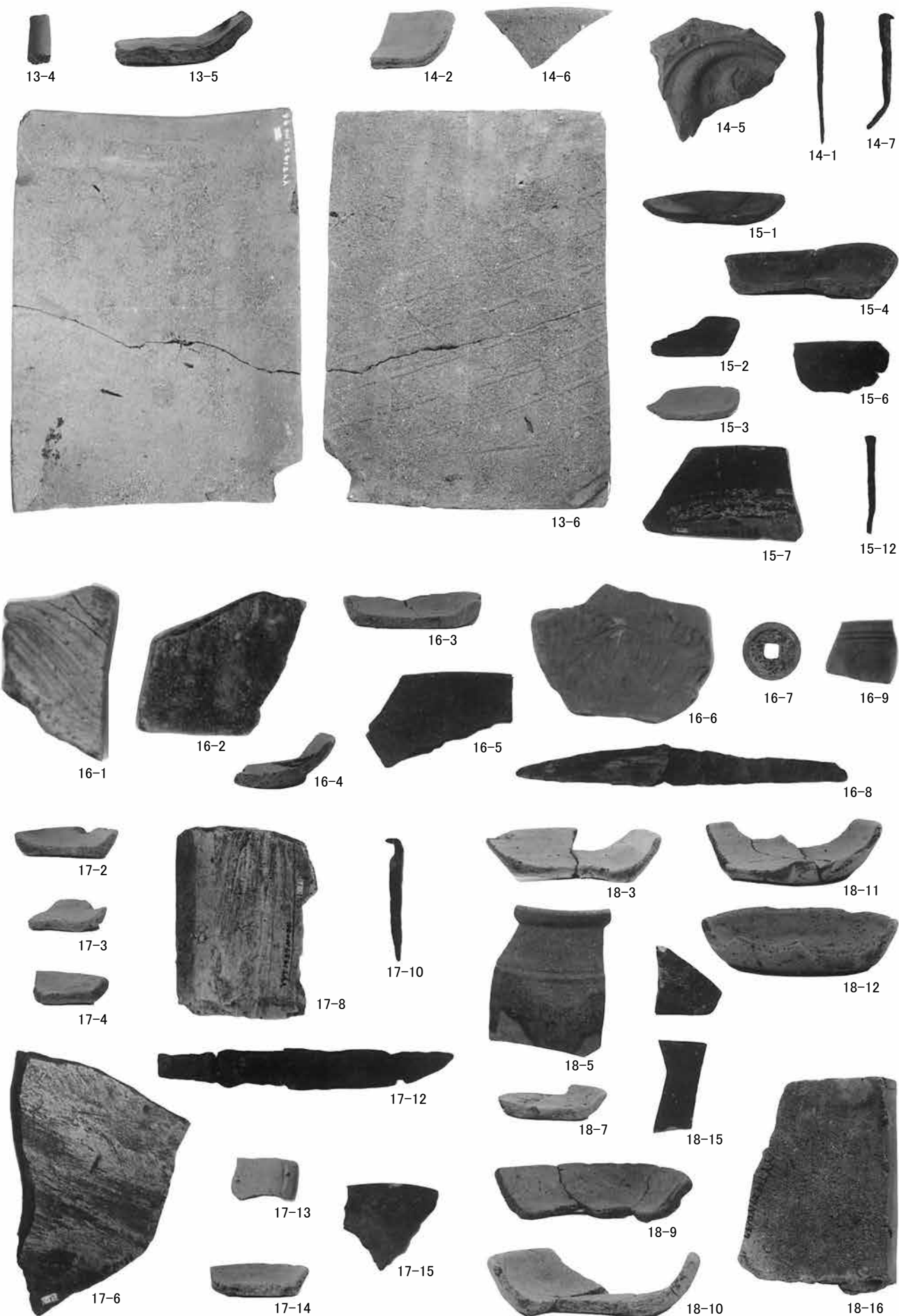
13-2 1区西壁(調査区境界)土層断面



图版 14



出土遺物 1



出土遺物 2



出土遺物 3